

# 夕 の オ 其の参



じろちやう著

# タビのキ

## 其の参

じろちょう 著





夕日のキ

足が動く

足にマメができる

心が動く

心が飛んでいく

命が動く

命がさまよう

多くの多くの得体の知れない何かが  
僕らを取り巻いている

僕らの周りの何かを感じ取るため  
僕らは歩く

歩く

歩く

歩く



タビのキ 其の参／目次

はじめに／3

お四国遍路編 第一期．．．．．5

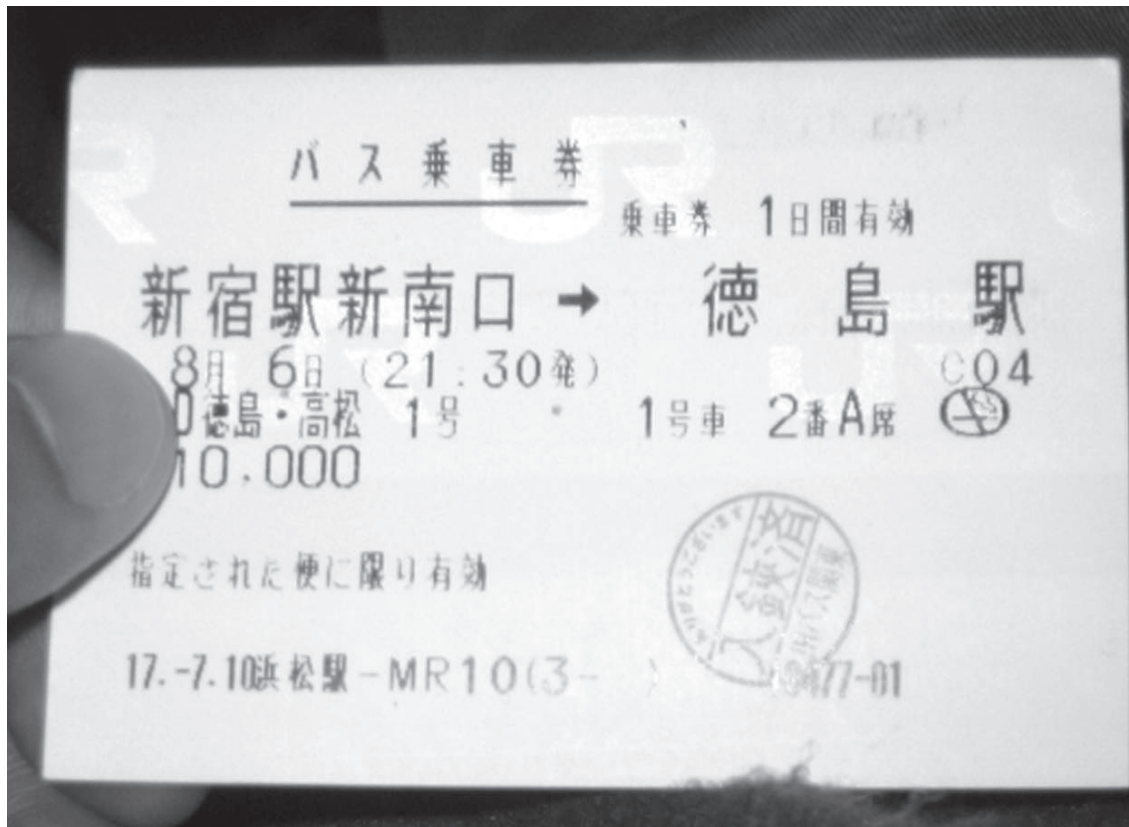
お四国遍路編 第二期．．．．．39

お四国遍路編 第三期．．．．．153

お四国遍路編 第四期．．．．．213

あとがき／321

お  
四  
国  
遍  
路  
編  
第  
一  
期



計画的犯行という言葉があります。まさしくその通り、計画的に事を起こす……ちよつとした快感でもあります。

その日、僕は東京にいました。たまたま弟がそこで結婚式をするというので、そりゃ、兄として参加しないなんてことは考えられず、お祝いの席にいたんです。うれしい席でした。

それで、式が終わって僕の時間です。夏です。旅立ちの時です。事前調査によれば、東京からは夜行バスがたくさん出ています。お四国へもバスが出ているようでした。ゲット……その日のうちにバスに乗れるチケットを手に入れるわけです。日頃、そんなに計画的な行動をするような人間じゃありません。むしろ、無計画が服を着て歩いているようなモンです。そんな無計画人間が、事前調査をし、さらには事前にチケット入手を敢行していたんです。これはすごいことでした。

うれしい出来事の後にくく自分自身の楽しみ……、こんなに美しい流れはありません。ここに緻密な計画の良さを感じさせられました。これからの僕が、もう少し計画的な人間に変わっていく可能性を暗示する、貴重なチケットです。たとえば歩き遍路を始める自分が毎日だけ歩けるか明確じゃなくてもいいんです。エ工加減人間からの脱却、記念碑的チケットです。

この後、バスの中……チケットは回収されてしまいました……。



学校では家を出てから家に帰るまでが遠足だ、なんてことを言います。そりゃ、事実としてはそういうことになるんだけど、僕としては学校を出発して学校に戻ってきたら、それが一つの遠足っていうセットになるような気がします。

僕の遠足……全部で千二百キロぐらいにもなるという長い遠足の歩き遍路で、出発点はどこになるんでしょうか。ま、普通に考えたら一番札所になるはずです。でも、実際に僕が僕の足を使って進み始める実感をもったのは、それよりも前、列車を降りた駅からでした。交通機関の足を使わずに自分の足だけが頼りだという、その出発の場所です。

言うたモン勝ち、なんて、豪語する人がいます。結婚式という場所で「汝は一生愛し続けますか」と神父に問われて「はい」と返事をした友達が、後から「言うたモン勝ちや！」と言っている。そんなのもアリなんですかね……。これも一つの出発点かもしれません。出発点なんて他の人が決めるモンじゃありません。自分が「よし！」と決意した瞬間に物事が動き始めるんです。人生の中でもいつだって出発点を見つけられます。八十歳になってから習い事を始める人だっているくらいですから……。

だから、感覚として、歩き遍路の僕の出発点は、列車から降りたこの駅です。始めの一步です。





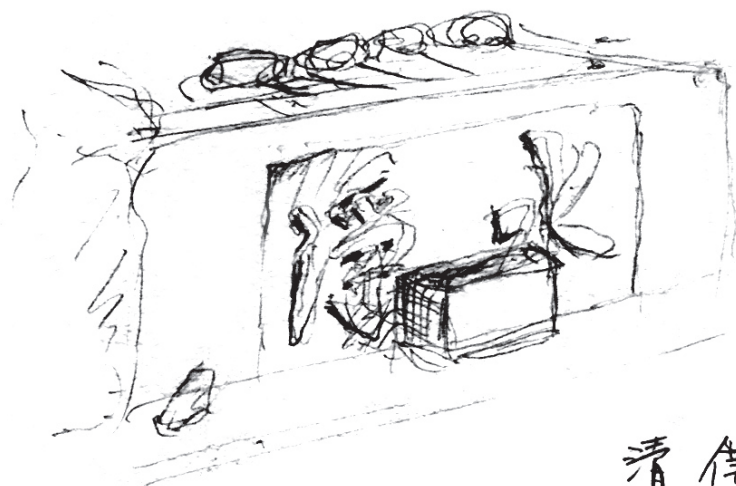
歩き始めた僕は、第一番目の札所への道をてくてく進んでいきます。駅を出てからすぐに寺への道が僕を待っていたような、そんな道でした。きっと、これまでも自分勝手なヤツが「ワタクシのために道を準備してくれてありがとう！」なんて寝言を口にしながら足を進めたと思われる道です。それほど「いらっしやい感」が強く感じられる空気がありました。

小さい頃新しいノートを買うと、最初のページだけはとにかくきれいな字で書き始めて、しばらく経つとそれがだんだん崩れ始め、そしてとうとうミミズの行進曲になっていく過程を何度となくくり返してきました。一番最初って、ドキドキします。そして、フクフクします。最初だからこそって、妙にはりきってしまうわけです。

一番札所を目指し、そんなに力んでいたわけじゃないけど、やっぱりドキドキフクフクでした。適度な緊張感をもっていたいところなんです。自分を高めるのは何なのか、最終的に、その答えは「自分」だと思います。たとえば、八十八ヶ所の札所を回るのに、最初からアドレナリン出まくりで吠えていたって、途中でしぼんでしまいうはずです。最初からガラガラしてたって、途中でとろけてしまいうはずです。

最初の札所、自然体で進めるような、落ち着いた参道でした。

清めの水。



清めの水

しばらく

僕の強欲は

清められそうにない。

2005.8.7

寺に参ると、最初に現れるのが山門です。そこで一礼をして境内へと入り込みます。そして、中をキョロキョロします。汚れた身を清める水を探すわけです。僕なんかは煩惱のかたまりみたいなモンだから、いくら神聖な水だったとしても簡単に清められるとは思いません。それでも多少はマシかと気は心とばかりに一応の作法に従って自分自身を清める努力をしてみます。

お寺の水で清めたらホントに自分はきれいになれるのか……、そんな訳やないだろ……とツツコミを入れてしまっています。現代科学の知識からすれば、水とは酸素と水素がくっついてできている物質である、と定義されます。それ以上でもそれ以下でもありません。非常に安定した物質であり、溶媒としての有用さが特色として考えられている……それだけです。

仏教の教えに限らず、水が聖なるものという考え方が世の中にはあります。僕には聖なるドブに見えたガンジス川も、その場の人たちにしてみればものすごく貴重な聖地だったりしました。人は様々なものにありがたさを感じて生きています。どんな物にだって何かの力が宿ると考えることだってあります。それだけ人は周囲の物たちに頼って生きているんです。僕はそれを実感しているのか、不安になることがあります。大切なものを大切だと感じていられる、そんな人間の知恵を持ち続けていたいモンです。

初々しい旅立ち。



本堂へ向かいます。そこで「般若心経」をよんだり、灯明をあげたり……という、まあ、儀式を行います。お経なんて、今まで自分でよんだことなんてありません。本当だったら学生時代に学んでいたはずなんですけど、なぜか仏教についての知識は身についていません。ダメ男です。だから、お経をあげるのも妙に不自然なんです。時々つかえながら、自信なさそうに本堂の隅の方で、ボソボソとよんでいきます。

ああ、やっと終わった……と思えば、次には大師堂へ向かって同じことをもう一度です。お札を納めて、線香をあげて、また、隅の方でボソボソとモゾモゾとお勤めをします。

こんな感じだから、とにかく時間がかります。別に緊急事態が発生しているわけじゃないから、のんびりやっていればいいんです。でも、スムーズにいかないのは気持ちが悪いものです。たぶん、周りの人たちの多くも、同じようにゴソゴソしているんだと思います。それが、ものすごく上手に慣れた姿に見えるんだから不思議です。自分に自信がもてないと、全てがうまくいきません。自己肯定感があることの大切さを感じます。僕だって何かきつと優れたモノがあるはずですよ。胸を張って行きましょう。

あれれ……、山門で撮った写真の情けないこと……。人間ってすぐには変わらないモンなんですね。



大麻店。



ハシシ、ガンジャ、チャラス、ハッパ、マリファナ……、いろんな言葉で売り手から声をかけられたことがあります。漢字で書いたら大麻というヤツです。そいつの煙を吸い込むと、酔っぱらったような感じになるわけです。インドには政府の直営店があると聞いたこともあります。ホントカウソカ知りません。

まさか日本国内に堂々とそんなモンを売っている店があるなんて……、と僕は目を疑いました。「大麻店」、しかも産地直送なのか「農家の店」とまで書いてあります。恐るべし……。警察の人たちが来たら、お店の人は取り調べに合ってしまうじゃないですか……。でも、みんな健康そうな顔をしています。体つきも頑丈に見えるし、薬物中毒の雰囲気はありません。おう……。そういうえば、医大生が「大麻には毒性はない」と断言していました。それでか……。いや、待てよ……。ニュースでは「大麻所持で逮捕」なんてことも報道されていたような気がします。空を飛べる気分になって、本当に大空へはばたいてしまう人もいるみたいです。自由に飛び回ることとはできず、やっぱり地球が好きだということを証明する結果になるらしいけど……。なんか危険がいっぱい潜んでいるような感じがします。恐ろしいお店です。

あ……「大麻」……地名ですか……。そこでたまたま目にした漢字でこれだけアホな発想をしましてすみません。





白衣にすげ笠、首に輪袈裟、手には金剛杖を持っているのが昔ながらの遍路姿です。僕も一応の歩き遍路人間なので、それなりのお遍路グッズをそろえました。でも、根性無しなのでいい加減です。頭に物をつけるのがキライだから、すげ笠はかぶりません。信心深い人たちに申し訳ないという気持ちもあって、輪袈裟を身につけるのも遠慮しました。金剛杖をどうしようか、と少し考えただけ、弘法さんの化身だという意味合いがあるらしく、そして一緒に歩いた方が頼もしいと思って入手しました。「同行二人」という言葉もあり、一人で歩いても弘法さんと一緒です。

金剛杖は歩くのにも力になってくれました。足への負担が軽減されていたみたいです。杖ってすごいと思いました。歩き遍路ならではの実感です。

あれっ、とびっくりしました。バスからぞろぞろ降りてくる人たちが、出口ですぐに金剛杖を杖立てに置いていきます。お杖を頼りに歩いているわけでもなく、降りてからすぐ手放すんだっただら必要ないような気がします。所詮はシンボルでしかないのかもしれない。自分たちは遍路の旅に出ており、それが観光バスの団体ツアーだったとしても弘法さんと一緒に回っているというアピールなんだと思います。

僕ごときが指摘することじゃないんですけどね……。

命の長い杉だて  
何かを頼って生きよう  
深い年輪  
深いしり  
支え合ひ……

支え



2005.8.7

共存。

頼ることも頼られることも、両方とも大切なんだと思います。でも、頼ることも頼られることも、両方とも苦手なんです。どうしようもない人間です。ベタベタと人に甘えて頼ってばかりいる人を見ると、イライラします。自分でやれよ、って怒鳴りたくなります。人の世話ばかりしていて、頼られてばかりいる人を見ると、ハラハラします。自分のことやれよ、ってなぐさめたくくなります。僕はできるだけ人には迷惑をかけないで生きていきたいと考えています。そりゃ、生きている限りは必ず誰かに迷惑をかけるモンです。でも、可能な限り独立採算制で、自給自足であり、独立独歩だったら、かなり迷惑をかけずに過ごせるんじゃないかと思えます。……寂しい人生ですよ……。

心ゆくまで頼り、納得いくまで頼られ、お互いに支え合って生きていけるような人と出会えたら、それが一番いいんだと思います。一人でツツパってなくてもいいんです。自分の心の中を空気で感じてもらえたら、ずいぶんと肩の力が抜けていきます。まだまだ、僕には修行が足りません。全然足りません。人って難しい生き物です。

杉は無理をせず、支えられて生きていました。ごく当たり前に支え合って生きていました……。





休日の午前中は完全に夢の中です。下手をすれば昼過ぎまで夢が続くこともあります。時々、フツと現実の世界も甦るんだけど、後から考えたら何かなんだか分からない時間なんです。夢か現か、なんて、よく言ったモンです。

うつらうつらと過ぎていく時間はうれしくもあり、苦しくもあります。最近の僕は苦しみとして感じることも多いような気がします。何かやらなきゃいけないことがあって、それでもその現実の世界へと突撃していくのが怖くて、やらなきゃいけないんだけど、ああ……夢とは別れたくなくて……。弱すぎます。結局、やらなきゃいけないことから逃げ続けていたら、夢の時間が過ぎていくことが苦しみになっていくんですね。

自分の中にゆとりがあったら……、夢の時間は、まさに夢のような幸せを感じられる楽園になります。無……宗教的に考えたら、何もないことが究極の幸せなんでしょう。そりゃ、強欲に次から次へといろんな思いが出てきたら、どれだけ物があっても幸せにはなれません。欲さえもない無の境地に達していたら、どれだけ楽なことか……。楽を極めた所、極楽です。お経を唱えたら極められるんでしょうか。真言を唱えたら極められるんでしょうか。木魚を抱いて眠れば極められるんでしょうか。いろんなことをやってみます。あ、でも、木魚は持ってない……。

厳しいお店かもしれない。



歩くことはとても大変なことです。ちよつとだけ歩くんだったら大したことはありません。気分転換になるくらいの時間、適度な運動になるくらいの距離だったら歩きつていい感じです。

じゃあ、千キロ以上とかいうレベルで歩いたらどう感じるんでしょう。そこまでいったらトランス状態で、何があってもウフフって思えるのかもしれない。僕はそんなに歩いたことがないから分かりません。一日目、歩き始めて間もないのに疲れてしんどくて嫌になってしまう僕は、やっぱり軟弱者です。遍路道なんて激しすぎる旅路です。

居酒屋ってどんな場所でしょうか。強引にお酒を飲まされるような雰囲気があるんだったら、僕にとっては地獄です。みんなが和やかに過ごす空間になっているんだったら、楽園です。僕はお酒が飲めないから、ちよつとだけアルコールが体の中に入ってきたら、もう別世界になっています。周りの人たちの体にも適量のアルコールが流れたら、適度な潤滑油としての役割を果たすことでしょう。そんな居酒屋はいい場所ですね。

居酒屋のやわらかさと遍路道という名前の厳しさ……、その両方が融合することはあり得るのか、不思議です。光明真言酒とか、弘法カクテルとか……、そんなモンがメニューに載っているのかもしれないです。そんな訳やないですよね。



何でも描いてやる。

阿弥陀堂

おお、

と思つて描いてたら

「個人の草堂です。」

と、ニニまれ

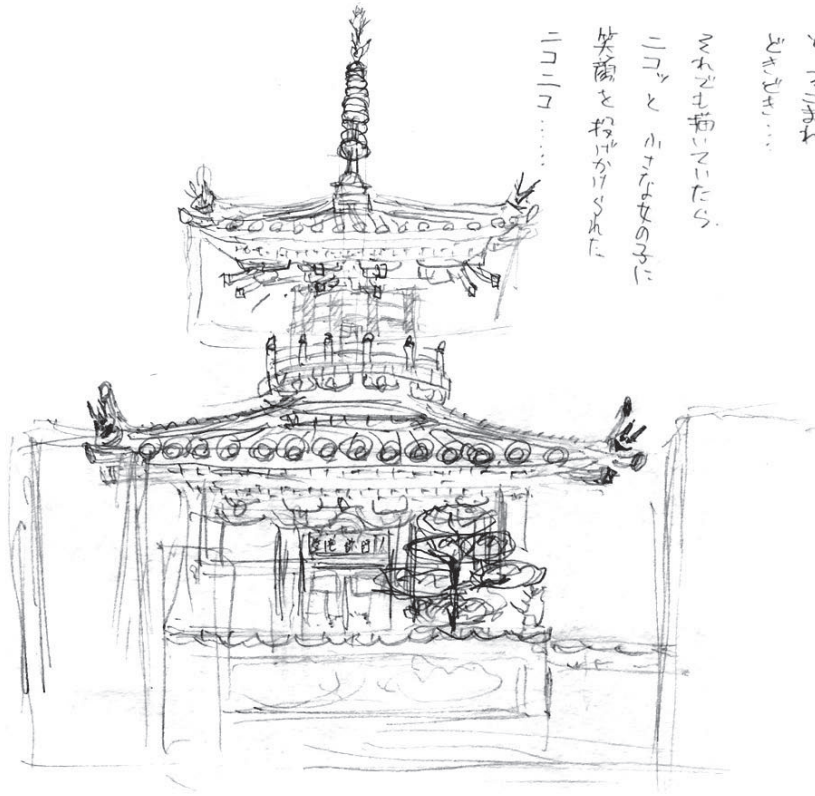
と、ニニまれ

それでも描いていたら

ニニと、ハハハハハハハハハハ

笑顔を振りかざした

ニニニニ



自分で勝手に作った宿題は……お寺ごとに一つの絵を描くことです。なんでそんなことを自分で決めてしまったのか、ちよつとだけ後悔しました。

そして、その寺で絵を描き始めて、また少し後悔しました。面倒くさいんです。いやまあ、お寺の建築物はだいたい面倒くさいんです。棟の木組みやら屋根の瓦やら、宮大工さんたちががんばったであろう成果があちこちに表れています。絵を描くのに、かなりがんばらないといけなくなります。

宮大工という人々……、すごい存在です。昔から日本に伝わる建築方法をずっとずっと受け継ぎ、正確にその技術を伝えていきます。絵を描く僕にとっては涙ホロホロの木組みの技術なんて、いったいどんな風に作られているのか訳ワカメです。クギを使わない方法でお寺を建てて、それでもとても堅固なものになり……、むしろ、クギを使うよりも強い建物になるんだから恐れ入ります。そして、見た目には美しい姿の建物です。内側にどれだけ苦労があっても、外側に見えてくる姿は平然と美しいものなんだから、ニクイですよ。宮大工さんが受け継いでいるのはそこかもしれない。技術みたくに形で伝わるモンじゃなくて、内側に秘めた心こそ伝統といえるのかなあ、なんて偉そうに思っています。

でも、僕にはその建物の価値がよく分からなかったりして……。

おしまい？



いわゆる遍路道というものがお四国にはあります。遍路道をたどって歩いていけば、八十八ヶ所のお寺を回ることができるといふ具合です。

お四国とは長い長いハイキングコースを設置しているようなモンだと思います。だから、昔ながらの文化とでもいうべきか、道が大切なものとして存在しているような気がします。「四国の道」と呼ばれる道も何やらそこに存在していました。遍路道と出会ったり別れたり、ビミョーに関係をもちながら伸びている道でした。

そんな道が終点を迎えていました。かなりシヨックでした。僕は歩き始めてまだ一日目、それなのにその道が終わりを迎えていくんです。じゃ、僕は何を頼りに進んでいけばいいんでしょう。案内役がいなければ困ります。僕の荷物の中には正確な地図が入っています。少しでも軽くするために、家へ置いてきました。案内役がないのは非常に困る、本当に困るんです。

よく考えてみます。四国を巡る道は、文字通り四国をぐるっと巡っているんじゃないでしょうか。つまり終点とは同時に始点を表しているんじゃないでしょうか。そうか、それなら何の問題もありません。……物事にはすべて表と裏があるんですね。イヤだなあと思ったことでもいいなあと思える直すことができるはず……。ぜひ、そうやっていいなあと思える時間を増やしたいです。





方向音痴とは半分ビョーキみたいなモンかもしれません。しかも、なかなか治らないやっかいなモノです。

僕はしばらくの間、京都市に住んでいました。その頃、僕は方向音痴になっていったような気がします。東西南北に道が走り、それが、まっすぐに伸びているんだからとても便利でした。道はまっすぐなモノなんだ、という情報が体中に染みついてしまったみたいです。曲がった道なんてあり得るはずがありません……。

山の中を歩いていると、まっすぐな道なんてほとんどありません。ぐねぐねと曲がりくねった道がずっと続いています。僕は方向を失います。と、そこに遍路道マークが現れるんです。迷いそうだと思った頃に出てきてくれるありがたいマークです。

実は、山の中に限らずお四国の道には、あちこちに遍路道マークが登場します。心ある人たちが旅人のために作ってくれているようです。本当にありがたいことです。

僕らには道しるべが必要です。それはお四国の中だけじゃなく、日本各地、世界各国でもほしいと思います。そして、心の中にも道しるべがあったらいいと思います。でも、その道しるべは誰かが作ってくれるものとは違います。自分でこつこつ作っていかなくちゃいけません。いっぺんに全部はできないけど、少しずつ道しるべを作って、確かな道のりを探していきたいモンです。



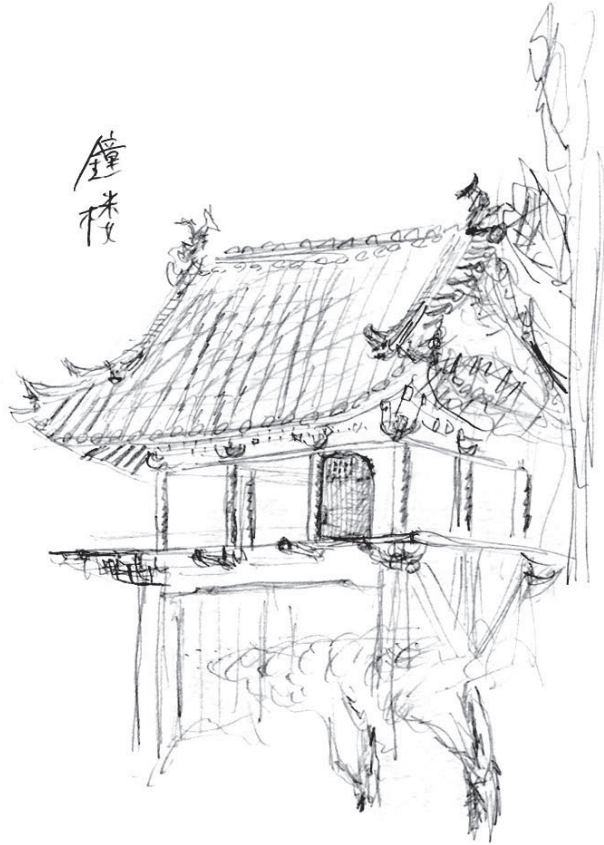
ジパングは金色に輝く国でしょうか。大昔、マルコポーロは日本という国をまぶしい国だと思ったみたいです。それを聞いた昔の人がジパングと呼ばれる日本を目指したそうです。そして、小昔、この国は戦争を起こしてボロボロになり、近昔には復興を遂げました。極近昔になって僕が現れ、この島国を旅するようになっていきます。

一説ではマルコポーロが見たのは、刈り入れ時の田んぼが広がる日本だったといえます。ものすごく納得できる説だと思うんです。だって、稲穂が輝く田んぼはとても美しいですから。それに、その田んぼはものすごい価値が込められている場所であり、また価値を高めていく場所でもあります。大切に耕せば耕すほどに人に恩恵を返してくれるなんてすてきなことです。

お四国にも金色が広がっていました。まだ暑い夏のことだから、季節としては早いことです。汗はダラダラでヒビヒビいながら歩く僕に、豊かな実りを届けてくれました。八月だったし、メチャメチャ早いと思ったけど、ま、僕を幸せにしてくれたんだから何でもあります。輝く稲穂に感謝です。もちろん、それを育てくれたお百姓さんにも感謝です。

近未来、そして、遠未来にまでずっとずっと、この大昔から続く光景が残っていることを望んでいます。





鐘楼

遠くから見えた時、  
山門に見えた。  
見えた時、  
ものすごくうれしく見えた。  
近づいたら  
鐘がかかっていた。

2005.8.7

歩くってことが大変なことだと気づき始めたのは、歩き始めてから少し経ってからのことです。走って大変なのは想像できるけど、……というか、走ったら疲れるのは体育の授業などで何回も経験させられています……。長い距離を歩くななんてことは何回も経験したことがあります。どれだけ大変なのか実感として分かりませんでした。

暑い夏、上には元気な太陽が光っています。首筋あたりがジリジリと焦げていく感覚があります。のどがカラカラに渴いていきます。それだけで、もう大変です。そのうえに、荷物が肩に食い込んでくる痛みが加わり、足の疲れもたまってきた、最悪のコンディションになっていきます。

苦勞して歩いて、その先にお寺が見えてきました。ヤッホーなんて叫びたくなるくらいの喜びです。お寺の山門はだいたいどこでも威風堂々のオーラが漂っているから、着いた実感を味わうことができるんです。そのオーラをスケッチブックに写し取るうと努力をします。最初から無駄な努力だと分かっているけど、それでもやっぱり挑戦です。こつこつと線をつけ足していくと、そこに鐘がぶら下がっていました。山門だと思っていたのは鐘楼だったみたいです。

それにしても一日目からこんなに疲れて、先が思いやられます。

支え。



四天王が餓鬼を踏みつけているお寺があつたりします。悪いヤツらを足の下にして四方を守っているようなオーラが漂います。餓鬼ってすごい字だと思います。カタカナで書いたら「ガキ」で、ちよつとかわいい感じがするけど、漢字の「餓鬼」は何かキョーシツな印象です。

屋根を支えている小さいヤツを発見しました。一体、何者なんでしょうか。やっぱり何か悪いことをしてしまうようなヤツなんでしょうか……。

僕は時々悪いと思えることをしてしまいます。ゴメンナサイ。決して人を困らせようとしているわけじゃないんだけど、自分のことを最優先させた時、いつの間にか悪いことをしていることが多いみたいです。……といっても極悪なことではありません。根がセコい人間なので、セコい悪さをちよつとよこしてしまいます。金欠病に悩んでいた時、お店のトイレでは石鹸がポケットに入っていたり、トイレットペーパーがカバンの中に忍び込んだりしていました。チャリンコで走っていたら赤信号を通過していたり、バイクですり抜けをして自動車をびっくりさせたり……。

弱い自分との闘いです。要するに僕の中にも小さい小さい悪いヤツが住み着いているってことです。その小さい小さいヤツらが支えている僕の体……、上手につき合っていきたいです。

描けるものか……。

大銀杏

おけいなんて

最初から

わかる

それこそ

描きたーと思っただ

何百歳という

大きな木



2005.8.7

旅に出て、そこにあるステキな木を自分のモノにしたいくてスケッチブックを開きます。僕なりに一生懸命に描くんだけど、出来上がった絵を見てショックを受けることがよくあります。そんな貧弱な木じゃないはず……にもかかわらず、なんか弱々しくなってしまうているんです。悲しいことです。

大銀杏が大きく枝を広げていました。大銀杏って、お相撲さんのマゲのことを呼んだりするけど、堂々としててかっこいいんですよ。僕の頭の上に、あのマゲが乗っかっていたら……、いや、髪の毛の量には問題ないはずなんですけど……、それでもやっぱり貧弱なイメージが残ると思うんです。分不相応なことなんでしょう。

そこにいた大銀杏にも偉大なオーラが漂っていました。天に向かって伸びていく姿を見上げると、自分の小ささが余計に分かってしまうような気がしました。僕はいろんなことを相対評価で判断しちゃいけないと考えています。その物の本質を見極める眼をもって、つまり、絶対評価を大切にしたいと思っています。大切です。大切にしたいという思いはあるけど、僕にとってはかなりハードルの高い課題です。

まだまだ修業中、どれだけ考えても同じです。僕はまだまだ修行中、いつまでたっても修行中です。



光差す像。



どこでもいいんだけど、まあ、どこかにたどり着いた時、誰に迎えてもらうのがうれしいんでしょうか。それが家だったら、家族だったりするわけです。何かで疲れ果ててたどり着いた家に、誰もいない……。そして「ただいま」と言っても寂しさが返ってくるような生活に慣れてしまいたくないモンです。

たどり着いた場所がお寺だったら、そこに必ず仏様が待っています。それは当然のことです。仏様を祀っているのがお寺の定義なんだろうから、他の何が祀られていたって特にうれしくはありません。んで、山門をくぐったら弘法さんが待っていてくれました。この人は仏様じゃないけど、僕らはこの人の後を追って歩いているようなモンだから、迎えてもらってうれしくないわけがありません。光を浴びて、たけばカーンとかいって響くくらいに固くなって律儀に待っていてくれました。

どこかに僕を待っていてくれる人がいるのか、ドキドキします。僕自身はいつでも誰でもいらっしゃい、というつもりで準備万端整っているんだけど、あんまり僕の懷に飛び込んでくる人はいないんですね……。そりゃ、もちろん仏様やら弘法さんやらのように深い懷を持ち合わせているわけじゃないけど、少しは誰かを待ってみたいと思います。

待ってるだけじゃダメだ……。はい、その通りです。



チャリンコで走るとき、僕は路側帯を走るようにします。時々、歩道を走るチャリンコもいるけど、それを見ると自分までつらくなってきました。だって、歩道は途中で切れてガタンガタン上ったり下りたりしなきゃいけなくてケツが痛いんです。長い距離を乗ってないと分からないことかもしれないけど、あのケツ痛は我慢できません。それに実は、歩道って意外にデコボコしてるんです。普段は気づかないけど、ケツイタイ病が発症していると、それが非常によく分かってしまうんです。

そもそも歩道とは、読んで字のごとく、歩くための道のはずです。トホダーが最優先されるべきです。弱いモン順に守られるべき場所なんです。それなのになぜ、なぜ四つ輪の自動車が行るんですか。信じられません。確かに歩道のくせに妙に広くて、一車線分くらいの幅はあるけど、それをいいことに自動車が走るなんて横暴です。信じられません。信じられません。信じられません。

弱い者いじめはキライです。僕は自分に自信がないこともあって、軟弱者であることを続けています。強くなってしまうたら、僕は弱い者の心が分からなくなってしまうだろうと思います。弱い者の心が分からなくなるとき、弱い者いじめをしてしまいうな自分がいます。自動車から見たら弱い者、歩き遍路の者を大切に続けるお四国であってほしいと思います。



狸瓦。



ポンポコリン……、なんてのどかな姿なんでしょう。のどかという言葉が正しいのかどうか、それも分かりません。とりあえず、時間の流れ方がゆっくりしているような印象があります。なんで、ためきつてそういうイメージになってしまうんでしょうか。

だいたい、瓦についている生き物は龍とか鬼とか怖い生き物のようない感じがします。しかも、よく考えたら、実際にはいい生き物かもしれません。その家を守る役割をもって、屋根の上から家人を見ているんです。龍は水の象徴でしょうか、火事から家を守るんでしょうか。鬼は畏れの象徴でしょうか、悪霊から家を守るんでしょうか。大きな役割をもっています。

じゃ、ためきは何なんでしょう。葉っぱを頭の上に乘せて化けましようか。腹鼓を打ちましようか。……って、だから何になるんだというのでしょうか。凡人の僕の頭が連想することといえば、のんびりした時間を生み出すようなモンです。何とも愛らしい姿に思えます。本物のためきが丸々と太って腹をたたいっているとは思いません。頭に葉っぱを乗せて化けるところを見たこともありません。でも、僕の中に植えつけられたイメージは強烈にためきの平和つぷりをアピールしてきます。

それぞれの役割を果たすことは大切です。僕の役割は何だろうと、常に考えながら、できることをやっていきたいと思っています。





水がない……。。

深刻な水不足を伝えるテレビニュースが、ダム映像とともに僕らに伝えられることがあります。それを見て僕らは「へえ、大変だねえ」なんて思っていたりするわけです。結局、テレビの中のニュースは他人事ではないのかもしれないかもしれません。

用水路を見て「ああ、水がない！」とリアルに感じ取ることができました。水が流れていてしかるべき所がカラカラに干上がったいて、草なんかが生えてしまっているんです。そりゃあ、水不足ですよ。どれだけの雑草でも、水中に生えるような雑草は見たことはありません。ええ加減長い時間水がなくなっているかを証明しているような草の生え方だったように思っんです。

歩いている僕は、のどがカラカラになっています。暑くてへ口へ口になっています。そんな状態の僕が用水路を見て、その雰囲気の中からいまで感じ取るような、そんな感覚で水のなさを目にしたんです。リアルに感じないわけがありません。誰が何と言おうとライブにかなうものはないんです。たとえば学校の運動会で応援合戦をやったとしても、その場においてほこりっぽいグラウンドの様子や、応援団長が必死の形相で叫ぶ息遣いを感じなければ、応援合戦の迫力は伝わりません。

さて、この用水路、水が流れるのはいつのことでしょう。ま、夏の終わり頃には台風がきていると思いますけどね……。



でかい生き物って、よく海にいるモンです。今、地球上最大の動物は、シロナガスクジラじゃないかなあと思います。僕のあやしげな記憶では『子ども図鑑』にそう書いてあったはずです。それで、クジラたちが捕鯨船につかまってしまったり甲板に上げられた時、その体はベロベロと何とも言えないかっこ悪い姿になってしまみたいですね。でかい体だから、海の中で水の力を借りてスマートな体型を保っているんですね。

クジラほどじゃないにしても、でかいヤツらがいます。セイウチなんていうヤツらも結構でかい体をしています。それにヤツらはでかいキバを持っています。迫力あります。図鑑で見たりテレビで見たりする姿は貫禄です。

お四国の陸上で出会ったセイウチは、どこか間の抜けた顔をしていました。中途半端なキバで、口の周りはごま塩ヒゲみたいになっていきます。皮膚もカピカピに乾いた感じでした。

たぶん、海でセイウチに出会ったら、印象が全然違うんだと思います。ちょっと怖い印象なのかもしれません。海で生活していたら、日々の生計を立てるのものすごくがんばらなければいけないはず。血生臭い戦いだってあるでしょう……。

幸か不幸か、僕の出会ったセイウチはユーモアたっぷり僕を迎えてくれました。いつまでも、その愛嬌を忘れずに……。

焦る……。

香り

煙の香り

仏の香りなんだろう

僕の線香から

仏の香りが漂う



2005.8.7  
いよいよいよいよ

今さらながらに二十四時間営業のお店ってすごいと感心してしまいます。一分一秒たりとも休むことなく、しかも、一年三百六十五日続けて働いているお店なんだから感動モノです。僕にそんな仕事をしろといわれても、五百パーセント無理な相談です。そんなすごいお店に慣れてしまっている自分があります。

朝七時から夕方五時まで……、それが納経所の営業時間です。それより早く行っても開いていないし、遅く行ったら終わっています。自分の歩く足が遅いことを棚に上げて、営業時間の短さをうらみます。ああ、もう時間だよあゝ、と悲鳴をあげたくなります。そして、自分に課したノルマをうらみます。それぞれの寺で何かしらの絵を描いて進んでいくというノルマです。やめときゃよかったと思っても、自分で決めたことだから文句をいうこともできません。

超スピードアップです。超手抜きになります。いかに簡単に絵を「描いた」という気分になれるのがポイントです。要するに自己満足でしかないんだから、別にすごい絵を描かなくてもかまいません。……じゃ、単純な形をしたモノを紙に写し取ってみようと思っわけです。線香の煙が脳裏をかすめます。さらさらあゝ、なんとなく形が見えるような気がします。これで作品完成です。

もっと、のんびり歩けることがベストなんでしょうけどね……。





忘れた……、ちょっと悔しく、ちょっと悲しい忘れ方でした。何を忘れたか、第七番札所、竜宮城のような十楽寺の御本尊さんを忘れたんです。って、何のこっちゃという世界ですよね……。

ワッセワッセと歩きました。時間ギリギリです。お参りも後回しにして納経所へ向かいます。納経の時間は朝七時から夕方五時までに限られているからです。その時間を有効に使うのは歩き遍路としての頭の使い方とイコールになってきます。それぞれの札所で、納経帳に達筆すぎて読めないくらいの文字をウニョウニョと書いていただき、御朱印をいただきます。そして、納経すると、そこに祀られている御本尊さんの御影をいただくことができます。

で、時間ギリギリで焦りすぎ、間に合ってホッとすすぎてしまい、御影をいただくことを忘れてしまったんです。御影といっても、所詮は紙切れです。だから何だというほどのことはないかもしれませんが。でもね、一応、いただけるものは何であっても自分のものとして取り入れたいじゃないですか……。そりゃ、しっかりお参りをして、御本尊さんと心が通じていれば即物的な、紙切れに心残りを感ずる必要もないけど、僕には信心が欠けています。納経だってスタンプラリーの延長線上にあるようなモンだから、紙切れ一枚が貴重に思えるんです。

はあ……、バタバタして、第一日目のお参り終了です。

開ざされた扉。

営業時間  
なにも  
公衆トイレまで  
閉めたままにいいながら  
と思われてますか  
なぜ  
なぜでせうか  
トイレの扉が  
原因のせい……  
情けない……



野グソ立ちションは当たり前前っていえば当たり前前の人間です。どこでも出してしまいます。どうにもなりませんから……。ホントにシャレにならないんです。もらしてしまうか野グソするかを選択肢があつたら、どっちを選びますか。そりゃ、野グソを選ぶでしょ。もらしてしまつたら、そのパンツはどうするんですか。もう、取り返しのない悲劇が待っています。

野グソ愛好家ではないので、野グソしかないフケじゃありません。できればトイレを使用したいと考えております。だいたいはトイレにて用を足すことができます。ありがたいことでもあります。ところが、トイレに営業時間がある場合、くやしい思いをすることになるんです。せつかく文化人への仲間入りができるかと思つたのに……。

営業時間が短いこと……、その原因がその利用者にあるとしたら、さらにくやしく、悲しいことだと思えます。看板には「不本意ですが」と書かれていました。僕も不本意です。不本意ですが、野グソをしなければならぬかもしれないんです。よっぽど利用者のマナーが悪かつたんでしょう。夕方、すでにトイレは閉鎖されていました。

来たときよりも美しく……、美しい言葉です。そんな美しい言葉を行動に移すために、野グソはしっかり埋めようと思えます。



ただひたすら歩くことは楽しいことか……、まあ、楽しいことには違いありません。それでも、楽しさといえは食事です。食べることの楽しさは他の何モノにも代えられません。

以前、僕は旅先で自炊していたことがあります。質素倹約です。朝は米を炊いて、夜はインスタントラーメンというのが定番メニューでした。昼はフランスパンと一リットルの牛乳を買い、バクバクと体の中に放り込むような感じです。とても安上がりな食生活だったと思います。反面で、とても寂しい食生活でもありました。その土地でしか食べられないような「うまいモン」に触れることなく通り過ぎていくような旅人だったんです。

味は自分の舌で感じなければ分かりません。どれだけ言葉で説明されても、分からないモンは分かりません。最近、お金を払ってその幸せが味わえるんだったら、お金をかけてもいいと思えるようになってきました。これは僕の文化的レベルが向上した証拠だともいえます。食は文化なんですよ。ずっとその土地で培われてきたモノをいただくワケで、その文化を少しでも自分の中にかみしめられる機会になるかと思えるようになったワケです。

ただひたすら歩いた一日の終わりにいただいた食事が、いつの間にか僕の前から姿を消します。空腹すぎて、ゆっくり味わうだけのゆとりが胃袋にはありませんでした……。





どこでも寝られる、というのが僕の自慢でもあります。本当は橋の下が自分の中ではベストポイントではあるけど、橋の下じゃなければ寝られないワケでもありません。橋の下だったら雨が降っても水に濡れることなく過ごせるから楽なだけです。んで、少しでも屋根っぽい所を探します。夕飯を食べた後で寝場所を探すとなると周りが暗いので、探すのが大変だったりします。それに、もう、めんどくさくてテキトーに決めて寝てしまうことが多いです。

この日は、〇〇自治会館みたいな建物を発見しました。夜の寄り合いもなさそうな雰囲気だったので、その軒先にテントを張らせてもらいました。小型のシヨベルカーみたいなのが置いてある隣から半分くらい外へ飛び出す形でテント設営です。

夜中なのか、明け方だったのか、誰かが用事があったみたいでその場にやってきて、「っ！」と、反応があつたような気がします。知らんフリをしてテントにこもっていました。ゴメンナサイ。一応、お杖と白衣をテントの外に配置してそれっぽくアピールはしてはありました。それでも本当だったら、「歩き遍路です。一晚寝させていただけます。」くらいの張り紙をしていたらよかったのかもかもしれません。

朝、メチャクチャ寒くて目が覚め、そそくさと動き出しました。



怒るのは精神衛生上あんまりいいモンじゃなさそうです。時々、キルなんて言葉も使われるけど、血管がプチっとなってしまうたらエライことになってしまいます。それでも、怒ることはあります。そんな時に聞こえてくるのが怒鳴り声です。学校の廊下で先生に「×◇▽□☆○……！」などと大きなで怒鳴られたことも数知れずあります。怒るのもイヤだけど、怒られるのはもっとイヤなことです。

怒るというと、意識不明になって怒鳴りまくっている様子が想像できます。感情の高ぶりです。じゃ、叱るという言葉だったらどうでしょう。冷静に指摘されている様子が思い起こされます。そりゃ、理論的に言われたら納得することも多いはずです。

ここで、もう一つ真実があるように思います。どんなに正しいことを言っても素直に認めたくない人と、ちよつと間違っているかもしれないけど「まあ、この人が言うんなら仕方ないか」といつの間にか素直にさせられる人とがいることの真実です。これは、ある人から言われて、ハッとなりました。人間性というものになるのでしょうか。僕の中にほんの少しでも出てきてほしい部分です。

さて、漢字で「土成」と書いた時、読みは「どなり」であり、意味を考えたら……、地名として解決です。



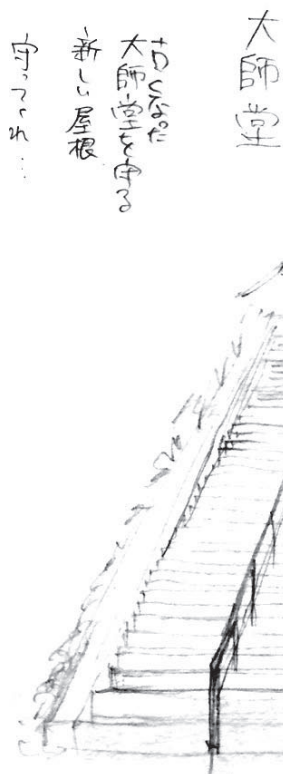
朝一番、歩き始めて自分に酔います。お四国での歩き遍路も二日目の朝を迎え、さすがしく歩を進め出しました。さすがに昼間ほど暑いわけではなく、気持ちよく歩けそうな気がします。太陽もまた高くないから、目の前には自分の姿がビヨヨンと長く伸びていました。杖を手にした感じも、ちよつとカッコイイ姿です。影には顔のつくりも映らないし、朝の影なら長く伸びた足が自己陶醉へと僕を誘ってくれます。

太陽が高く昇ったら、ものすごく暑い日差しが突き刺さってくるはずです。でも、そんな昼間がやってくるなんて関係ありません。先のことは先のこと、どんなことが起きるかなんて僕は知らないんです。一日歩きっぱなしになるであろうことだけは疑いもせず朝の空気を感じていました。

影の中に自分の姿を感じた時、自分の本体はどこへいってしまったているんでしょう。何だか幽体離脱しているみたいで、変なモンです。心と体が離れてしまったら人間がどうなるのか、僕は経験したことがないから分かりません。命が躍動しているのは体のはずなのに、影の中に自分の存在を感じるんだから、やっぱり本体はそこにいるのかもしれない……。影は本来の自分を写し取る鏡だと考えたら少しすっきりです。

僕の影は、運命の第八番札所へと伸びていました。





突然に……。

この絵を描いている時、  
ケータイ電話が鳴った。  
とさばちん 急変……。

2005. 8. 8.

7:12

息が止まった……と、ケータイ電話から父親の声が聞こえてきた。病院の公衆電話からだった。

第八番札所熊谷寺の大師堂を描いていた朝、七時十二分。僕のケータイ電話の着信履歴にその時刻が刻まれていた。とにかく家に帰らなければいけないと、足を動かした。頭の中がグルグル回っていた。どうすれば早く家に着けるのか。まずは歩くしかなかった。グルグル回る頭を必死に抑え、歩いた。たまたま高速バスの停留所があり、たまたま乗り込むことができた。大阪までたどり着き、新幹線に乗った。昼過ぎに家へ着いた。

僕の記憶の中に熊谷寺の色がない。モノクロの大師堂が浮かんでくるだけの、かすかな記憶。

何なんだろう。よく分からない。本当に本当に何なんだろう。よく分からない。よく分からない。

声が出なかった。出せなかった。口を開いて何かを話そうとすると、声ではない、何かがあふれ出し、吹き出ていった。一人の時間、空間が必要だった。自分だけの時間、空間が必要だった。何かを考えようとして、確かに考えていたはずなんだけれども、全てが空虚に通り過ぎていった。ただただ、得も言われぬ何かが、僕に迫っていた。

僕のばーちゃんが死んだ……。

お四国歩き遍路、これはしばらく前から挑戦したいと思っていたことだった。その年の春、僕はバイクで徳島県まで走り、第一番札所である霊山寺で白衣や数珠、簡単な経本を購入している。浜松からバイクで突っ走り、ただその買いい物をただで帰ってきた。そして、「般若心経」をブツブツ読む練習をしていたのである。どこで息継ぎをしたらいいのかも分からず、内容を解説した本を読み、自分流のリズムで「般若心経」を読んでいた。

夏がくる頃、僕はチベットへ向かうチケットを手に入れていた。頭の中の計算では、弟の結婚式に出席し、その足で四国へ向かい、十日程お四国を歩くはずだった。一度、静岡県へ戻り用事を済ませた後、チベットへ向けて出発。完璧なストーリーができあがっていたのである。

徳島に着いた僕は、意気揚々とお四国を歩き始めた。もちろん、ブツブツと練習したとはいえ「般若心経」は上手に読めるわけもなく、お参りの手順もおぼつかない。何とも頼りない歩き遍路の始まりだった。頭の上に降り注ぐ太陽がジリジリと僕を焦がしていったし、のどはカラカラになったし、身体的にも大変さをかみしめる初日だったように思う。それでも、札所と札所の間が大きく離れていないため、心地よく歩くことができた。いつでもどこでも同じ、旅の途中で僕の目に留まる変なモノたちを写真に収めながら、ヘラヘラと歩を進めていった。また、それぞれの札所で一枚ずつスケッチをするというノルマを自分に課し、とりあえず自分なりの歩き遍路スタイルを確立させようとしていた。一日目の終わりに自分へのごほうびのつもりで唐揚げのついた定食を食べた。たまたま、そこでは友人のギタリストである白柳淳から電話があり、弟の結婚式で弾いてもらったギターの話などをしていた。この白柳淳という男、何かと節目となる時に連絡が入る不思議な男である。体は疲れていたが、彼の声を聞き、心にゆとりを取り戻して眠りにつくことができた。

二日目の朝は早起きだった。第八番札所では納経所が開く前にお参りを済ませ、七時ちようどのタイミングを見計らって御朱印を頂こうと考えていた。本堂、大師堂とお参りを済ませてスケッチブックに向かうところまで、全てが順調で計画通りだった。ところが、突然携帯電話が鳴り、父親からあの連絡が入ったのである。「ばーちゃんの息が止まっ

た」という。

とにかく必死だった。爆発しそうな頭を懸命に抑えて、いかに早く実家へ帰るかを考えた。まずは、列車の駅を指した。地図を見て一番近いであろう駅を目指した。実家のある焼津まで、どんな交通手段を使うのがベストなのか分からなかったものの、とにかく本州へ渡らなければいけないということを考えた。前日歩いた同じ道に戻るコースだった。この時、本当に幸運だったのは、高速バスの停留所を見つけたことである。そして、ほんの少し待つだけでバスに乗車できた。あとは、交通機関のスピードに頼るだけだった。どれだけ僕が焦っても何も変わらない。冷静さを取り戻す努力だけが、僕にできる全てだった。

実家に着いた時、ばーちゃんは既に白い服を着てふとんに入っていた。周りには親類が駆けつけて、様々にやるべきことをやってくれていた。横になったばーちゃんに手を合わせた。長い時間その場にいることができず、僕は逃げ出した。二階に上がって自分の部屋に閉じこもって泣いた。後から後から涙があふれ出た。

その夜、結婚したばかりの弟と嫁さんも一緒に、ばーちゃんが寝ている隣の部屋で夕食をとった。鯛の唐揚げだった。涙があふれそうだった。そのメニューは、ばーちゃんが献立に困った時に出てくる切り札のようなものだったからだ。小さい頃から僕らはばーちゃんの作る夕食で育ってきたように思う。これは僕の印象だけなのかもしれないが、母は仕事が忙しくて夕食の準備がなかなかできなかった記憶がある。だから、夕食といえばばーちゃん、というイメージが僕に植え付けられていた。鯛の唐揚げを口に運びながら、またしても泣きそうになり、食えることだけに集中することにした。

僕は、ばーちゃんの隣に寝ることになった。光栄な感じがした。なかなか寝付けない。高ぶる気持ちを整理するために、僕はひたすら文章を綴った。その時にしか感じられない自分の気持ちをただただ紙の上にぶつけていった。他の家族はどんなことを思っているんだろうと想像しながら、とにかく文字をたたきつけていった。意外に元気な姿を見せていた母親。相変わらず飄々とした姿を見せる父親。結婚式から二日しか経っていないのに実家へ戻ってきた弟。それこそ誰



が誰かも分からないはずの弟の嫁さん。いろんなことが頭の中を飛んでいった。そういえば、僕は三日前にばーちゃんと話をしていた。夏の盛り、「浜松でうなぎを食べたかね」なんてことを聞かれていた。さらにもうちよつと前に実家で、バナナを口へ運んだ時のことも思い出した。□元へ運んだ時の感触がまだ指先に残っていた。横を見ればばーちゃんが寝ている。いきなり起き出して歩きそうなくらいに当たり前の様子で寝ている。額を触ってみた。冷たかった。でも、やっぱり起きあがりそうだった。そして、やっぱり涙があふれてきた。

次の日、ばーちゃんはだんだん「物」になっていつてしまった。業者さんが体を洗いに來た。皮膚が弱くなつていて風呂で洗うことはできなかった。グイグイと体を拭いていった。一緒にいた伯母さんが「見ないで……」と声をかけてくれた。僕はどんな顔をしていたんだろう。「物」になっていくばーちゃんだった。

父が「喪主をやらせてくれ」と言ったらしい。普段の父からは想像しにくい発言だ。弟が「弔辞を言う」と名乗り出たらしい。ふさわしい人間だったように思う。葬式の間、僕は「泣くな、泣くな」と自分に言い聞かせていた。隣には母がいる。一番動揺してしまうかもしれない人の隣で僕は泣くわけにはいかないと思っていた。母はばーちゃんと離れて暮らした経験がない。生まれてからずっと一緒に暮らしてきた。どれだけショックなのか想像もできない。だから、僕は泣くわけにはいかない。葬儀場にはたくさんの方が来てくれていた。誰なのか僕には分からない人もいた。僕の職場でチームを組んでいる人も来てくれた。一つの命が多くの命と絡み合っていることを感じた。

葬式が終わると、事務的な仕事が続いていた。相続に関する書類やら何やら……。僕も自分にできることをやりたかった。当然のことながら、チベット行きはキャンセル。家族のためにできることを探した。運転免許を持っていない母を車に乗せ、運転手として市役所へ行ったり法務局へ行ったり、資料をもとに書類を作ったり……。それなりに僕にもできることがあつてうれしかった。

だんだんにやるのがなくなり、心にぽっかりと穴が開いたようになってしまった。より大きな心の空虚さを感じているだろう母のことは気になったが、ばーちゃんの供養という大義名分を掲げて僕は再びお四国へ向かうことにした。

お四国遍路編 第二期

小銭。



怒濤のように時間が過ぎていきました。線香のにおいが立ち込める日々でした。

少し落ち着いてふと振り返ると、そこにはまだ何かが残されています。引き出しの中を整理していました。下書き段階の短歌の山、詩吟の本、高価には見えないアクセサリー類……、何かしらばーちゃんの影を感じるような物が次々に出てきます。

ずっしりと重みのある封筒が出てきました。開けてみると小銭がジャラリとこぼれます。金額としては大したモンじゃありません。それでも、僕にはその重みがズンと感じられました。僕はこの小銭をほしいと周りに申し出ました。「ん？」という反応もあっただけど、特に何ということもなく、小銭は僕のもとに納まることになります。ま、僕のところに来たといっても、それは一時的なことです。小銭は僕と一緒に旅をして、また少しずつ僕とお別れをしていく予定だったからです。お四国の札所に賽銭として生かされていくんです。

小銭とともに僕は、ばーちゃんとお別れをしていきます。ばーちゃんと一緒に歩きながら、お四国の輪廻を体で感じるようなモンです。小銭が全部なくなった時、僕がどんなことを思うのか、本当にばーちゃんとお別れができるのか、分かりません。でも、大きなアイテムを手に入れたような気がしました。





たまたま来た列車がこの列車でした。どうやってお四国へ向かうか……、そんなことは何も考えていません。とりあえずこいつに乗っておけば西へ向かえるというわけで、僕はこの列車に飛び乗りました。駅員さんは「予約いっぱいだよ」と言っていたけど、自分の目で確かめなければ納得できないのはいつものことです。乗り込んでから車掌さんに声をかけると、場所を指定され、自分のスペースを確保することができました。次の停車駅は姫路です。そこまでは降ろされることはないはずですよ。

初めて乗った寝台列車、もっと計画的に利用したいモンでした。寝台列車といえば、僕の憧れでもあります。そんな憧れの列車に、たまたまそこに来たからというだけの理由で飛び乗ったことが何とも寂しい気がします。何も考えていないのはいつものことだけど、何も考えずに憧れの列車を利用してしまったことが寂しいんです。ああ……。

壁ぎわに金剛杖を置き、弘法さんと一緒に横になります。赤ちゃんのことを思いながら、自分一人のスペースが得られたことは、とてもありがたいことでした。他の何かに邪魔されずに自分の心と向き合うことができます。あわただしく過ぎ去っていった、何日間かの僕の心を静めるスペースです。眠っている間に僕をお四国に近づけてくれる、マイ・スペースです。



大阪の駅で、僕は出入り口に立ちました。列車が減速し、停車します。扉は開きません。「開閉」と書いてあるボタンを押してみました。扉は開きません。車掌さんが通り、「次の停車駅は姫路ですよ」と声をかけていきます。チャリリン、大阪で下車することとはできませんでした。それなら、いつそのこと大阪駅で停車しないで通り過ぎてくれたら心安らかに過ごすことができたのに、と自分勝手なことを思います。

そもそも、計画なんてモンがあるわけじゃないし、行き当たりばつたりの行動です。僕の頭の中では、西に向かうんだったら当然大阪で停車するという思い込みがありました。そりゃ、東の東京、西の大阪です。停まるかと思えますよ。大阪からならどんな手段だってお四国へ渡れるはずですよ。なんていっても大阪ですから……。

おかしい……、それでもたどり着いたのは姫路です。僕を降ろして列車は走り去っていきます。朝早くの出来事です。なんとなく人気のないホームで僕はそれからのことを考えます。旅に出たら、その時その時が勝負です。何が起きようと、その場で乗り切っていかなければなりません。次に僕がすることは、こっち側のホームから発車する大阪方面行きの列車に乗り込むことです。

とりあえず、西へ送ってくれた寝台列車に、ありがとう。



大阪と徳島を結ぶ交通機関として、とてもお世話になったのが高速バスです。ばーちゃんのもとへ向かうとき、僕はどこをどうやって進めばたどり着けるのか分かりませんでした。とにかく、駅のありそうな方向へと歩を進めるしかない状況です。そこに、ふと現れたのがこのバス停でした。時刻表を確認、営業所の電話番号を確認、乗車可能かを電話で確認……、熱い頭を必死に冷まし、ほんの少し待つだけで乗車可能であることを確認しました。

本当に偶然です。たまたまそこにバス停があり、たまたま時間的にもちょうどよくそこを通りかかっただけなんです。この偶然に僕は感謝しました。おかげでタイムロスも少なく、ばーちゃんの所へ帰ることができました。偶然というものに感謝です。

僕は何か超越した力を信じることができません。自分の目に見えないものを信じることができないんです。この偶然が訪れたことについて、僕なりに分析しました。一番大切だったことは、僕が冷静に物事を考えられたことなんじゃないかと思います。頭の中は芯まで熱くなりパニックに近かったけど、それをどうにかコントロールしようとする頭が残っていたことなんじゃないかと思うんです。逆上してしまいうような時、客観的に自分自身を見つめられる眼をもっていられるか……、この時の自分に拍手です。第二期のスタートは、このバス停からに間違いありません。





お寺の山門へ至る曲がり角、ここからお寺に詣でて仏さんにあいさつをして、また出てきます。その後が問題です。門から出てきたら体を右に向けなくてはいけません。本当はそうするつもりだったんです。でも、ばーちゃんに呼ばれてしまったから、一回目の時は左へと体を向けました。今回は曲がり角にたたずみ、何週間か前の自分の影を追いつ、ばーちゃんへの思いを振り返りつつ、新たな一歩を踏み出しました。僕としては未踏の地です。夏の暑さとの戦い、自分の心との戦いのスタートでもあります。

お肌の曲がり角、なんて言葉を聞いたことがあります。☆歳を境にして肌の張りがなくなってくるから、より丁寧にお肌の手入れをしてあげなきゃいけないってことなのでしょう。僕の肌が曲がり角を迎えているのかどうか分かりません。あんまり気にしたこともありません。一般的に女の人はとても気にするみたいです。

本当に何かをきっかけにして曲がり角を迎え、コロッと変わるこつてあるのか考えます。表面的には劇的に変化しているようでも、実はじわじわと変わっていることが多いんじゃないかと思うんです。曲がり角なんて要は気持ちの問題であって、きっかけとして自分が大切にすべき時があるこつてことです。

僕は、お四国第二期への曲がり角をそれなりの勢いをもって進んでいきました。



日差しが強い……夏は暑い……いや、むしろ熱いと表した方がいいような気がします。体は全部がやけどしているような感覚です。いかに日光から自分の身を守るか、大きなテーマになります。そこは、さすがにお百姓さんです。最新の機械を常に導入していきます。コンバイン？そんなの当たり前です。日傘？そんなじゃ強力な日光から身を守ることはできません。でかいヤツです。ビーチパラソルというヤツです。これなら、かなりの守備範囲の広さがあります。強い味方になってくれます。

お百姓さんは強烈に天候と向き合って生活をしています。どんなに逃げ出したくたって、地球上に酸素があり水がある限り、お百姓さんは天候と向き合うことになるはずです。僕なら、つらいことがあった時に、多少なりともごまかしてその場をやり過ごすこともあります。そのうち、どうにかなってしまうことも多いですから……。そりゃ、天候とは全然、質が違います。

僕だって、本当はごまかさずに生きていきたいと思っています。でも、自分の中で、どうにもならないことだってあるんです。全てのことを自分で処理できるような強さが僕にはありません。強くなりたいと常に思いながら、強くなれずに生きてきました。

僕は、災難を見極めて、それが降りかからないように日傘を差して生きていくしかないと思っています。



教習所では習わなかったペイントです。



教習所で習ったこと……雨の日にペイント部分で滑りやすいということ……、よく覚えています。バイクで走っていると実感することもあるので、忘れることができません。他に何を覚えているのかといえば……何でしょう……。ペイントの意味とか標識の内容なんて、ほとんど忘れてしまっている自信があります。

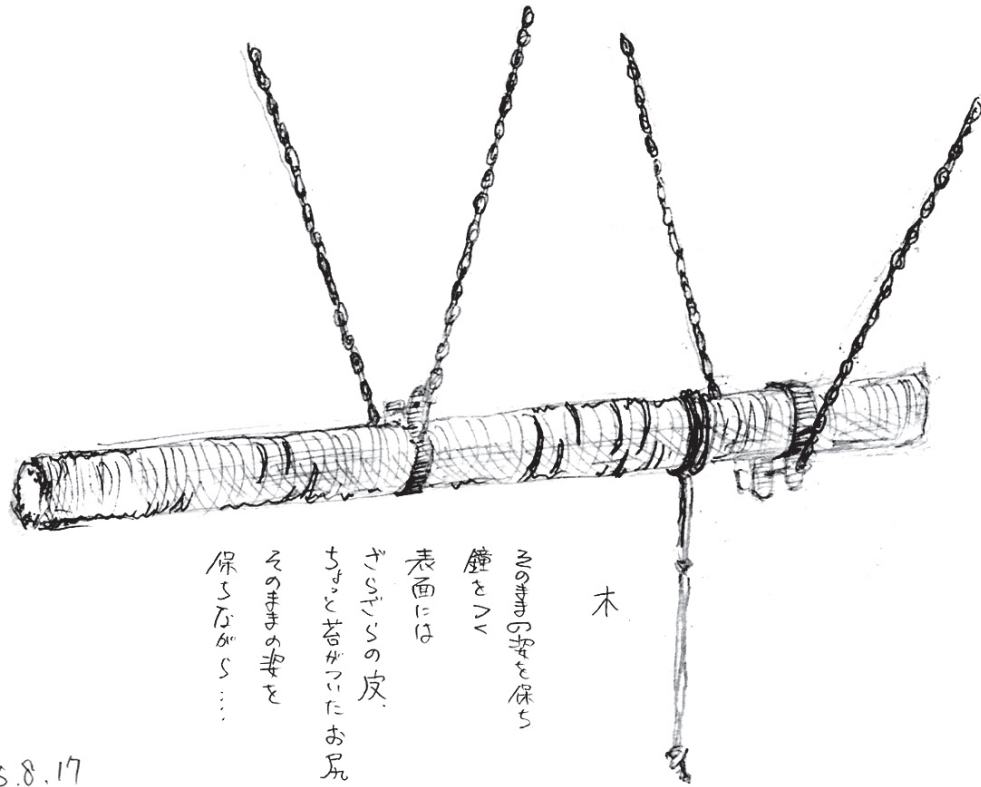
絶対に、などと断言できるほど僕が堂々としていられる場面は多くありません。たまにはそんな言葉も使ってみたいんです。よし使ってみます……教習所でこんなペイントについては絶対に教えてもらっていません。絶対です。ドキドキします。

お四国という場所を歩いていて強く感じるのは、そこに遍路というものがとつもない影響を与えていることです。物理的にいえば、遍路道のマークがあちこちにぶら下がっていたり方向を示す矢印がガードレールなどにベタベタはってあることで影響の大きさが感じられます。さすがに公道にドカーンとペイントしてあると、本当にいいのか、と不安にもなるけど、きっと大丈夫なんです。だって、お四国ですから……。

影響は人の心にも深く深く染み入っています。よそ者である僕に対してもやさしいんです。温かいんです。気軽に「お遍路さん！」と声をかけてくれるんです。つくづくありがたさを感じました。培われてきた遍路という文化に囲まれて矢印をたどりました。



素顔のままで……。



再スタートしてから一つ目の寺にたどり着きました。手順を思い出しながらお参りを済ませます。鐘は……つきません。朝早ければゴーンという音が響きすぎて騒音公害にもなります。力いっぱいやりすぎて割れてしまうことも……長期的に考えたらあるはずです。くわばら、くわばら……。

と、何気なく鐘楼が目に入りました。そして、ざらざらの表面が気になってしまったんです。だいたい、鐘つきの木はツルツルと磨かれていて丸太のようになっていてるモンだと思っていました。それが、皮のついた形でぶら下がっていたからびっくりです。びっくりしながらも、いいなあ、と思ってしまうました。

女の人がいて、化粧をしている人としていない人がいて、どっちがいいのか考えてみます。ベタベタに化粧をしていたらイヤな感じがします。うっすらと化粧をしていたら好感がもてます。これは僕の間感です。外側の美しさだけを追い求めて本当の自分で勝負できないのは悲しいように思っています。化粧なんかしなくたって内側からにじみ出てくる美しさってのがあはずです。ま、見るに耐えないほどの醜さを感じさせてしまうことがあったらいいですけどね……。

内側から自分を鍛えているつもりでいます。でも、内も外も磨き方が中途半端で、見るに耐えない人間になりにかけています……。



僕は走りません。

地図を持って走ることがあり、それを楽しむ人がいます。そんな人の地図にはポイントを示す丸印があり、そんな人の手には方位磁石がにぎられています。オリエンテーリングと呼ばれるモノが世の中には存在するということです。

オリエンテーリングです。時々、オリエンテーションをする人もいます。オリエントエクスプレスなんて乗り物もあるみたいです。……関係ありません。オリエンテーリングです。あれをやっている、ものすごく一生懸命に地図を見るようになります。いや、見るというよりも読むというレベルで地図を活用します。等高線など細かい情報も必要になるので、国土地理院発行の精密な地図がベストです。目的地を制覇して、いかに早くゴールできるかを競います。

僕は走りません。たとえそこにオリエンテーリング用のポイントが立っていても関係ないんです。僕の歩き遍路はオリエンテーリングとは違います。お寺を回って納経し朱印をもらうだけが僕の目的じゃないんです。一步一步に思いを込めて歩いていくのが僕の歩き遍路です。

一応、大義名分として「供養」という思いがあるから、しんどいから走らないなんて絶対に理由にはなりません。絶対に……。

# 観音様

きれいだ……



2005.8.17

遠近。

仏様に対して失礼なんでしょうか……。イメージとしてだけど、美人だと思いました。体全体からオーラを感じるんです。それこそ、失礼かもしれないけど、オーラというよりフエロモンといった方が適切かと思うくらいです。ほれてしまいます。

仏様の姿を見ていろんなことを感じます。厳粛な気持ちになったり、励まされるような気がしたり、叱られているように思うこともあります。観音様の姿を見て、照れくさくなるような感じがしました。ちよつと、僕のような者が近寄ってはいけないくらいの美しさを感じたんです。実際にも近寄って手で触れられるわけでもないから、名実ともに遠い存在ということになります。

いいなあ、と思った相手との距離が遠いことってあります。ひとまず、物理的な距離が遠いとそれだけでもうがっかりです。それに加えて心理的な距離が縮まってこなかったら、どうにもなりません。距離……。なんとか縮めようと努力はするものの、うまくいかないモンだなあと、しみじみ思います。こっちは縮めたいと思っけていても、相手がその倍くらい離れていくことさえあります。……。なんか悲しくなってきました。

せめてスケッチブックの中には入ってきてください。その美しさを僕の力で表現できるかっていったら無理なんだけど、それでも少しでも距離を縮めてください。観音様へのお願いです。



沈む橋。



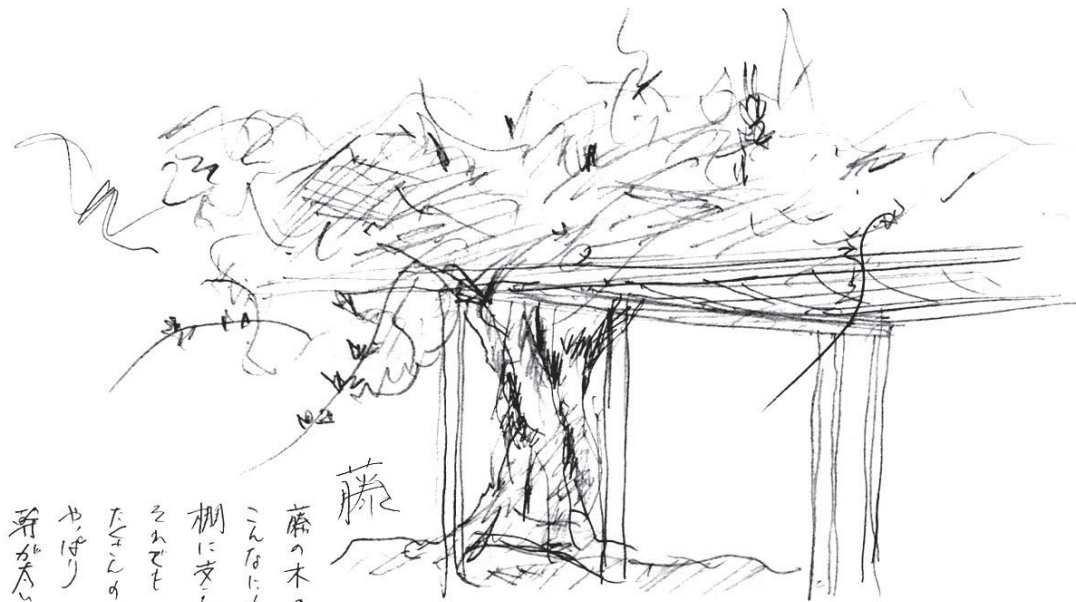
このはし渡るべからず、と言われて橋の真ん中を歩いて渡ったという一休さんの話があります。「端」を渡らなかつたんだからいいじゃないか、ってことです。屁理屈小僧め……。

この橋で、僕は真ん中しか歩きたくありません。別に何かの御触書があつたわけでもありません。ただ、橋の端に欄干がないんです。ハプニングが起きたら、そのまま橋の下へ落ちてしまいそうな橋でした。有名な橋、お四国では当たり前ともいえる、沈下橋です。

大雨が降って、橋が流されたらえらいことです。被害甚大です。流されない工夫をするのにたどり着いた結論が沈下橋だといいます。欄干なんてモノがあつたら橋ごと流されることだつてあるし、欄干だけが流されてもショックです。いっそのこと最初から欄干がなければ大雨の被害を受けずに済みます。この発想の転換、すごいです。

世の中で、頭がやわらかい人というのを僕は尊敬します。物事を柔軟に受け止めて、自分の中へ取り込み、より良い形にして外へ出していく人たちです。凡人には発想できないことを何気なく発想してしまうすごさを感じます。固い頭はいりません。地震の時、頭を守れなくてもいいから、固い頭を捨ててやわらかい頭を手に入れたいです。どうすればいいんでしょう……。

藤井寺だけに……。



藤

藤の木の幹

こんなに太い、なん

柵に交っても、うしろど

ろいでも

たまたま枝葉を伸ばして

やばり

新が太いからか

2005.8.17

ばーちゃんはへびがきらいでした。テレビの画面にへびが出てきてもヒヤヒヤア言っていました。そのばーちゃんは近くの中学校の横を通り過ぎる時いつも想像していたようです。上からばーとん、とへびが落ちてくる様子です。中学校の横には藤棚があり、五十メートルほど道を覆っています。その先へ行きたければ藤棚の下を歩いて行かなければならないということです。んで、ばーちゃんとしては、藤棚にはへびがいて時々ツらがばとん、と落ちてくるというイメージだったんです。よく分かりません。

藤の花房は優雅に揺れます。咲いた花が薄紫に色づいて伸びている姿は本当に美しいモンです。見事な花を咲かせる時、藤が天を覆うかのように枝葉を広げていたら文句無しです。頭上一面に花畑が浮かび上がります。それだけの花を咲かせるためには、幹がしっかりとしている必要があるはずです。多くの花たちに豊かな養分を送り出す本流です。

太い幹に僕は驚きます。それはそれは多くの花たちを喜ばせるんだろうと想像します。花盛りの藤を想像しながら、僕はスケッチブックを手に取ります。少しずつペンを動かします。幹から枝が分かれていき、ニユルニユルと先へ伸びていました。茂る葉っぱの陰からニヨロニヨロとへびが出てこないか少しだけ不安になりながら、太い幹を見つめました。





自信があります。どんな所でも眠れることです。

今回の寝場所は山の斜面です。ちよつとした倒木があつて、地面にカムフラージュされた昆虫みたいな感じもします。それでも、下には枯れ葉が重なつてフカフカしてクッション性は抜群です。

ガイドブックに「遍路ころがし」と表記されていました。どうやら遍路の者を転がすほどに勾配が急な山道があるということのようです。さらにガイドブックには「歩き遍路、最初にして最大のピンチ！」なんて言葉も書かれています。しかも、データでは第十一番札所の藤井寺から第十二番札所の焼山寺までは十キロ以上も距離があります。恐ろしい限りです。そんな所を無理して歩けるほど僕は強い人間じゃありません。本日の歩き、終了です。

スパッと簡単にその日の終わりを決められるのは、どんな所でも眠れるという自分の特技があるからだと思います。自分に自信があることについては躊躇なく決断ができます。逆に、自分に自信がなかったら決断なんてできません。たとえば僕は自分の外見に全く自信がないから、小さい頃から人からの視線に怯えてオロオロしていたように思います。だから、押しが弱いなどとも言われ続けています。ちと、悲しい人生です。

外見なんか気にしなくてもいいくらいに自信をもてる人間性を磨きたいモンです……。





ふくろうって、あの夜にバサバサ飛んでいる鳥ですよ。そんな鳥がたくさんいるんですか。僕、見たことないんですけど……。地球上では自然破壊のひどさが叫ばれています。酸性雨が降ってきたり、温暖化が進んだり、絶滅の危機に瀕した生物がいたり、人間によって壊されていることが多すぎます。端的に言えば、人間の自分勝手な生活ぶりが地球を痛めつけていることは明らかだということです。つまり、人間は絶滅すべきなんです。……といったら、「じゃ、お前から消滅しろ」と言われた友達がいます。ああ、なるほど、間違いではありません。

自分では何気なく生きていても、いつの間にか僕らは地球を汚しています。今現在、文章を作っている僕は、パソコンのキーボードを打ちながら電力を消費することで、火力か原子力か、発電所を動かす何かのエネルギーを吸い取っているわけです。そんなことは言い訳にもなりません。自然からの攻撃が浴びせられます。ふくろうに襲われるかもしれません。お四国にはふくろうがまだ人間と接するかもしれない近い所に生きているようです。

ふくろうが近いというのか、人間が近いというのか、視点によって全く違います。僕はふくろうに近づける山へと歩を進めていたんです。恐るべき人間代表として山へ入り込んでいたんです。彼らに襲われないよう、謙虚に進んでいきました。

まだまだ元気。



山道を歩き、休憩し、足元を見て、そして、足の裏を見ました。ふと思ったんです。「どうなるんだろう」ということです。お四国を一周するのが目標で、それが終わった時にどんなことになっているのか想像もできませんでした。というわけで、靴の裏側を撮影です。

縁の下の力持ちという言葉があるけど、目に見えない所にある物ほど力いっぱい働いていることが世の中いっぱいいます。靴の裏側だって同じです。僕の全体重を背負っています。足なのに背負うのは変だとしたら、足負っています。あるいは、靴負っています。ここで支えなかったら僕は前に進めません。

日本人の美德として、草葉の陰に隠れて善行……、という感覚があります。奥ゆかしくていいと思います。自己満足に浸るというのかナルシストというのか、自分で自分をこっそりほめてあげるのがいいんです。日本に生まれ、日本人として育ってよかったと思います。顔は日本人離れしていると言われても、中身は生粋の日本人なんです。信じてください。うちの両親がうそつきでさえなければ、僕は奥ゆかしさに美德を感じる日本人なんです。

まだまだ修行が足りません。僕自身のことはありません。僕の靴のことです。見えない所での働きが少ないようです。これから先の長い道のりで、充分に身をすり減らしていきましょ。





山の上、見えてきました。第十二番札所です。夏でありながら、山の中、意外に涼しい到着でした。

朝、何となく明るくなってきた頃、僕はもうろうとする意識の中で騒々しい音に囲まれていました。とにかくうるさいんです。虫の声でした。テントに寝ていると布きれ一枚隔てた向こう側は外界です。まあ、山の中にそのままゴロンと寝ているのと同じことになります。耳のすぐ横に虫がいてギャーギャー騒いでいて、しかもそれが大量の虫たちなんだからエライことなんです。

天然の目覚まし時計のおかげでこの日は動き出しが早く、いいスタートができました。「夏休み最終日の宿題がんばれ書き取り人間」の僕が出だしをいいモノにできるなんて滅多にないことです。それにしても「遍路ころがし」と呼ばれる場所を通ることが僕を不安にさせていたから、札所にたどり着けた実感が湧いた時には妙なほど安心感に包まれたんです。

名前負けすることがあります。もし、自分が聖徳太子とか名づけられていたら、もうダメだったと思います。その名前の偉大さを知っただけで無理です。だまされてしまうんです。本当の姿と、上にかぶせられている「名前」というベールの差に気づかないんですね……。もしかして「遍路ころがし」という呼び方を知らなかったら、到着の喜び方が違っていたかもしれません……。





工事中

本堂のとなり。

強い日差しを受けて

お  
ちゃん  
・  
お  
ば  
ちゃん  
が

石を割る

石を運び

石を重ねる

もし

次に来るのがあたり。

何か建、てゐるんだらう

2005.8.18

ガッチンゴッチンと石を割ります。ウンシヨコラシヨと石を運びます。それでもまだ、そこに何が現れるのか全体像は見えてきません。イライラすることでもあるけど、何モノかのイメージがでないことって多いです。

木を見て森を見ずという言葉は本当に僕のためにあるようなモノだと思えます。そのまんまなんです。たとえば話として……、僕は他の人の顔がだんだん見られなくなってくる場合があります。照れくさいという要素は別にしてです。最初は顔が見えています。で、「話をするときには目を見なさい」なんて教えられてきたから、目を見ます。で、そのうちに右目と左目のどっちを見たらいいのかわからなくなります。で、とりあえず左目を見ていたとしても、左目のどこを見たらいいのかわからなくなります。で、とりあえず黒目の真ん中を見ていたりします。もう、顔なんて誰だかわかりません。恐ろしい大バカ者です。

工事をしていたのは本堂の隣でした。寺の伽藍を大きな目で見たら、本堂の隣にくるのは大師堂でしょうか。それとも寺務所を新しく作っているのでしょうか。石だけを見たって僕には何だか分からないけど、寺全体のことを連想したら建物が見えたような気がしました。実際にはまだ工事中……、いつか訪れたとしたら、何が建ってるんだろうと楽しみではあります。いつかまた……。



うちの近くに釣り堀がありました。そこにはコイが泳いでいて、練り餌をつけて釣り上げるというシステムでした。僕ら素人は受付でお金を払って釣り竿と練り餌をセットで手渡され、コイと勝負することになります。

小学校のプールにもコイがいました。といっても一緒に泳いだことはありません。冬の間のプールです。夏の初め頃にはみんなでそのコイを捕まえて、学区の川に放流します。今考えると、ものすごい行事だったようにも思えます。

山を下りていく時、どう見てもプールの形をしたモノがありました。でも、水はドロドロとアオミドロたちがたくさん住んでいそうな感じです。夏の太陽が絶好調で輝いているにも関わらず、そんな微生物たちの天国になっていたんです。人間は泳がないのか……、とツツコミの一つも入れなくなります。で、その環境についての考察が始まります。ま、僕の考えはシンプルに一つだけで、以前はそこに学校があったんだということです。校舎も運動場もなくなっていたけど、プールだけは姿を留めていたんじゃないかと考えたわけです。

ポツンと残されたプール……、今となっては緑の液体をたたえるだけです。かつて、そこには子どもたちの笑い声が響いていたんでしょうね……。しみじみしてしまいました。





何気なく歩いていて、ふと何かに気づくことがあります。その場の風景の中でもとても印象的な物事の時もあり、他の人には何の価値もない物事の時もあります。どっちだって構いません。僕にとつての気づきがあればそれで写真撮影です。

何気なく歩いていて、ふと気づいてしまいました。お杖の先がモシヤモシヤしていたんです。どうやら少しずつ削られてしまっているようでした。これは今の内に写真に収めなければお杖がなくなってしまう……とまで思ったわけじゃないけど、シャッターをきりました。

お四国の道、かなり多くの部分はアスファルトで舗装されています。だから、お杖をつきながら歩いたら木とアスファルトの戦いになるんです。んで、木はアスファルトに負けてしまい、その身を削っていくことになります。お杖は弘法さんの化身とまでもいわれて大切にされつつ、反面ではその身を削って僕らをいつも助けてくれているんです。でも、このお杖について歩いてはいけない場所があります。それは橋です。橋の下には弘法さんが休んでいるかもしれない、それをコツコツという音で邪魔してはいけないという理屈です。弘法さんの化身が弘法さんの耳障りな音を出してしまったら何だかよく分からなくなってしまういます。

まだまだ僕のお杖は美しい……、新参者です……。



寝床。



旅に出ると人は詩人になると聞いたことがあります。その日の僕は、疲れていて死人に近かったかもしれないけど、それでも何かを書き残そうと思っていました。ところが、メモ帳がない……。どこかへ落としたようです。かなりのショックです。

しかも気力を抜き取るかのように、とんでもなくおなかが空いていました。お昼はカップラーメンとぶどうにミニトマトというメニュー……。これが二百円でした。食堂でカップラーメンを出されたのは初めてです。それで、手持ちの食糧はパンが一つだけ。飢えをしのぐというか、おなかがごまかされているうちに眠るしかない……。というくらいの状況でした。

悲しい現実をつきつけられたような感じがします。山から下りてきても近くにお店なんてありません。まず、おなかと背中がくっつくくらいに空腹が押し寄せてきます。そこにメモ帳を落としたという心理的に大きなダメージを与えられたら立ち直れなくなりそうな感じもします。その日の出来事、これからのモノはこれから積み重ねられます。でも、これまでのモノを補充し直すのはものすごく労力がいる作業になるんです。大変大変……。

自分の中で分析すると何が正しいのかどんどん分からなくなってきました。それでも材料だけはメモ帳に取っておきたいんです。そのメモ帳は探し始めてから三十分で無事に保護されました。

倒れないでね。

倒れないで

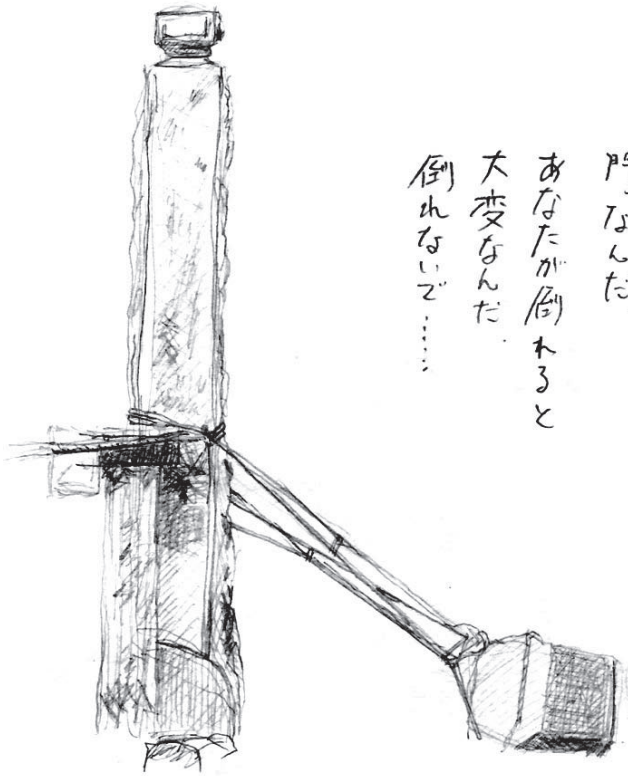
正面なんだ

門なんだ

あなたが倒れると

大変なんだ

倒れないで……



2005.8.11

仕事をしていると、絶対に倒れてはいけない人というのがいます。その人がとても大切な役割を果たしているという状況です。そんな人だからこそたくさんの仕事回っていくし、また、それを見事にやり遂げていくことも多いように思います。

人間は一人じゃ生きていけないっていいです。その通りです。それに多くの場合は仕事でも、一から十まで全部一人で完成させられるわけでもありません。ここでも一人じゃ生き残れません。

チームを組んで全員が目標に向かって動く時、ものすごく大きな力が発揮されます。それぞれの部分がパワフルに動き、部分と部分が有機的にからみ合って一つのところを目指すんです。一足す一が二じゃなくて、二にも四にも変化していくことの強さです。

チームにはリーダーが必要になります。絶対に倒れてはいけない柱です。だから、そのチームの柱を倒してはいけない。倒るか倒さないかは、支えがあるかないかにかかっています。どんなにすごい柱だって持っているモノが重すぎたら倒れるはず。支える存在の大切さを意識しなきゃイカンと思うんです。

僕自身はどう考えたって柱になれる人間じゃありません。そんなことは自分が一番よく分かっています。だから、一生懸命に柱を支える存在になりたいと思うんです。それだって大切な役割です。僕にできる最高の役割だと考えています。がんばる……。



境内には砂利道が続き、その上をジャリジャリと音を鳴らしながら歩いていくのが僕の寺社仏閣についてのイメージです。そのイメージはたぶん、僕が小さい時に遊びまくった焼津神社のものがそっくりそのまま染みついている証拠だと思います。

この寺では不思議な様相をした境内が僕を待っていました。岩肌がゴツゴツとツルツルの中間くらいの表情をして寝そべっているんです。テレビでやっていた、火山から流れ出る溶岩みたいな感じです。もちろん触ったって熱いわけじゃないから大丈夫です。

ゴツゴツなのかツルツルなのか、表現者としてはどっちかはつきりしてほしいところではあります。僕の中の正義の味方が白黒をはっきりさせたくてうずうずしています。一方で、僕の中の傍観者が灰色のままごまかしていこうとねらいます。最近、思うんです。はっきりさせない方が幸せなことも多いんじゃないかってことです。

いいあんばいで生活をしていくことは常に楽しく生きていくことにもつながります。さすがは常楽時です。人と暮らしをするのに、全部の人と仲良くなるのは無理だと思えます。でも、毎日ケンカをして暮らすのはイヤです。そしたら、白黒はつきりさせることなく、なんとなくヘラヘラ上手にやることだって大切になるはず。いいあんばいに生きていきたいです。



音で清めて！

水

ピシャピシャと

どこからともなく聞こえてくる

夏の日差しを浴び

それこそなあ

涼しさを感ずる

この不思議

2005.8.19.

夏です。とりあえず暑いんです。

夏になると時々テレビのニュースで、四国ではダムの貯水率が下がって取水制限をしているなんて伝えたりもします。ダムの底に消えたはずの町が復活しそうなくらいに水が減っている映像が印象的でした。きっとダムができる前まではそこに人が住み、日々の生活を送っていたはずですよ。ダムが作られることになってその町を出なければいけなくなっただけですよ。あの映像を見たらどう思うんだろうと、他人事ながら気になってしまいます。

夏です。とりあえず暑いんです。雨はほとんど降っていない様子だし、あちこちがカラカラに乾いた感じがします。のどだってカラカラに乾いていきます。何もしくなくても干上がってしまいうです。

ピシャピシャと水の音がしました。雲もない空、太陽の光が照りつける暑さの中、水の音がします。のどが乾き、頭まで干上がリそうな僕の耳に、水の音が流れてくるんです。頭の奥の方で響きました。ピシャピシャ……、水のしぶきが頭にはじけます。なんででしょう。少し涼しくなったように感じました。

実際の温度は変わらなくても涼しいと思える……、音ってすごいと思います。そして、そんな音たちを感じるように工夫した日本人ってすごいと思います。誇りに思いたいモノです。

突然登場。



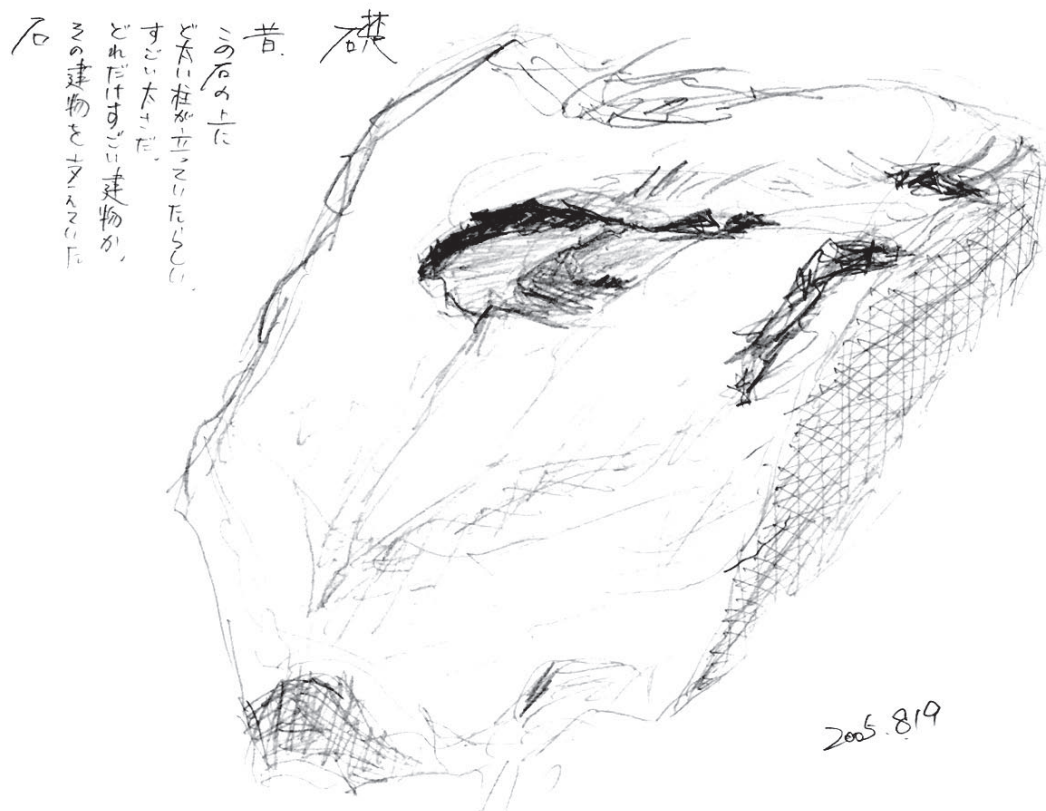
どこなのか、どこなのかと町を歩きます。町の中を歩いていると、どこでもだいたいアスファルトの道なのでみんな同じ場所に見えてきます。それで、だんだんに不安になってくるんです。ガイドブックに載っている何となく表示された地図と、遍路道を示す標識やシールくらいが僕の頼りです。本当に目的地へ向かっているのか全然自信がもてません。

予想外にボンツとお寺が現れました。一瞬、疑います。

人の話を素直に聞きなさいと言われることがあります。そんな中、僕の印象に残っている言葉が、人の話を素直に聞いちゃいけない、というモノです。疑ってかかれ、というんです。簡単にいえば、それくらいの問題意識をもって人の話に耳を傾けなさいという気持ちを込めての言葉でした。僕はショックでした。かなり、納得してしまっただんです。確かにそうだ、ケチをつけようとしてたり、あら探しをしている時は、ものすごく人の話をよく聞いている。

いきなり現れた寺を懐疑的に眺めます。「ココハモクテキチデアルコクブンジデアロウカ」と脳が計算を始めます。地図を見るとやっぱりそこが目的地のようです。前の札所からそんなに歩いていないけど、確かに到着のようでした。一番信用できないのは、地図を読む自分の力です。門には寺の名前が書いてありました。

大きな支え。



昔、  
この石の上に  
大きな柱を立てたらしい  
すごい大木だ。  
これだけすごい建物か、  
この建物を立てたらしい  
石

相も変わらず他との比較でしかモノを見られない情けない人間です。いろんなモノ、その本質を見極められる眼がほしいと常に思っており、自分なりに何かを鍛えようとしているつもりではあるんだけど、悲しいかな、僕の目は節穴です。

絵を描きました。とてもとても僕の目に飛び込んできた印象が強かったということです。大きな石、大きな穴という印象です。昔はコンクリートなんていうものは使われていなかったと思います。大きなお寺、特に国分寺なんていう名前をもらっているようなお寺だったら壮大な伽藍だったはずです。柱も太かったはずです。太い柱を支える礎石だって、やっぱり大きくなければ支えきれなくなつて崩壊してしまうんです。その大きさを紙の上に描こうとしました。でも、どうも僕の節穴の目で見た印象では、他との比較対照がないと大きさが伝わりません。絵を描く技術の低さと相まって、より臨場感のない絵に仕上がりました。

僕のような小さな人間……だからこそ、大きな物に憧れる気持ちが強いのかも知れません。今は町の中、アスファルトの道に囲まれたお寺かもしれないけど、そこに大伽藍が存在していたことを示す礎石が残されているんです。カッコいいじゃないですか。今はもう、自己主張することはないけど、実は大切な役割を果たしていた石です。しみじみとカッコいいです。





おなかと背中がくっつきそうでした。よく考えたら、その日の朝食は菓子パンを一つだけです。途中で、荷物の奥底に忍ばせておいた携帯食を食べたけど、それは一箱で二百キロカロリーだから、歩いていたらあつという間に空腹が押し寄せます。

我慢できなくなったというのがホントのところですよ。うどん屋さんへ入りました。さあ食べようとして、ふと違和感を覚えます。うどんがそうめんに見えたんです。細いんです。大丈夫、味は抜群においしいうどんでした。おなかの虫も大満足です。

小さい頃、うどんといえばスーパーマーケットに袋入りで売っているボヨヨンとした物、という定義でした。風邪なんかひいた時、温かくてボヨヨンとしたうどんを食べさせてもらったことを覚えています。あれこそが僕のうどんでした。でも、だんだんに以て異なるうどんが存在することに気づき始めました。うどんに腰があるという事実です。おそらく讃岐の国の人が聞いたなら怒ると思います。腰があつておいしいうどんを食べるのが当たり前だからです。

味覚って変わらないモンなのかと考えます。僕の家々の味つけはとても薄味でした。周囲の人は「病院食」と称していました。それが僕の味なんです。おいしいおいしい、僕の家々の味なんです。腰のあるうどん、ボヨヨンとしたうどん、どっちも大好きです。



雨宿り。

ものすごくついてる、と思いながら発心の道場たる徳島を歩いていました。何しろ雨に降られることがないってのが幸せでした。もちろん、お四国という場所は夏に雨が少なくてダムが干上がるくらいの所だから不思議なことじゃないんだろうけど、僕にとっては本当にラッキーに思えたんです。

このお寺でもラッキーな自分を感じられました。ちょうどお寺に着くくらいのタイミングでにわか雨が降り出したんです。ということは、お寺で絵を描きながら雨宿りができるんです。本格的に天候が崩れていたわけじゃないから、雨も長く降り続くようなものとは違います。しばらくしたら絶対にやむだろうという自信がありました。

やたらついてるって時があります。逆に、やたらついてないって時もあります。なんでだろ、って考えてみました。ついてる時ってのは物事をすごく前向きに考えられる時で、ついてない時ってのは物事をすごく悲観的に考えてしまう時なんじゃないでしょうか。どんな苦しいことでも考え方次第で「この程度ですんだ」と思えるってことです。そんな考え方ばかりしてたら脳天気なアホになりそうだけど、幸せな考え方だと思います。僕は幸せです。

さてこの後、予想通りに雨はやみ、僕はますます幸せに歩くことができました。ラッキー！



狛犬

俺は今、神殿にいる  
だから

お前はこちを見ない

外から来る人々を見て

おまへはこちを見ない

守るモノ。

頭が頭痛で痛かったら大変です。重傷です。じゃ、犬が狛犬になつてしまつたら、犬度二百パーセントになつてしまいます。どうも漢字に弱くて、石造りなのに犬々してしまいました。

お寺は観音寺、きつと観音様を大切に想う人たちが多い場所なんでしょう。守るべき存在というものです。外側からおかしなやつらが入ってきては困ります。番犬が必要です。狛犬が石のような意志の固さで守っていました。おかしなやつらなんて寄せつけることもなさそうでした。

日頃は「おかしなやつ」と指さされるような僕だけど、監視の目をかいくぐって境内へと侵入しています。そして、石の番犬の姿を後ろから眺めました。妙にかわいらしく見えてしまいました。常に外側を気にしているから、内側に誰がいようと全く意に介していません。番犬だったら、周囲三百六十度に向けて常にオーラを発していきやいけないと思うんですが……。

世の中一般、正々堂々、小細工を必要としないたくさんの人たちはすばらしいと思います。たとえ目の前に狛犬がいたって、堂々と……です。外側なんて気にすることはありません。一番守らなきゃいけないモノは周りには見えない自分の内側にあります。見なければいけない場所、それは心、自分自身を象徴するモノです。守るべき自分の心です。





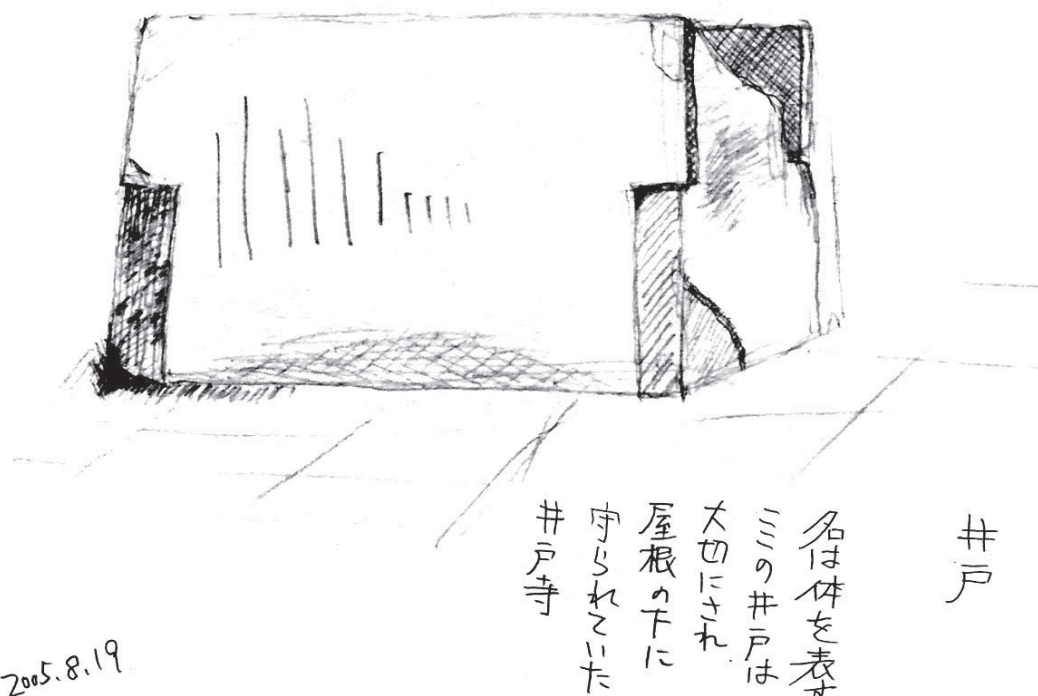
昔からこんな光景が受け継がれているのでしょうか。とても不思議な光景に思えます。田んぼの中にお墓がニョキッと頭を出している姿は、それまで見たことのないものでした。

たとえばもし、僕のお墓が田んぼの中にあつたら……、ちよつとうれいかもしれません。僕はお百姓さんを尊敬しています。お百姓さんが心を込めて育てている稲や、それが生まれてくる田んぼもステキだと思っています。ステキな田んぼの真ん中に、いつまでも眠っていられるのはそんなに多くの人にはできません。

僕のばーちゃんは、家から歩いて何分かの所に眠っています。まあ、フツーのお寺のフツーのお墓です。法事があつたらそこへお参りをします。お寺だから当たり前かもしれないけど、周りにもお墓があつて線香の煙が漂っていたりもします。みんなでその場の雰囲気を高めているかのようです。線香の香りって、それはそれでステキな感じですよ。もともと僕の家には仏壇がなくて、線香の煙とは無関係の世界でした。あるのは蚊取り線香くらいのものでした。それが、ばーちゃんが死んでから、家の中に必ず線香の香りが残るようになりました。家と、お墓と、それぞれの場所ではーちゃんは線香を感じているはずですよ。

田んぼに現れたお墓、周りには黄金の稲穂が揺れています。線香の煙にも通じるような、稲の波でした。

名前。



井戸

名は体を表す  
ミミの井戸は  
大切にされ  
屋根の下に  
守られていた  
井戸寺

2005.8.19

雨はキレイです。誰が何と言っても、何回言っても僕は雨がキレイです。もともとガチャリダーで、ライダーで、屋根がない乗り物に乗るのが好きだから、雨がきれいなのは当然といえば当然です。トホダーだって同じ……というよりは、屋根どころかお尻を乗せる所さえないんだから、雨が好きなわけがありません。

雨って、ものすごく強い力をもった存在です。天高くから様々なモノに降り注ぎます。それで、少しずつ打ちついたり染み込んだりしてモノの姿を変えようとしています。大きな岩だって、だんだんに形を変えられてしまします。雨ってすごいヤツです。

お寺には仏様がいます。一番大切にされる存在です。んで、弘法さんがいたり、守り神みたいのがいたり、存在感のあるモノたちがひしめいています。そんな中で井戸を前面に押し出したお寺があつたんです。その井戸は大切にされている様子がよく分かりました。屋根の下にいて、僕らを迎え入れてくれる井戸でした。井戸寺をずっと見守っているんだと思います。

僕らにはそれぞれ名前があります。ふさわしい名前をもっていることがあります。井戸の寺はバッチリです。ふさわしくないこともあります。「名前負け」していることがあるんです。自分はどうだろうと考えると……まあ、後者でしょうね。それを自覚しているだけマシかと開き直って、「名は体を表す」状態を目指します。



一番感じるのは入院した時でしょうか。病院という場所の質素儉約の精神です。食事が出てきて口にするとその思いが強くなるように思います。いや、別に質素儉約を奨励している場所ってフケじゃないはずだけど、そう思ってしまうんです。ヒジヨクに味つけが薄い食事になっています。ま、僕は濃い味が苦手なので、そんなに問題ありません。

病院が贅沢な場所、というイメージはあまりありませんでした。が、その建物を見たらガラランと病院に対するイメージが崩れていきました。天守閣があります。安土桃山建築でしょうか。派手な特徴をもった建物です。パツと見て、まぶしくりました。少なくとも、僕が住んでいる近所に天守閣のある家はありません。ただそれだけでも大いなる驚きです。よくよく見たら、そこに看板が立っており、「〇〇病院」みたいなことが書かれています。ものすごい病院です。天守閣が好きな人が建てたんでしょうかね。

おもしろい所、おもしろくない所……いろいろあります。病院ってのはどっちかといえばおもしろくない所の部類に入りそうです。おもしろくない所にずっと入れられていたら、人間もおもしろくなくなってしまうです。せめて外観くらいはおもしろくてもいいんじゃないか……って、この建物は主張していました。もちろん、僕の勝手な解釈ですけどね……。



宿。



実はちょっと失敗したかな……と思いました。最高の場所、橋の下のはずなのにくやしい感じです。確かに橋の下、雨が降ろうと問題ありません。人目にもつかない所で、シチュエーション的にはかなりいい場所でした。それなのに……。

朝起きて失敗だったと分かった経験、おねしょなんてのも、そのひとつです。いやいや、橋の下テント失敗の経験としては、鳥の糞事件です。撤収しようとしてテントを見たらうんこだらけで、声も出ないくらいにショックを受けたことがあります。忘れようにも忘れられないくらいのショック状態でした。

そう考えたら今回の失敗なんて、ちょっとしたモンです。とにかく暑い、という状況でした。橋はすぐ頭の上まで迫っているし、橋げたもすぐ隣までできています。風がまったく通りません。ついでにいうと、今回使用のテントは一人用の物で山岳テントの親戚なので、ガバァ〜と大きくメッシュなんてありません。出入り口と、天井部に穴がポンと空いているだけです。アウトです。

バランスなんです。周囲から判断したシチュエーションと、自分が眠るための条件……、どのくらいで妥協し合うかのバランスとなります。眠る場所として他に選択肢が見当たりませんでした。仕方がないので、暑さに耐えることを選びました。仕方がないんです。仕方がないんです。寝不足です……。



イヒヒヒ、こういうネタが大好きです。言葉遊び系ですね。ブロック塀に囲まれたパン屋さん、どれだけ固いパンを売っているんだろうと思ってしまいました。

しばらく前に「ロバのパン屋さん」なるものが僕の周りで話題になりました。といっても、僕はそんなモンを知っているわけでもなく、なんじゃそりゃ、と思っていただけです。どうやら歌を流しながらパン屋さんがそこら辺を回って歩く、という形態があったということです。その歌がとても印象的なモノらしく、「ロバのパン屋さん」の話題で盛り上がっていました。

それでか……、「ロ」という文字と「パン」という文字が見えた瞬間に、パン屋さんがあるんだと脳みそが反応してしまったようです。で、よく見たらどうやら「ノロパン」と書いてあるらしい、それはそれで、なんじゃそりゃ、となるわけです。ノロノロと売って歩いたから名前がそうなったのか、それとも、何か呪われるようなパンなのか……、得体が知れません。

すみません、僕がバカでした。「プロパン」でした。プロパンガスの置き場なんでしょう。そりゃ、ブロックの壁でも納得です。でも、見えにくかったんです。ホントに「ノロパン」って見えなんです。その間違いに気づいた時に、おもしろさが来るんです。イヒヒヒ、こういうネタが大好きです。



正体は……。



たどり着いたはずなんです。でも、なんとなく着いたという充実感が得られません。だいたいのお寺に着くと、それなりの造りをもった建造物が僕を迎えてくれます。ところが、到着したはずの十八番札所にはそれらしい建造物が見当たらないんです。裏側から見るとボロっつい小屋くらいにしか見えないモノがあるのみでした。

いや、本当は分かっているですよ。どれだけ粗末な造りだって、門は門なんです。人を迎え入れる最初の場所です。そこに自転車が止めてあったって、アスファルトの道から少し外れてたって、そんなことは小さなことです。思いさえ込められていたら何の問題もありません。……たぶん……。

僕は人からの見た目なんて気にせずに生きていきたいと考えます。それで、ファッションという種類の話題に興味をもつことがほとんどありません。身につける物は実用性が何よりも最優先されます。どれだけかっこよくても実用性がなかったら却下です。逆に、実用性があればどれだけかっこ悪くても採用となります。結果的に、ただでさえかっこ悪い僕が、よりかっこ悪くなって人の目にふれることになってしまうんです。ああ、悲しいことです。門も僕も、少しは見た目を気にした方がいいみたいです。中身を見てもらうための最低限のマナーってヤツのようです。



人肌。

神木

おぢさんが  
人肌みたいや  
と言っていた



門のすぐそばに立派な木がありました。いわゆる神木ってヤツじゃないかと思えます。毎度のように「こんなに立派には描ききれない!」と感じながら、それでも僕のペンは動き出してしまいます。

この木、「立派な」という表現だけでは足りない姿をしていました。うまく言葉にならないんだけど、表面がザラザラって感じとデコボコって感じの中間みたいだったんです。ツルツルっていうときれいすぎるし、ヌルヌルっていうと気持ち悪いし、擬態語って難しいと思います。

僕もそうだけど、擬態語や擬音語が会話の中でメチャクチャ登場するタイプの人間がいます。「ピャー」とか「シユシユシユッ」とか、何を言いたいのか分からないことも時々あります。身振りがセツトになっていることがほとんどです。体いっぱい効果音までつけて何かを伝えようとしている姿なんだろうと好意的にとらえると幸せになります。

そこに現れたおっちゃんは、物静かにこう言いました。「人肌みたいや」と……。擬態語や身振りでは表せないことをズバリ分かりやすく伝える言葉でした。決して難しい言葉じゃありません。でも、その言葉をその場面で上手に使う力が必要なんです。感性なんでしょうね。努力して磨けるモンなんでしょうか……。



昔々からお四国遍路はあったんですね。それがいつのことなのか知りません。人々が家を建てる前から遍路道があるわけです。輪廻を形作る道がお四国を巡っているわけです。

メビウスの輪なんて変なモノもあるけど、僕らがいつも目にするような輪ってのはそんなに珍しいモノでもありません。たとえば、僕の目の前には輪ゴムがあります。ビヨヨンと伸びてはピンと縮んできます。こいつをハサミで切ったらビヨヨンと長いだけのモノになってしまいます。輪は輪であり、一周ぐるんとつながっているからこそ意味があるんです。

遍路道のある場所へ家を建てようとしても、その道は動じません。敷地の中を悠々と道が伸びていきます。それはいいんだけど、遍路道を歩く者にしてみると非常にドキドキする現象が起きてしまいます。僕はこの敷地に足を踏み入れて良いのだろうか、と自問しながら先を眺め、道しるべを見つめました。確かにその道は敷地内へと進んでいるようです。ああ、ドキドキです。入り込んで不審者と思わないでください。

結果的に僕は不審者として捕らえられることもなく、遍路道の前に向かって行くことができました。輪廻の道を進むことを許されたと思ったら、ちょっとカッコイイ感じがします。輪廻から解脱することはできないみたいですけど……。



見えます……。

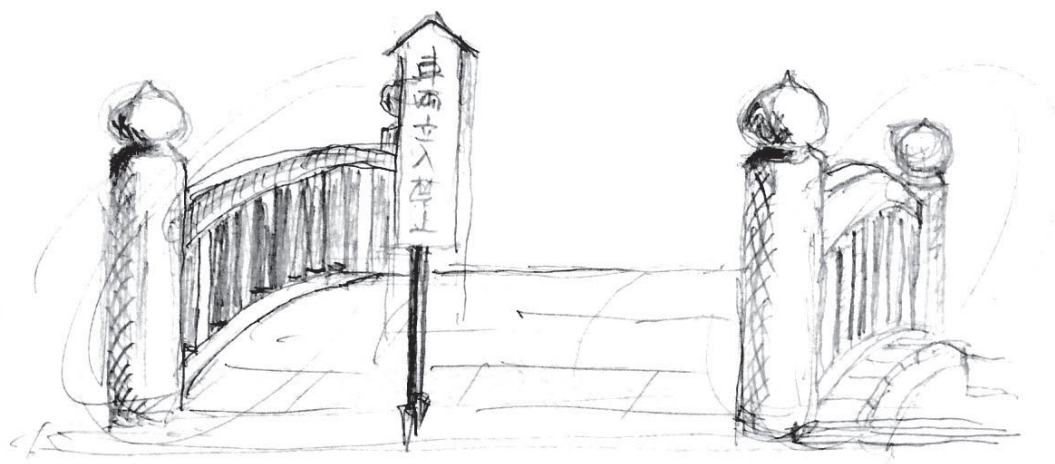


もちろん着いたときにはうれしく思います。でも、さすがの僕にも十メートル先は見えます。十メートル先には目的地有りです。遍路道を表す札や、シール、道標など、とてもありがたいものです。昔だったらそんな物はたくさんなかったということも分かります。お地蔵さんにお参りをし、近所の人たちに道を何度も尋ねて札所を探していたはずです。そう考えたら、目印がたくさんあることはとてもありがたいんです。よく分かります。でも……、でもですよ……、これはどうなのかとツツコミをいれたくなります。そして、あとはケラケラ笑うだけです。

笑って、大きな力をもっているモノだと思います。何もかもを超越してプラスの方向へ導くくらいにすごい力を感じます。どんなに苦しい時だって笑いを絶やさないでいると、いつの間にか自分自身が、そして、周りみんな楽しくなってきます。中身が整う前にまず環境から……、笑いの環境が中身の楽しさを持つてくるんです。楽しくなったら余計に笑いが出てきます。そうするとまたまた楽しさが増して笑いがあふれてきます。幸せな循環です。

苦しい苦しい歩き遍路、そんなことをする義務も必要性も、あんまりありません。でも、歩くから苦しいし、苦しさが分かるから楽しさも生まれてきます。十メートルでも充実の前進です。





2005.8.20

橋

川の向こうにあるのは

極楽浄土か

橋は衆生として渡れない

人が生きる道の教え、それが仏教というものだと思います。歩寺の中に足を踏み入れたら、人の在り方として理想とされる世界へと近づいていけそうな気がします。人は悟りを開き四苦から解放されたら仏陀になれるみたいです。きっとものすごい修行が必要になるんじゃないでしょうか。衆生として悟りの境地に行き着くのは至難の業なんだということになります。

この橋渡るべからず……です。車の人たちです。人の足で一步步進む者たちだけが前へ進める場所なんです。そりゃ、人の道を照らすヒントあふれるお寺へと簡単にエンジンふかして入っていけるようじゃ困ります。なんか、価値がうすれてしまします。ま、価値のあるなしを考えてしまうこと自体がもう世俗に染まった感じはするけど、それでも僕は自分の足で歩いています。それだけの見返りがあってもよさそうなモンです。

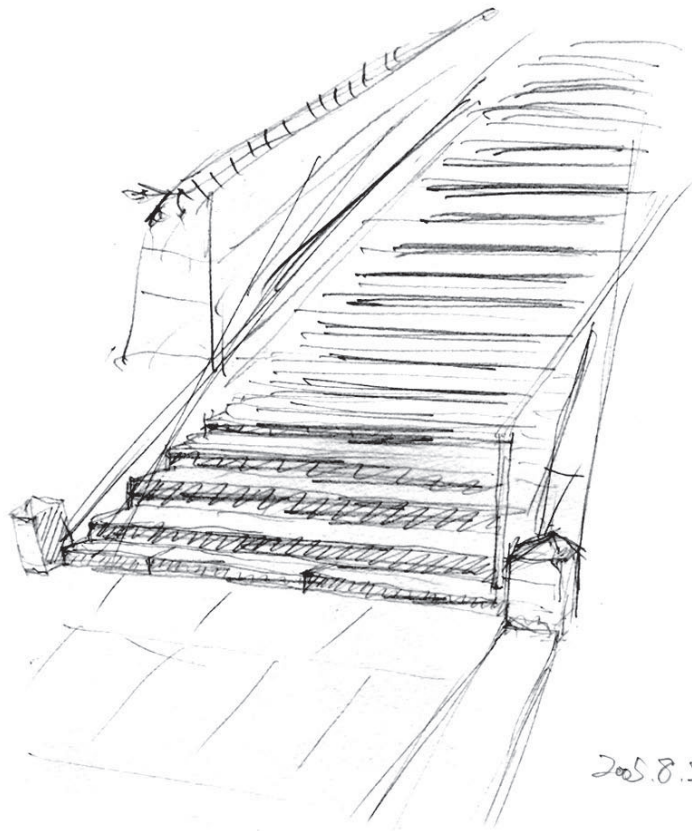
実際のところ、何かしらの見返りを求めてしまうのが人間というモノのように思います。どれだけ心を冷静に保とうとしても、自分の身はかわいいんです。周囲のいろんな状況と比較してしまいます。資本主義の中で生まれ育ってきていることの象徴かもしれません。がんばったらがんばった分の見返りを期待するんです。それからも解脱できるか……、簡単にできるなら僕らの生き方はもっと楽になるんですけどね……。無理です……。



僕、基本的に自分勝手にわがままなんです。だから歩く時にもかなり自分勝手に歩きます。歩くペースもエエ加減だし、歩き方だってスムーズとは言い難い様子でダラダラとしていると思います。そうすると、自分勝手に歩けない状況が現れるとストレスがたまり始めます。階段がいい例です。誰の歩幅に合わせてあるのか知らないけど、とにかく僕の足にピタッと合う階段はそんなにありません。階段が僕に合わせるなんてないから当たり前、仕方ありません。

目の前には階段が続いています。先がどこまであるのか見えないくらいに続いています。もう、げっそりです。山道の階段はまた余計に歩きにくいような気がします。横に渡してある丸太が少し高さを増していて、その分高く足を上げなきゃならないから気も遣うし大変です。

お寺が山のとっぺんにあることは珍しくありません。階段を上り始めてしまったら、とっぺんまで山を登らなければいけないと覚悟を決めます。逆に考えると、山が過激に高くなければゴール近いわけです。十メートルの山でも、とっぺんはとっぺんですから……。気休めです……。実際に目の前にある階段は、何百メートルというレベルでとっぺんまで伸びている感じがします。自分に修行の苦を課して、ペースだけは自分勝手に上げる階段でした。



2005.8.20

続々と

トシキタ...と  
山頂へ歩んできた  
まだげんご

まだ、あった……。

山のとっぺんに着いたら、そこにお寺があるってのがイメージ通りの展開です。なのになぜ、山門が見えないんでしょうか。山道の階段が終わったかと思ったら、現れたのは石段です。残念、僕のイメージは崩れ去りました。

時々、心の中で思います。「百里の道も、九十九里をもって半ばとせよ」という言葉のありがたみです。ゴールが頭にちらつき始めると、どうしたって気持ちがうわついてしまいます。そこで、九十九里という中間地点を思い出すわけです。ほとんど終わっているはずの道のりが実はまだ半分だけしか過ぎておらず先に同じだけの距離があるとしたらシヨックだけど、それくらいの気持ちでいたら緊張感を保っていることができます。

つらいんです。そこが標高二メートルくらいの山なら全然どうってことありません。でも、長い時間かけて登ったはずなのに、しかも、歩みにくい階段を歩いたのに……また階段なんです。どれだけ自分をだませるかということにかかっていると思います。物理的に考えたら、百里の道は百里なんです。それ以上でもそれ以下でもないんです。そこを「まだ半分だ」と自分をだまして歩き続けるテクニクといえるのかもしれませんが。どれだけ正しくてもしんどい時にはしんどいし、どれだけウソでも楽な時には楽だと感じられるんです。そう、だましまし、あと少し……。あと少し……。





どこかに「あと五百メートル」なんて表示がありました。よっしゃ、と思う気持ちと、うへえ、と思う気持ちがぶつかります。そもそもここまでの道がつらすぎたんです。山道を登ったり下ったり、五時に閉まる納経所を意識したら急ぐことも必要になります。山道でも下りの道は走りました。お杖をちよつとだけ先に着地させて転ばないように注意しつつ、全速力です。

ばーちゃんがついてきてしまった……と思うのはこの頃からでした。走っているとチャリンという音がするので見てみると、ばーちゃんの小銭が落ちていっています。全速力の下り、しかも土がふかふかの山道でその音が聞こえたのには感謝しました。本当にありがたさを感じました。ばーちゃんが教えてくれたような気がしたんです。偶然にしても、何にしても、ありがたいのはありがたいモンなんです。同行二人じゃなくて、同行三人になってます。

さて、五百メートルを残した上り坂、今度は陸上選手を思います。ヤツは四百メートルの選手でした。ま、同じくらいの距離です。そうすると、ヤツには負けられないという思いが湧いてきました。ヤツが四百メートル走れるんだから自分にできないわけがない、と勝手に思うわけです。実際、運動神経に大きな差があつて、同じ土俵で比べること自体が無理なんだけど……。

ラストスパート、五時まであとわずかでした。

ギリギリ

ギリギリセーフ

いせ

正確には

ギリギリアウトだな

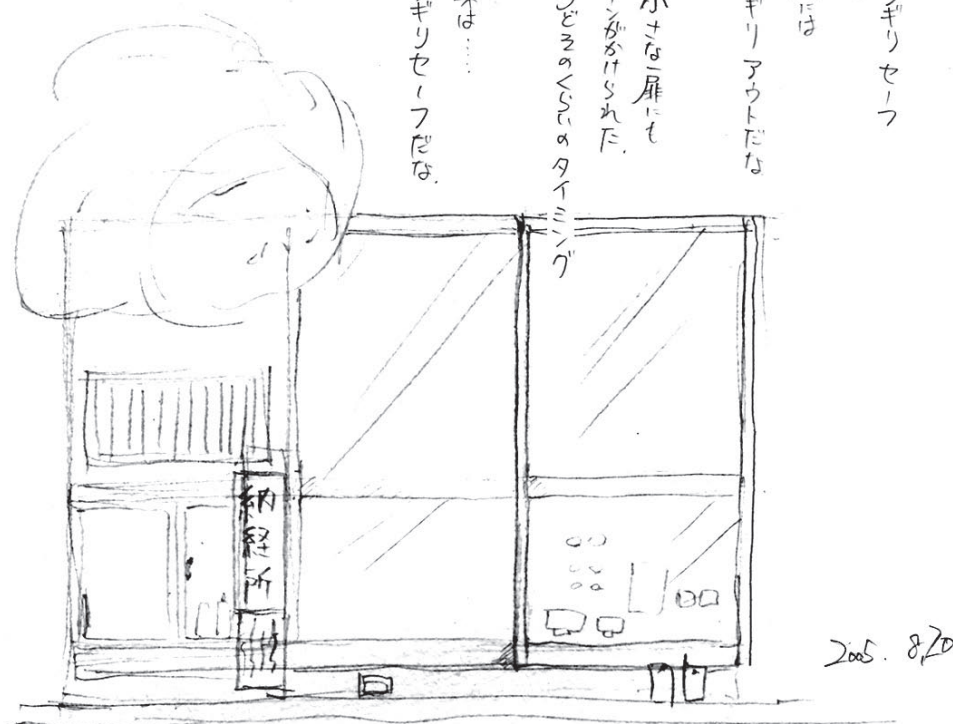
一番小さな扉にも

カーテンがかけられた

まじまじのくぐりタイム

結果は……

ギリギリセーフだな



ギリギリ人間。

ギリギリのところできているような人間です。ちっちゃい頃からギリギリの人間でした。特に印象的なギリギリは高校生の時のことです。自転車通学でガシャガシャとチャリを駐輪場に放り込み、そのまま昇降口へ……、先生に腕をつかまれるものの振り払って教室まで逃亡したギリギリです。結果、高校三年間は無遅刻無欠席無早退の皆勤賞を獲得しました。

ラスト五百メートルを走り抜けた時、太龍寺の納経所は閉まる時間でした。お守りのようなものは片づけられ、大きな窓はカーテンまでかけられ、小さな受け付け窓もカーテンが閉じられる途中でした。そこに顔をすり寄せ、両手を合わせ、お願いをし、納経させていただきました。

時間的にはギリギリだろうと何だろうと、アウトでした。でも、実際には納経帳に御朱印もいただいたし、セーフです。終わりよければすべてよし……、この日もいい日だったと終わっていくことができます。

ギリギリで何とかその場をしのいで今までの人生を歩んできました。困ったことに、だいたいの場合ギリギリでセーフになってきています。一度、大きなアウトをもらわないと学習しないと思うんだけど、幸か不幸かギリギリセーフでごまかしています。しばらくは、ギリギリセーフの甘い考え方が治りそうにありません。



所々で歩き遍路のための場所を見ることが出来ます。お四国の精神が今でもあちこちに息づいていることを感じる時です。ここは「へんろ小屋」であり、しかも「第二号」と記されていました。どうやらありがたいことに「第〇号」と番号をつけながら、たくさんのお憩所を作ってくれている人がいるようです。

休憩所にはいろんなモノたちが集います。この時いた先客は犬でした。のんびりと自分の時間を過ごしていました。これは邪魔してはいけないと思い、静かに写真だけを撮って通過です。心を込めて作ったであろう憩所、人間が過ごしやすいんだから犬が過ごしやすいわけがありません。リラックスしまくりです。

僕は少しだけ謙虚になれたような気がします。もし、心が荒んでいたら、犬をどかしてでも自分が座ろうと考えたかもしれません。心にゆとりがなかったら、犬をからかっていじめていたかもしれません。僕は、歩き遍路の者として周囲のモノへ広く心配りができていたように思います。僕はいつもいつでも広い心配りができるほどすごいヤツじゃないけど、時々そういう瞬間がやってくるんです。それでもお四国を歩いていて、そんな瞬間がやってくる回数が増えたような気がします。ありがたいことです。

先客はさも当然のようにそこにいました。僕は単に「犬だ」と思い、「じゃー!」と当然のようにあいさつをして写真を撮りました。





プロレスの世界で電流爆破デスマッチなんてモノが行われていると、もう血沸き肉踊る感じがします。プロレスはものすごいスポーツです。ほとんど我慢比べの様子を呈していて、相手がどれだけ遅い攻撃を仕掛けてきても「おうりゃー！」と正面から迎え撃ちます。んで、ダメだと思ったら倒れるし、大丈夫だと思ったらもう一回攻撃されることを望んだりもします。電流爆破だったら、ロープに吹っ飛ばされると「ドン！」と火花が散ってやけどです。

田んぼでプロレスをする人は多くないと思います。でも、そこには電流が流れているようでした。そこへ吹っ飛ばされたら火花が散ってやけどするんでしょう。目的がプロレスじゃなかったら、誰なんでしょう。山の動物たちになるんでしょうか。イノシシとかサルとか他にはスズメとか……？田んぼに設置してあるってことは米を守りたいという気持ちのはずです。

興味津々でそこに触ってみました。ビリビリビリとくるのかと思いきや、あれれ、全く何事も起こりません。お休み中なんでしょうか。ただの脅しだったんでしょうか。……ということは、字を読む者をターゲットにしているのか……。

後から情報ゲット……電力がものすごく弱いけど動物を目標にしているんだと教えてもらいました。ついでに、舐めたらしびれるだろうことも教えてもらいました。



色のもつ力つてのも大きなモノがあります。パツと見たら辛さが口の中に広がるカレー屋さんの色、口の中に炭酸飲料がシュワシュワとはじけるような自動販売機の色……いろいろあります。

色は何かを具体的に説明してくれるわけじゃないけど、感覚的に僕らの中へ訴えてきます。理論的に説明されるわけじゃないから、よけいにザックザックと心の奥の方にまで入り込んでくるような感じです。でも、その色たちにも背景となる文化みたいなものがあるように思います。カレー屋さんの色が黄色っぽいと見事に「カレー屋さん」というイメージを得るのが僕ら日本人です。緑っぽいカレー屋さんを見ても辛い雰囲気を感じられません。あるんですよ、緑の色をしたカレーが……。ものすごく辛かったりするんです。そもそもカレーなんて、どこぞの国へ行ったらみそ汁と同じ感覚です。毎日のおかずの一品で、中に何を入れるかなんて決まっていません。香辛料で味つけしてあつたらカレーになつてしまふんです……たぶん……。

仏教にも色があります。虹のように配色された布が風になびきます。仏教が生活の中に深く入り込んでいない僕にはあまり感動的なものじゃないけど、その道をじんわり歩き続けている人にしてみたら「仏教」と何かを訴える配色なんだと思います。山門を見て「やっと着いた」と思っただけじゃないんでしょうね……。



祠

窓の奥

暗闇の中には

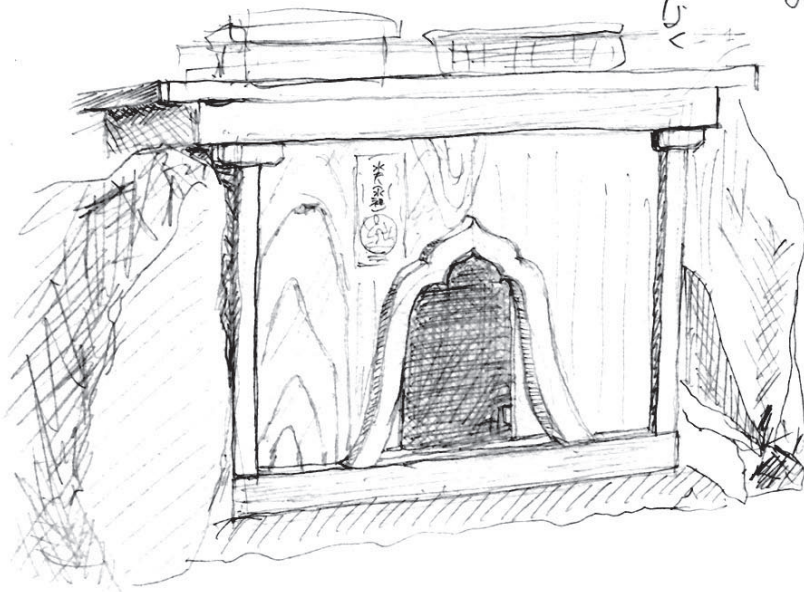
水

湧き出する

水

絶えなくひく

水



奥。

2005.8.21

大切なものはどこにあるのか、奥の方です。簡単に見えるような所に大切なものがあるってのは、なんとなくありがたみがありません。これ、ただの感覚です。日本人的な感覚として奥ゆかしさという美徳が根付いているということでしょう。

窓を開けるとそこには暗闇があり、その暗闇の中には水が湧き出ています。平等寺の祠の奥です。神聖な場所、すぐに手が届くような所に水が湧き出るわけじゃありません。よく目を凝らさないと見えないくらいに湧き出ているから、よけいに価値があるような気がします。

表に出ていて、すぐに手が届くものに大切なものがないのかわつて、そんなことはないと思います。そりゃそうです。大切なものが全て手の届かない所にあるんだったら、僕らは大切なものを得ることが不可能になってしまいます。ま、逆に表に出ている方がものの大切さを見落としてしまうこともあるかもしれないけど、だいたいは表に出ているものってのはスパーンと僕らの目に飛び込んできます。見えない所のもの、見えにくいものこそ明確に見極められる力が必要になりそうです。

それにしてもこの祠、水が大切にされていることを感じます。僕らを清めてくれる水の力、その力にどれだけの価値を見出しているかということだと思います。水の力、あなごれません。





必要以上に汚い雰囲気漂っています。なんでか分からないけど、何をやっていても僕は「汚れ」というモノと仲良くなってしまう傾向があります。ホント、ナンデダロウ……。

本格的に雨が降り、本格的にカッパを着て、本格的にイヤになりながら歩いていました。カッパを着て山道を歩くなんて、最悪です。できる限り山道を避け、アスファルト舗装された国道を歩く軟弱さです。国道を歩いていると山をドカンと突き抜けているトンネルが登場します。昔の人だったら上まで登って行かなきゃ越えられなかった山だって、直線の道をスイスイです。それにトンネルの中はとりあえず雨が降っていません。軟弱者には手頃なルートだといえます。

どこかで見たことのある光景が登場しました。歩道の片隅に室戸までの距離が書かれた標識があり、そこで怪しげな顔が吠えている光景です。ガイドブックに載っていた写真です。本来ならそこで全く同じ写真を撮るべきだったと思います。それが芸人魂というモノです。……いや僕は芸人じゃないんですが……。気分が滅入ってたんですね。そこで記念撮影をするのが精一杯でした。

気持ち次第で人の行動なんてすぐ変わってしまうんです。ただだけアホなことでも、そこに価値を見出してやれてしまうステキなエネルギー……プラス方向以外へは省エネでいきたいです。

ありがたいお言葉。



なんか違うような気がします、「上」の使い方……。まあいいか、分かることが大切です。注意しなければいけないんです。赤い文字で書かれているから、意識を上方へと向けやすくなっています。蜂は怖いなあと思います。刺されたら痛いはずです。僕自身、本格的に蜂に刺されたことがないような気がします。だから、想像の域を出てはいないんだけど、だからこそ、よけいに怖さが頭の中を駆け巡っていくのかもしれない。

僕が蜂を相手にして痛い目にあったのは幼稚園に通っていた頃です。その相手はミツバチでした。たぶん、その相手は僕よりももっと痛い目にあっているはずです。なんといっても僕の体重を感じてしまったから……。いくら幼稚園児でもミツバチと比べたら大巨人です。大巨人が何気なく体を支えようとして置く手の下に何気なく入り込んでしまったミツバチは、自分の針を大巨人の手に突き刺しました。「痛い！」……大巨人の泣きべそです。同時にミツバチはべったんこ状態です……。

痛い目にはあいたくありません。だから、そこにあった注意書きはとても価値のあるものだったと思います。危険認知能力の低いアホな歩き遍路の者にも、文字は確実に情報を伝えていました。言葉や文字の持っている「伝える」という力は大きなものです。僕の場合、その力をもてあましていることが多いですが……。



かなりの恐怖でした。ここでもしフラッシュが光ってしまったら、僕は多量の蜂に襲われてしまうことになってしまいそうです。それでも、義務感の強いつもり僕だから、なんとしてでも記録を残さなければいけないと思うわけです。

頭の上にはでっかい蜂の巣……。ありがたいお言葉が記されていたおかげで存在を意識して見上げることができました。シヨックアブソーバーという言葉がある、と何かのマンガで見たことがあります。たとえば自分で「失敗する、失敗する……」とあらかじめ思っておいたら、実際に失敗してもそのシヨックが少なく済むというヤツのことだそうです。同じこと……。「蜂の巣がある、蜂の巣がある……」あらかじめ思いながら見上げたんです。それにしてもでかすぎました。ビビりまくりです。

ミツバチだったら僕の手の平でプチっとなつて、チクツとしておしまいです。でも、でかいヤツらです。何匹か飛んでいます。巣の中にはそんなヤツらがうじゃうじゃ動いているのかと思ったら、怖くて仕方ありませんでした。刺されたら死にそうです。

報道カメラマンたちは危険なことに対してもカメラを向けます。その結果、命を落とすことだってあります。僕にはそんなことはできません。命が惜しいです。先に逝ってしまった人たちの分まで充実した命を燃やしていきたいと思って生きていきます。





カニ、おいしいですねえ。長くて太い足、そこからツル〜ンと上手に身が出てきたら感激です。□の中で感じる身の充実感ばかりません。お金持ちでもなく、お金持ちの知り合いが食べさせてくれるわけでもなく、自分で捕まえる力もない僕にとってのカニは少しばかり遠い存在です。

巨大なカニがワシヤワシヤと道を横断していくことはないと思います。イメージの中では小さいカニです。そんなカニたちを注意して車を運転するのは、なかなか大変なことでしょうね。僕は歩き遍路だから、もしもカニが現れてもひよいひよい足の踏み場を考えてあげられます。時速四キロくらいだから難しくありません。でも、車のスピードじゃ、「あ、カニー!」……グシャ……、合掌……という結末をたどりそうです。

看板によると、ここは「自然の恵みによって成り立つ」町だそうです。カニを助けたら「覗かないでくださいね」とか言っただけで自分の殻で何かを作ってくれるんでしょうか。ま、それはないでしょう。それでも、このカニがいることがこの町の誇りなんです。カニたちに敬意を表しているところがステキに思います。

僕は自分の生まれ育った町が好きです。だから、同じように、カニと共に自分の町を大切にしているこの町のことも大好きになりました。



いったい彼らに何が起ったのか……。いや、たぶん何も起ってはいないんです。ここは無入島でもないし、漂流してしまっただけでもないと思います。それでも彼らは海岸に大きく自分たちをアピールしていました。

冒険物の物語を読んでいると、だいたい漂流先は無入島であり、そこに「S・O・S」なんて文字を地面に記して助けを求めます。それでも助けを見込むことはできず、自分の生活を作り出していくストーリー展開です。僕はワクワクしながらそんな物語を読んできました。もしも自分自身にそんなアクシデントが降りかかってきたら、まずメガネを失うことで生き残りの可能性が下がりそうですね……。うですが……。

落書きのネタとしてメジャーなのは相合い傘だったり、放送禁止用語だったり、また、そのシンボルマークだったり、だんだん下ネタが増してくる傾向にあるようです。海岸に書かれた言葉、下ネタとしてはかわいい方です。でも、僕としては語尾が「ち」よりも「こ」の方がなじみがあります。

言葉はその地域の文化を象徴します。海水パンツをはいた二人の男の子らが砂浜に大きな文字を書いても、地域性が出てくるんです。言葉は大切なもの……。丁寧に丁寧に書いていきましょう。たとえば下ネタでも……。

見えた！



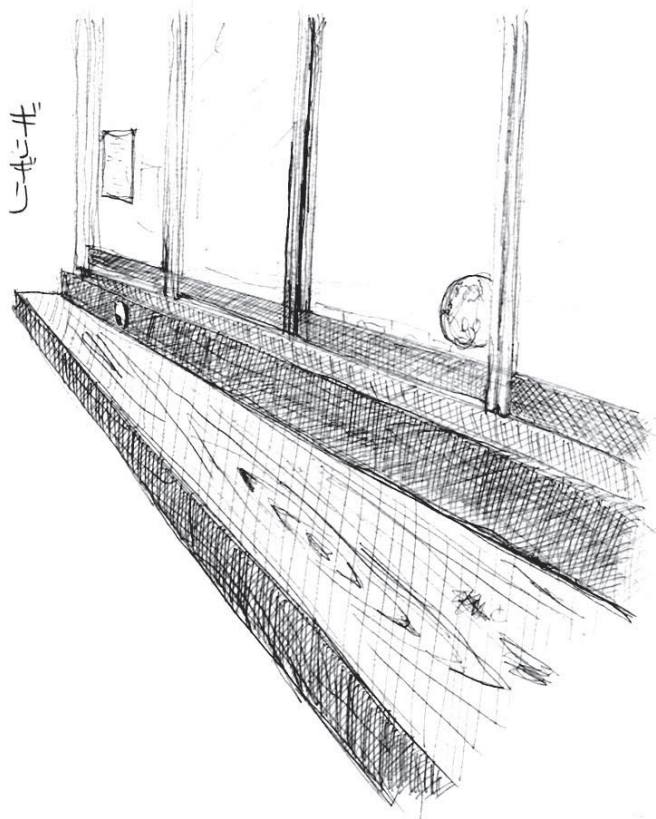
山越え谷越え、やっとここまでたどり着いた……と、なんとなく気持ちが一段落してしまいました。雨の山道のしんどかったこと……。体への負担がグワーンと倍増した感じです。特に、足への負担が大きかったようです。結果として、初のマメができてしまいました。かかとの部分にできたのは存在感のあるマメでした。

山道を抜け出して視界が開けた時、柵の向こう側に朱色の建造物が見えました。自信はなかったけど歩いた時間を考えると、二十三番札所である可能性が限りなく高いはずです。お四国の札所ともなるお寺なんだから、立派なお寺がたくさんあります。そりゃ、全国から遍路道を訪ねてやってくるし、失礼なもてなしはできません。

自分の部屋に誰かを招くことができるか考えます。ビミョーです。あらかじめ予定があつて、誰かが来るんだと分かっていたら、かなりのエネルギーを費やして掃除をしたいと思います。かなり大きなエネルギーが必要になります。もし、いきなり来られたら、かなり危険です。居場所がありません。

心はいつでもきれいなつもりです。でも、心の表れが環境に見えることも多いんですよ。できれば、逆に、環境をきれいにすることから始めて、心もきれいにしていきたいと思います。





ギリギリ

ギリギリセーフです

まだギリギリセーフです

でも

お参りを後回しにしていなかったら

アウトでした

まだギリギリセーフでした

結果は……

ギリギリセーフです

2005.8.21

毎度毎度のことです。別に遍路に限ったことではないんだけど、とにかくギリギリなんです。高校の時は遅刻ギリギリ……反則ありでセーフだったり、二十一番札所ではアウトになりかけのところを救ってもらったり、進歩のない人間です。学校に入るタイミングとして考えるなら、チャイムがキンコンカンコンと鳴っている最後のコンぐらいで正門をくぐるかどうかという瀬戸際です。基本的に今でも変わっていません。

二十三番札所である薬王寺はギリギリセーフです。納経所は間違いなく開いていました。微妙な反則としては、本来、まず先に行うべきお参りを後回しにしたことです。線香をあげたり「般若心経」を唱えたり、また、それを本堂と大師堂と二回通りやっている、それなりに時間がかかるんです。お経などというものは普段ふれ合う機会もないので、もたもたしてしまいます。……と言いつつ、言い訳をしながら、とにかく納経所が先です。御朱印をいただいておけば、五時を過ぎても安心してお参りができます。

名を取るか実を取るか……、重要な選択です。どちらともいえないけどどちらもです。今回は、すこし反則技を使っただけでも、御朱印はいただけたし、ゆつくり丁寧にお参りもできたし、名も実も取れたと考えることにします。何を先に行うか、優先順位を間違えずにできた結果だと思います。大切なことです。

ズボン乾燥機。



僕の歩き遍路史上初、有料宿泊施設利用です。雨にめげました。雨降りの中でテントを張るのにいい場所を探す努力さえしないで、もう、泊まろう、と思いました。日和佐のユースホステルです。

何だかディープな雰囲気が漂う宿でした。洗濯機を使おうとすれば、手で押さえないと二層式の脱水機の部分がポツーンと開いてしまします。風呂に入れば、やつれたシャワーがポツーンと水滴を落とします。部屋に入れば、「扇風機」という空調設備が一台ポツーンと置いてあります。もちろん、部屋のカギはありません。

どんな状態であろうと、屋根の下で眠れることは幸せなことです。洗濯ができ、風呂に入ることができ、風が吹く環境が待っています。風が吹く道具は乾燥機として利用できます。風呂では体を癒すことができます。洗濯をしたズボンや服を気持ちよく着ることがができます。幸せなことです。

明るい部屋の中で足のマメを見つめます。直径約三ミリ……、大きなものではありません。ものすごく大きな違和感があったのに、そんな小ささでした。「山椒は小粒でもぴりりと辛い」なんて言います。「マメは三ミリでもビリビリ痛い」って感じです。電気で明るくなければ、その小ささが分からなかったかもしれません。屋根の下、手紙も書き、できる限りのことをして床にきました。朝に向けて、ズボンも順調に乾いていきます……。



人から「行動全部がギャグになってるねえ」と言われたことがあります。これはほめ言葉なんでしょうか。複雑な心境です。どうも、僕には僕にしか分からない世界が頭の中に渦巻いているような気がします。

そんな僕には「二輪にシートベルトを着けよう」という文字が目飛び込んできたんです。普段はバイクを乗り回すライダーとして、「そんなアホな！」とツツコミを入れる必要があります。二輪にシートベルトがあつたら、よけいに危険な乗り物になりそうです。コケたら最後、一緒にずるずるドカンで痛い目に遭います。これは、運転が下手な僕としては実感です。僕には唯一の財産である貴重なバイクでも、コケた時にはあつという間に蹴飛ばされ、僕とは離ればなれになっていきます。コケる確率が高いだけに、僕のバイクはボロボロです。ごめんよ……。

看板のパンダが本当に伝えたかったのは、「二輪にヘルメット」の文字だったんですね。色やレイアウトに関係なく、自動的に右から中央、左へと順番を追って読んでしまった僕は、自動的にギャグ的発想へと導かれてしまったことになります。自分の意識とは関係なく自動的に何かができるというのは、当たり前なのようでいて、実は貴重なことです。アホな勘違いをしたとしても、それはきつと貴重な能力……なんです……たぶん……。





案山子の表情。

人の顔を描くのに「へのへのもへじ」なんて言いながら筆を走らせます。他にも「つる二八〇〇ムし」なんてモノもあります。定番です。

顔はその人の内面を表すことがよくあります。僕が中学生の頃、常に恐怖のオーラを発している先生がいて、その人の眉間には深いしわが刻まれていました。メチャクチャ怖い先生でした。常に不機嫌な様子で、授業中も何やら不思議な時間が流れていたことを思い出します。先生なりにおもしろいことを言った後、「笑え！……せゝのっ！」と音頭をとるんです。僕は、そのこと自体がおもしろくてクスクス笑っていました。笑うことが苦手な先生でした。

スズメが笑っても仕方ありません。恐怖を感じてくれたら任務完了です。むしろ、スズメよりも人間に対しての方が効果的かもしれないヤツが立っていました。そんな表情をしたヤツが僕の隣にいたら、僕はその場を立ち去ります。怖いですから……。

顔と共に名前も表立ってそのものを表すことがあります。でも、読めなかったら意味がありません。「かかし」と読めなかったら漢字で「案山子」と書いてもどうにもなりません。なんでそんな字を使うのか知らないけど、何かきつと由来があるんでしょう。マネキンの固い表情をもつ案山子でした。



ただただ歩きます。なんといっても室戸岬へたどり着くまでは札所がなく、中間目標になるようなものもありません。そして、ただただ歩いているとメチャクチャ眠くなってきます。肉体的な疲れもあるからだと思うけど、とにかく眠たくなってしまいました。睡眠時間はどれだけ長くても寝足りないと感じてしまう僕の、まあ、半分病気みたいなところですよ。

で、海岸で寝ました。

で、その間に僕の財布がフナムシの御馳走になっていました。

僕はズボンの後ろポケットに財布を入れることにしています。歩いていると汗をかき、ポケットに入れておいた財布はグチャグチャに濡れてしまいます。そこで、眠っている間に乾かそうと、そこら辺に干しておいたんです。パツと目が覚めて僕はびっくりしました。財布が埋もれているんです。フナムシの大群でした。

小さい頃、海辺の堤防で変な虫たちを見ました。ダンゴムシを大きくしたようなコソコソと動く連中です。僕らはヤツらをフナムシと呼んでいました。本名は知りません。そんなヤツらが僕の財布を埋め尽くしている……、ひえ、勘弁してください。ヤツらが去った財布には、食べられた跡が点々と残っています。そんなにうまいモンなのか……、さすがに試食はしませんでした。

長い道中の、どうでもいい一コマです。





ゆっくりと……って、そんなにゆっくりしていられる身分じゃありません。次へ次へと歩を進めなければ僕の夏休みは終わってしまいます。期限というものがあるんです。それなのに、ゆっくりと時間を過ごしてしまうような場所でした。

外から見たお店の雰囲気が僕を呼んでいるような気がしたんです。おいしい水でおいしいコーヒーを淹れてくれるようです。

中へ入ると、木の雰囲気で満たされていました。何気なくそこに置いてあった文芸作品集を手に取り文字を追います。ぐいぐいとその文章に引き込まれてしまいました。人の命を思い、遍路道を歩く文章が目飛び込んできたからです。他人事とは思えませんでした。まぶたの奥の方が熱くなっていました。

おばちゃんが淹れてくれたドリップコーヒーは、やわらかい味がしました。おいしいという言葉ですますがもったいないような味わいです。こだわりなんですね。細かい所に気を配ろうという意識が自然に感じられました。おばちゃんの人柄が出ているんだと思います。空気で味わえるようなお店……もっとゆっくり時間を過ごしたい場所でした。

お店をあとに、また歩き始めます。さわやかな心地でした。近所の川岸を散歩する気分です。川岸を歩いているのは、僕と……ばーちゃんでした。同行三人、さわやかな午後でした。





下ネタはダメですって……、よく思っんです。でも、頭の中がきつと、そんな風に作られているんです。あきらめましょう。

だいたい、小さい子どもでも笑ってしまう、大人気のネタは決まっています。「○んち」ネタです。笑わせようとして困った時には、間違いありません。うん、このネタで攻めるべきです。

それにしても、なんでもおもしろいんでしょう。不思議です。毎日、誰もが同じようにつき合ってるはずの存在なんです。僕もそうだけど、どれだけきれいな女の人だって、密室での孤独を充実させる時間があるんですね。人間だけじゃなくて、いろんな生き物も同じようにつき合っている存在。

ちょっと前までは体内にいた「排泄物」も、この世に出た瞬間に「汚い物」に認定されてしまいます。生まれてすぐにマイナスのレッテルをはられてしまう悲しい存在です。人間は、それを外に出す前は、おなかの中にたっぴりため込んでいるのに、なんか理不尽な扱いを受けているようにも思います。

だからこそ、ケラケラと笑い飛ばしてしまうのが一番すっきりします。いつだって笑いがあったら、たぶん、それだけで幸せになれる。ま、常に下ネタが渦巻いている頭じゃ、どうにもならないかもしれないけど、いいんです。「らんち」が「うんち」に見えたとしても……。



お四国は曼陀羅だといいます。八十八の札所を一周ぐるっと回ること、曼陀羅が完成するシステムになっているようです。一番札所のある徳島は発心の道場として始まり、次の修行の道場たる高知へと続きます。

僕は、夜中に修行の道場へと入門しました。まさに修行中といった感じです。この辺りは一日中歩いていても次の札所が出てこない道だし、もう、ひたすら歩くんです。オーバーナイトウォークというヤツです。フナムシに財布をかじられながら昼寝もしたし、そんなに眠くなることはありません。何よりも、昼間の直射日光ビシバシの中を歩くよりはマシ、多少は涼しく歩くことができます。

暗い道、車もほとんど通らないような道を歩いていると、自分がバカなんじゃないかと思えてきます。物事を深く考えるだけの回転が脳みそから奪われてしまう気配を感じるんです。習うより慣れる……いやいや、考えるより感じる、という世界かもしれないません。周囲は真っ暗、視覚さえも奪われていく夜道だから、何かしら感じ取るセンサーは鋭くなっているに違いないんです。さすがは価値ある修行の道場です。ばーちゃんが一緒についてきている感覚もあります。

でも所詮、僕は僕……、どんどん眠くなっていききました。



だいぶ、ヨレヨレの足取りになっていました。夜通し歩くことのしんどさです。僕の場合は、とにかく眠くなることに恐怖を感じました。いつの間にか道の真ん中をフラフラ歩いていることの恐ろしさです。どうにもならず、明け方、橋の下で少しだけ仮眠を取りました。熟睡してしまうとその後の札所に間に合わなくなりそう、それはそれで恐ろしかったですが……。

そして、室戸岬。空海が悟りを開いたという岩の割れ目に入り込みました。修行中、明けの明星が口から入って体を貫いていったんだそうです。何のことやら凡人の僕にはよく分かりません。

大切な場所はたくさんの人たちが拝みます。ここに限らず、世界中あちこちに大切な場所があります。象徴的なのはメッカです。イスラム教を信じる人々にとって、メッカがどの方角なのか知ることとはとても重要なことになります。一日に五回、メッカの方角に向かって礼拝をする必要があります。道に迷っている時に礼拝の時間になり、アザーンが鳴り響いてしまったらどうするんでしょう。これも凡人の僕には分かりません。でも、場所を大切にしようとする気持ちは分かります。場所というものがもつ、独特の雰囲気は圧倒されそうです。

少しでも空海に近づくと、岩の割れ目を振り返りました。そこにはバスがあり、口の中へは排気ガスがたっぷり注がれました。





データによると、二十三番札所から二十四番札所までの距離は約八十三キロということになっています。単純に、時速八十三キロで走り続けたら一時間で着くことになります。バイクだったら、時速八十三キロも何とかなりそうです。チャリンコだったら、僕の平均時速は約二十キロだから、単純計算で四時間くらいでしょう。トホダーとしての僕の足は平均時速にしたら四キロほどのスピードしか出ません。つまり、休憩なしで歩き続けたら約二十時間で着ける距離だということになります。

目的地、最御崎寺まであと百五十メートルくらいまで迫った頃でしょう。行き先を示す矢印が登場しました。完全なる山道でした。標識には「登山道」とはつきり書かれており、「自転車通行不可」と謳われています。自転車も通れないような山道がラストスパートとして残されていたなんて、もう感謝感激ブチ切れ状態です。勘弁してください……。

苦勞してたどり着くと、ありがたさが数百万倍くらいあるような気がします。山門の前にたたずお弘法さんがとてもやさしく見えました。歩き遍路ならではの喜びです。時速八十三キロで走っていたら分からないだろう喜びです。買っても苦勞はするべきなんて言うこともあるけど、少しだけ、……そう、少しだけ……、苦勞することの喜びを得ることができました。

信じること。



読経

心にお経を説く  
何度も何度も繰り返す  
蚊の攻撃に耐え  
心にお経を説く  
これこそ、修業

2005.8.23

修行の道は厳しい……言葉では分かります。自分の中の弱い心と戦いながら、自分自身を追いつめることで本質をつかもうとしているんじゃないかと思います。そして、お経を読むことで理論的にも正しさを得て、生き方を正すことにつなげていく修行です。僕は目に見えるものを信じようと考えています。だから、逆にいうと、「見えない物は、無きものと心得よ」というような感覚です。そりゃ、見えない物は見えないんです。周りには普通見えないうしろモノが見えてしまつ人もいます。僕には全く見えません。見えないから、僕はその存在を感じることができません。そんなモノたちが存在してもおかしくないとは思うけど、僕には見えないうしろモノも何ともないんです。

そこで、ひたすらお経を読んでいる人がいました。本当に、他のことには目もくれず、何度も何度も繰り返しています。僕も、隣にお邪魔してお参りです。ん？何かが僕の周りに寄ってきます。大キライな蚊です。どこからともなくやって来て、周囲を囲んでいました。耐えられません。バタバタワタワタしながらそそくさと退散です。読経の声はひたすら続いていました。

僕はワタワタしながら、その人の姿を写し取りました。その集中力と信仰心、そして、蚊の攻撃に耐えるだけの忍耐力に感心しつつ、やっぱり自分に厳しい修行は無理だと感じました。



お四国へ発つ前から僕にはいくつかの指令が下されていました。その一つに「津照寺では住職さんと出会い、車についての話をする」というものがありました。これは僕の知り合いであるフジケンという人からの指令です。

例によって時間ギリギリ何とか納経を済ませ、まずは納経書きのおっちゃんと話をします。どっちかといえば一方的に話されただけかもしれないけど……。そして、住職さんと話すべく奥の方に声をかけます。

住職さんは気さくに対応してくれました。フジケンからの指令で車について話すと、とてもうれしそうです。車が大好きなんですね。話を聞いてみると、機械の類が好きみたいです。そういえば本堂へ向かう階段を歩いていたら突然電灯がついたり、清めの水がいきなり流れ出したりしてびっくりのお寺でした。気づかれにくい位置に防犯カメラもたくさん仕掛けられているそうです。それじゃ、僕が光や水にびっくりしている姿も見られているってことでしょうか……。それもびっくりです。

その後、フジケンの知り合いなら……と、「こちらに泊まっていたらいいですよ」と旅館に案内されました。人の縁とはありがたいモンです。人の心を温かくする空気があふれる場所、お四国がより多くの縁を感じさせてくれるのかとしみじみしました。





歩いてすぐ、山門から何メートルというくらい場所に案内されました。そこは人の縁が作り出した僕の居場所です。ありがたいことに、屋根の下で眠る夜を迎えられます。

旅館という場所に泊まったことが何回あるか、自分で考えてみます。小さい頃、家族で旅行に行って泊まっていたのは旅館と呼ばれる種類のものだったんでしょか。おぼろげながらに思い出すのは、宿泊部屋のすぐ横に小さなテーブルといすが置いてあって、そのまた上にはお茶とお茶菓子がおいてあって、障子でそこが仕切られるようになって……、んで、そこにばーちゃんがすわってたような映像です。たぶん、旅館というものの光景だと思います。旅先なのに落ち着いた雰囲気があって家族と一緒に過ごす場所、というのが僕にとつての旅館の定義なのかもしれません。

遍路の途中、僕が泊まった部屋には一人しかいません。みすばらしい姿の僕がいるだけです。でも、存在感としてのばーちゃんと一緒に泊まっていた、ともいえます。山道を歩いていたり、海辺の道を歩いていたりする時、なぜか存在感が出てきていました。ばーちゃんは僕を旅館に泊まらせたかったのかもしれない。生前、僕が旅に出ようとすると思わず反対した人です。僕がろくでもない貧乏旅をすると知っていたからです。

ばーちゃんに隠し事、できなくなっていました。ようです。

お接待

お寺に行って話をしたら、  
お接待させてくれたら、  
宿をお世話になる。  
そんなに冷たい麦茶



2005.8.23

夏の暑いとき、プハアゝなんて言いながらビールを飲んでいる人がいます。それを見て僕は、何て幸せそうなんだろう、とうらやましく思います。僕は、お酒が飲めません。飲んでも頭が痛くなるし気持ち悪くなるし、うれしいことはひとつもありません。じゃ、夏の暑いとき、僕がプハアィなんて言えるのは……、たとえば麦茶つてのがあります。ゴクゴク何杯でも飲めてしまいます。おばちゃんが麦茶を持ってきてくれました。冷たい麦茶です。怒濤のように飲み干してしまいました。飲み干した後、ふと、このこめられた心を絵にできないかと考えるわけです。

食事をしながらも、おばちゃんと話をしました。室戸の港、造船所、そこに集う人の話……、なぜか懐かしい感じがしました。焼津の海を語る、僕のばーちゃんの姿と重なってしまいました。家族と話す温かさを想ってしまいました。すぐくすぐく幸せな、ほっとする時間だったように思います。

僕はばーちゃんとそんなにたくさん話をしたのかな、と考えます。□うるさい人だったから、ずっと一緒に住んでいるときは自分の場所へさっさと逃げていたような気がします。耳も遠くなつてだし、めんどくさいという思いもありました。仕方ないとは思いますが。でももう、それさえもできない人になってしまいました。しみじみと、できるだけの想いを紙の上に残しました。

厄払い。



厄年って何歳のことをいうんでしょう。男と女で違うらしいけど、僕の場合はいつでもいろんな厄介ごとが降りかかっているから、いつだって同じです。

じゃ、厄払いをしなきゃいけないか、と考えることになります。目の前に現れたのが「厄坂」。これは都合がいい感じです。上っていく時、一段ずつ注意して足元を見ます。一段ずつ、お金が置かれています。この階段、全部でいくつあるんでしょう。結構たくさんあるようにも見えます。それぞれの段にお金を置いていったら、その金額も結構なものになりそうです。やめます。僕に降りかかる厄介ごとなんて大したモンじゃありません。しばらくは厄介ごとと共存共栄を図ります。

気楽に考えたら、苦楽はそんなに大きな違いがありません。どれだけつらいことがあっても、「その程度で済んだか」と考え直せばラッキーなことに变身してしまいます。なんて単純な頭なんだろうと自分の頭を疑うけど、それで日々平穩に過ごすことができるんだったら非常にありがたいことです。てくてく遍路道を歩いていると、細かなことが気にならなくなってきました。つらくて仕方がなかった出来事も、少しずつやわらかなものになってきました。

遍路道そのものが厄坂と同じだったのかもしれない。



# かん封じの椿

かんを  
すべて

背負っているような  
その姿

ありがたや



2005.8.24

身代わりに……。

パツと見ただけで「そりゃ、マズイでしょ」と思うことがあります。だいたい、骨折などをした時なんか、そう思う瞬間です。僕が覚えているのは剥離骨折をしてしまった時、やたら、足がふくれあがってきていました。もちろん痛いから大変なんだけど、それが視覚効果と共に押し寄せてくるんだからマズイ感も倍増です。

パツと見て、「何じゃ、こりゃ」というのが素直な感想でした。木の肌がテロントロンポコンポコンだったんです。人間の肌だとしたら、絶対お医者さんにみてもらうことをお勧めするくらいの状態でした。樹皮に傷がつき、そこから樹液が出てきて修復しようとしていたものだと思います。それにしても溶けだして途中で固まってしまった溶岩のような姿は印象的でした。

その名前に「がん封じ」という言葉が冠せられていました。人間にとってのがんを自分の体の中に取り込んで、身代わりになつてくれているような木でした。とても日本的な発想かもしれないけど、自分の身を挺して他者を生かすことを僕は美しいと感じます。その木はその通りのことを実践していると評されていたんです。人々の尊敬を集め人々に大切にされてきたんだと思います。世間の大勢から敬われたいとまでは思いません。でも、身近な人からは本当に大切な存在だと思われる人間になりたいです。



学生時代、蔵に住んでいたことがあります。もちろん、人間が住めるような環境にはなっていきましたが、夏は暑く冬は寒いという過酷な空間でもありました。でも、そこは大家さんがとてもステキな人で、とにかくいろいろお世話になっていました。僕の部屋になっていたのは、蔵の二階部分で、そのまた半分の六畳のスペースでした。以前は三畳間だった所を一つにくっつけて六畳間にしてみました。

蔵には関心があるんです。……で、この蔵はいったい何なんですか。屋根が四層にもなっています。豪華な感じがします。僕が住んでいた所とは少し印象が違うものです。ま、きっと中身は同じようなモンだと思います。外側だけ、かっこつけてるだけですよ……きっと。

外側の飾りだけ……と思いつつ、それでも意味を詮索してみます。壁の強化につながるか、それとも、雨よけとして大きな役割を果たすか……真実はわかりません。でも、何かの役割があるとして、それが姿としても美しい物だったら嫉妬してしまいます。僕自身の外側は明らかにきれいじゃありません。だから、昔から中身で勝負しようとしてきました。中身もダメだからボロボロだけど……。中も外もステキな物だったら、うらやましい限りです。天は二物を与えてるんでしょう。不公平です……。

救急車。

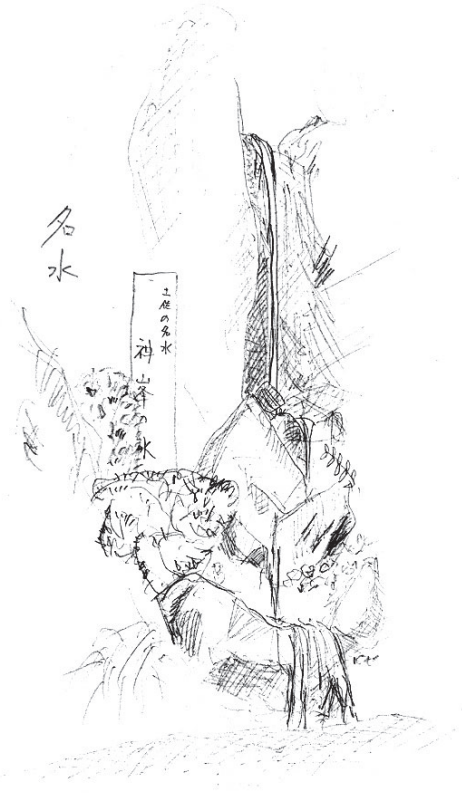


道を歩きながら「○▲×☆□！」と叫び、メエメエ泣いた夜がありました。サイレンを鳴らす救急車の前を、普通の車が平然と走り続けているのを見た時です。僕の頭には、ばーちゃんが浮かびます。そして、涙があふれ出てきます……。

第八番札所でケータイ電話が鳴る前の日、僕のばーちゃんは救急車に乗せられていました。自宅で急変し、病院へ搬送されたんです。一刻も早く病院へ、と考えます。そんな、一分一秒を争うような救急車が、アホな車一台のために前へ進めないなんてふざけています。救急車への思いが僕の中をいっぱいにしていました。いっぱいになって、こらえきれなくなって、涙があふれてしまいました。救急車が通り過ぎた後も、僕の涙は止まらなかつたし、僕の思いはまだまだあふれ続けていました。

しばらく経ったこの日、また、救急車を見ました。心臓がドキドキしてしまいます。心は癒えていません。でも、隣に隊員さんが控えていました。いつでも出動できます。他の誰かが身代わりになることもできます。少しでも心の奥の方が温かくなりました。いつも緊張感でピリピリしている場所のはずです。人の命が直に関わってくる最前線です。そこに、心を和ませる平面の隊員さんがいました。張っているだけじゃダメなんですね。僕に心のゆとりを少し分けてくれてありがとうございました。





名水

山頂の水

山頂の水

山頂の水

真、縦の山道を登りきり  
目の前に現れたのが

水 水 水

何より

水がうまい

と、いふ

水がうまい

2005.8.24

僕は怯えていました。「真ッ縦」という言葉が紹介されていたからです。第二十七番札所への参道のことです。海拔〇メートルから四百メートルを一気に登り切る道を進むなんて信じられません。「真ッ縦」ということは、ストレートの道が延びているということ……、ストレートということは階段ということ……、と頭の中のイメージが最悪な状況を連想させます。自分の歩幅で好き勝手に上ることのできない階段なんて、大嫌いです。

札所にたどり着いた時、僕はかなり疲れていました。でも、思ったほどありません。ラッキーなことに、「真ッ縦」とはいいながら、「ほぼまっすぐ」という意味合いでのネーミングだったらしく、クネクネと曲がる登山道みたいな所だったからです。しかも、階段ではありませんでした。助かりました。疲れたといっても、まあ、許してあげられるくらいの疲れ方です。ただ、時間はギリギリで、ようやく納経所へ間に合ったくらいのタイミングでした。そして、焦って到着したから、のどもカラカラでした。

水のうまいこと……、どんな飲み物もかきません。誰が何と言おうと、世の中で一番うまい飲み物は水だと思います。あらゆる生物が何億年も飲み続けて、飽きない飲み物です。「名水」と呼ばれるものであったら、そりゃ、なおさらです。シンプル・イズ・ベスト……、「真ッ縦」を登り切った最高のごほうびでした。

（日じゃ着けません……）



原動機付きのモノたちであつたら一時間ほどで買い物ができるんでしょか。四十五キロ先のお店です。

大きな看板が立っていました。きっと大きなお店なんでしょう。専門店がたくさん集まっているようです。きっと魅力的な場所なんでしょう。もしかしたら夜も遅くまで営業しているかもしれません。とても便利な所なんでしょう。……たどり着きさえすれば。

一晩中歩いたって、足の遅い僕だったら目を見張るほどの前進はありません。そもそも、眠気と疲労に襲われているだろうから、一晩中休まず歩くことなんてできません。そんな僕だって、車やバイクに乗れば格段に違うスピードを手に入れることができます。二酸化炭素をはき出して、騒音をまき散らし、地球の環境破壊に協力しながら進めば、その分のスピードが自分のものになるんです。

人間が元来自分がもっている力以上のものを手に入れた時、何か勘違いをしてしまうことがあります。僕はライダーに変身してしばらくすると、そのスピードが自分自身のものであるかのように思ってしまう傾向があります。頭では違うと分かっているが、いつの間にか力を過信してしまうんです。そうりたいという希望もあるのかもしれませんが。自分の力は自分の力……、それを見失うことがないようにしていきたいと思います。



ものを食べている時ほど幸せなことはありません。きれいな食べ物もないし、どんな物を食べてもおいしく感じられる人間です。別におなかが空いていたわけじゃないんだけど、僕の頭の中には天ぷらや茶碗蒸しなどのメニューがイメージされます。

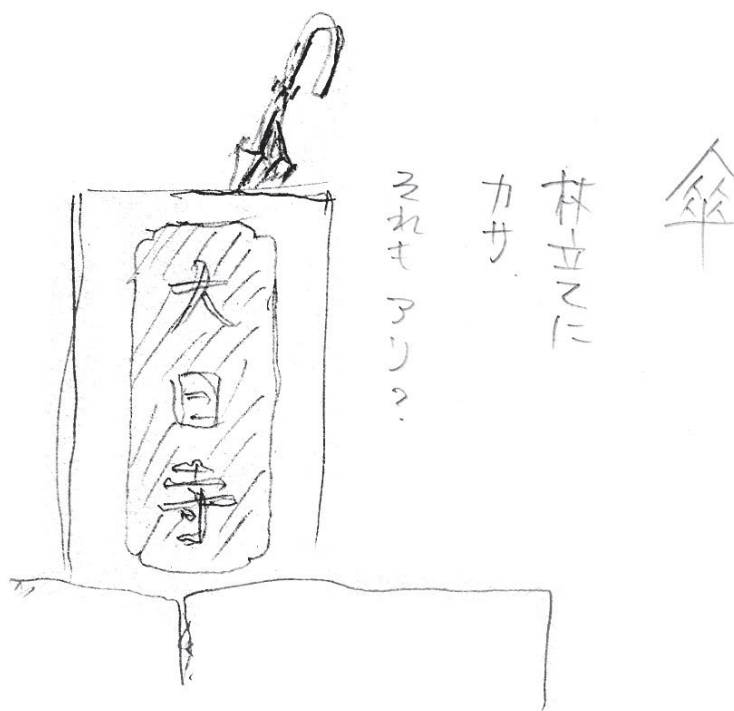
和食です。特に朝ごはんは和食です。外国の映画でコーンフレークなどというモノで食事を済ましている場面があります。信じられません。何よりもごはんです。米です。米こそが食事です。日本の食事がすごいと思うのは、主食としての白いごはんがありとあらゆるおかずを仲間にしてしまうことです。どんな物だって、だいたいごはんと食べたらおいしさが倍増します。そんな風に思うのは僕だけでしょうか。

そんなすてきな食事が集まってくるのでしょうか。駅といえば、いろんなものを呼ぶ場所のような気がします。しかも、あちこちの方角から駅を訪れるモノたちがいます。その駅の名前に「和食」とあったら、魅力的すぎます。日本人サイコー、アイラブ日本人です。日本人だけど、ローマ字だって読んでみます。「Wajiki」です……。「わしよく」じゃなかったんですね……。

日本人は漢字を使います。見た目だけでモノのイメージまでできてしまうすごい文字です。二文字合わせるだけで天ぷらや茶碗蒸しだって想像できる、ものすごい力をもった文字です。



役割。



すごいなあ、と思ったことの一つは札所それぞれに石でできたお杖立てがあつたことです。それなりに立派な雰囲気を感じ出しているお杖立てが、そのお寺の名前入りで標準装備されていました。んで、僕らはお参りする時には線香をあげたり「般若心経」を唱えたりするから、お杖立てに自分のお杖を立てさせていただきいてお参りするんです。ありがたや、ありがたや……。

傘……、お杖立てに一本だけ立てられていました。傘立てじゃないです。お杖立てです。ああ、悲しいかなお役違い……。

遍路を歩く者にとって、お杖は弘法さんの化身だし自分と共にお四国を歩く大切な存在です。宿に泊まるとすれば最初にお杖を清めてから上がり込むくらいの大切さです。お杖は自分の身を削りつつ僕らの歩きを助けてくれます。ぞんざいに扱ってはバチが当たります。お杖立ても分相応に立派な物になっているわけです。

そんなお杖立てに傘……、傘が立てられていました。決して傘の役割を軽んずるつもりはありません。雨の中ずぶぬれで歩かずに済むんだから、そりゃ、傘は大切です。でも、お杖立てに傘が入り込むのは領域侵犯じゃないでしょうか。そりゃ、ちようどいい具合に立てられます。でも、でも……。

傘も一緒に受け入れているお杖立て、そんな寛大な心を見習いたいと思います。



滝のような汗という表現があります。剣道をやっていたりすると、そりゃもう、次から次へと汗が出てきて怒濤のように流れていきます。臭いわけです。ハードな動きがあったら、汗は滝のように噴出してきます。

じわ〜じわ〜と出てくる汗もあります。じんわりと体が動いているような時には、一気に流れるような感じじゃありません。いつの間にか皮膚の表面が湿ってきて、いつの間にか服が水浸しになっています。質の悪い汗のかき方だと思います。

どっちかといえば、歩くという動きは後者に近いようです。気がついたらダラ〜ンと汗が滴っています。気がついたら服はびしょぬれだし、気がついたらパンツまで……もらしてしまっただかのような状態です。そして、気がつかないうちにザックにまで侵出していました。そして、ふと気づいたら、そこには塩ができたがっていたんです。なめたらしょっぱい真正正銘の塩でした。

気がつかないうちに何かをしているって、実はちよつとカッコイイようにも感じます。他の人が見ていない所でひたむきな努力を続けて、何かの機会にその成果が現れてみんなが感動するんです。カッコイイです。誰かが見ているから努力するんじゃないくて、自分の信念に基づいて行動している感じがカッコイイです。地味だけど、じわじわ染み渡る人生……カッコイイです。



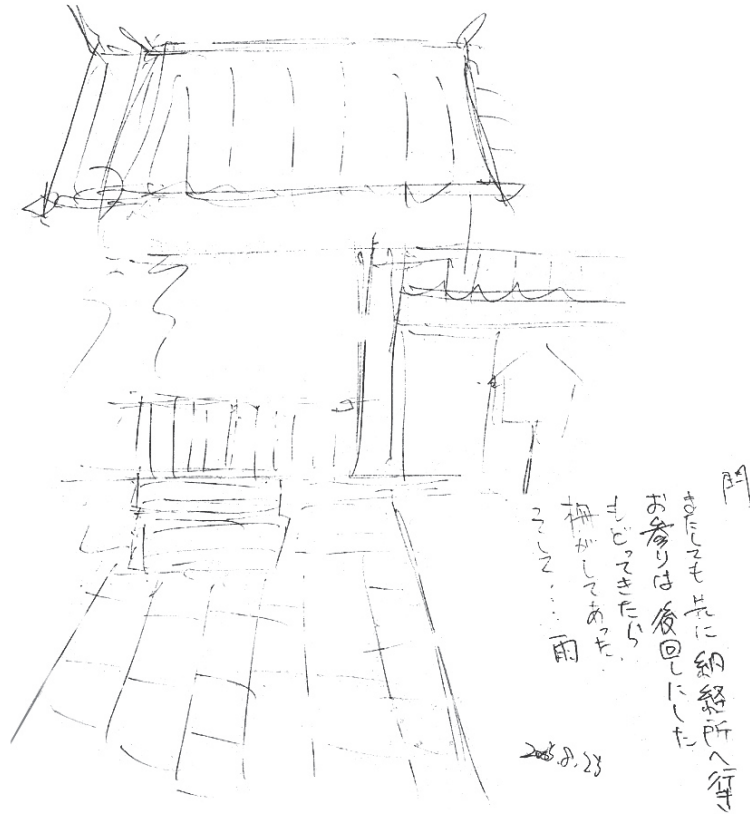
もう、闘いでした。その相手の一つは足のマメでした。一步進むとズキン、二歩進めばズキンズキンとくる痛みです。そして、もう一つの相手とは、見えない闘いを繰り広げます。例によって時間との闘いです。納経所が閉まる時刻が午後五時、何としてでもお参りをしたいポイントでした。

ラストスパートは第二十八番札所を出た時から始まっていました。そこから第二十九番札所までは約九キロ、歩いて二時間ほどの距離です。寺を出たのは午後三時過ぎ、普通に歩いたら合わない時間でした。しかも、足の痛みが襲います。難しい判断です。でも、往生際の悪い僕だから、行ける所までがんばらないと納得できません。ギシギシと歯を食いしばりながら前へ進みました。

ガイドブックの地図を見ると、どうやら残りが一キロくらいの場所まで来ていました。通りかかった人に道を尋ねます。そこから迷ったら致命的、絶対に間に合いません。正確に情報ゲットです。そして、走り始めました。自分が信じられませんでした。足は痛かったです。でも、痛みは麻痺していました。体全体も疲れ切っていたはず。でも、走り続けました。

川の土手を走りながら顔を上げると、どうやら第二十九番札所らしき所が見えてきました。あきらめちゃいけないんです。ギリセーフ、自分で自分をほめてあげたくなる瞬間でした。





踏んだり蹴ったりとも言っただろうか、僕のスケッチブックは情けないページを残しています。このページに限ったことではないんだけど、最高級の部類に入る情けなさです。ほとんど線さえ見えないほどの悲しさです。

かるうじて午後五時、納経所營業中に間に合つた第二十九番札所でした。ひとまず御朱印を頂くことを優先させます。そして、その後にお参り……、仏様ゴメンナサイ。おかげさまで、ゆつくりスケッチブックを開ける状況が生まれました。ふと見ると、門には柵がされており、以後は入れないようになっていきます。何度経験することか……、ギリギリセーフなのかギリギリアウトなのか、とにかく瀬戸際の絵を残そうと思いました。

ポタポタツという音が響きました。水滴がスケッチブックを叩きます。僕の手がいくら動こうとしても線が伸びません。こちらはギリギリアウトだったようです。雨模様です。仕方ありません。構いません。僕はお参りを後にしたことで、大切な時間を充実させることができました。そのお寺で、ばーちゃんの小銭が全部、お四国へと納められたんです。たいした金額じゃないはずです。幸か不幸か時間ギリギリだったからお参りは後回し、時間を気にすることなくお参りができました。だんだんに、ばーちゃんの面影も薄くなっていくような気がしました。



遊園地といえば観覧車、動物園といえばサル山、ぶどう園といえばウォータースライダーです。いえ、僕の頭の中では違うイメージの物がいます。ぶどう園にウォータースライダーって、あんまりないパターンじゃないでしょうか。うちの近くのぶどう園にはないような気がします。

ぶどう狩りを企画しているような農園はどこか近所でも見たことがあります。ぶどうの中でも巨峰など、粒のでかいヤツは食べられて幸せです。中に種がなかったら最高においしく感じられます。そして、同じような気候なわけだから、だいたい半径一キロの範囲に同じようにおいしいぶどうを作っている農家があるんです。それは全国共通、お四国でも同じでした。

わりと近くの場合にぶどう園を発見です。んで、僕のイメージが変えられていくことになります。そう、ぶどう園といえばウォータースライダーなんです。ぶどう園には必要な物のようです。

ぶどう園が先か、ウォータースライダーが先か分かりませんが、でも、どっちかが先にあって、そこにもう一つの要素を組み合わせたんだと推測します。そこを訪れた多くの人が「こりゃいいね」と思ったんでしょう。それで、そこら辺の人々には「ぶどう園といえばウォータースライダー」という定義が成立するわけです。場にそぐわなくても、いい物はいいんですね、きっと……。

### お願い

公衆浴場法に基き、10歳以上の  
男女の混浴させないよう、条例で  
定められております。  
ご協力ください。

時間ももつとたつぷりあつたらなあ、と旅に出て思います。

旅人の種類として何パターンかあります。わりと人口が多いのが、学生旅人です。夏休みなどの長期休業を利用して旅をしまくる人たちです。この人たちは、ある程度の時間は保障されているけどお金がないという弱点もあります。僕の場合は逆パターンです。いわゆる「リーマンパッカー」と呼ばれるものに近い形、お盆休みや正月休みなどをギリギリいっぱいまで使い切って集中的に旅をこなすような感じになります。学生旅人にはない金銭的な力を武器に強引なスケジュールを組んだりします。他には、仕事を辞めて、貯金してきた資金を少しずつ放出していく人たちや、お金がなくなったら日本で稼いだ後に物価の安い国でだらだら過ごす「外ごもり」と呼ばれるタイプなど……。。

時間はお金で買うことができません。いつの間にか過ぎ去ってしまうものです。大切にしなきゃ、と思っても気がついたら時は経ち、歳をとっていきます。僕が十歳だった頃、小学校高学年だった僕は何をしていたのか……。ひたすら外で遊びつつ、それでも自分の嫌な所をウジウジ考えていたような気がします。……今思えば、もっともつといるんなことをしておけばよかったんですね。銭湯にも行っておけばよかった……。十歳までが勝負、「公衆浴場法」などというものがあるんですね……。



散歩。



うちのばーちゃんはよく焼津の川沿いを散歩していました。小石川という、まあ何とも汚い川です。それでも、桜の季節には花びらが舞い、歩いていても気持ちがいいようでした。僕は、歩くなんて小さい頃は全然おもしろく感じたことがあります。ばーちゃんが散歩から帰ってきて幸せそうな顔をしていることが理解できませんでした。

日常生活の一部としての散歩、どんな場所でもある風景みたいです。健康増進ということで義務を課してやっている人もいるかもしれないけど、かなりの散歩人口が認められるんじゃないかと思えます。もちろん、お四国にも一般散歩人がいました。足のマメが痛くて、疲れ切った足を引きずって、ヨタヨタ歩いている僕を、何食わぬ顔でスイスイと追い抜いていく人がいます。……いくら超長距離を歩いているとはいえ、散歩中の「おばちゃん」に追い抜かれること、悲しい現実でした。

普段、僕らは何気なくそこら辺を歩いています。でも、何気なく歩くのが大変だと感じる経験も必要です。ものすごい重労働に感じられるんです。晩年、うちのばーちゃんはどんどん老人化していきました。いや、それは当たり前なんだけど、あれだけ歩き回っていた人が、歩かなくなっていくんです。足のマメの痛さと疲れて重たい足が、ばーちゃんの動かない体を想像させました。

一緒に。



参道

神に

仏に

近づき

参るためには

門をすり

道を歩む

遠い道なつか

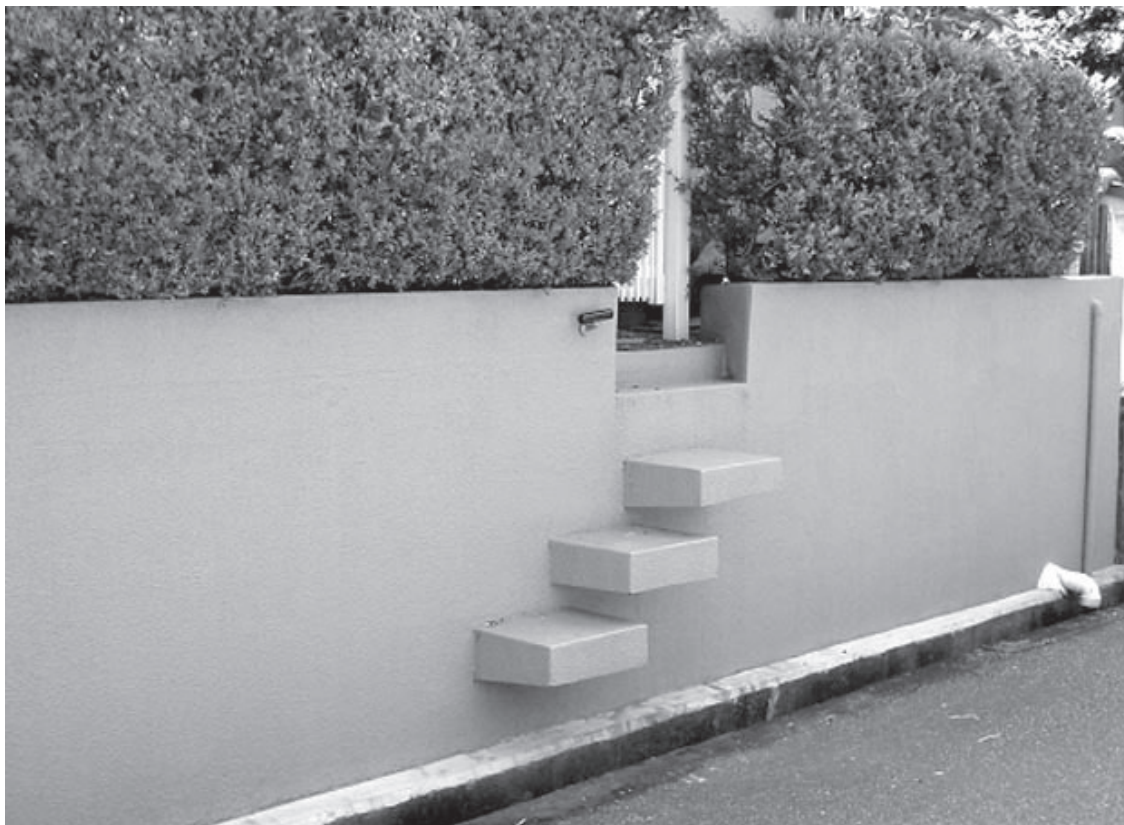
近い道なつか

2005.8.26

何か、とっても困った時に「神さま仏さまあ」と手を合わせたことがあります。溺れる者は藁をもつかむ……、まさに困った時の神だのみ、って感じです。普段は全く信心なんてない人間なんだから助けってくれる雰囲気はありませんでした。それでも小さい頃の僕は、思わずそんな風に唱えてしまったんです。ポイントは「神さま」と「仏さま」にすぎている所です。もちろん、それぞれの違いなんて知りません。今でも深く理解しているわけじゃありません。でも、神社に祀られているのと、お寺に祀られていることの違いくらいは分かっています。

神社では鳥居、お寺では山門が堂々と僕らを迎えてくれます。第三十一番札所の山門があります。でも、その内側に神社がありました。はて、確かに僕は山門を見ているはずです。神社、お寺……どっちでもいいです。とにかく僕よりも遥かに偉大な存在にお参りすることに間違いはありません。門をくぐって建物に向かっ歩きさえすれば、それだけでありがたい存在に近づくことができます。山門から境内まで百メートルくらいはあったかもしれません。遠いかな、とも感じました。だけど、その距離さえ歩けば偉大なものに近づけるんだから、贅言言っちゃイカンのです。神仏混淆、「神さま」と「仏さま」が仲良く近所づき合いをしているんだから、平和の象徴なんだと思います。

美。



古代インカからの伝承技術か、そこには壁から突き出した階段がありました。マチュピチュで見た物と同じタイプです。マチュピチュで見た時、そのデザイン性の高さに僕は目を見張りました。石垣の石組みから二ヨキ二ヨキと出っ張った部分が飛び出していて、そこを人間が歩いて上れるようになっていたんです。

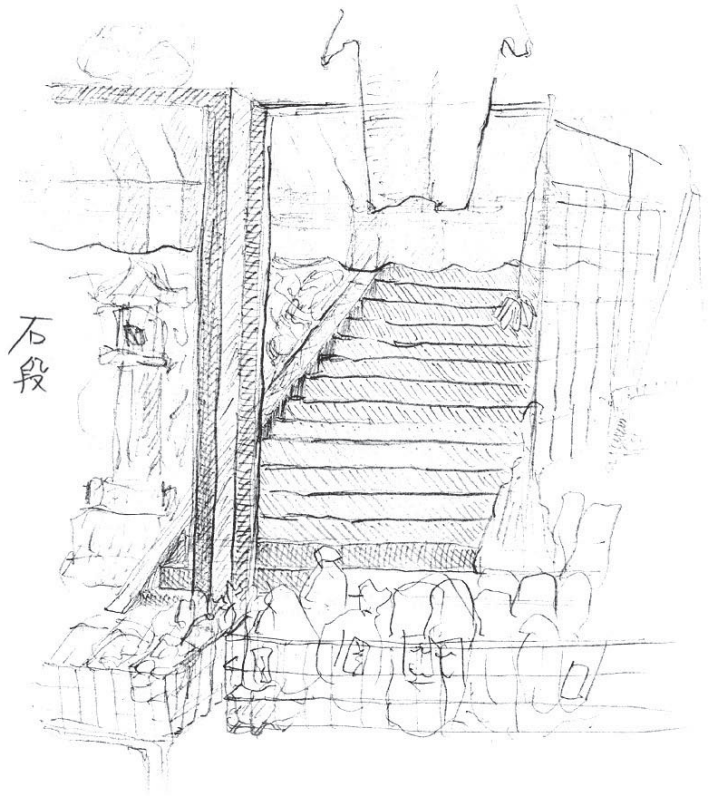
現代日本にも通じる美しさがあるのかと、少し感動してしまいました。コンクリートで塗り固められて植木も設えてあるような壁だけど、基本原理は古代インカの物と同じです。美しい物は美しいんです。

美しい物を追い求める心って大切だと思います。人間だって醜いよりは美しい方がいいような気がします。いやらしい話かもしれないけど、女の人を見て「きれい」と思うことがよくあります。そんな人と一緒にいられたら幸せなんだろうと想像してニヤニヤすることもあります。んで、自分の姿を振り返るんです。悲しくなります。今までに人からの評価で外見をほめられた記憶はありません。小さい頃から鏡で自分の顔を見るのが大キライでした。そこには変なヤツが変な顔をしてこっちを見ているんです。イヤでした。

無い物ねだりというんでしょうか。自分にはないモノ……美しさに強く憧れてしまいます……。



克己。



石段

はやくから  
僕も苦いめた  
階段が見える  
なぜか  
とて  
涼しげだ……

2003.8.21

楽あれば苦あり、苦あれば楽あり……、どっちになるのか、人の生きる道です。

歩いていたらしんどいわけです。んで、とどめに上り坂があったりするわけです。びっくりしました。地図を眺めて、第三十一番札所が山の上にあるだろうことは予測可能でした。だから、しんどいしんどいと苦しみながらも覚悟の上で山道をクネクネ登っていきました。アスファルト舗装された山道だから歩きにくいことはありません。ダラダラ歩いていったら上にたどり着きます。おお、山道終了、と思ったら、山のとっぺんから上に石段が伸びていました。……とどめでした。一度、気を抜いてしまうと、その後が大変なんです。じゃ、いつそのこと一気に登り切ってしまう、となります。「この恨み、忘れるな！」などと思いつつ、石段を登ってお参りを済ませました。

苦あれば楽あり……この時の僕は弱い自分に勝つことができませんでした。いわゆる克己というヤツです。実はこれ、僕にとっては珍しい現象なんです。エエ加減人間として生き続けているから、苦しいことがいつの間にか後回しになっていることがほとんどなんです。ほんのちよつとがんばれば僕にもできるんですね……。

心もさわやかに冷たいお茶など飲みながら、門前の売店から、自分自身が恨みを忘れないうちに、石段を描きました。

……だけ……。



確かにそうです。一般的に人間は二足歩行をすることができません。特筆すべきことではないかもしれませんが。それだけなんです。「その『歩くだけ』ってのが大変なんですー」と何回ツツコミを入れたことか……。そのポスターを目にし、目にするたびに僕は一人で激しくつぶやいていました。

そういえば日常生活では意識して「歩く」なんて作業をしていません。どっちかといえばダラダラした雰囲気の中で「歩く」という行動が出てくることの方が多いくらいです。まだまだ自分の行動を表面しか見られない眼だなあ、と感じます。

僕らは一歳かそこらで歩くことを始め、不自由なく暮らしています。でも、よく考えると生まれてから一度も歩くことができない人たちもいるんです。手を動かすことを知らない人たちもいるんです。最近ではノーマライゼーションなどといった言葉が駆け巡り、近所でそういった人たちとふれ合う機会だつて増えています。見ているはずなのに見えていない僕の眼、情けない話です。

じっくり考えなきゃいけない言葉なんだと学びました。「だけ」という言葉。とらえ方によって、その「だけ」に含まれる内容が大きく変わってしまうということ……。何か、「だけ」でも「できる」のが大切なんですね。僕の中にある、ほんの少し「だけ」の能力も尊重される日がくることを待っています。

遙かに想う。

眺め

どきどきも見えそうなのが  
どきどきも行けそうなのが

2005.8.26

夕暮れ時、小高い場所から眺める景色は疲れた僕を癒してくれました。海岸線の遙か向こうから歩いてきた遍路道、風に揺れる草の影から行き交う自動車の姿も見えてきます。今日はどこで眠ろうか……、確約された寝場所はありません。しみじみと日が傾いてくる時間を味わいました。

その日、ここより先へ進むのに急ぐ必要はありませんでした。次の第三十三番札所へ着いたとしても夜になっているはずで、当然のことながら納経所が開いている時間には間に合わないからです。自分をしばっていた時間というモノから開放され、身も心も軽やかになっていきます。心が軽くなると、こうも体に影響するかというほどに、僕の肉体は疲れを忘れていきました。なめらかな曲線を描いて自動車が走ります。道の曲線が美しく、美しい道を走る自動車の流れも美しいんです。全てのものを包み込んで緩やかな流れは景色をつくります。

日常生活の場でこんなに心が安らかになることって、あんまりありません。いつも仕事に追われ、時間に追われ、しがらみに追われ……、いいことでも悪いことでも、とにかく追われることこそが日常生活になっているようにも思えます。安らかに、穏やかに……そんな心が絶対必要なんだ……、分かっています。

僕は束の間の充実を味わっていました。





夜、てくてく歩き続け、桂浜へたどり着きました。ずいぶん前にチャリダーとして四国を走っていた時には立ち寄ることができず、後からくやしい思いをした場所です。桂浜といえば、かつて土佐と呼ばれていた頃の英雄で有名な所です。坂本龍馬です。現在では高知県と呼ばれている所だけど、ここの空港からしてスゴイと思わされるモノです。その名も「高知龍馬空港」……本当に英雄であり、郷土の誇りなんだろうと思います。

坂本龍馬は広い海原に思いを馳せ、「日本の夜明けは近いぜよ」と口にしたといえます。明治という時代を迎える日本という国の将来を真剣に考え、力強く動き続けた人なんだと思います。その行動力は注意欠陥多動性症候群かとも思えるほどです。

注意欠陥という点では僕も負けてはいられません。カメラを構えて上手に撮ったつもりが、なぜか変な顔が撮れるのみ……。本当なら、僕の後ろに大きな坂本龍馬が腕組みをして立っているはずでした。坂本龍馬の銅像は、僕が想像していたよりも大きすぎて、一緒に写真に入りたいと思ったんです。でも、彼の体は大きすぎ、カメラのフラッシュは長すぎる僕の顔を光らせるのみで、姿を画像に残すことができなかったんです。ポケットカメラじゃ限界がありました……。

坂本龍馬殿、こんな顔に光を奪われてしまい、すみません。

頭痛が痛い……。



日本語って難しいと思います。他の国の言葉をしゃべれるわけじゃないから比較できないけど、なんかそんな気がするんです。同音異義語がメチャクチャ多かったりして、日本語を知らない人が聞いたら同じことをくり返してるんじゃないかと勘違いするかもしれません。

この前、「トドのまつり」という言葉を見ました。書類に「今週のことわざ」なんて銘打ってあります。ほう、ここにはどんな思いが込められているんだろうと想像しました。図太いやつらでも体を動かして楽しむことができる、いや、もっと働けということか……、勘ぐってしまいます。その怪しげなことわざはイラストに描かれており、トドたちがどんぐりで遊んでいました。ことわざ複合技です。「ドンぐリのせくらべ」です。「ドンぐり乗せ比べ」ということですね。なんとお馬鹿なトドたちでしょう……。

言葉遊びは大好きです。じゃ、この川はギャグで名付けられたんでしょうか。「しんかわ川」って、漢字で書いたら「新川川」ですよ。ああ、いいのか本当に……と思いました。名付けられた根拠を深く知る由もありません。地名になるくらいだから、きっと何かしらの背景があるんだと思います。地名に限らず、名前とはそれだけの意味を負ったものだと思うんです。「名は体を表す」……名に恥じない人間を目指します。

灰

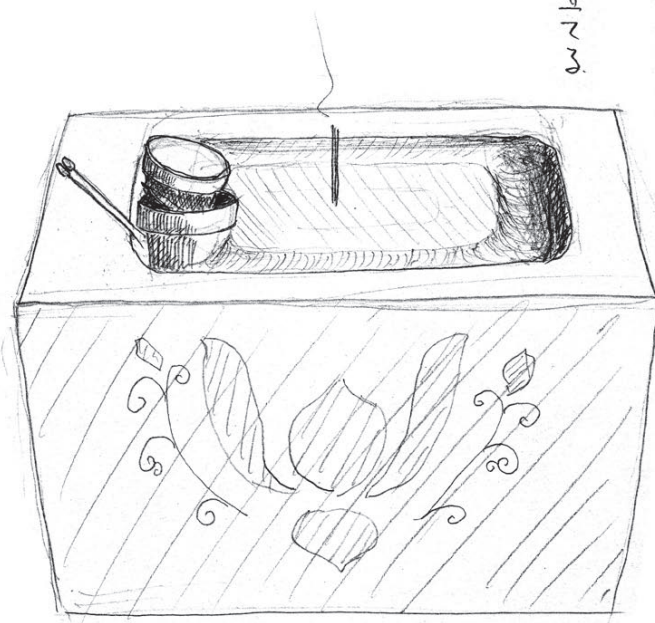
朝一番、

きれいに手入れされている

そこに

線香を立てる。

美しい



2005. 8. 27

新鮮。

早朝って気持ちがいいモンです。さわやかな空気を吸い込んで、今日も一日「ガンバロー」と思える感じがします。「早起きは三文の得」なんて、よくいったモンです。日頃、早起きなんて全然できない僕だからこそ、そこら辺の価値が分かるというものです。ま、全然自慢にならないけど……。

第三十三番札所に着き、お参りをします。手、口を清め、お札を納め、灯明をあげ……と、一連のお参り作業の中で、それぞれのパーツがとても美しく輝いているような気がしました。特に、印象的だったのが、線香をあげた時のことです。一面が真っ平らに整えられていて、その真ん中に線香を立てるのは恐れ多いような気持ちにさえなりました。

新学期、新しい教科書とノートをパリパリっと開き学校が始まります。予定帳の最初のページに鉛筆を走らせる時のドキドキ感です。これ以上ないというくらい気合を入れて、神聖な場所に丁寧に字を書きます。修了式の頃には読むこともできないくらいに汚くなるかもしれない予定帳への最初の儀式なんです。初めが肝心なんです。最初からできないより、最初くらいはできた方がいいんです。

要所要所で自分自身の確認作業をしながら少しだけリセットをして、気持ちよく「ガンバロー」と歩き出したいです。





とにかく水がきれい、というのはお四国を歩いていて何度も何度と感じたことです。山、川、海……どこを見てもきれいな水が僕を魅了してくれました。

そして、街の中にもきれいな水を発見です。テレビ番組なんかで見るような光景でした。一番上の方には野菜やらの食べ物が冷やしてあり、下の方では洗濯をしているような映像が頭にちらつきます。キラキラと輝く水面を通して、底にある物たちが同じように輝くようです。木枠の中に何が入っているのか、僕には分かりません。でも、間違いなく水の中へ沈めてあり、流れる水を有効活用している様子でした。

水を活用するにも、規模がとんでもなくデカくてダムみたいにすごいこともあります。僕の貧弱な想像力では収まりきれない、不自然な代物です。小さくセコく僕のイメージできる、自然に流れる水の姿はステキでした。活用という言葉さえ申し訳ないような、「使わせていただいている」感覚の水でした。

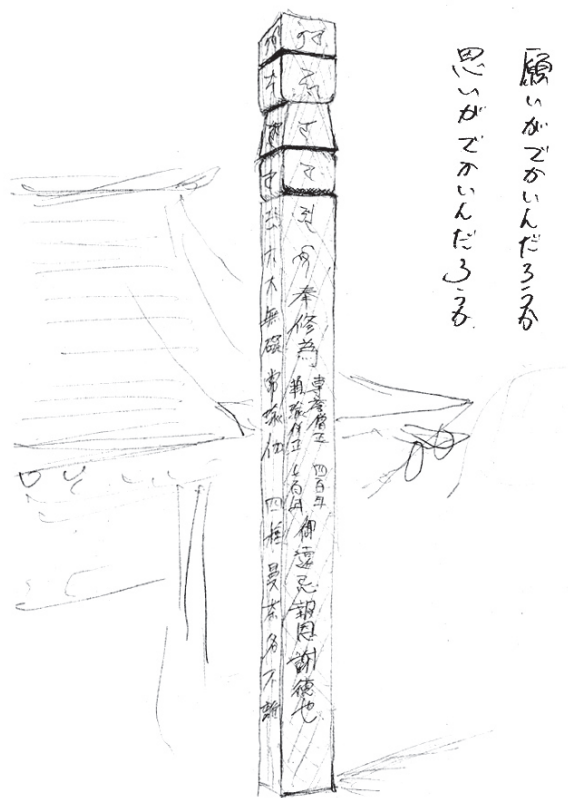
どうも、自分が偉くなったような錯覚に陥ることがあります。こりゃイカンと思います。本当に偉い人間だったらいいけど、僕は本当に偉い人間とは違います。偉いというよりは違いというタイプのはずです。分をわきまえよ……、小さな水路の下の方で構いません。そこで少しでもキラッと輝けたら少し満足です。

でか

祈りがでかいんだろっか

願いがでかいんだろっか

思いがでかいんだろっか



でかっ！

境内にドカーンと大きなモノが立っていました。第三十四番札所のことです。これは卒塔婆っていうんでしょうか。よく分かりません。そもそも卒塔婆って、インドの仏塔か何かのストウーパが訛ってそんな名前になったんだと習った記憶があります。

そういえば、ばーちゃんのお墓の後ろ側に平べったい木の板を供えました。あれ、卒塔婆って呼んでたように思います。法名が書いてあって、ばーちゃん専用のモノでした。香服院日時ナントカいう法名をいただいていたはずです。ずっと和裁をやっていたばーちゃんにふさわしい名前だと和尚さんが言っていました。別にどんな名前でもいいです。ばーちゃんは、ばーちゃんです。

そういえば、もう一つ、金剛杖の頭の部分が境内のでかいモノと同じような形をしていました。お杖の頭は普段カバーがかぶせてあるから分からないけど、カバーをはがしたらポコポコと形が彫られていました。僕と一緒に旅をしてくれているお杖です。常に手に握っている頭の部分です。なんか大切な意味があるんでしょう。かっこいいデザインだから何でもいいです。

本当の意味は分からないけど、いろんな思いを受け止めているモノであることには間違いありません。何千年という長い間、人々は同じような形のモノに信仰心を集め、それを大きなモノに仕上げ、信仰心も大きくしていったはずです。心から拝みます……。



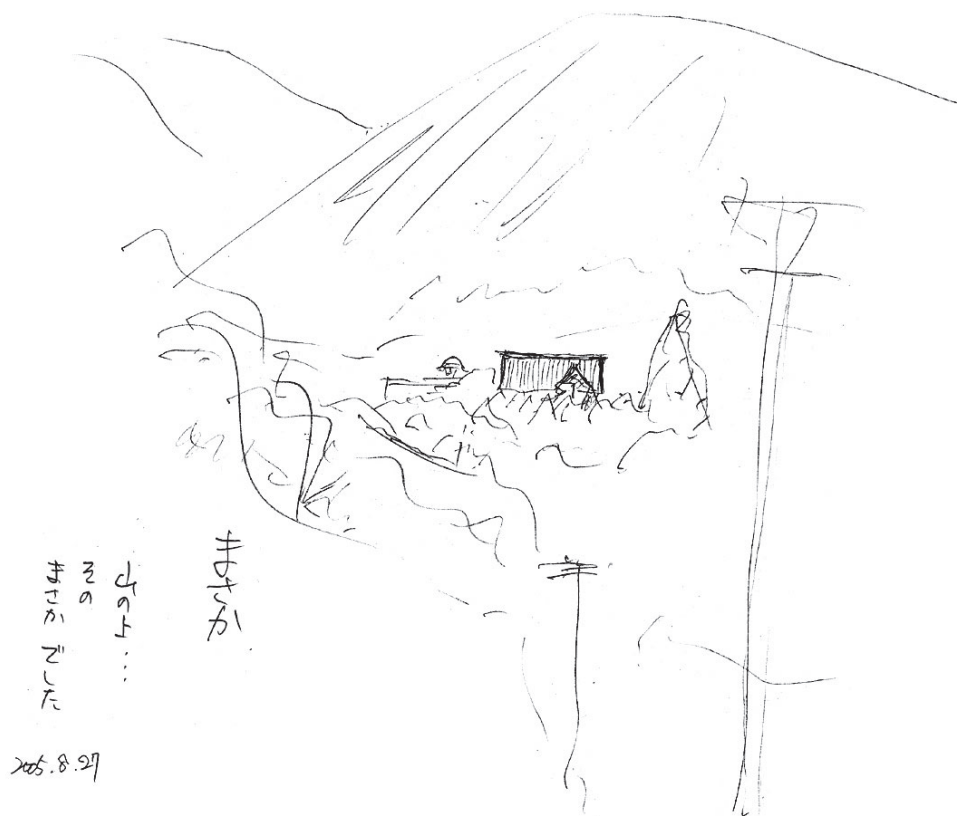
この川もきれいでした。透き通った水がゆるやかに流れていて、川底の石がゆらゆらと見えています。橋の上から見たらそれなりに深さもあるみたいで、時間にゆとりがあればそこから飛び込んでいたかもしれません。夏の暑さを少しだけ忘れさせてくれる美しさがありました。

仁淀川という名前は頭の隅のどこかに眠っていたようです。地図を見てハッと思い出しました。チャリダーの僕がテントを張ろうとしたら、なぜか軽ワゴン車に「オラオラア〜」と追いかけ回された場所だったんです。あれは、いったい何だったのか、謎の出来事でした。ある夕暮れのことです……。

真っ昼間、輝く水面の誘惑が強く感じられました。そもそも僕は水が大好きなんです。泳ぐのは最高です。生まれ故郷の焼津の海では、海水パンツと水中メガネだけを持ってひたすら潜りまくるというアホな日々もありました。何をするでもなく泳ぐ魚を見ながらドボンと海底へと向かって沈んでいくんです。キラキラ光る魚と一緒にいるだけで幸せでした。キラキラ輝く水面の向こう側にキラキラ光る魚たちが仁淀川でも待っています。ホントに時間に制約がなければ……。高知を過ぎる頃、僕は夏の旅をどこで終えようかと考えながら歩いていました。そして、できる限り遠くまで歩きたい、と歩くことを最優先にしました。



遠いよ……。



山を見上げます。高い所に屋根が見えます。立派な屋根です。大きい建物のようです。……げっそいす……。

旅の感覚というモノがあります。どんな街へ行っても、どんな国へ行っても、だいたいの雰囲気や勘で方角が分かったり、物価が分かったり、目的地の当たりをつけたり……、不思議なほどに分かることが増えてくるんです。旅の感覚です。旅を続けてしばらくすると見えてくる自分自身の力です。

歩きの旅人として遍路道をたどっていた僕に、歩き旅の感覚というモノが舞い降りてきていました。距離感や方向感覚はかなり正確になっていたと思います。んで、ついでに身についていたのが、札所を見分ける感覚です。お寺はたくさんあります。いろんな宗派のいろんなタイプのお寺があります。でも、お四国巡礼八十八ヶ所の札所のオーラが感じられるようになっていたんです。ま、地図を見ながら歩いているわけだから、当然といえば当然なんです。遠くからでも札所を見分けられたように思います。

三十五番札所らしきモノを発見です。最初は「まさか……」と思います。山登りをしなければ着けないような所に見えます。遍路道をたどっていくと、どんどん山の方へ……。坂道を上ります。上ります。そして、登ります。そこに見覚えのある屋根が表れ、遠くからの観察が正しかったことを知りました。



蚊取り線香のヒト……それが第一印象でした。第三十四番札所へたどり着いた時、僕と前後して姿を現した人です。ザックのベルトに蚊取り線香をぶら下げて歩く姿に、何とも言えないインパクトを受けました。

その後、第三十五番札所でもすれ違ったけど、何を話すこともありませんでした。……と、次の寺を目指していたら、向こうからあの蚊取り線香が歩いてきたんです。なんで逆方向から？ここで初めて話をしました。彼は道を間違えて進んでいたんです。

そこから、しばらく一緒に歩き始めます。かなり疲れがたまっていた僕ではありましたが、何かと話をしながら進むと、意外に歩けてしまうモンです。ラッキーでした。ここで、この蚊取り線香のヒトの名前が明らかになります。タカハシさんです。

タカハシさんは、その時の靴との相性があまり良くなかったみたいで、何やらいろいろ工夫をしていました。ゴムズーリで歩いたらどうか、と試したりもしていました。他に……、笠はかぶっていたけど、白衣は着いていません。最初は白衣も着いていたけど、あまりに臭かったのでやめてしまったそうです。

工夫するってことはとても大切なことだと思います。それは自分にとって何が大切なのか見極めて、不要な物をそぎ落としていくことなのかもしれません。シンプル・イズ・ベストです。



たどり着けて、とにかくラッキーでした。何しろ疲労感たっぷりだったから、歩くことが苦痛でしかないほどの道のりです。歩くことができた一番の要素はタカハシさんと一緒だったということです。たぶん、時速五キロくらいのスピードで歩くことに成功していたと思います。

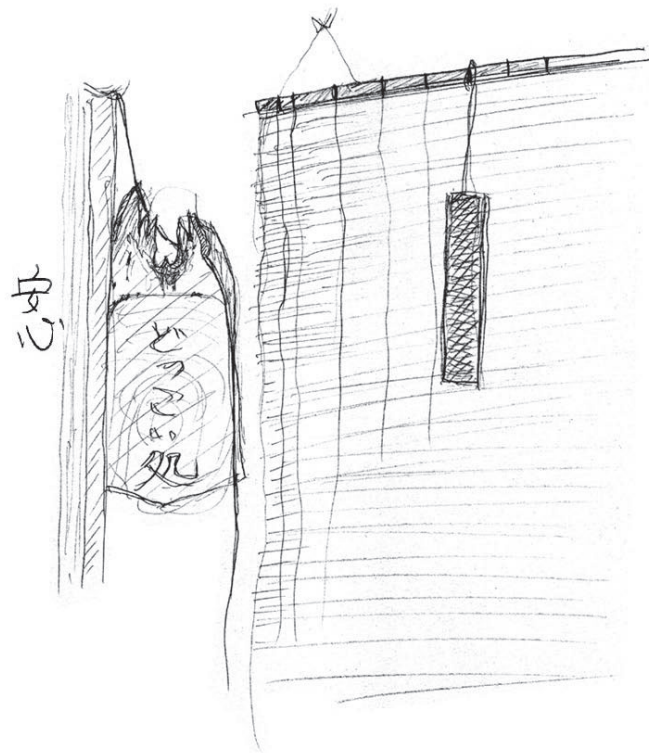
第三十六番札所はビヨーンと突き出した半島の先っちょにあるんだけど、幸いなことに大きな橋が架かっていて行きやすいんです。これもラッキーでした。そこまでの道にしても、僕らはできる限り楽をしようと努力しました。遍路道としては峠を越えて行かなきゃならないような場所でも、新しいトンネルがあることを知って当然のようにトンネルを通ります。ここの辺の感覚が僕とタカハシさんは意見が合ったので一緒にいても居心地が良かったですね。

札所へのラストスパートは階段です。さすがにここを避けて通るわけにはいきません。最後の力をふりしぼって僕はタカハシさんについていきます。一人じゃできないことが誰かと一緒ならできるとステキなことだと思います。残念ながらタカハシさんは男の人だったけど、もし女の人だったら三倍くらい頑張っていたかもしれません……。いやいや、そういう視点じゃなくて……。

一人じゃなくてよかったと思うラストスパートでした。



ちょっと一息。



すだれがあり  
机があり  
いすがある  
疲れた体  
疲れた心も  
どうしよう……

2005.8.27

思わず口に出てきてしまう言葉ってのがあります。ちょっと気持ちいが楽になり体が楽になりそうな時、それまでの緊張感と共に、ふと言葉がこぼれてしまいます。

何とか札所にたどり着き、お参りも済ませました。んで、ふとそこを見ると、居心地の良さそうな場所があったんです。もう、日も傾いてきてはいたけど、場所の涼しげな様子が僕を誘います。日本の夏の風景で、すだれのもつイメージが僕の中ではとても涼しさをアピールしてくるんです。そして、「すわってね!」と呼びかけるかのようにいすがあるわけです。

思わず口に出てきてしまう言葉が……ああ、やっぱり……「どうこいしよ」とこぼれてしまいました。看板を見て、もう一度「どうこいしよ」とこぼれてしまいます。その言葉を心おきなく使ってもいい処なんです。「どうこい」の「処」ですから……。

スケッチブックを取り出し、ペンを動かします。タカハシさん、ちよつと待っててくださいね。絵を描くのは下手くそだから、時間がかかります。まあ、夜は長いし、疲れてシャキシャキ歩く気にもならないから大丈夫ですね。そう、夜は長いんです。泊まるうかと思っていた宿はいっぱい、必殺ナイトウォークを決行することになりました。

束の間の休息……、どうこいしよ……。

異様な姿。



闇夜に浮かぶ秘密要塞みたいなモンが視界に入ってきました。怪しげな光をまとい、夜空を照らします。戦闘機でも出撃してきただっておかしくないシチュエーションです。むしろ、映画だったら、何も起こらないことの方があり得ないって感じの光景です。

どこかの街で「二十五時間営業」なんて看板を見たことがあります。それは極端な例にしても、日本には夜中までひたすら営業しているお店がたくさんあります。逆に夜遅くにお店が閉まっていると、イライラしてしまうことだってあります。おかしい話です。自分自身は夜の時間をゆつくりふとんの中で過ごしたいと思っているくせに、都合のいい時……しかも、自分以外の対象にはいつでも休みなしで稼働していてほしいと思うわけです。人間って自分勝手な生き物だと、自分を見ているとつくづく感じてしまいます。

その夜に見えた秘密要塞は、でかいコンクリート工場です。コンクリートは固まります。固まったらカチンコチンになって、どうにもならなくなります。工場を止めるわけにはいきません。コンクリート工場の便秘なんて嫌すぎます。カチンコチンに固まったうんこが自分の中にたまっているのと同じです。最悪です。

確かに異様な工場の光景だけど、その異様な工場達たちが僕らを支えているという現実を受け止めて生きていくしかありません。



水の音がします。わりと耳から近い所で聞こえてくるようです。でも、前に聞いたことがあるようなタイプのモノではありません。前に聞いたようなパチャパチャ流れるような音じゃなくて、チャポーンチャポーンと間隔をあけて聞こえる音でした。

今までに聞いた耳元で聞こえる水音の中で、印象的なものがいくつかあります。パチャパチャ流れるような音……が聞こえた時は、寝ぼけた頭で事態を正確に把握し速やかな対応が求められる場面でした。次は台風を計算に入れてテントを張ろうと思いました。ジャーンと流れ出てくる音……が聞こえたかと思うと、なま温かい黄色い液体が芳しいにおいと共に降り注いできました。ま、我慢できなかったんだから仕方ないことです。次はタイミングよくトイレへ誘ってあげようと思いました。

夜、歩き続けていたタカハシさんと僕は、疲労と眠気が限界まで近づいてきていました。どちらからともなく、「もう、やめよう」というオーラが満ちていき、「寝よう」という結論に達します。ここならきつと大丈夫、と判断したのが堤防の横でした。周りが暗いからはつきり分らないけど、面積としては問題ないはずです。

朝、どこにいいのか一瞬分からなかった、というのは僕らに共通の感想だったと思います。テント無しのタカハシさんの方が、数倍その思いは強かったと思いますが……。





確か、僕は、お四国を、歩いて、いた、はず、です。それで、日本で、一番、大きな、湖は、滋賀県に、あった、はず、です。その、名前は、確か、琵琶湖、だった、はず、です。何が、なぜ、こんな風に、起きる、ことに、なつて、しまった、ので、しよう。

意味不明の出来事に対面した時、人間って自分自身も意味不明になつてしまふのかと思ひました。他の人たちは何も思われないのでしょうか。もしも車のスピードで走っていたら、気づかなかつたのでしょうか。歩き遍路のみぞ知る穴場的なおかしさなんでしょうか。

自分がおかしいのか周りがおかしいのか、時々そんなことを考えます。僕は昔から「変なヤツ」と言われる機会がたくさんありました。なんでなのか、よく分かりません。よく分からない……ということとは、少しは分かるつてことです。分かる部分としては、自分が周りと一緒にのガイヤだと感じるあたりです。小学校の図工の時間、みんなと同じような絵を描くのガイヤでイヤで仕方ありませんでした。いかに他の人が描かないような絵で勝負するのかポイントでした。人と違つてほどに上手に描けるわけじゃなかったから、とにかく人と違つて視点を探していました。

たぶんこの場所で明らかに違つて視点でモノを見てしまった人があるんです。だから、「琵琶湖」という名前が生まれたんでしょう。

見方によっちゃあ……。



確かに琵琶湖の北の方はこんな雰囲気だったかもしれない……などと思わされてしまいました。「琵琶湖」という看板にだまされているだけなんでしょうか。ま、それでもいいかと思います。

昔、梅の花の匂いが風に乗ってきたらなあ、なんて都を思つて歌を詠んだ人がいるといひます。まさか、九州にまで梅の花が香るわけもないし、まさか本物が飛んでくるなんてありえませんが、でも、その人には見えたのかもしれない。思いを強くもつと、見えないモノが見えてしまうこともあるような気がします。僕には全くそんな能力はないけど、見えてはいけないモノが見えてしまふ人だっているんだから、人によってモノの見え方なんていろいろあつて不思議じゃありません。

僕の生まれ故郷も、だんだんに姿を変えつつあります。小さい頃は田んぼだった所に建物が建ち、実家のすぐ前にあつた伊達巻屋さんの工場も何件かの家が変わってしまいました。友達と泳ぎに行つたチャリンコで十分くらいの所にある海も、コンクリートで固まっています。でも、僕の頭には、あの頃の様子がピッタリとくっついていて離れません。もし、同じような風景の場所があれば、きっと「あああああ〜！」と叫び出すんじゃないかと思うんです。

人間の目って、エエ加減なモンみたいですよ……。

いい国です。



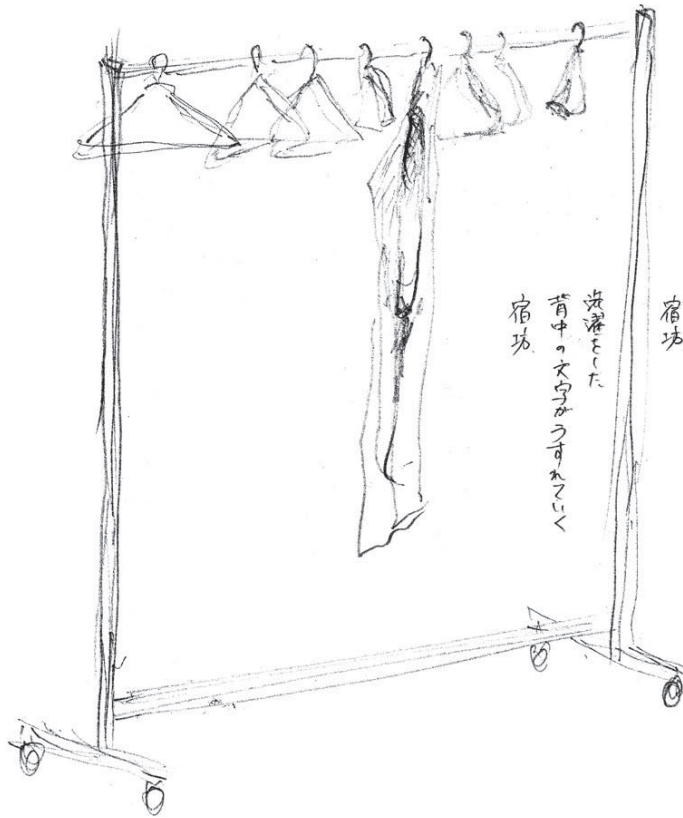
英語で言うなら「The United States of Shimanto」になるんじゃないか。USAならぬUSSです。ちよつとかつこい感じがします。「States」……この「州」という響きそのものからして、貫禄があります。

アメリカだと、州それぞれがアイデンティティをもって機能しているようだと言いたことがあります。みんな違う特色をもって生活をつくり出しているということだと思います。んで、それがバラバラになってしまふんじゃなくて、一つの国として成り立っていることは魅力的です。お互いの個性を尊重していることの表れです。クラスの人が一人一人みんな違う所を「すごいねえ」と言っただけで、それこそ「すごいねえ」と絶賛してしまいます。理想的なクラスです。もちろん、アメリカ合衆国が全てうまくいっているわけじゃありませんけど……。

個性を大切にしながら、みんなでまとまって高め合っているという気持ちが伝わってきます。四万十川といえば、多くの人たちが憧れる清流です。清らかな流れです。美しい四万十川を囲む人たちが一致団結したら、きっと美しい団結力が生まれるんじゃないか。お互いに、汚い所はきれいな所に変えてしまい、きれいな所をさらに伸ばし合っているような関係を想像してしまいます。そんなステキな合衆国、是非、住んでみたいものです。



屋根の下。



大師  
傳無漏照金剛

洗濯をした。  
すた  
乾いてない。  
宿坊

洗濯をした。  
背中、文がうすくていく  
宿坊

2005. 8. 29

寝る場所には困りません。なんといってもテントという強い味方がいます。どこだって眠ることができます。これは旅をする人間として非常に重要なことです。でも、屋根がある所でふとんに入って眠れたら、そんなに幸せなことはありません。それがベストなんです。

岩本寺に着いた時、もう、納経所が開いている時間ではありませんでした。僕とタカハシさんは相談をして、宿坊に泊まることにしました。その宿坊に泊まれば都合良く次の日も動きが取れます。しかも、岩本寺の宿坊はユースホテルを兼ねている所で、普通に快適な夜を提供してくれる所でした。僕が勝手に想像していたような怖い所……、木の枕に板張りの寝床というような宿坊とは全然違う所だったんです。

屋根のある所に泊まったら、まずやりたいことは洗濯でした。屋根がある所には大体クーラーがあります。クーラーがあるというところは部屋の中は乾燥していて、洗濯物がよく乾くんです。もう、うれしくてうれしくて……。自分の苦労も一緒に詰まっている白衣ではあるけど、何より臭くて汚い衣服になり果てています。ゴシゴシ洗濯です。清き白衣は洗濯からです。

心地よく眠りにつきました。

翌朝、お経をあげる、お勤めの時間を寝過ごしました……。

怖い川です……。



ブルブルと怒りに燃える時があります。その気持ちをどうにもできないこともあります。拳が震えます。でも、だいたいの場合はその拳をどこへ向けたいのか分からずに、よけいに怒りが高まってしまいます。くやしいことです。人間だから怒りという感情があります。人間だからそれをコントロールする理性もあるはず。あるはずなのにどうにもならないんです。

人に対して怒りが生まれてしまった時、人間だから言葉で何とかその気持ちを伝えようとします。言葉が足りないと相手からの反撃に会い、もう言葉では伝えられないほどの感情の高ぶりが訪れてしまうんです。僕の場合、飽くまでも人間をなぐっちゃいけないと思うから、壁をなぐります。できれば適度な硬さと適度なやわらかさを兼ね備えた所を目標にしていきたいんです。……が、怒りに任せて壁をなぐると、適度な硬さのことはほとんどありません。メチャクチャ硬くて自分の拳が出血するか、メチャクチャやらかくて壁が壊れるかのどちらかです。そして、自己嫌悪に陥るという結果を迎えるんです。

川が怒り拳をあげたんでしょうか。流域に怒りに満ちた人たちが多く住んでいたんでしょうか。もっと単純に河原が拳のような岩石だらけだったんでしょうか。本当だったら、もっとやさしく拳ノ川にしたい人たちもいっぱいいたと思うんですけどね……。



五三〇運動って小さい頃によく言われたような気がします。ごみゼロということ、地球にやさしい運動ですね。体力がない僕にでもできる運動です。本当にシャレにならないほどに劣悪な地球環境のためにはどんどん進めていくべき運動だと思います。

と、頭では分かっているが自分の生活を省みると、地球に厳しい生活をしていることが恥ずかしい限りです。ゴミの分別って苦手なんです。そもそもゴミを捨てるのが苦手なのかもしれません。テレビでゴミ屋敷と紹介されている映像を見て、あそこまでのいかにうちにかしよう、と考えさせられます。ありがたい番組です。分別の分けがとても細かくて、どこまで燃えるゴミで、どこまで燃えないゴミで……ああ、分からなくなります。

看板には「粗大ゴミ集積所」と書いてあるようです。ということは、ここにある物はゴミなんです。ステキなゴミです。是非、もらってしまいたいくらいです。僕はトホダーであり、ライダーであり、チャリダーだから自動車には乗らないけど、ただならもらってもいいかな、と思います。ゴミ捨て場には、その人の価値が捨てられます。僕には必要でもその人には不要なんです。まだ使える物が捨てられていたりすることだってあります。その人には不要なんです。かわいそうなゴミたちがいっぱいいます。

ま、この場合はたまたま車を停めただけだと思いますが……。



もう、やめられませんか……。



なんで始めてしまったんだろうと思うことはよくあります。今までそれをよく感じたのはチャリダーに変身した時です。とりあえず尻が痛いことが第一、当然ながら足は疲れる、隣を走り抜ける車たちが怖い……、挙げだしたらきりがありません。

遍路道を歩きながら、なんで始めてしまったんだろうと思うこともありました。足は痛いし、のどは渇くし、背中の荷物は肩に食い込むし……、しかも第三十七番札所から第三十八番札所までは遍路道最長、約九十キロという道のりです。歩いてても歩いても次の札所までたどり着かないってのは、かなりの苦痛でした。そんな時「よせばいいのに」などと、もつともなツツコミが入ったら、ゴメンナサイと思うしかなくなります。もう、始めてしまったんだから、引くに引けない状況なんです。

とはいっても、歩くという行為は対象年齢の幅がものすごく広いモノです。車のように免許もいらないうし、電車のようにお金もいらないうし、万民に平等に与えられたチャンスといえます。その手軽さのおかげか、チャリダーの時ほど僕の苦痛は激しくならなかったような気がします。欲をいえば、もつとのんびり歩けたらよかったなあと思います。そうしたら「よせばいいのに」というツツコミにも、そんなことないよ、と速攻で反撃できたのに、と思うのです。



タカハシさんは「だから、やめた方がいいって言ったのに……」  
と言うけど、仕方ないんです。興味津々だったんです。自分の目  
に見えないモノたちには、その存在感は主張するけど実態がつか  
めなくてくやしい思いをします。もし、それが見られるチャンス  
がきたら、生かさない手はないんです。

好機到来、中身がクシヤクシヤと違和感を伝えていました。そ  
れまでは何も感じなかった部分が少しだけ変化を見せています。  
雨水がデロンデロンにしみたからだと思います。思い切って中身  
を引っ張り出してみました。何かしら尊いモノが感じられるかと  
期待していたんです。何が出るかな、何が出るかな……、ショック、  
出てきたのはただの段ボールでした……。

金剛杖は弘法大師として敬うもの、非常に大切なものだったは  
ずです。当然、カバーがつけられていて、守られるものでした。でも、  
そのカバーの中には段ボールが巻かれているだけであり、所詮、  
木の杖は木の杖か……。偶像崇拜を禁じたイスラムの教えが分か  
るような気がしました。僕らは何かを信じて支えにします。心の  
支えです。それをイメージしやすいように物を代理にして信じる  
自分の気持ちを守ります。どれだけ信じる気持ちが強いのか、そ  
こが自分の気持ちを守れるんだと思います。

僕のお杖からは余分な物が取られ、純粹になったことにします。



歩けど歩けど店はなし……、かろうじて自動販売機が現れるのを心の支えに修行の道を歩き続けます。

さあ、どこでメシにしようか、何を食べようかと思うわけです。市街地だったらあちこちにコンビニなんというモノが存在し、食べ物屋さんも選べるほどにたくさんあります。でも、そんな贅沢を言えるわけがありません。何といっても修行の道場です。

タカハシさんが地図を見ます。僕は見せてもらいます。そこには「食」マークがついていました。どうやらファミリーレストランがあるようでした。これは刺激的な情報です。ファミリーレストランといえば、冷房完備であり、いろんなメニューがそろっており、それがお手軽な値段で食べられ、しかも、営業時間が極めて長いので利用しやすいという、ありがたい施設であります。このようなありがたいモノが地図上に明確に記されているのです。俄然、元気が出てくるというのが道理というもののなのです。

日常の中で、僕はファミリーレストランのようなチェーン店の食べ物屋さんを、必要以上に低いモノとしてとらえているかもしれません。コスト削減のため、店員さんはアルバイト多数、食材はおそらく安い輸入品ばかりのはずです。そんな所に敬意をはらってたまるか、とひねくれているのかもしれませんが……。

ゴメンナサイ。ファミリーレストランは偉大です……。





駐車場。

僕の頭の中には、鉄板の上でジュージューいつている肉のイメージ画像がリアルに再現されていました。冷たい飲み物もついています。ああ、至極のひとつきです。

おなかはペコペコ、いくらでも食べられそうな状態で、「ファミレス、ファミレス」と半ばつめき声のようにつぶやいてたかもしれません。

それが、「ふざけるなあ」という叫び声に変わっていました。

あるべき所にあるべき物がないんです。

だいたい、駐車場があり、植木が何かがあり、ちょっとした段やスロープを進むと、入り口の扉があるモンです。そこを入ると「何人様ですか」と質問され、「おタバコは吸われますか」なんて聞かれるんです。

それなのに……、それなのに……、駐車場しかないんです。「ふざけるなあ、建物はどこへ行ったあ、俺のメシはどうなるんだあ」……渾身の雄叫びです。明らかに想像ができる造りでした。ここに駐車場があるということは、こっちに入り口があって、こっち側が喫煙席、あっち側が禁煙席……、というように、ファミリーストラップが遺跡のように感じられる一画でした。

期待をしすぎたんですね。まさかつぶれているとは……。諸行無常、やはり、修行の道場です。



濃い宿でした。遍路とはこういうものかと思い知らされたような感じです。足摺岬まであと少しという遍路小屋のことです。

そこにはおっちゃんがいきました。その小屋の説明をしてくれま  
す。風呂はどうなっているのか、洗濯はこうだとか、寝る場所は  
こんなだとか、細かく教えてくれます。遍路小屋だから宿代は不  
要だけど、一応の維持費として百円払ってくれるとうれしいなん  
てことも教えてくれました。その人は管理人さんじゃありません。  
僕と同じ遍路道をたどるおっちゃんです。

おっちゃんは語ります。胃を摘出してしまったから栄養補給も  
大変で、体に取り込みやすい物を少しずつ何回にも分けて摂取し  
ているとのことでした。また、おっちゃんは語ります。時々、自  
分の家に帰らなければならぬ用事もあるけど、ほとんどはお四  
国を歩いているとのことでした。さらに、おっちゃんは語ります。  
いつ倒れても構わないし、お四国を巡り続けるとのことでした。

お四国とはものすごい所です。輪廻転生とはいうけれど、お四  
国の輪廻は僕らの心をつかまえて放してくれません。おっちゃん  
の納経帳は隙間もないくらいにビッシリと朱印が残されています。  
何周お四国を巡ったんでしょう……。

自分の思いをとことん追究していくおっちゃんをうらやましく  
思います。いつか、僕も自分の道を悠々歩いていきたいものです。

ち  
よ  
っ  
と  
強  
そ  
う。



夏休み最終日、八月三十一日は毎年のように地獄の苦しみを味わっていました。家にある科学雑誌を丸写しして理科の自由研究を終わらせ、泣きながら漢字の書き取りを進めながら夜を迎えるパターンです。そして、この年の八月三十一日は、お四国最南端の地である足摺岬にいました。

第三十八番札所金剛福寺へ到着して記念写真を撮ります。同じようなポーズを取っていた場所があるなあ、と記憶をたどります。第一番札所でも杖をつき、山門の前で記念写真を撮っていました。でも、明らかに雰囲気違います。日焼けで黒くなっているだけの違いじゃありません。ニヤリと笑った表情を始めとして、立ち足の広げ方、胸の張り方、腕の降ろし方、全てが堂々としてるし、ただ者ではないオーラが感じられます。

自分のことをかっこいいなんて思うことはありません。本当にかっこいい人がうらやましいと思います。そんな僕が写真を見て、自分自身に好印象を抱きました。何かをやり遂げた時の充実感があふれ出ていて、すがすがしい姿に見えるからです。歩き遍路に限ったことじゃなく、達成感が味わえた時には、誰でも少しかっこよくなったり強くなったりするんじゃないかと思えました。よくもここまで歩いてこれたモンだと、自分で自分をほめてあげたいと思います。



お亀さん

あなたが連れていてくれる

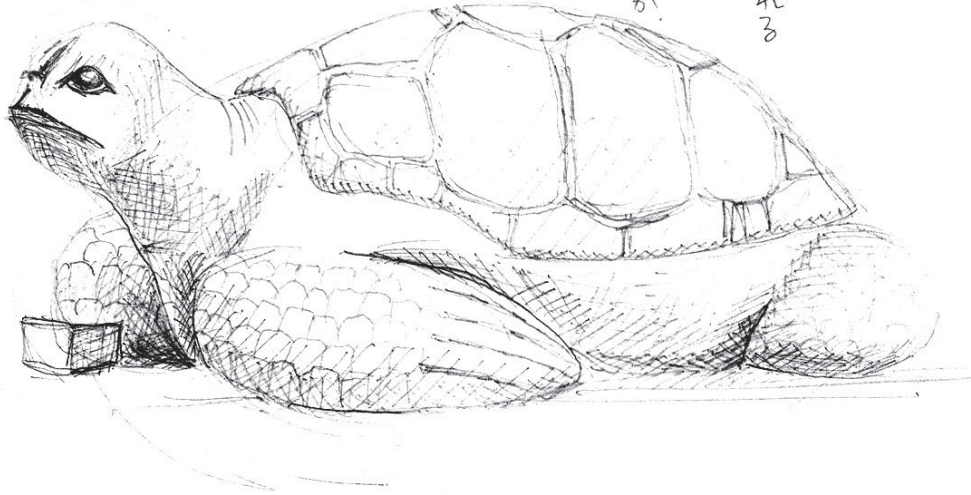
竜宮城とは

お楽々ともいえますが

ゆっくりゆっくりでも

いいんですからね

2005. 8. 31



竜宮城へ。

鶴は千年亀は万年……、おめでたい生き物として昔から大切にされている亀たちです。「お亀さん」として祀られるのも当然かもしれない。亀は万年っていうけど、実際は何歳くらいまで生きているんでしょうか。分かりません。もし、人間が「一万歳おめでとう」なんていうような時代がきたら、びっくりです。僕がそんなに長く生きていたら、たぶん興味の対象が消え去って抜け殻状態になってるんじゃないかという気がします。

人間に限らず生き物には寿命があります。生まれたときから間違いなく死に近づいているんです。分かっちゃいるけど、親しい人の命が失われた時には悲しさが押し寄せます。うちのばーちゃんは九十二歳でした。客観的には、まあ大往生といえるみたいです。けど、孫として思うのには、あのばーちゃんに「死」なんて全然似合わない……。いつでも元気に歩き回っている姿しか想像できなかったんです。ばーちゃんは自分勝手に頑固で、やりたいことはそれなりにやりきって逝ったようにも見えます。幸せだったんだと思います。

竜宮城へ行った浦島太郎は、玉手箱を開けて本当の自分の時間軸へと戻ります。僕は三十八番札所のお亀さんにお参りをして、日常の自分の世界へと戻ります。非日常の世界も終わりがあるからこそ輝きを放つんですね。輝ける「時」に乾杯！



前へ前へと進む姿はカッコいいモンだと思います。後ろへ後ろへと逃げて行きたくなるような僕はそう思います。

自分では攻めの姿勢を忘れているつもりはありません。それなのにどうしてか、結果的に弱々しいことになっています。セコくて軟弱者である僕の宿命なんでしょうか。悲しいことです。

夏の終わり、僕はどうしてもお四国を去らなければなりませんでした。足摺岬という、一番遠くにある場所から引き返すんだから、悲しいことといったらこの上ありません。

自動的に、しばらく一緒に歩いてきたタカハシさんともお別れです。タカハシさんは通し遍路としてまだまだ歩き続ける人でした。いろんなことをたくさん話して、いろんなことをたくさん考えさせてくれた人だったので、僕は別れるのを寂しく思っていました。それでも、タカハシさんは淡々と自分の道を歩んでいってしまいました。自分としては寂しいんだけど、すごくカッコよく見えてしまいました。バスの中から、撮った後ろ姿が必要以上に堂々と見えてしまいます。

旅という非日常の世界のさらに先へと進んでいく人を見送る僕を、日常という当たり前でそれでも刺激的な世界へとバスは引き戻していききました。日常と非日常の狭間、それがあことは幸せなのか違うのか……、またタカハシさんに考えさせられました。

身近な人の命が亡くなる経験をあまりしたことがない。小さい頃、じーちゃんが亡くなつて葬式に出たことはある。でも、じーちゃんは僕と一緒に住んでいる人じゃなかったし、「死」というもののイメージが全くつかめずにいた。じーちゃんが生きていたとしても僕の生活にはほとんど関係のない所にあったから、無関係に近かった。

ばーちゃんは違った。ずっと同じ家で暮らしてきた人だから、その人の命が亡くなるなんて現実味がなかった。ただひたすら涙があふれ出てきた。葬式が終わり慌ただしさが過ぎ去ると、心にぽっかり穴が開いたような感覚に陥り、何かをしなければ自分が保てないような感覚が訪れた。そして、再びお四国を目指す。

ずっと僕の場合は異常だった。感情の起伏が激しくて涙が無意味に流れる道のりが続く。ことあるたびに「ばーちゃんが見たらどう思うか」などと考えていた。それでも基本的に楽観的な人間である僕は、旅をすることでの心の平静さを取り戻していったような気がする。自分の心をコントロールするのに、日常的に僕は文章を綴るという方法をとる。特に、悲しかったり落ち込んだり怒りが収まらなかつたりすると、ひたすら文章を綴る。そしてもう一つ、旅の中で心を開放させる。歩くことはその時の僕にとって一番適切な活動だった。

真夏、太陽がジリジリと僕に照りつける。熱い。のどが渇く。足にまめができる。荷物が肩に食い込む。「発心の道場」と呼ばれる徳島から「修行の道場」と呼ばれる高知へ入り、苦しさが体の奥まで染み渡っていった。高知では札所と札所の間隔が広い所が多い。一日歩いても札所に巡り会わないこともある。長距離を朦朧として歩きながら、時々ばーちゃんのことを思い出した。ふとした瞬間に心の中に現れるのである。そういえば、母や伯母の夢の中にも登場していたらしい。四十九日も済んでいない頃だから、まだその辺をフラフラしていたのかもしれない。いろんな所に出張して御苦労な話だ。僕には靈感というものが全くない。勝手にばーちゃんを登場させて喜んでいた。そして、返事が返ってこないばーちゃんに勝手に勝手に話しかけては気を紛らわせていた。物事を忘れることに関して、僕はものすごい能力を備えているように思う。いいことも悪いことも次から次



へと忘れ去ってしまう。あれだけ僕の心に衝撃を走らせたばーちゃんの死からの痛手さえも、お四国を歩いているうちにだんだんに薄れていった。ピンポイントでばーちゃんを思い出させる出来事が現れることもあったが、心の波は少しずつ凪いでいった。心の平静が訪れようとしている頃、高知・「修行の道場」を半ば程まで歩き進んだ頃に僕はタカハシさんと出会った。

彼はどうやらすごい人のようだった。歳は僕とそんなに違わないのに、放つオーラが僕を圧倒した。いろんな話をした。歩きながら僕はたくさんのことをタカハシさんに投げかけ、帰ってくるモノを吸収しようとする。一つの言葉を拾い続けた。僕にはない知的なスマートさを感じながら、しばらく一緒に歩くことになる。不思議なもので、一緒に歩いていると、自分一人で歩いているよりも苦しさが少なくなったように思えた。歩くペースも少し速くなった。苦痛を忘れさせるほどにタカハシさんの時間は楽しく魅力的だった。歩き遍路をする中でタカハシさんほど親しく話をした人は他にいない。向こうはどう思っているのか知らないが、僕はタカハシさんと出会えてとてもよかったと思っている。

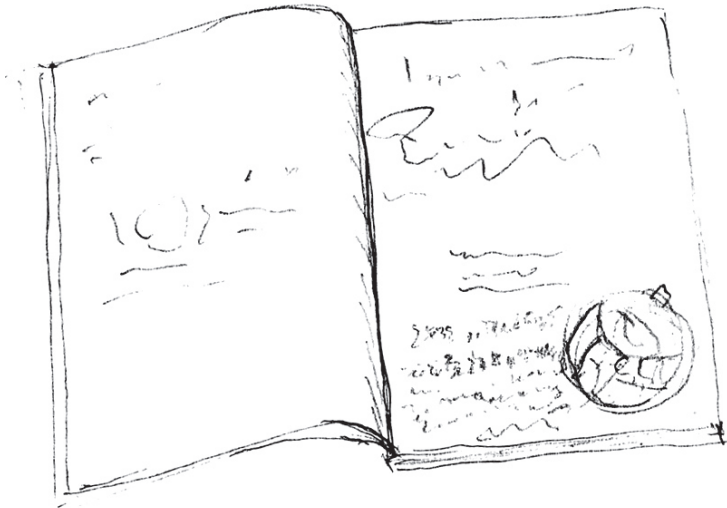
夏休み最終日まで二人で歩き、足摺岬で僕とタカハシさんは別れた。僕は翌日から始まる職場へ戻らなければならなかった。

お四国遍路編 第三期

冊子に込められた想い。

今日、教え子が死んだ。  
なご通事政だという  
ダチに養子とよめんだという  
おぼやかしう  
昔いかにうら  
十五年間の命  
いかに、まだまだはよはるはあたたか命。

無器用なヤリだに  
それでも  
懸命に  
かむいかに  
ひたすら  
真面目に  
生きている  
今日、教え子が死んだ。



2005年度 (平成15年度)  
京越通信 野田こ

2005.9.19

体に力が入らない。何かしら動いている自分の体なのに、全然自分の意志を感じないこの体。

言葉が意味を成して入ってこない。聞いている音は確かに流れ込んでくるのに、全然感じることもない自分の耳。

ばーちゃんがあの世に逝ってしまつて約一ヶ月。またしても自分に関わりのある命がこの世を去つた。つい半年前までは中学生だったユースケの死だ。

かつて、彼の家には稲があつた。母親がこつそり教えてくれた稲だつた。僕は、お百姓さんという職業を心底尊敬している。僕にはできない仕事だと思う。こつこつ地道に命と共に歩いていく生活だ。……ユースケは稲を大切に思っていた……。

不器用な男だつたが、ひたすら真面目だつた。努力を重ね、高校へ入学し、勉強に運動に力を注いだ。彼のがんばりを思うと、涙が止まらなかつた。以前、僕は彼の文章を読んだ。固い文章だつた。ストレート過ぎるくらいに出来事を綴っていた。

ユースケの文章も載っているが、かつて僕は自分の小冊子を作つた。それに関わりの深い人たちに贈つた。もちろんユースケの手元にも届いている。その頃の僕が精一杯の気持ちをぶつけていた、そんな小冊子……。『大切にしています』というユースケの母親の言葉が、聞こえない耳を通り、頭の中でビリビリ響いている。





ぶかぶかと空に何かが浮いていました。

僕の心も、どこをさまよっているのか分からないような感じてした。僕の中で命というものが、まだまだ理解できない状態で、それでも確かに命というものがどこかへいつてしまったという事実だけがグルグル回っていました。

形ばかりは命というものをどこかへ送り出しました。そして僕の足は、お四国へと向かっていきます。というよりも、お四国へと向かう電車……に乗るための駅へ向かっていました。

ぶかぶかと空に何かが浮いていました。秋晴れの美しい空に、気分もよさそうに、飛行船です。僕は飛行船に乗ったことがありません。ちよつと憧れます。空でのんびりと優雅な時間を過ごすことができそうです。僕が体験した空は、ヒコークの中、空気を切り裂いてビュンビュン進んでいくような空でした。せわしない、地上での時間が空にも流れていました。のんびりとした時間を過ごせそうな飛行船は遙か遠くに浮かんでいました。

本当だったら意気揚々と向かうんだらう場所、お四国へ、自分の気持ちも分からずに旅立ちます。そんな僕をも受け入れてくれる場所……、勝手にだけど、そんな風に思えるお四国ってすごいと思います。輪廻転生、曼陀羅の地、お四国です。区切り打ちの歩き遍路が、また、お四国へと向かいます。



走れ、新幹線。

足は、お四国へと向かっていきます。……といっても、新幹線というモノに頼って前へ進んでいく段階です。重い足取りの僕の前をビュンビュンと新幹線が走り去っていきます。僕の気持ちと新幹線のスピードが全然かみ合わず、その速さについていけません。

僕がいるのは新幹線の車両からメートル弱の距離です。手を伸ばせば、その体にさわることもできるくらいのところです。なんとなく僕は、怖くなってしまいました。柵もないホームを平然と歩いていることに対する恐怖です。もしも、何かの拍子に新幹線の方へ近づきすぎてしまったら……、僕の体は吹き飛びます。

今まで気づかなかったことなんだけど、ホームに柵があるって大切なことみたいですね。よく考えたら簡単なことです。いつでも誰でも思いつくはずのこと、それに気づけなかった僕……、それに気づけた僕の心……、そんな心をもつことができたことを喜びたいと思います。

きっかけに感謝です。つらいこと、悲しいこと、いろいろあります。その全てが自分を高めるきっかけになるんだと思うことにしています。そうでなきゃ、やってられないこともたくさんあります。……で、感謝していたら、そのきっかけが、本当に素晴らしい財産と呼んでくれることも多いんですね。感謝感謝……。



再スタート。

最寄り駅から遙か彼方、スタートラインは遠くにありました。区切り打ちの歩き遍路、前回までにたどり着いていたのは足摺岬です。そこまで行かなきゃ始まりません。駅の周りをフラフラしてみます。でも、どうしたらいいのかわかりません。バス停の時刻表を確かめます。でも、すでに最終バスもありません。何台かタクシーが停まっています。どうも、それに乗るしかありません。

タクシーに乗って運転手さんのお話を聞きながら、闇の中を進んでいきます。いろんな話をしてくれました。夏に来た台風で四十川がドバーっとなってしまったこと、四国沖のジンベイザメが大阪に運ばれて見世物になっているということ、昼間だったもののすごく景色がいい所もあるけど夜だということ、そして、目的地、足摺岬は自殺なんかする人もいるということ、など……。

話し好きな運転手さんのおかげで、眠ることもできないまま足摺岬に到着しました。そこには、懐かしくも感じられる寺の様子が闇に浮かんでいました。

いよいよ歩き始めます。つらい歩きの道が前にあります。それなのに、また、歩き始めてしまうんです。しかも、夜通し歩こうとしている自分がいます。何が僕を動かしているんでしょう。目には見えない、言葉にならないモノが僕を包んでいるようでした。そして、タクシー代は一万円……、仕方ないのかな……。



冷たく温かい……。



夜歩きをします。夏の日差しが残る頃、昼間に歩いていると上からビンビンの光線を浴びてしまいます。札所と札所の間の距離は長いけど、夜歩きなら納経所のオープンしている時間帯なんか考える必要ありません。多少でも夜の涼しいうちに次の場所まで近づいていたらラッキーだと思います。

昼間よりはマシ、でも、ジトーッと暑い夜を歩いていると、だんだん頭がボーっとしてきて、意識が飛んでしまったりもします。そこで、なけなしのお金を投入です。自動販売機の缶コーヒーでも飲んで、リフレッシュさせなきゃ、やってられません。……で、ふと見ると、「あったかミルクココア」などというモノがあります。……が、そのコーナーの表示は「つめた〜い」なんです。やられてしまいました。これは買わないわけにはいかないでしょう。このココアが目の前に現れた時点で、かなり目が覚めてしまいました。僕の気持ちをよく分かっている自動販売機です。

人が話をするとき、他者にどれだけ理解してもらえるか、それはものすごくポイントになる部分だと思います。いくら正確に話をしても、それが分かってもらえなかったら意味がありません。どれだけ簡単に話をしても、ばつちり伝わればそれでいいんです。僕が冷たい飲み物を飲めたら、それで任務完了なんです。

僕が手にした缶ココアはすっかり冷えていました。



小学生の頃、学区の自動販売機を渡り歩いたことがあります。それってどういうことか……、もしも今の自分がその時の自分の姿を見たら、ハア、とため息をついてしまうかもしれません。おつりの返却口に指を突っ込み、地面に顔をつけてそこをのぞき込んでいる姿です。仲間にくっついて歩き回り、収益金でお菓子を買うという姿です。

自動販売機で買い物をして、おつりの返却口からお金を取り出します。ごくごく当たり前の行動です。それを忘れてしまうことだってあります。お金持ちのミスですね。僕はお金持ちじゃないから、そんなミスを犯すことはありません。確実におつりの返却口に指を突っ込み、あわよくば地面に顔をくっつけようとするくらいの人間です。

さて、おつりを手にした僕は、アメリカへ飛んだ気分になりました。アメリカで見るようなコインが手の上にあったからです。僕が買ったのが輸入品だったとも思えないんですけど、少しでも余分におつりが返ってきました。なんで、そんなコインがあったのか、そんなことは分かりません。でも、旅先から、さらにまた旅に飛び立ったようで、すこしうれしくなりました。

外国からの小銭、後から、どこかの札所で賽銭になっていきました。賽銭に国境はありません……。



だんだんに夜が明けていきました。街灯も少ない足摺岬からの道も、周りの様子が見えるようになってきます。いよいよ本格的に第三期の始まりを実感する時間です。疲れと眠気で僕の頭は相変わらずボケボケだけど、それでも、太陽の光を浴びるとうれしくなってきました。

薄暗い中でも僕の歩いている道が「サニーロード」と呼ばれるものであることは目に入っていました。明るくなりかけの標識を見て、僕が夜中のうちに約二十八キロを歩いていたことを知りました。いつの間にか歩いているモンなんですねえ……。などと考えながら、あ、その道が名づけられる由来が明確に分かりました。正式には「国道三二一号線」だと思われます。そして、「三」だから「サ」、「二」だから「ニ」、「一」だから「イ」となり、合わせたら「サニイ」になるんですね。ぼけた頭で、必要以上に納得してしまいました。

ダジャレって好きです。何か言うたびに「おやじギャグ」とも言われますが、それでもいいんです。国語的なセンスで考えれば、それは掛け言葉なんです。昔からの日本の伝統文化なんです。頭を使わなければできない高等技術なんです。……いや、分かっています。僕のユーモアセンスの欠如が救いようのないダジャレ発生の原因になっています。でも、努力は認めてください……。……。





鯉や鮪は泳ぎ続けていないと死んでしまうんだと聞いたことがあります。じゃ、眠らないのかというところでなく、泳ぎながら眠っているみたいです。器用なモンです。人間が同じようなことをしようとしても無理です。少なくとも僕には無理です。バイクでは走りながら眠ってしまったこともあるし、信号待ちをしながらボタンと倒れたこともありますが……。

歩き遍路の最中といえどもそれは例外ではなく、僕はとにかく眠たくなる人間みたいです。このときも夜間ウォークをしており、いつの間にやら道の真ん中を歩くこともしていました。フラフラしている自分の感覚がなんとなく分かり、これはイカンと思いながらも打つ手がなく、結局ヨレヨレの状態で進んでいくわけです。

昼間、普通に起きていても眠っているように見えてしまう僕が目だから、眠くなつた時の僕が目なんか、発見するのも難しくなってしまうはずです。なのに、鯉さんたちは、カッと目を見開いてこれでもかと泳ぎ続けるんです。体の三分の一くらいの大きさまで目を開いてしまう鯉が道端にいるのを見たときには、感動して僕の間もニミリくらいは大きくなったかもしれない。そして、居眠り注意を呼びかけてくれました。さすがは鯉です。

どんな方法でもいいんだと思います。注目してもらえらること、その役割を果たすことが肝心なことなんだと思います。



こっち側とあっち側、何だかよく分からないけど、明らかに違う世界が存在しています。ボーっともやもや漠然と違う世界です。あっち側ということは彼方の岸、彼岸ということになります。インドでは聖なるドブとして有名なガンガーだったら、あっち側の岸には人の気配が全くありません。最大の聖地と呼ばれるヴァラナシの様子です。こっち側では人々が洗濯をし、体を洗い、身を清め、死体を流し、ウンコをし、そして、うがいをします。修行僧から貧乏旅行者まで、いろんな人がいろんな思いをもって様々なことをするのが、こっちの岸でのことです。小舟に乗せてもらってあっち側へ様子を見に行ったら、ホント何もありませんでした。あっち側、彼方の地、彼岸……、そんな名前をもつ花、彼岸花。誰がそんな名前をつけたんでしょう。ワサワサとした草の中でも凛として咲いている姿は、何ものにも揺るがない芯の強さを感じさせてくれます。世の無常を知っているんでしょうか。モノクロの世界では分からないけど、赤く輝いていました。

諸行無常……、僕はそんなことを理解できずに生きています。そりゃ、言葉は分かるけど、実感として分かるほどに立派な人間じゃありません。お四国という輪廻を巡りながら、まだまだ修行の身、分からないことだらけです。ま、僕にそれがしっかり理解できてたら、世界がひっくり返りそうですけどね……。



ビリビリしびれる。



原子力って人類にとってプラスなんだろうか。ものすごい電力を生み出すこと、やるなあ、って感じです。まさに核の平和利用です。平和なときに平和な電気が生まれてくることは、すばらしいことだと思います。じゃ、その平和が崩れたら……、悲劇が待っています。そんな確率は低いとも思うけど、ゼロパーセントじゃないんですよ。チェルノブイリの事故だって起こったし、ちよこちよこ事故が起きて二ニュースになっています。そう考えたら、臆病者の僕は原子力発電所のそばには住みたくありません。

牛力って人類にとってプラスなんだろうか。牛が発電するわけじゃないし、めざましい効果は見えないように思います。それでも、可能性ってヤツがあるんです。「牛力による林地等の周年管理システム実証試験」と看板には書かれていました。牛が草を食べることで、下草刈りの労力を軽減しようというもののようです。やるなあ、って感じです。

牛たちは電流の流れる囲いの中でウロウロしていました。電流爆破のプロレスみたいに闘っていたら、もっと下草をたくさん食べるんだらうけどなあ、それに、牛たちがコブラツイストなんかの技を繰り出していたらおもしろいんだけどなあ、とくだらないことを思っていました。

のんびりと世の役に立つ働きができればいいと思います……。





目の前に馬があり、それがクルクル回ることも分かるような情景でした。それなのに僕の頭にはグルングルン縦回転するカゴがイメージされていました。すべて、そこにある小ささがいけないんです。

電気のコードが自分の命の源を求めるべく、ひよろひよると横たわっていました。そのコードが電源にまで届いていたら、小さなメリーゴーランドは回っていたんでしよう。もしも、夜であれば、子どもらを夢の世界へと導いてくれたのかもしれない。でも、僕が見たのは昼、誰もいない場所でのことです。以前、どこかの国で、やっぱり小さい小さい、その時は、観覧車を見ました。グルングルン縦回転して、そこにくっついていた蛍光灯の光をギリギリランふりまいていました。小さな遊具がガッチリ結びついて、僕の頭の中では遊園地になってしまったわけです。

目の前にいながら、ありながら、心でとらえられないことがあります。しばらく前まで関わりのあった人たちが、今、自分の前にいながらも環境が変わったことで、無関係の人になってしまった経験……。目の前にいるのに直接関わることでできない種類の人間になってしまったということ……。僕は、そんな簡単に気持ちの整理をすることができません。不器用なのかもしれないけど、それならそれでいいと思っています。

# 眼洗井戸

故障中の僕の目  
すくしは見えるように  
なるだろう

真実を見極める  
眼よ



2005.9.24.

眼の力。

僕の眼は何を見ているんでしょう。節穴かもしれません。見えるべきものが見えずに、見えなくてもいいものが見えてくることがあります。自動感知センサーが故障している感じです。

学校みたいな視力検査をすると、印を見る以前にどこを指しているのか分かりません。一步前に出て、さらにもう一步前に出て、だんだんに検査可能射程距離圏内に到達です。いつからこんなに視力が落ちたのか……中学の後半くらいからです。原因も単純明快、マンガの見過ぎです。本当だったら勉強のし過ぎといきたいところだけど、あまりにうそがひどいのでそれは無理です。勉強は大きらいでした。今でも勉強はきらいです。特に受験勉強のような機械的のものを覚えるような勉強は拷問にしか感じられません。で、中学生当時は、ひたすらマンガへと逃げていたんです。

視力回復センターなんてものがあって、そこへ通っている友達もいました。僕は……無策でした。ますます視力は落ちてきます。何かできることをしておけばよかったと思っても後の祭りです。今からでもできることがあればやります。お金はかけられないですけれど……。だから、第三十九番札所の井戸水が眼病に効くと知り、とにかくも洗眼してみました。

第三十八番札所から六十キ口弱、久しぶりの札所です。眼の大切さを考えました。



疲れた体には温泉が一番、何よりも幸せな時間がやってきます。最近ではスーパー銭湯などと呼ばれるお風呂屋さんが増えてきて、夜遅くまで大きな浴槽につかって体を癒すことができます。ガイドブックにも載っているような所だから、と油断したのがいけませんでした。

足は棒のようになり、なかなかスピードをあげて歩くことができません。無理しようと思えば走ることもできそうだったけど、弱い心に打ち勝つことができず、結局はガラガラ歩いていました。

第三期歩き遍路は三連休を利用した短期決戦です。だから、そんなに慎重な歩き方をしなくても大丈夫なはずでした。ユースケの葬式に参列してから浜松を発ち、お四国へ着いたのがその日の夜。歩き始めたのは翌朝だから、実際に足を使うのはたったの二日間だけです。二日間だけで壊れてしまうほどに弱い足じゃないし、そんなにハードな道でもありません。でも、なんか疲れます。

チャリダーに変身した時も、始めた一日目や二日目は体が対応せず、非常につらいと感じられます。三日目以降、あとはほとんど同じ感覚で進むことができます。歩き遍路にも同じことが当てはまったのかもしれませんが、歩くことの少ない日常から突然ひたすら歩くだけの生活へ、体がついていきませんでした。

それにしてもあと五分……。営業時刻を調べておくべきでした。



アホが見る豚のケツ……。



写真を撮る時、わざとその構図を考えました。写っている文字は「あほのグラウンド」となっています。

僕の友達で、好きな人間は「アホなヤツ」、きらいな人間は「本当にアホなヤツ」とプロフィールに書いていた人がいます。これはなるほど納得でした。自分のアホ加減を客観的に理解できている人は、そのアホ度を踏まえてアホの姿を披露することが出来ます。自分のアホ加減が分からない人は、救いようのないほどにアホの醜態をさらすことになります。見るに耐えません。

さて、このグラウンドを使用できるのはどんな種類のアホなんでしょう。最低限のルールを守れることが条件になると思います。とすると、ある程度の冷静さを持ち合わせたアホでないとその条件をクリアできません。さらに、グラウンドという環境要因をプラスすると、活動的なアホが望まれているような気がします。「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにや損、損」と評されることもあります。見ているだけだったら損なんです。活動的なアホは得をするということです。

こんなことを考えている人間の方がよっぽどアホみたいだけど、もし僕だったら賢いだけの人間にはなりたくありません。賢くない人間は人間のひがみかもしれないけど、アホ万歳なんです。あ、ここは「あけぼのグラウンド」が正式名称でした……。



流域からは少し外れてしまったかもしれませんが、ま、それはそれで構わないでしょう。近くを歩いているんだから五十歩百歩です。憧れの清流、四万十川の名をもつおにぎりです。

旅路では行く先ごとに何かしらの名産品があります。静岡といえばお茶とみかん、というような感じですね。その場所ならではの収穫物があり、そこでしか味わえないようなおいしさが詰まっています。水や土、空気や気候、様々な要因が折り重なってこそ、オリジナルの風味が誕生するんです。

カヌーに乗ってみたいと思いながら、いまだに経験したことがありません。そして、カヌーにうまく乗れるようになったら、ぜひ四万十川をゆつくりと下ってみたいと夢見ています。上流から下流までずっと川の流れに身を任せて時間を過ごしてみたいんです。歩きの視点とは違う視点で物事を見られそうな気がします。

四万十海苔のおにぎりを自分の口で食べていきます。僕にとっては「食べた」という事実は大きな意味をもちます。何事も経験していなかったら偉そうに語ることができません。実際に経験してこそ思いを込めて語ることができるんです。そう、思いを込めて語ります。……コンビニのおにぎりじゃ、感動するほどのすごさは味わえませんでした……。

信

最近では

狸さんにも信ずるものがあるらしい。

さて

人間は……



2005.7.25.

ぽんぽこ。

僕は何をやっているんだろう、と考え直します。たかが狸の置物ごときにたくさん時間を費やしてしまいました。考えた末、思い当たることが浮かんできます。それは、お参りの人たちが僕の横を通るといふ事実があったことです。要するに絵を描いている自分の姿を、「どうだ、カッコいいだろ」とばかりにアピールしなくなってしまったのだと思います。絵が上手なわけでもないのに自信過剰です。ついでにいうと、久々に絵を描いたから、手際よくできなかったということもあったのかもしれませんが。

モデルの狸は笠をかぶり、経本を持っています。僕なんかよりもずっと信仰心が厚いように見えました。首を少しかしげてお参りする姿は、何も考えていない僕とは違う、思慮深さを醸し出しています。第四十番札所の狸です。

人が心の支えにするモノにはいくつかあると思います。世間一般に広く支持されているのが宗教というモノに当たるわけです。特に世界三大宗教は、誰にでも門戸を開いていて寛容さがあります。信じるか信じないかは個人の自由です。信じた時にどれだけ信じ抜くことができるか、そこに信仰心が見て取れます。僕はお経を読んでお四国を回っていても、強い信仰心はありません。逆に、僕が一番信じているのは何か考えても答えは出てきません。あるがままに物事を受け止めて生きていくだけです。



その眼に映るものは……。



ものすごく大変なものを見てしまった、異様なものを見てしまったような感じでした。何よりもその眼……得体の知れないものが宿っていました。

僕の前に現れた像は、激しく何かを訴えてきました。人の命というものを感じ、自分の感覚が研ぎ澄まされていたことにも何か原因があったのかもしれませんが。本来ならいるべき人がいない、本来ならあるべき所がない……、そんな違和感を体が敏感に察知していたようにも思います。

世の中には、物理的に見えてはいけないモノが見えてしまう人がいるみたいです。あの世のモノたちを近くに感じる人たちです。僕にはそんなセンスがありません。僕に見えるのは、物理的に目の前にある物です。

左目と右目、様子が全然違いました。左目は非常にきれいで透明感があり、白黒のコントラストがはっきりしています。右目は、よごんだ光にくすんでいます。白があり黒がある、当然そこにあるはずなのに違うんです。対極的な両眼が並んでいました。

逆に考えたら……、くすんだ右目は物理的に見えない物をキャッチする眼なんでしょうか。その眼をもてば、この世を旅立った魂が見えるのでしょうか。もしできるなら、その眼で見つめ、この世へと引き戻したい魂があるのですが……。



お四国は水がきれいでした。それは川であり、海であり、自然の美しさに直結するものです。天気がいいと美しさが際立つて、それを見ているだけで幸せな気分になります。

きれいな水の上に浮いている建物がありました。人間が住んでいるわけじゃないと思います。きっと物置です。魚を捕るための網だったり浮きだったり、生活を支える道具が詰まっているんだと想像しました。もしも、僕が海上の建物に住むことになったら……、毎日お魚さんたちに餌をばらまく人になってしまいます。自分が食べた物を細かくして口から海へと放出するに違いありません。あの、絶えず揺れている感覚の中で普通に生活できるとは思えないんです。

世界のどこかには、水上の家で生まれ育ち、死ぬまでゆらゆらした環境で過ごす人たちもいるんだと聞きます。生活環境には体が適応していくものみたいです。逆に水上の民が陸上で生活を試したら、おかしくなってしまうのかもしれない。僕らが思っている当たり前の生活は、場所によっては全くそうじゃないこともあるってことです。物事を一面だけで考えるのは危険ですね……。

ちよっとだけなら海上倉庫で暮らしてみたいとも思いました。朝、起きて一番に海へドボーンと飛び込んで浮遊感を楽しむんです。ホント、ちよっとだけなら、こんな幸せなことはありません。



アジという魚は味がいいからそんな名前がついたんだと聞いたことがあります。僕にとつてアジを一番に感じられるのは干物です。それで、骨にくつついた、あのペリペリの部分をめくって食べるのが最高にうまいと思える、そんな魚です。他の食べ方としては、刺身がいいですね。透明感のある光に満ちた刺身に醤油をつけて口に運んでモグモグすると、適度な弾力が歯を押し返しつつ細かくなっていきます。アジの味が口中に広がります。

刺身にするのには鮮度が大切です。できる限り食べられる直前まで生きているヤツがおいしいんです。料亭の水槽で泳いでいるヤツらは、人間にとつて都合よくおいしいヤツらを演出します。もしも、夜に家で食べたいと思ったら、夕方くらいに水から揚げられてまな板へ向かうのがいい頃合いになります。その条件をかなえるために、二十四時間営業の魚屋さんがあつたらステキです。

看板には「24時間セルフサービス」と書いてあるようでした。これなら鮮度の高い味を手に入れることができます。……って、どんなシステムなんでしょう。考えようによつては、「自分で捕まえてください」ってことになりませんか……。もしかして、釣り堀でしょうか。何にしてもこのような宣伝文句を考えた人は天才だと思います。発想力が抜群です。発想力が×群の僕とはえらい違いです……。





夢の寝台特急にも乗り慣れた感があります。自分の場所が確保でき、しっかり横になって眠れる列車のステキさが非常にいいんです。それで、眠っている間に僕を浜松まで送り届けてくれるんだから、こんなおいしい話はありません。

一応、まだクビにはならず職をもち、お金をいただいている身です。三連休をつかってお四国へ行くのは、かなり厳しいスケジュールだけど、自主的に四連休にしてみたら自分の席がなくなっている文句は言えません。ただでさえ働きが悪いのに、自分勝手なことなどできるワケがないんです。この寝台列車が浜松駅に停車してくれることに大いなる感謝です。

だんだん外が明るくなってきました。そもそも、僕が乗車した時、この列車は十五分ほど遅れていました。この遅れが広がっていたとすると、僕は仕事に遅刻してしまいそうです。時刻表によれば、六時三十分に浜松駅到着となっています。それでも少し焦る必要があります。仕事が始まる時刻は八時十五分、二時間弱しかつなぎの部分がない状態です。逆に考えると、僕はこの上ないほどに上手な時間の使い方をしているってことです。お四国遍路のためなら自分のもっている力の全てを注げる感じさえました。思いというのはどんな場合でも必要なんです。

何はともあれ、第二期の前半は終了していきます。

再出発に向けて。



第三期後半戦開始……、それは勤務時間終了後すぐに突入していききました。まずは大阪を目指します。大阪から宇和島までの高速バスに乗り込みます。本当はその先、岩松までのチケットが欲しかっただけで、「ない」とのこと。二台目のバスを増発してくれただけでもありがたいし、夜の寝ている間にお四国へ向かい、朝には少なくとも宇和島に着いているんだから贅沢はいえません。

夜中、バスは走り続け、気がついた時にはお四国にいました。宇和島です。一台目のバスに連なるように走ってきた夜の旅もおしまいです。……ん？　そこで挑戦する価値のあることに気づきます。一台目からも乗客が降りている……ということとは、空席が生まれ、僕が乗車できることだって考えられます。一台目が出発する前に係のおっちゃんに交渉です。結果はすんなり成功。「車内補充券」という物を作ってくれました。追加料金は五百十円、お手頃価格です。いそいそと乗り込みました。さすが、この年、ペナントレースを制した球団系列だけのことはあります。

他者との交渉って、ものすごくエネルギーが必要になります。疲れるんです。でも、その壁を乗り越えた時、何かのプラスが自分に訪れることもたくさんあります。ダメで元々……という感覚で、もっと気楽に交渉すればいいんですね。もっとも自分のエネルギーを外向きに発していく必要があるのかもしれない。



一般名詞としてではなく、固有名詞として僕にとっては大きな意味のある名前を目にしました。「とまり木」です。

学生時代から僕がずっと行ってみたい場所がありました。それは屋久島です。屋久島へ行って縄文杉に会いたい、という願いがずっとずっと僕の中で温められていました。初めて行った屋久島、僕はチャリダーとして乗り込みました。だから、ライダーハウスという場所に宿泊することには全く抵抗がありません。テントを張って一泊七百円です。屋内のベッド泊だったら、一千元……、朝食付きは魅力的だけど、僕にとっては七百円のテント泊で充分です。そのライダーハウスには様々な種類の人間が寄り集まっています。とても人間くさい宿という空気を醸し出しています。夜な夜な何かを真剣に語り、宿泊者みんなで餅つきをし、年明けソフトボール大会を行い、みんな仲のいい宿でした。そんな宿の名前が「とまり木」だったんです。思い入れの深い固有名詞なんです。

お四国に同じ名前のお店がありました。屋久島の「とまり木」とは全然関係ないと思います。でも、その名前を見ただけで、僕はうれしくなっていました。難しいことは考えなくてもいいんです。ほんの少し、羽根休めができる「とまり木」のような場所の存在がうれしいんです。ステキな名前に感謝です。





わりと昔から、僕はでんでん虫が好きです。何とも愛嬌のある姿だし、ゆっくりゆっくり進んでいく雰囲気がおなかの奥の方をポカポカさせてくれるような気がします。

ふと、足もとを見たらでんでん虫がいました。小さい小さいでんでん虫でした。お杖を横に並べたら、大きな壁になってしまいくらいの大きさのでんでん虫でした。そいつはちよつとずつ歩いていました。いや、そもそも歩いているという表現は間違いなんでしょうか。進んでいました。

僕はどんな時でも前を向いて進んでいきたいと思っています。もちろん、時々悲しいことがあったり、落ち込んだりすることはあります。でも、そこで立ち止まることがないようにしていきたいと思っています。ほんの少しだけ立ち止まってしまっただけでああ……と、どよどよして、それでまた前を見直します。僕の前には何かあるのか、よく分からないこともかなりたくさんあります。どうも、僕は先のことを見通すのが苦手なんです。行き当たりばったりで、本当にバツタリ倒れてしまいうです。倒れそうになりながら、おっと……と自分を支えながら生きています。見えている先は前です。具体的にはどこなのか分からなくても、とにかく前です。

でんでん虫は前へ前へと進んでいました……。



特別に有名な所ではありません。一般的なバス停です。僕以外のほとんどのの人にとっては何てこともないバス停だと思います。そんなモンです。それぞれ個人の感じ方次第で、人の価値観なんて高くも低くもなるつてことです。

写真や絵の価値観なんて、本当に見事にバラバラなんじゃないかと思えます。だから、僕は自分の価値観に自信をもって写真を撮ります。後から、撮った理由も分からなくなったとしても、それはそれで価値があるはずなんです。僕がこのバス停の写真を撮った理由は……、ここが第三期歩き遍路の前半後半をつなげる場所だったからです。

前半最終日、できれば宇和島まで歩いておきたかったんだけど、もし、それを実行していたら僕は仕事を失ったプータローになっていたと思います。むしろ、その方が幸せだったかもしれないけど、もう少しは働きたいという未練があるから仕方ありません。つなぎつなぎの区切り打ち、お四国を一つの輪につなげていくために前回打ち止めになったバス停までテクテク歩きました。朝早かったので、バスには乗れず、この区間だけ逆打ち遍路です。そしてまた、偶然にもタイミングよくバスが到着したので、その日の逆打ちをバスで順打ちして進み、いよいよ本格的に第三期後半がスタートしました。



古代人だろうが、現代人だろうが関係ないような気がします。いつの時代でも人の感情には普遍性があるんじゃないかと思うんです。特に、命というモノを肌で感じ取った時には、いつでもどこでも誰でも心に波が押し寄せるんじゃないでしょうか。

新しい命がこの世に生まれ出てきた時、やさしくて温かくも力強い波が心の中に広がります。子どもは宝です。これからという時間を体一杯に可能性という光に輝かせます。命が肌を震わせま

す。  
消えゆく命の灯が尽きた時、虚無が冷たく激しい波になって心を砕きます。それがどんな形をとっていたにしても、周りに大打撃を与えます。それが突然のモノであれば、その影響は果てしなく大きく広がるモノになるはずです。

でも、現代人は命を実体のあるモノとしてとらえることが苦手みたいです。命がつくり出して心に起こした波も、いつの間にか忘れ去ってしまいます。だから、現代人には適度に命の存在を思い出させてくれるようなお墓が必要なのかもしれません。どんなお墓がいいのか分かりません。僕としては、自分に少しでもプラスになるようなきっかけをくれるお墓があつたらありがたいと思います。地球よりも重いといわれる命というモノを、少しずつ思い出させてくれるようなお墓があつたらありがたいと思います。





古代人だろうが、現代人だろうが、人間だろうが、ゴジラだろうが関係ないような気がします。……えっ、ゴジラは守備範囲外じゃないですか。ペット霊園の前には墓石が並び、厳かな雰囲気だ漂ってはいるんだけど、何か違和感がありました。亡くなった犬を偲んで犬の像を建てたり、猫を偲んで招き猫の像を建てたり、そこら辺はありそうな気がします。でも、亡くなったゴジラを偲んで……なんて話は聞いたことがありません。

そこにはゴジラの像が立っていました。しかも、二体のゴジラ像です。世の中にはゴジラをペットにしている人がいるんでしょうか。僕の身の回りにはいないんですが……。

僕自身は本格的にペットというモノたちを飼ったことがないので分からないけど、愛情を注いだペットが亡くなったら、それはそれは悲しい思いをするんだと聞いたことがあります。知り合いの家では犬を飼っていて、その家へ行くと必ず僕と遊んでくれるヤツがいます。かわいいヤツです。確かにヤツが亡くなったら悲しく思います。それに、よく考えたら、犬も含めてペットにされるようなモノたちは人間よりも寿命が短いような気がします。ほぼ確実に僕ら人間が彼らの死に向き合うことになるんです。家族の一員として生きてきたモノが亡くなることは悲しいことです。

僕は……悲しい思いをあんまりしたくありません。



そういえば焼津神社にも鳥居があったなあ、などと思い出しました。入り口には鳥居があります。……て、それは神社というモノであって、お寺とは違うんじゃないか……と、一人でボケとツッコミを組み合わせていました。なんだかなあ、寂しい感じです。

僕は第四十一番札所にたどり着いたはずでした。参道と思われるモノが伸びています。向こう側には朱色の山門も見えるような気がします。なのに、入り口にあるのは鳥居なんです。まあ、どうでもいいことです。前へ進んでいくんです。

神様仏様……と、窮地でお願いする言葉に違和感を覚えません。これは僕の間接感覚です。そんななにもそんな言葉を唱えているわけじゃないけど、神様と仏様は似たようなモンであり、どこかが違っていても、別にどうでもいい話なんです。神仏混淆という日本独自のワケの分からん状態によって僕の間接感覚も作り出されただと思います。

とにかく、偉大なモノを尊重しようという気持ちがあります。神様や仏様を直接信じているんじゃないやありません。でも、それが長い人間の中で敬われてきたことは事実です。だから、何かすごいことが含まれているんだろうと思うんです。理屈では説明できないことでも、大切にすべきことがあるんだろうと思っています。これからもいろいろしくお願いします、神様仏様……。

ぬくもり

平面のお大師くんが

ふわふわの帽子をかぶっている

平面ではあるけれども

彼はいつでもほほ笑んでいる

なぜか

あたにかい



2005.10.8

ポイント。

どこの札所へ行っても同じような顔をした人が立っていて、「こちら、本堂」とか「こちら、大師堂」などと案内をしてくれました。僕は勝手に「お大師くん」と名づけていました。

みんな同じような顔をしていたんだけど、この第四十一番札所の彼は少しだけ様子が違いました。何とも温かさうな雰囲気漂わせていたんです。もともと、本体は板きれで、ぺったんこです。そこに丸みを感じ温かさを感じたポイントは、一つ、帽子をかぶっていたということだけが原因です。毛糸の帽子を頭にかぶって、フカフカした感触が僕に伝わってきました。僕自身はチクチクするような気がして毛糸製品は身につけないけど、他の人の姿を見るだけで温かなれるんだから、すごい製品です。恐るべし毛糸。物事には何かしらポイントがあります。そこだけは外せないし、そこを外したら以て異なるものになってしまう場合もあります。僕はよく、「そこだけは……」というところを外して惨めな思いをします。周りからも「他はほとんどいいのに、なんでそこを……」と同情されだります。間が悪いというか、要領が悪いというか、とにかく情けなくなります。僕とは逆にポイントだけを押さえて要領よく社会をわたっていく人もいます。僕はずるいなあ、と思いつつそんな人を見ます。人間的にどっちが上なのか、分かりません。でも、僕は僕のバカさ加減がキライじゃありません。



見えない……。



ある程度、近くに札所が集まっているエリアだなあ、と感じながら歩いていました。心地よく次の札所が現れてくるから、歩くモチベーションを高く保つことができたエリアでした。

さて、次は……と歩きながら、僕は遍路道表示をあてにして探します。ガードレールやら電柱やらに矢印のマークがついていることを当たり前に思うようになっていました。それから、道路標識です。青地に白文字で書かれたヤツです。前方に道路標識発見、確認を急ぎます。何か書かれているけど、イマイチはつきり読み取ることができません。また一段と視力が落ちたのかと、悲しくなります。さらに近づいても文字を読み取ることができません。頭も一段と悪くなっているようです。さらに近づいて……、ダメだこりゃ……とつぶやきました。表面がはがれかけています。寺の名前を知っている者として、かろうじて「仏」「木」「寺」という文字が読めたような気がしました。意味がありません……。

普段仕事をしていると、自分の力のなさに悲しくなります。何かをやろうとしている自分がいるんだけど、それが何の意味もなかったりするんです。いくらやっても無駄な仕事であり、もっとやるべき仕事があるはずなんです。優先順位が分からないんです。何となく気づきつつ、それでも仕事のできず、自己嫌悪です……。一応、自分なりにはやっているつもり僕を認めてください……。



2005.10.8

屋根

幾重にも上に乗り

下を守る

かやぶき

そこには鐘があり

心を響かせる

存続。

ひょえ〜面倒くさい……と思いながら、それでも僕の興味はその方向へ向かってしまいました。絵を描き始めたら重なりの部分を上手に表現できない自分にイライラ感まで上乘せされていきます。どこかのおっちゃん「珍しいよねえ」などと言いながら、パチリと写真を撮って終了です。

夕方になっていいるし、次の札所まで歩くことは無理だし、のんびりと絵を描くことにしました。何層にも何層にも積み重なった茅葺き屋根を持つ鐘楼の姿がとても新鮮に感じられました。今までも、もしかしたらそんな様式のものがあったのかもしれないけど、意識して見たのは初めてのことです。茅葺きの屋根は維持するのにもすぐ金がかかると聞いたことがあります。古くなつた屋根を葺き替えるのにかかる費用と手間は半端じゃないみたいです。それを本堂ならともかく、鐘楼の屋根を維持させるのにはそれなりの熱意がなかったらできないような気がします。

熱意があったら何でもできる……ホントかウソか……。実は僕、これはウソだと思っています。気持ちだけで何でもできるわけではないと思うんです。でも、熱意がなかったら何もできないというのはホントのことでしょう。そして、熱意があったらかなりいろんなことができてしまうこともホントでしょう。可能性を引き出すための熱意、それを大切にしていきたいと思っています。



何事でもひとまず疑ってみるのは僕の思考回路として普段からよく行うことです。疑ってみることで物事の本質を見抜こうとする方法だと思っています。

目の前に現れたのは「きついのは最初だけ」という言葉です。当然、疑いの対象になります。甘い言葉にだまされてはいけません。「きつい」と思いながら登ったのは誰なのでしょう。しかも「最初だけ」そう思ったなんて、アンケートで調査でもしたんでしょうか。何人が登り、何人がそう思ったんでしょう。ただ単に言葉を書いた人がそう思っただけじゃないのでしょうか。さらにガイドブックを見ると、この先には鎖場という表示がされています。疑いはますます深まります。

根性がひねくれていますね……。折れ曲がったらせん階段のようです。いやいや、純粹に疲れていただけなんです。これ以上、精神的ダメージを受けなくなかったです。事前に大変だと思っておけば、後から多少の大変さが現れても「ああ、この程度か」と思うことができます。シヨックアブソーバーってヤツです。実際にこの道、鎖のある所が登場しました。でも、僕が受けた衝撃は微少で済みました。山道も「確かに『きついのは最初だけ』だ」と思えるくらいでした。表示のおかげです。いろいろ考えさせてくれる情報を与えてくれたことに感謝です。





〇〇と煙は高い所が好きなんですが、僕もきらいじゃないです。高い所から見下ろす景色がきれいだと幸せになれるような気がします。だからといって、夕暮れ時に峠のてっぺんにいるという状況は歓迎すべきことではありません。前に進もうが後ろに戻ろうが、坂道を下っていかねばならないからです。これから暗くなるうとしている山道を下るのは精神的につらいものがあります。

というわけで、美しい夕暮れを感じながら、僕はここで夜を明かすことにしました。暗くてよく見えないけど、何やら小屋があります。そこにテントを張り、モソモソと入り込みました。スミマセン、実は見えていました。そこにはお地藏さんが祀られていたんです。でもね、旅の途中で困っている者に助けの手を差し出すのがお地藏さんってモンだと思っんです。これは言い訳でしょうか。お地藏さんと一緒に眠る安心感つても悪くありません。

峠の上に一人だけ……、お地藏さんに見つめられながら眠ると考えた時、少し怖い感じもありました。それは、少しだけです。旅の道中で一番怖いのは人間です。動物だったら、こちら側から攻撃しなければまず大丈夫。僕は怪奇現象には縁のない人間だからこれも大丈夫。何をしてくるか見当もつかない人間が最悪です。それでも、きつとお地藏さんが守ってくれるはず……、安眠です。



峠の上で泊めてくれたお地藏さんは、天候まで僕好みにはしてくれませんでした。もう、メチャクチャ寒くて耐えられなくなっていました。夏に歩き始めた頃を思い出すと、季節が移り変わっていくことを空気が教えてくれます。日頃、建物の中にいることが多くて、微妙な季節の変わり目などは感じられずにいました。でも、テントの中にいると、布一枚を隔てた向こう側は外気なんですよ。肌で感じる季節の移り変わりでした。

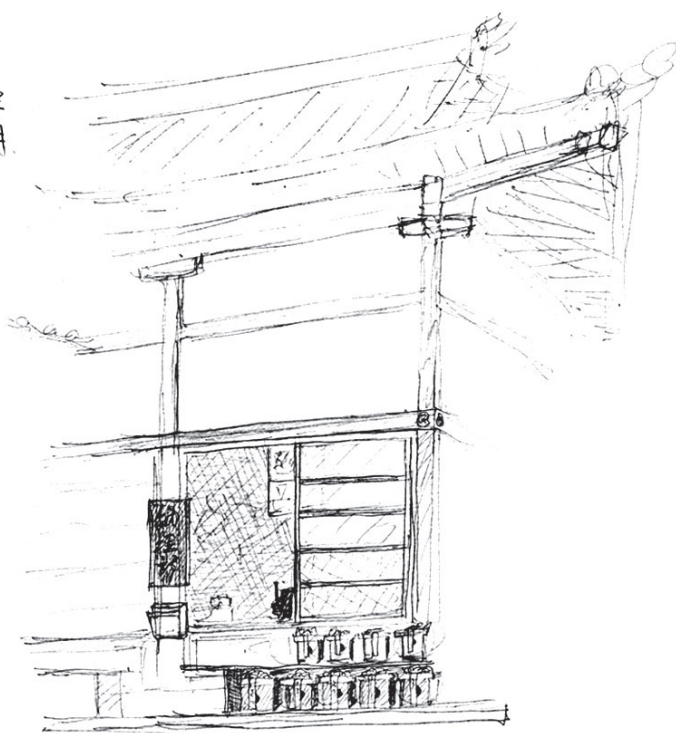
寒くて寒くて、もう寝ていられなくなった僕は歩くことにします。時刻は午前三時半……、僕以外に人間の気配は感じられません。ヘッドライトの光を頼りに歩を進めました。

道の向こう側に自動販売機発見です。温かい飲み物を買います……が選択肢の少ないこと……。夜中以外の時間だと、まだまだ暑い季節なんです。冷たいものばかりなのも仕方ないことです。

またしばらく歩くと、休憩所発見です。そこにはカゴの中にたくさんのみかんがあふれています。小さい小さいサイズのもので、売り物にはならないでしょう。遠慮なくバクバクいただきました。寒い上におなか为空いていたんです。

暗いうちに歩く……、短期決戦の第三期においては有意義に感じられる道でした。三日しか時間がないんだから少しぐらい無理したって平気です。みかんも食べられたい、いい気分です。

早朝



納経所のまんな前で  
おにぎりをお食べする  
途中でお出立した  
お遍路さん  
自分の母親くさいの  
年齢の  
二人姉妹の  
お遍路さん

お遍路さんから  
おにぎりをもらい、  
納経所のまんな前で  
おにぎりをお食べる  
納経所には  
筆が走る。

2005.10.9

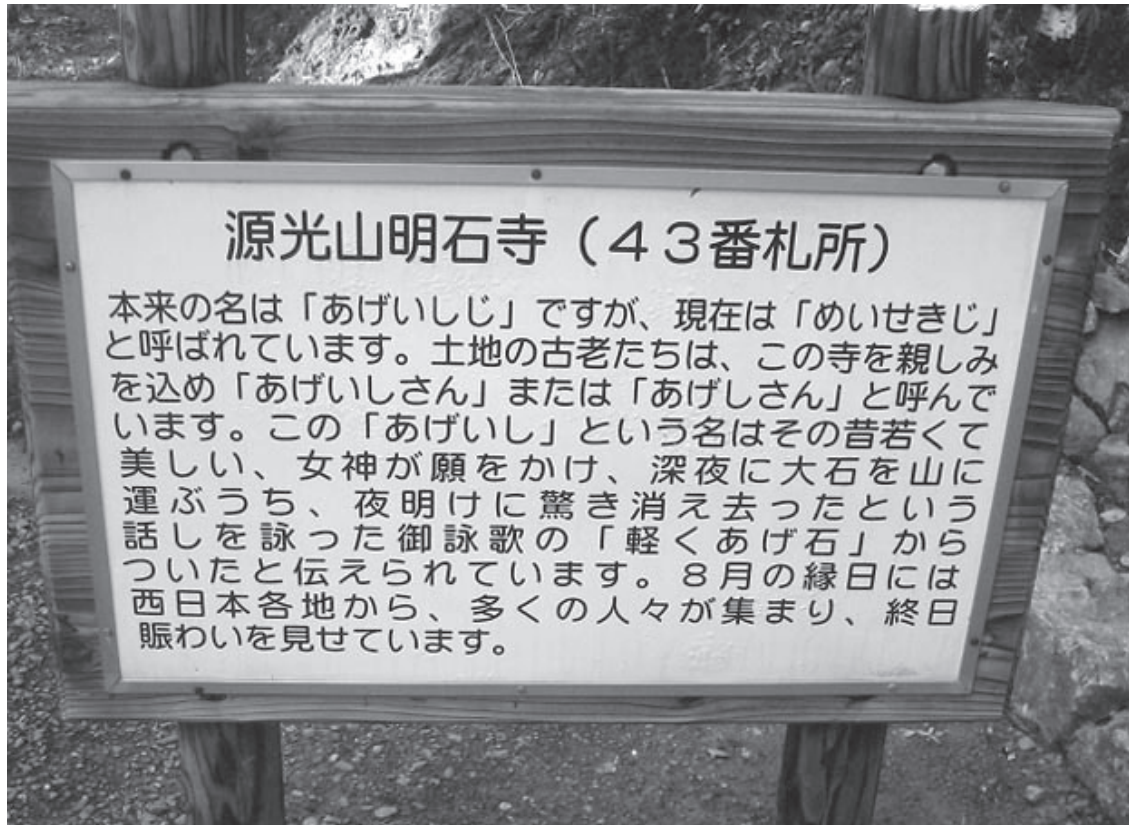
早起きは三文の得。

朝、というよりは夜に歩き始めたおかげで、すがすがしい時間をさわやかに歩くことができました。途中、道を間違えて分からなくなっていた頃、二人のおばちゃん遍路と出会いました。この二人は姉妹で仲良く歩いているということでした。話をしていると何ともおもしろい人たちで、足取りも軽くなる感じがです。あっちだこっちだ言いながら、ノソノソ歩いていきます。

どうやら第四十三番札所に到着です。お参りをしてから納経所の前で一休み……、と思ったら、二人のおばちゃんが「お接待」と言っておにぎりを差し出してくれます。おう……、ついに歩き遍路の人からお接待を受けるようになってしまいました。相当に貧相な雰囲気を出していたんだと思います。僕の辞書に遠慮という言葉はありません。おにぎりはありがたいいただきました。

お接待を受けることに抵抗を感じなくなっている自分がいます。道すがら「お遍路さん！」と声をかけてもらえたらとてもうれしくなります。昔からの風習とはいえ、ありがたいものです。遍路道を行く二人のおばちゃんもあちこちでお接待を受けてきたのかもしれません。そして、おばちゃんから見たら僕の年齢は、ちょうど自分の子どもくらいの年代なんでしょう。気にしてくれたいですね。ありがたいことです。自分の両親のことを思います。親孝行をしなきゃイカンなあ、としみじみ感じさせられました。





## 源光山明石寺（43番札所）

本来の名は「あげいしじ」ですが、現在は「めいせきじ」と呼ばれています。土地の古老たちは、この寺を親しみを込め「あげいしさん」または「あげしさん」と呼んでいます。この「あげいし」という名はその昔若くて美しい、女神が願をかけ、深夜に大石を山に運ぶうち、夜明けに驚き消え去ったという話を詠った御詠歌の「軽くあげ石」からついたと伝えられています。8月の縁日には西日本各地から、多くの人々が集まり、終日賑わいを見せています。

お四国への道として明石海峡大橋なんてモンがあります。僕が下準備のためにライダーとしてお四国へ渡った時にはこの橋を使いました。本州から橋を渡り、淡路島を走り、大鳴門橋を抜けて到着です。明石です。たこ焼きの親戚みたいな明石焼きもあります。「あかし」です。

明るい石と書いてどう読むか、日本の標準時間だつて「あかし」を通っています。それ以外の読み方はイメージできませんでした。ところが、ここでは「あげいし」だったり「めいせき」だったり、読み方の可能性を広げています。やるな「明石」……です。

同じ漢字を書いても、読み方がいくつもあるってのはやっかいなものです。外国籍の人たちが漢字の勉強をしたら、一番いやな種類の壁になるんだと想います。僕ら日本人にしたって、小学生でアホほど漢字の書き取りをやらされてやっと覚えられるモノだと言えます。今となつてはあの書き取りにありがたうというお礼の気持ち絶やすわけにはいきません。手が勝手に漢字を書くほどに宿題を出してくれてありがたう……です。

漢字を完全マスターするにはものすごい努力が必要になります。せめて読めるようにはなりたいモンです。パッと見て瞬間的に内容をイメージできる表意文字である漢字の価値はとても高いものがあります。漢字はすごいんです。漢字はすごいんです……。

表情。



何か、おもしろいと思えることが現れました。と、ちょうどその時、何かの具合で、鏡の中から僕の顔をのぞく自分の顔が見えました。そして愕然としました。表情がない……、そんな顔を見ることは初めてだったかもしれません。

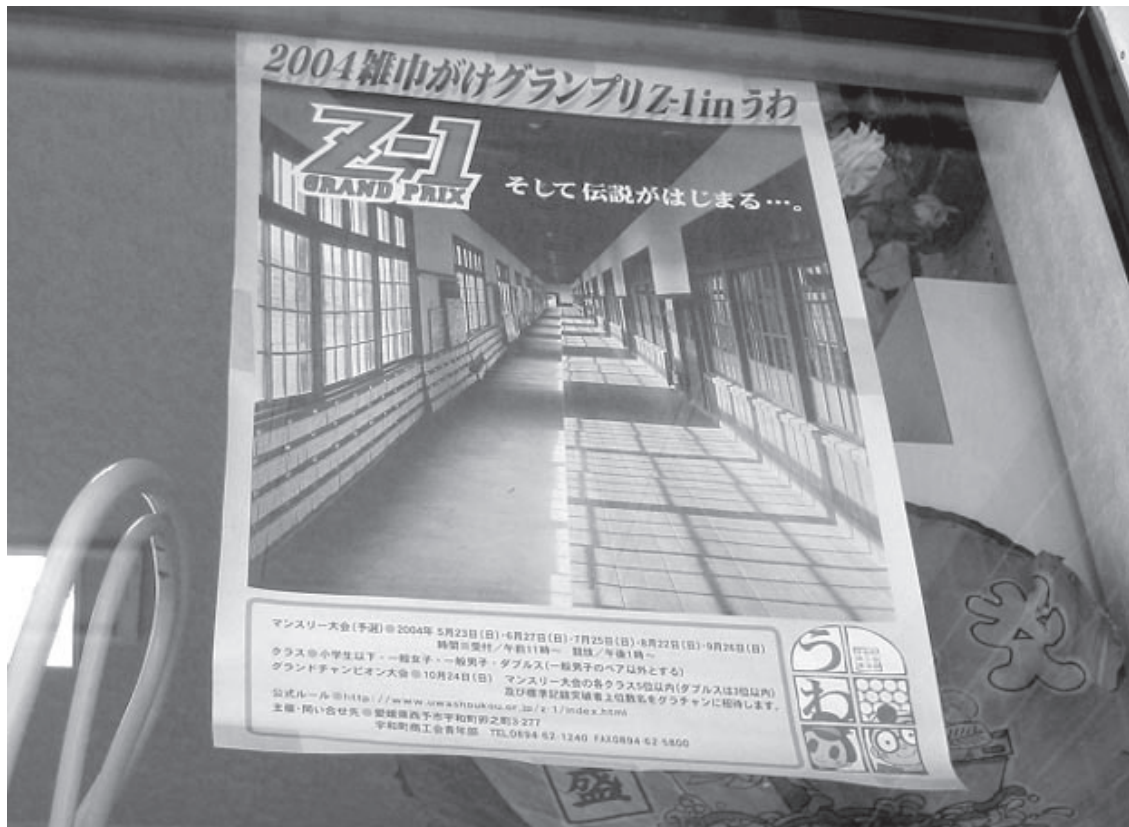
笑顔が好きです。自分のものも、他の人のものも、笑顔が好きです。自然に笑いがこぼれる時って、やさしい幸せが心の中に訪れた時じゃないかって気がします。泣き顔は好きじゃありません。感情が高ぶって、堰を切ったように涙があふれてしまう時です。

僕は、その秋、お四国を目指す直前に涙の洪水にあっていました。自分も周りも、本当に涙の洪水でした。若い命がこの世から去ってしまった悲しみの涙です。やりきれませんでした。でも、後からちよっただけ思っただけです。涙を流すことが貴重なんだということ……。

感情が高ぶり過ぎて、涙を流し過ぎて、僕の心はヘトヘトになっていました。喪失感でいっぱいでした。喜怒哀楽が心に届かなくなっていました。だから、頭で「おもしろい」と思っても、それが体に行き届かなかったんです。感情が一番表現できる顔でさえ反応することができていなかったんです。表情がない頃でした。

僕よりもっと表情を失った人たち……、そんな人たちに豊かな表情が戻ることを願ってやみません。

すばらしきレース哉。



テレビ放送では深夜のことが多いような気がします。僕が高校生の頃、月曜日に眠そうな顔で話すみんなの話題はだいたい前の日の晩のことでした。F1グランプリの様子についてです。ここが勝ったとか、スタートの瞬間がどうだとか、コーナーでクラッシュしていたとか、こと細かく話をしていました。

スピードとしてはそんなに早くはないはずですが、でも、これは白熱するんじゃないかと思わされるポスターを発見しました。すごいです。初めて見ました。世の中にZ1グランプリなどというモノがあるなんて、驚愕です。Z1の「Z」は雑巾の「Z」ということですよね。雑巾がけでレースをしようだなんて、そんなことを考える人はすごいです。僕にはない発想力です。うらやましい限りです。

砂でジャリジャリの体育館はモップがけなんかじゃ効きません。やっぱり雑巾がけです。一列に並んでみんなで隙間を作らないようにひたすら雑巾がけです。かなりしんどい作業です。でも、バスケ部やバレー部に見ると死活問題なわけで、滑らない安全なコート作りのためには絶対に必要な場合もあります。それに、このしんどさは足腰のトレーニングとしての威力も抜群です。だから、先輩後輩構わずにみんなで雑巾がけです。

さあ、体育館であろつと長い廊下であろつと、常に真剣勝負！



わき見したい。



クレオパトラの鼻がほんの少し低かったら世界の歴史は変わったかもしれない、なんて言われます。美人の力はすごいものがあります。人間には元来美を求める心があるだろうと僕は思っています。どんなものに美を感じるか、それは人それぞれかもしれませんが、それぞれの基準や判断で「きれい〜!」とを感じるわけです。もう、本能的なモンで、どうしようもありません。

もし、メチャクチャきれいな人が道端にいたら、そりゃ、思わず目を奪われるんじゃないかと思います。看板に「美人多し」と宣言されたら、必要以上に期待して道端を見てしまいそうです。僕は歩き遍路だから、ゆつくりのスピードで安心してじっくり美人を眺めることができそうです。ラッキーなことです。きれいな人はきれいだし、そんな人は見ているだけでも幸せになります。

美女と野獣と評されるカップルは世の中にたくさんいるようです。これは僕にとってもチャンス、チャンスです。僕は……野獣になりきれしていない変な生き物……くらいの立場だけど、それでも美女と仲良くなれるかもしれない、という希望を持たせてくれるような感じがします。野獣は内面がすぐれていることが条件です。イカン、それは大きな問題です。内側も外側も野獣に近い僕にチャンスは……。

高嶺の花……、この言葉を胸に刻むことにします……。



寝ても覚めても……。

高級ホテルに泊まりたいなんて全然思いません。テントで充分です。テントだったら他の人に何の気兼ねもせずに自分の空間を確保できます。橋の下が大好きです。遍路のマナーとして橋の上で杖をコツコツつかないというものがあります。そこで休む弘法さんが眠れないといけないから、ということです。

昔、弘法さんはあちこちのお宅に泊めてもらいながらお四国行脚をしていたといいます。ところが、何かの拍子に宿が取れなくて、橋の下に寝たそうです。それで有名になったという橋の下には、今、石造りの弘法さんが横になっています。お約束としてはそこで一緒に横になって写真を撮ることになるんだろうけど、その光景を見たらもうイヤになりました。集団で「般若心経」を唱えているようでした。橋の下まで降りてきて「わあ！」と叫びてすぐに立ち去ったおばちゃんもいました。気持ちがよく分かります。集団で何か一つのことをしているのは、日常生活の中だと気持ち悪い光景なのかもしれません。あれじゃ、安眠妨害です。

学校などで集団行動をします。みんなで暮らすためだからルールが必要で、自分勝手は許されないこともあります。みんな一緒であることの大切さです。でも、何より大切なのは、その一員として自分の頭で判断した集団行動なんじゃないかと思いました。





やっぱり地図はいいなあと思います。自分がどこにいてこれからどこへ向かうのか、見通しをはっきりさせるための情報がわざわざ詰まっています。

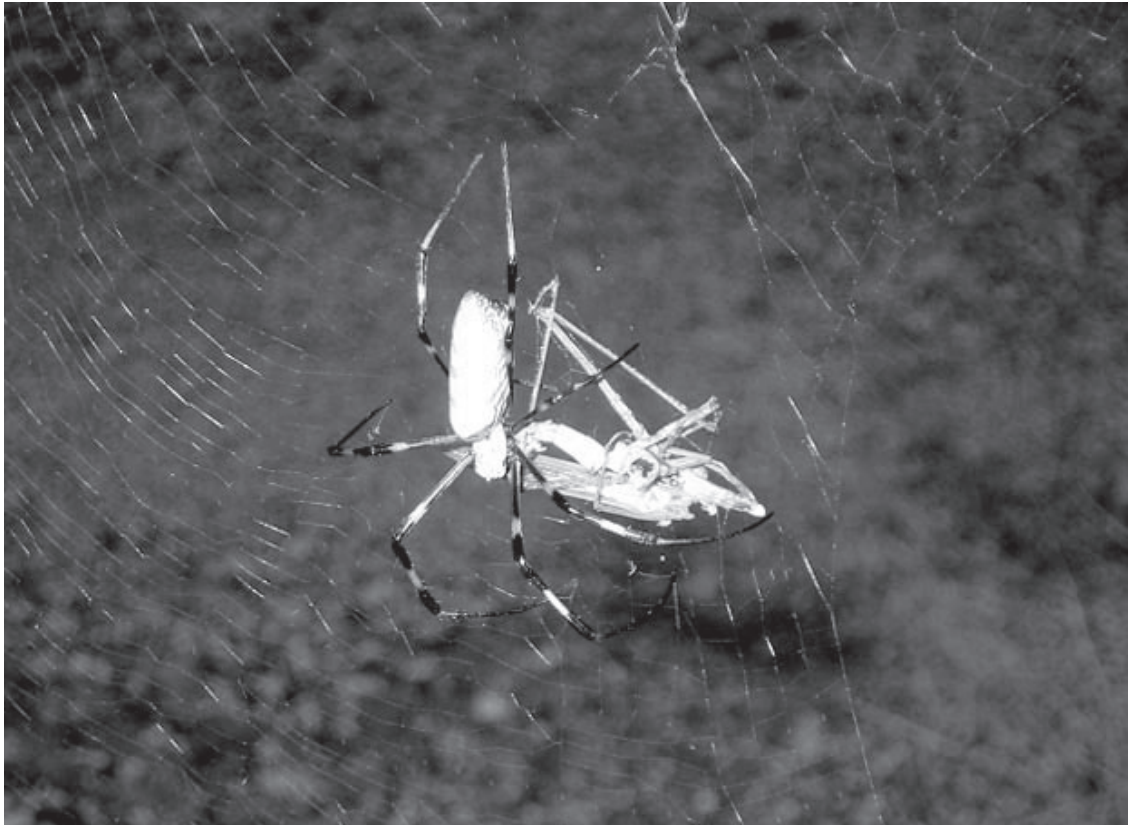
僕はコンビニの前にたたずみました。そのガラスにとっても親切で分かりやすい地図が貼られていたからです。鈍い頭で考えます。分かりやすく、且つ、安全な道はどこかを判断しなければいけません。おもしろみがあったら、さらにいい感じです。時間はもう夕暮れ、徹夜で歩くための情報収集です。ガイドブックによると、第四十三番札所から第四十四番札所までの距離は、約七十里です。そんな距離をかせぐには、必殺ナイトウォークしかありません。

ない知恵を働かせて僕が下した結論は、先に第四十五番の札所を通り、ぐるりと回って第四十四番札所へ向かうという少しだけ逆打ちするコースでした。

どんな結果であろうと、自分で十分に吟味したものなら後悔は少ないと思います。この時、コンビニに地図が貼ってあったことが僕を納得できる判断へと導きました。情報があって、それを自分の中に取り込み、処理をすること……心の中にそれを見極める眼が必要になります。自分で決めたことだから、誰にも文句は言えません。トボトボと夜道を歩きます。



お食事中。



最低でも一つ、僕はパンを荷物の中に忍ばせるようにしていました。いつでもどこでもお店に出会えるわけもなく、出会ったお店が閉店後だったりすることも多いし、そのまま食べられる食糧にありつけないこともあります。車にはガソリン、人間には食糧という燃料が必要なんです。なくなったら動けなくなります。食べ物には常備する必要があるんです。

これからナイトウォークで山登りです。食糧も調達しました。と、思っ歩き始めたら夕食中のモノがありました。ガードレールに陣取っています。充実の時なのでしょう。近寄ってカメラを構えても何の反応もなく、集中しているようでした。何を食しておられたのか分からないけど、他者の命を自分の中に取り込んでいる姿です。クモが何かを食べていました。

お肉屋さんで買う時は「お肉」という商品を手に入れることができます。魚屋さんで買う時は「お刺身」だったりします。そのモノたちに命があった時のことは遠い過去のことになっている商品です。牛を殺したり、鮪を殺したり、命を奪うことをとても残酷だと言うこともあります。その場に立ち会うことの回数が少ないから、自分のことのように感じられません。でも、僕は確実に他者の命をいただいています。クモが何かを食べる姿も、僕らがお肉や魚を食べるのも同じこと……、感謝していただきます。

闇夜の光。

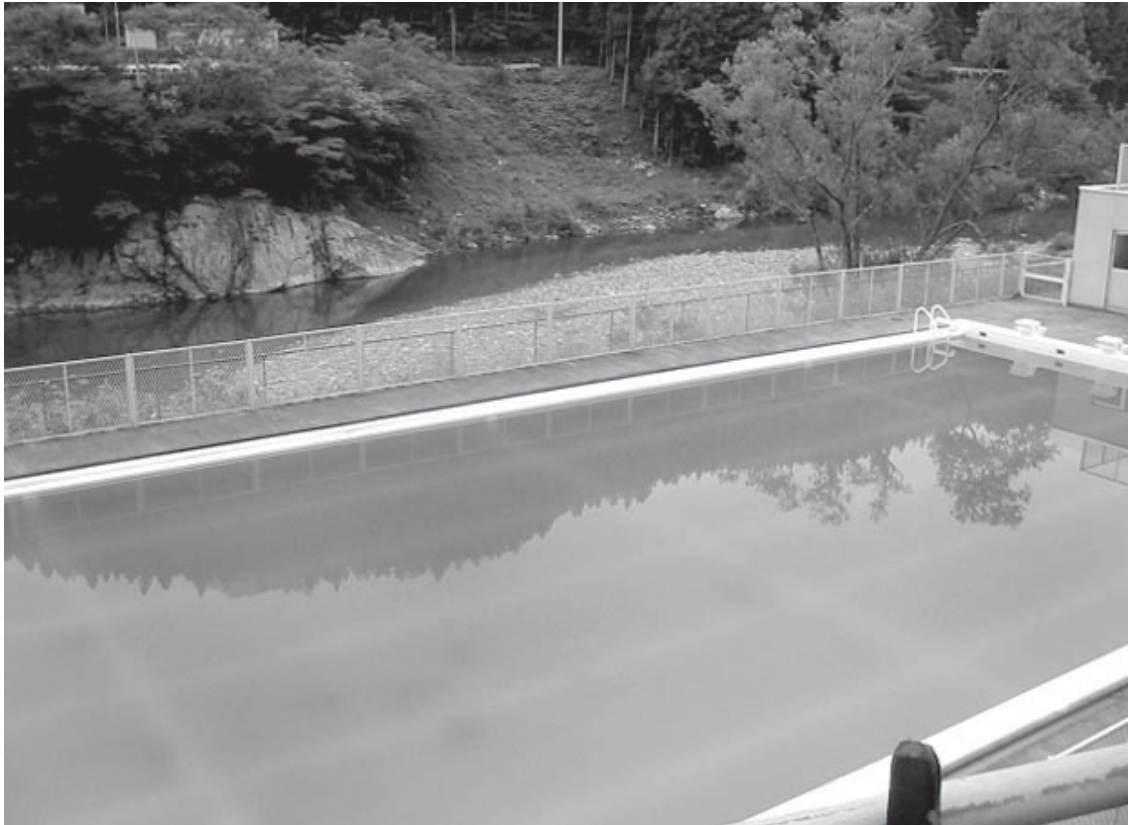


ピカピカ……と光るうちの「ピカ」の時をしっかりねらわなければいけません。工事中の点滅灯です。なかなか難しいモンです。僕のデジカメは鈍くさいので「エイッ」と思った時にシャッターボタンを押しても「カシャッ」というタイミングが合わないんです。何回か挑戦して光のラインを撮影することに成功しました。ま、デジカメだから成功か失敗か、すぐに判断できることが不幸中の幸いといったところです。

光が闇に浮かび上がる、きれいに浮かび上がる……それだけの時間になっていました。山道をひたすら歩き続ける計画です。でも、その道はコンビニの地図で確認したことによると、アスファルトで舗装されているはずだし、危険はそんなに多くないと思われる。つらいのは睡魔との戦いです。夜は眠る時間なのに歩き続けるんだから、もともと無理がある計画なんですよね。もっと自然の摂理に従って生きていきたいモンです。

街中で生きていると、昼なのか夜なのか、分からなくなってしまう時があります。常に明かりがある世界です。不自然な感じがします。本来だったら、もっと生き物として正常な時間の過ごし方をしたいんです。夜を夜として感じられる世の中を不便と感じないような生活に憧れます。

徹夜で歩く人間が夜を感じたいなんて、矛盾だらけですが……。



水遊び、大好きです。とにかく水の中にいられるだけで幸せを感じられます。学校の授業で体育は好きじゃなかったけど、水泳だけはキラリじゃない時間として過ごすことができました。もちろん、その後の授業に関しては眠くなるし大キライな状態になるんですが……。

小学校、中学校と義務教育を受けている期間、夏休みにはプール解放の時がありました。どっちみち夏休みはやることもなくヒマはもてあましていたので、かなりの回数でお世話になったような気がします。高校へ入ったの夏休みは……、勝手に入り込みました。受験をひかえた三年生の夏、勉強をするという名目で学校へ行き、プールに入っていたことを思い出します。何にしてもタダで、お金を払わずに水遊びができることが幸せでした。

夜通し歩いた道のりも、だんだん明るくなっていきます。周りの様子が見えるようになってきました。渓流が水を美しく流しています。所々に淵があり、飛び込んだら魚たちが元気に泳いでいます。なのになぜ、そこにプールがあるのか……。ナンセンス……、と思わざるを得ませんでした。きれいな流れがあるのに、コンクリートで固めた箱の中にわざわざ水道料を払って水をためるなんて、おかしい話です。

両方楽しめて「おいしさ二倍」と考えることにしました。



叱咤激励。



北海道へ行った時、なんて遠い所なんだ、と思いました。かなり近づいてきたと思っても、なぜか北海道はまだまだ遠い所がありました。地図の上では一瞬のうちにたどり着けるんですけどね。「まだまだこれから」なんていわれると、よけいに疲れてしまします。

歩き遍路の旅路……しかも続けて何日か歩いたら、疲れがたまっています。普段なら平気なことでも異常なほどにつらく感じることもあるんです。追い討ちをかけるように露店のおばちゃんが「あと二十分くらいがんばれ」ってなことを言います。あと二十分ずっと坂道ですか……。悲しくなります。

山を歩く坂道だったら、まあいいです。きつとてつぺんがあつて、下り坂があつて平地もあるはずだから……。人生の坂道だったら、ちとつらいものがあります。上り坂があつて、そのまた向こうに上り坂があつて、その向こう側には崖があるのかもしれない。先のことが分からないのが人生なんでしょう。僕なんか、自分の人生なんかホントに分かりません。それでも「まだまだこれから」です。だからといって「がんばれ」って言われると、プレッシャーにもなります。のんびりのんびりでいいかなあ、って思います。坂道を少しずつでも前に進んでいけたらいいと思うんです。

力を抜いて、ボチボチいきましようよ……。

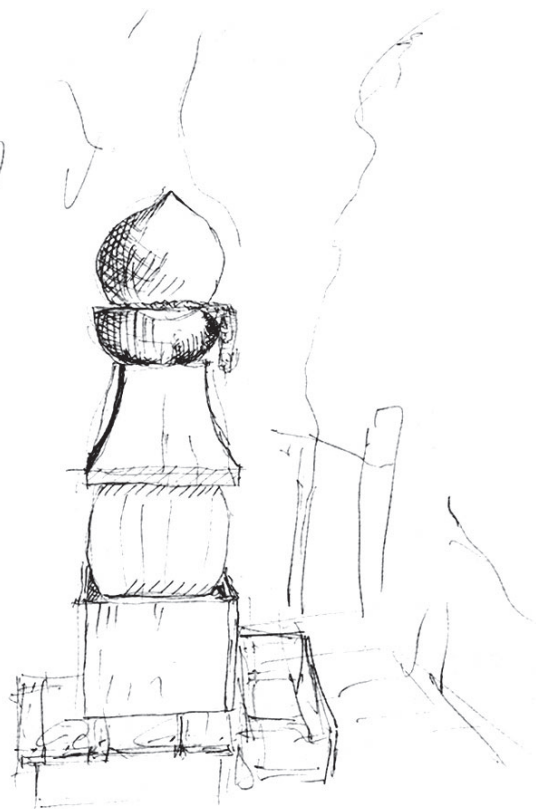


しんどい山道を登り続けて、さらにそこから石段が続くというのが山寺のセオリーみたいです。おばちゃんに、あと二十分くらいだと言われてから、確かにそのくらいの時間経った頃だと思っています。ようやく山門が姿を現しました。苔むした石垣、うつそうと茂る木々、静けさを含んだ山の空気……、ようやくたどり着いたという気分を盛り上げてくれます。

ようやくたどり着いたんです。夜の山道を歩き続けて……時々休憩をしながら……ナイトウォークをした結果です。一応は予定通りといった具合になりました。第四十五番札所から攻略、第四十四番札所へと向かうつもりです。夜に歩いたことでこの計画が達成できるというモノです。急ぎたくないのに急がなきゃいけない僕の歩き遍路……、とても寂しい感じがします。

いつも思うんです。期限のない旅をしてみたいんです。どこまでも思う存分に自分がやりたいことをやり尽くす……すぐく贅沢なことなんだと思います。でも、僕は僕の気持ちを抑えつけながら、一つ一つの旅にピリオドを打ちながら、次への期待をふくらませながら……、日常の世界へと戻る旅人です。果てなき旅ができる日がくるのでしょうか。そして、それは僕にとって幸せなことなんのでしょうか。今は何も見えません。それが見えた時、僕が現状に納得できるようになっていた……と思います。





高所レ

何とめと煙は高い所が好き  
なんせうワビ  
偉い人が  
高い所で  
悟りを開くことも……  
ありそうだ

2010.10.10

緑深き山門。

本堂の隣にはしごが架かっています。十メートルくらいなんでしょう。結構な高さがあるように見えました。で、はしごがあるからには上っておかなくヤカンわけです。上りやすいはしごとはいえません。無骨な感じで僕らを試すようにドカンとしているだけでした。

悟りの場というのは、ある程度神聖感に包まれた雰囲気が必要になるみたいです。人々がチャラチャラ遊びにきてヒヤヒヤというような場所じゃ、ありがたみがありません。地面からの高さがあるとムードが出ます。神聖感をもたせるには小道具があると、さらに雰囲気盛り上がります。お杖の先ちよのように形を細工した削り物が供えてありました。これで舞台としては完璧です。

はしごを上ると厳かな空気の中で「ああ、このような神聖な場で悟りを開くんだなあ」なんてことをしみじみ考えます。もし、はしごを取り去ったら、下界との接点がなくなるし無心に高尚なことに思いを馳せることができそうです。環境が人に与える影響は馬鹿にできません。自分オリジナルの考え方をしているつもりでも、間違いなくどこかに外部から得た何かが影響しているはずです。人間とは体外情報型の生き物であり、それは変えようのない事実です。できる限り外部との接点を絶ち、自己を見つめます。そんな覚悟、僕にはありません。はしごは置いてください。



へんそこから……ありがとう。

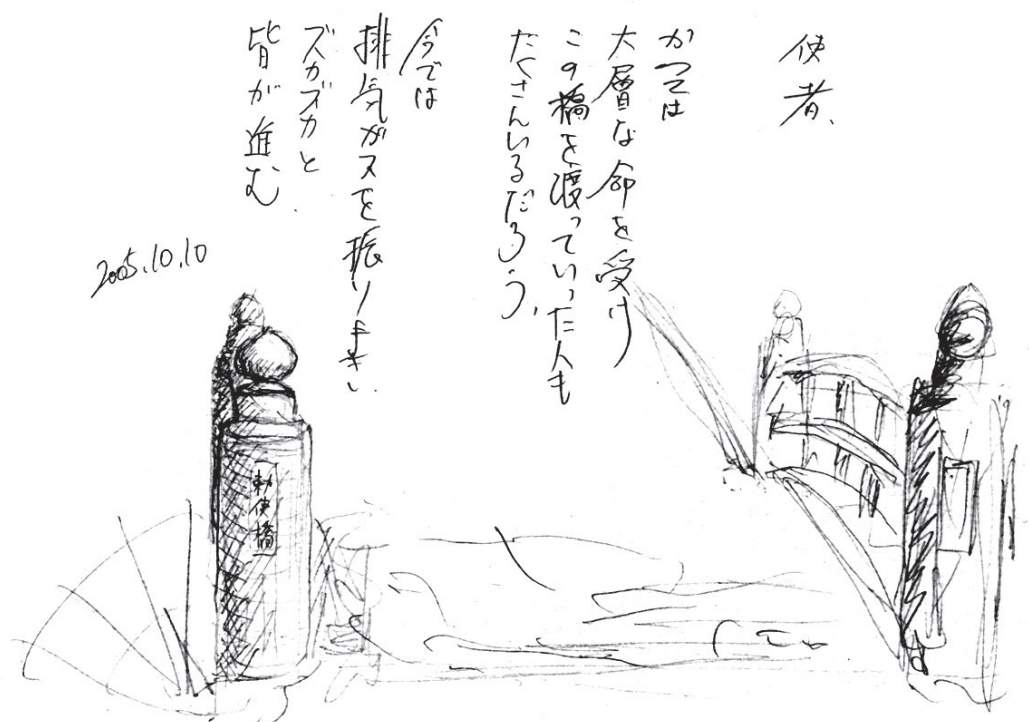


ライトの光が弱くて……かつて、チャリンコごと溝の中に落っこちたことがあります。ライトって大切なんだと実感しました。ライトの光がついていなくて……、かつて、向こうから走ってくる二人乗りチャリンコが見えずに正面衝突したことがあります。ライトって大切なんだと再認識しました。結果……ライトは自分の道を照らすことと、自分の存在に気づいてもらうこと……その二つの役割があることが証明されたことになります。

トンネルの中、歩き遍路にとっては生き地獄のような場所です。ビュンビュンと走り去る車、こんなに怖いことはありません。せめて自分がいることをアピールしておきたいものです。「トンネル内の交通安全のため、反射タスキ・タックルを、ご使用ください。」とあります。ぜひとも使わせていただきます。トンネル入り口にこんなステキなトホダーをいたわる道具が置かれているなんて、さすがは聖地お四国です。使い終わったら向こう側に返却箱完備です。至れり尽くせりです。

場所によって、常識は変わるみたいです。お四国ではトホダーに対する扱いがやさしくて涙が出そうでした。だいたいの場所ではトホダーやチャリダーは邪魔者として扱われるだけで、車が一番強い状況です。いじめの構造です。でも、弱い物を守る必要があります。守ってください。いじめないでください。『ロシク！』

使者の橋。



第四十五番札所から打ち戻って第四十四番、そこそ順調に進むことができました。迎えてくれたのは僕には恐れ多い感じのする橋です。何といっても「勅使橋」って名前がついています。

国語の授業で「勅撰和歌集」などという言葉習った記憶があります。偉い人が「作れえ〜！」と言って、「ははあ〜！」と作った和歌集だったように思います。そこら辺にあるただの和歌集とは格が違うモンのはずです。内容的にどこが違うのか、今は触れずにそっとしておきます。どう違うんでしょうねえ……。

僕は「勅」という文字を見るとホントかウソかわからないけど、近寄ってはいけない空気を感じます。近寄ってもろくなことがないような空気がプンプン漂っているんです。僕らとは違う世界に生きる人々に関わりのある文字の気配がします。「勅使橋」ということは、そんなに気安く利用してはいけないんじゃないかという気にもなるけど……僕の目の前には車が……橋を渡っていききました。そんなモンなんですね。

結局、猫に小判ってことです。おまけに今は昔つても関わります。かつては大切にされていた物事でも、現代に生きる庶民である僕には実質的な価値は限りなくゼロパーセントになるんです。そこに書かれた文字に、何となく異質なモノを感じて、多少、僕の心に引つ掛かったけど、ただそれだけ……以上、おしまいです。



小さい頃、家が揺れて怖い思いをした覚えがあります。実家の二階は、誰かが階段を上ってくると揺れていました。もしかしたら、そう感じただけなのかもしれないけど、それなりに大きく揺れていました。家の構造に問題があるようにも考えられます。木造建築、大黒柱なし、ふすま多し、壁少なし、後付けの二階部分あり……、ろくなモンじゃありません。大きな地震がきたらあつという間に倒壊するはずです。

世界最古の木造建築なんて呼ばれる建物もあります。何世紀にもわたって雨や風を受け、また、数々の戦乱をくぐり抜けていながら現存するんだからすごいモンです。作り上げた人たちの技術の高さが光っています。今に伝わる宮大工の腕というものは半端じゃありません。

木は柔軟に立ち続けます。本来の姿だと思います。そして、本来の資質を保ちながら建物という物に形だけを変えたなら、その建物は柔軟性も保っているんだと思います。人間でも同じ、元来もっている資質を伸ばすことで成長したなら、揺るぎない人生を送ることができそうです。でも、もって生まれた資質を途中でねじ曲げられたとしたら、その歪みは必ずどこかで露呈されます。今、僕の中では、自分探しが依然として行われています。本当の自分とは何者なのか、さらに歩き続け、見つけ出したいです。





いよいよ歩き遍路第三期も終わりに近づいてきました。三連休という活用できる時間に大きな制限のある第三期です。とにかく最短ルートを探し、夜通し歩き、がむしゃらに前へ進むしかありませんでした。急がざるを得ない追い詰められた状況です。

そして、振り返る現在地点……山中です。公共交通機関など当てにできない山中です。自分の足で急ぎます。日が傾きかけている山道、ひよいと視線を移して得体の知れない思いにとりつかれました。木の根っこがゴロゴロと重なっています。色も抜け落ち、カスカスな表面……。ある光景が僕の頭の中に浮かび上がりました。それはカンボジア、キリングフィールドと呼ばれる所です。人間の骸骨が山となり積み重なっていました。僕をバイクの後ろに乗せて案内した運ちゃん、当たり前のような顔をしています。僕も当たり前のように骸骨を手にとっていました。誰のものとも分らない頭蓋骨を手の平に乗せていました。

山の中で僕だけに訪れた重なり合う光景……。周りには誰もいません。いないはず。いないはず。いないはず……。

僕が抱いた思いは死者との対話にも通じます。言葉ではない、何モノかによる意思の伝達が、行われていたのかもしれない。靈感というモノが宿らない僕、そんな僕を飛び越えて、いろんなモノたちが交流していたんでしょうか。不思議な山道でした。



大相撲が好きです。自分は口先だけの批評をしながら、テレビ画面を見つめていたりします。

大相撲が好きでした。ばーちゃんのことです。僕や弟が他の番組を見たくても「男の子は相撲を見にヤカン」と言っただけでなかなか譲ってくれませんでした。一番理解できなかったのが、取り組みと取り組みの間に何度もくり返される行動です。塩をまき、にらみ合い、また戻って塩をまき……。その時間だけでも、とチャネルを変えたりします。せつかちなばーちゃんは「もう始まる、もう始まる」と、すぐにチャネルを戻します。変な時間でした。

真剣に取り組まれる肉体のぶつかり合い、それを小さい頃からやっていたらどんな風になるんでしょう。学校の中に土俵があつて毎日のように相撲をやっていたとしたら、その楽しさが体にしみていくんでしょうか。僕が通っていた学校で土俵がある所は知らないけど、ここにはありました。ばーちゃんとチャネル争いをしながら見ていただけの相撲でも好きになつてしまう相撲を、実際に土俵上でやっていたとしたら、その子どもは当然のことのように相撲好きになつていきそうです。

子どもの頃のことは、何を取ってもいい思い出になります。楽しいことも苦しいことも、いろんなことを自分の体で経験する子どもたちに幸あれ……。





多数派。

数の暴力、多勢に無勢、みんなで渡れば怖くない……、人間って仲間を求めるんでしょうね。集団になった時の強さはグングン育っていくように思います。

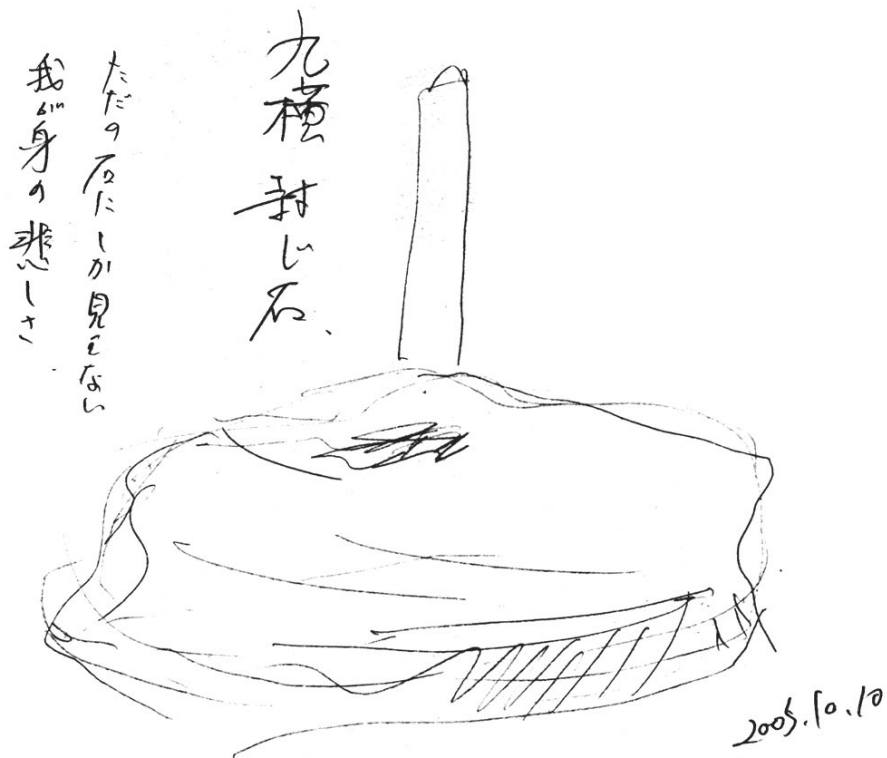
僕は急いでいるんです。翌日の朝には職場にいないと、それ以後の居場所がなくなってしまうんです。だから、納経所にたくさんの人が押し寄せて山のような納経帳が形成されてしまうことが致命的なんです。そんな時に限って僕の目の前にはたくさんの方が現れるから不思議です。しかも、おそろいの白衣に身を包み、声をそろえて読経しています。ああ無情……。

自分が必要以上に強気になっていること、じっくり考えたら誰にでもあるんじゃないかと思います。もちろん、一人だけでも妙に強い人もいるけど、それは例外です。集団心理の恐ろしさです。自分の頭がほとんど働いていなくても、裏づけのない安心感のうちに、いつの間にやら一つの方向に向かっていくことだってあります。いつの間にか世の常識になっていることに対して、僕は疑いの眼を向ける必要がある……こともあるように考えています。美しい言葉に踊らされていたら、あらぬ方向へと連れ去られている自分の姿がおぼろげながら想像できるからです。

個が手を結び集団になった時、その輪の中にいない者はつらい空気を味わいます。とにかく早くしてくれえ、心の叫びです。



やるなあ。



焦る心を抑えながらお参りをし、御朱印をいただき、はたと視線を移すと「九黄封じ石」なるモノが鎮座していました。ちよつとラッキーな出会いです。自分で勝手に決めてしまったルールにしばられている僕は、急いでいるにも関わらず、何かの絵をスケッチブックに収めていかなければいけないと考えていたんです。そして、ドカーンと堂々としたモノは、ある程度描きやすいモノに見えました。

何かを封じたモノというと、悪霊やら化け物やら、魑魅魍魎としたモノたちを押さえつけている画像が頭の中に浮かび上がります。「九黄」を封じる石……どんな恐ろしいモノたちを封じているのか……答えは裏側に書いてありました。「九つの災難」のこのことです。やはり偉大なる知恵が集められていることを感じました。封じるモノはどこかを漂う他者ではなく、自分自身に関係のあるモノだということなんです。「不治の病」であったり「暴力非行」であったり「淫酒」であったり……、自分の身から出る悪しきモノたちです。言い換えれば自分の弱さに発するモノたちとなります。何がつらいって、自分と戦うことほどつらいことはありません。全ての手の内がばれています。逃げることも不可能です。

結局、自分のルールからも逃げられず、スケッチブックには手抜き作品が残ることになってしまいました。

これにて打ち止め。



にここに顔の遍路グループとすれ違いました。「がんばれー」なんて声をかけてくれた人もいました。何の義務があるわけでもないのに、僕は夕日と競争するかのようには走っていました。

第四十六番札所から第四十七番札所までは約一キロ、かなりの近距離です。それまで歩いてきた道のりを考えたら余裕の近距離です。だからこそ何とかしたかったんです。本当だったら第四十八番まで到達できるとベターだったんだけど、さすがにそれは無理、奥歯に加速装置のスイッチぐらいついていないと間に合いません。射程距離としては一キロほどが限界でした。たかが三日間の短期決戦であっても、ほとんど休みなしで歩き続けている足には大きな負担がかかっています。ヨタヨタしていました。それでも、ラストスパートだと思って自分に鞭打ち走ります。

余分なことは全部頭の外に吐き出されていました。夏の盛りにはーちゃんが、秋の手前にユースケが……と、僕の頭の中は命のあり方とでもいうべきモノでいっぱいでした。それが、いつの間にか、それらのモノと共存することができるようになっていたんです。決して忘れ去ることはできません。いくら忘れっぽい僕でも命に関わる衝撃的な思いは、ずっしりと染みついています。余分なことだけが吐き出され、より清らかなモノとして残りました。そして、夕暮れの中に第四十七番札所が現れました。

曲線の美。



曲線

誰がこんなデザインをしたのか  
何とも言わね  
滑らかな美しさ  
夕暮れ時に  
静かにたたずむ  
その山門よ

2005.10.10

なんて美しいんだろう、と思いました。どこにでもあるような屋根なのかもしれません。でも、滑らかな曲線がズドンと僕の中に飛び込んできたんです。

猪突猛進なんて言葉もあるけど、まっすぐであることは難しくないし、分かりやすいことです。妥協を許さず前を見て、とにかく突き進む感じです。それが曲線になると、同じような分かりやすさなんて消え去ってしまいます。曲がり方の具合だとか、前後左右どのくらい曲がるのか、言葉で説明できずに「ああ、そこをこうして、あんな具合に……あ、違う！……あ、そうそう」なんて、指示語の嵐になってしまいくらいです。運動場のラインを引く時に、トラックを歪めて書くことなら僕に任せてください。

直線と比べると遙かにややこしい存在である曲線だけど、自然の中に入ると、曲線的なモノの方が多くて、直線的なモノはものすごい違和感に包まれてしまします。……ということは、曲線美を求める心はごくごく当たり前だし自然な感情になるはずです。世の中、直線的なモノが多すぎるのかもしれませんが。人間が生み出した価値観は「まっすぐこそ正義」に偏りすぎています。まっすぐに生きていくことはとても大切なことだとは思いますが、緩やかに曲がりながら、「なんとなく」まっすぐに生きていくことも大切なんじゃないかと思ってしまいました。



清められた庭。



時は夕暮れ、一日が終わろうとしていました。境内も掃き清められて夜を、明日を待ちます。お寺の掃除といってイメージするのは、長い廊下をテケテケテケーと雑巾がけしていく小坊主の姿です。日々、廊下が磨き上げられていく感じがします。

日本の中では庭園がもつ意味合いも忘れられない存在で、建物とセットになっていることもあります。さらに、遠くの景色まで取り込んでしまう借景ともなると、凡人の僕にはとても手の及ばない世界です。計算し尽くされているんだからすごいと思います。遙かな山に雨が降り、静かな流れとなって平地に下り、全てを抱く海へと注ぐ、そんなストーリーが日本庭園には流れます。本物の水を使わずに流れを作り出す工夫なんかも奥ゆかしくてかっこいい感じがします。第四十七番札所の庭も、僕にはさざ波が揺れる海に見えました。寄せては返す、永遠の営みです。

モノが何に見えるのか、人によって違うはずです。同じモノを見ても印象が全然違ったりすることはよくあります。この日の僕にとつて、夕暮れ時は歩き遍路の区切りの時になります。三日間という短い区切りをつけて、お四国を去るタイムリミットです。そこへ静かに揺れるさざ波が訪れました。心の平静さに少しだけ波が立つんです。そこで区切る充実感かもしれません。

時は夕暮れ、区切りの三日間が終わろうとしていました。

信じられなかった。僕は友人と一緒に晩御飯を食べに出歩いていた。そして、携帯電話。前任校でお世話になった主任からだった。主任の声は確かに聞こえていた。言葉の上では何を言っているのか、当然理解できる。日本語だ。でも、内容が自分の中に吸収されない感じがする。あの時と同じだ。第八番札所で鳴り響いた携帯電話、そこから聞こえる父の声……あの時と同じだ……人の命が尽きたことを伝える言葉が耳の奥へポロポロこぼれていった。

夏、ばーちゃんの命の灯が消えた。それから僕の心は不安定になった。それでも、お四国遍路を歩くことで少し心が癒されたような気がしていた。癒されつつあった心が再び崩壊した。今度は教え子の死だった。ほんの何ヶ月前まで中学生だったユースケが亡くなったという。交通事故。コンクリートミキサー車に巻き込まれたらしい。事故現場は僕もよく通る交差点だった。

通夜に行くと、大勢の学生がそこを埋め尽くしていた。当然ながら僕の教え子たちの顔も多い。みんな来ているんだと目で追いつつ、僕は彼らにどんな表情を向けたらいいのか分からなかった。とにかく焼香を、と思いつく前へ進んだ。だんだん僕の番が近づいてくる。棺に入ったユースケの顔が見えた。白い。きれいな顔だった。僕の目はかすんでくる。焼香。遺影がぼやける。「ありがとうございました」というお母さんの声が聞こえた。もう、耐えられなかった。もう、外聞も関係なく泣いた。後から後から涙が出てきて止まらない。その場を離れて、物陰に隠れてしばらく泣き続けた。

あの学年の子らには、本当によく泣かされた。心が震える機会がたくさんあった。体育大会で泣かされ、合唱コンクールで泣かされ、日頃の生活指導で泣かされ、卒業式でも泣かされた。ほとんどは感動のあまり、思わずこぼれてしまう涙だった。忙しい日々だったし、大変なことの方が圧倒的に多い生活だった。彼らのエネルギーは尽きることがない。パワー全開である。パワーが悪い方へと向かうとろくなことがない。年頃の子どもたち、やりたいことはたくさんある。仕方がない。逆に、いい方へ向かえばそのパワーは何よりもステキな

ものになる。「中学生ってステキー！」と思わされる場面は……そう頻繁ではないけど……間違はなく僕の心を揺さぶった。僕が一番好きな学校行事は合唱コンクール。強引な力技では引き出せない、響く歌声がホールを包む。三年生、最後の合唱コンクールでは「どれだけ心が震えてもステージ上では泣くな！最後まで歌いきれ！」と子どもには言いながら、僕自身は観客席で大泣きしていた。その涙は歌声とともに卒業式へとつながっていく。校歌を歌い、別れの卒業合唱をする彼らに、涙が止まらなかった。昔からの泣き虫がとことん涙を流していた。

高校生になったユースケはとても充実した毎日を送っていたらしい。そもそも志望校へ入るために彼はものすごい努力を重ねていた。黙々と地道な努力をする時期を経て、高校では様々に花開いていた感じがする。部活動の活躍が中学での顧問の先生にも届いており、僕はその先生の車に乗ってユースケの様子を教えてもらった。彼はバレー部。背は高くない。ボールを扱う体使いも不器用この上ない。そんな彼がリベロのポジションをレギュラーとしてつかみ取ったという。どんなボールへも向かっていくリベロという役割は、努力の成果以外の何ものでもなく、とことん自分を追いつめて、自分と闘い、たどり着いた場所だったと思う。事故に遭ったその日も、部活動へ向かう途中だったという……。そんな様子を聞きながら、僕はもう思いを言葉にするとさえ難しくなり、乗せてもらっていた車の助手席で、また大泣きをしてしまった。

お杖には、ばーちゃんの隣にユースケの名前を書き込んだ。同行二人どころじゃない、僕、弘法さん、ばーちゃん、ユースケと、同行四人になってしまった。秋、お四国へ呼ばれるかのように、歩きに行った。少しずつ札所をつなぎながら、日常生活と遍路生活が絡み合っていく。仕事に遍路に没頭することで心の平静さを保とうとしていたのかもしれない。

身近な二つの命、ばーちゃんとユースケのことを思いながら秋が終わり、冬を迎え、自分の心とも折り合いをつけながら、僕の足は結願に向けて、また、お四国へと向かっていく……。





お四国遍路編 第四期

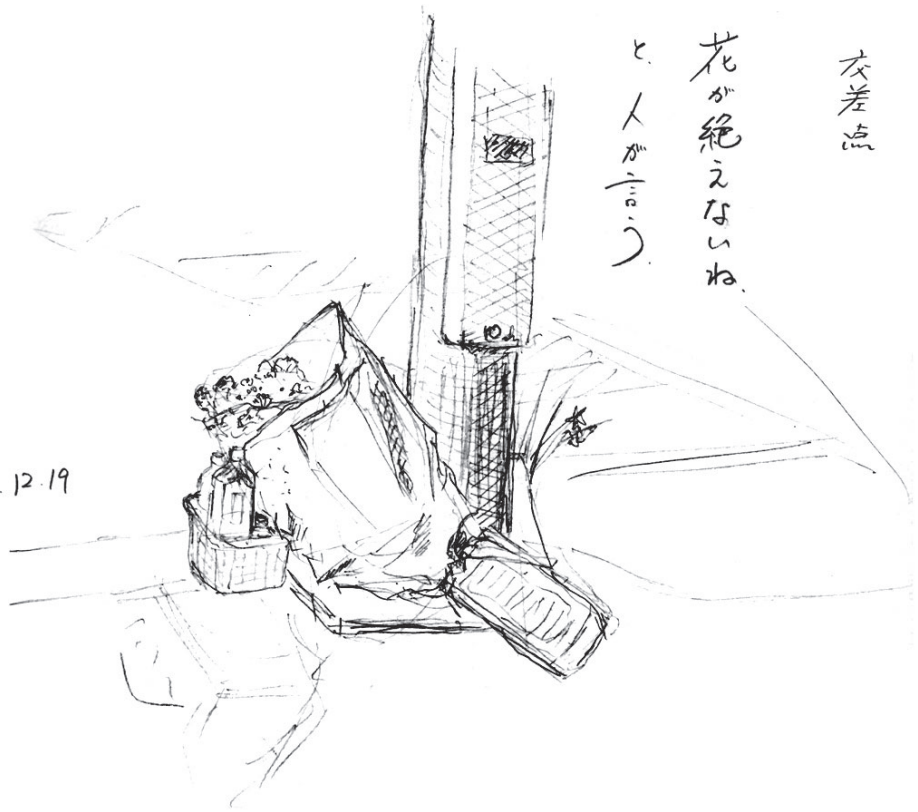
交差点。

交差点

花が絶えないね

と、人が（う）

2005.12.19



人が、車が、自転車が……、ここを通り、曲がり、渡っていきます。信号機があるから、自分の前に見える物を信じて進んでいきます。それが当たり前のことだと思っていました。

でも、タイミング次第で当たり前のことが当たり前じゃなくなるんです。夏の終わり、そんな一瞬があったんです。

いつでも花が生けてある場所のことが話題にのぼりました。そこには夏の終わりから絶えることなく、花が咲いています。ユースケがその場でその一瞬という時に会ってしまってから、花が咲き続けています。それをユースケとは全く関わりのない人が見ていました。そして、僕に教えてくれたんです。

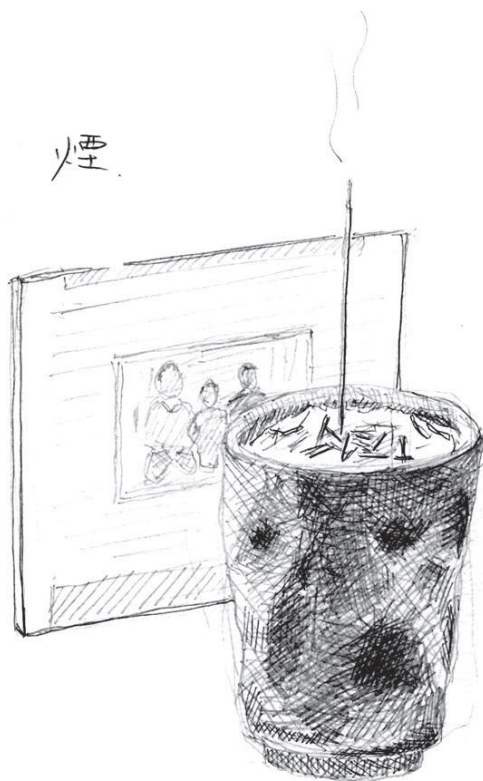
季節は冬に移り変わっていました。また、旅に出る季節がやってきます。それにしても、ペンを動かす僕の手は寒くて冷たくてカチカチです。あまり、その場所には行きたくありませんでした。ユースケが毎日のように自転車で走り抜けていた交差点です。もう、二度とその姿を見ることはありません。

季節が移り変わり、春が来て、また次の夏が来ても、そこには花が咲き続けているような気がします。誰かというのではない誰かが、気持ちの花を咲かせていくように思っんです。僕も、そこに気持ちの花を咲かせました。なんか、そこに花が咲くことに、とても大きな意味があるように感じながら……。



生まれくるモノ。

ここにいて 仏さん  
線香をあげてみる。  
自分の手から生み出した  
形も整わない  
線香の居場所。  
後で仏さんが  
煙にみずんで  
笑っている。



2005.12.20

コネコネと粘土をさわっていたら、いつの間にか形に現れてきました。いつだったか「職員旅行」というモノに参加し、行った先で器を作ることがあったんです。

まさか、器の中に灰を入れるなどとは思ってもみませんでした。お茶を飲むために作った器なんです。でも、お茶を淹れてみて内側まで黒く焼き上げられていて、お茶の色がまったく分からなくなる茶碗でした。灰が入って線香が立てられると、意外なほどにその姿が板につきます。向こう側には長い顔の三人がニコニコ笑って写真に収まっています。……僕なりの仏壇です。

ばーちゃんの遺影のために写真を選ぶのは、そんなに難しくなかったみたいです。もともと、ばーちゃんがとても気に入っていた写真だったといいます。僕と弟が両側からばーちゃんと腕を組んでアホ面の笑顔になっているモノです。三人とも長い顔で、間違いなく同じDNAが組み込まれていることが証明できます。僕はCDケースに写真を挟み込んでみました。

変な形の茶碗でも、安物ケースに入った変な写真でも、何だっ構いません。僕は僕の心を込めて線香を立て、手を合わせるんです。……それじゃダメなんですか。競争でも比較でもないはずです。僕は僕なりの方法でばーちゃんの死をとらえ、その気持ちをもって、また、お四国へ巡礼の旅に出るんです。



出発の日は嵐です。定番です。これは僕の旅にはついて回る常識になりつつあります。ふと外を見れば……、そこには雪国が広がっていました。僕自身は雪が降り積もるような場所で暮らした経験がないから、そんな光景を目にすると写真を撮らなければいけないという義務感が生まれてしまいます。だいたい東海道線が走る範囲の人間は、多かれ少なかれそんな感覚をもつんじゃないかと思っています。

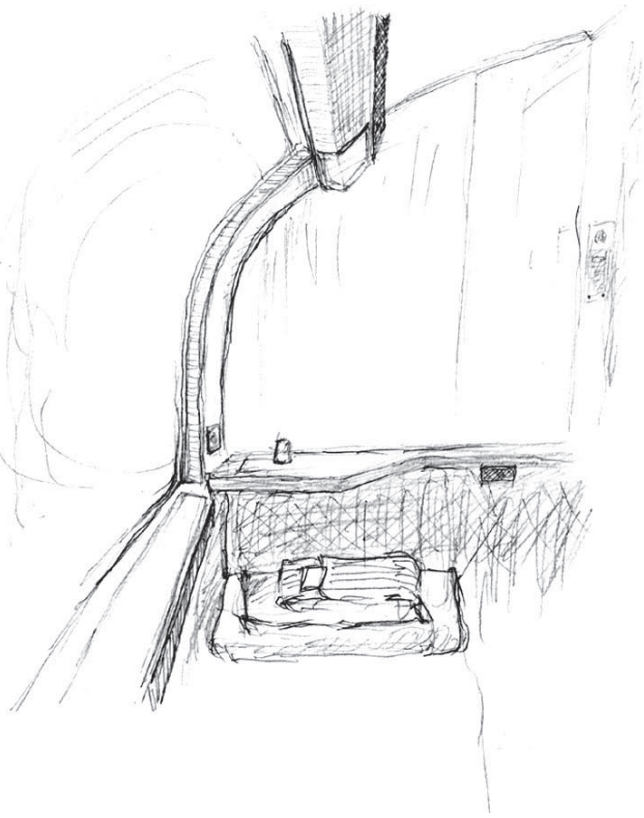
朝にはお四国へ到着している予定でした。それも、ただ眠ってさえすれば、いつの間にか僕の体は運搬されているはず、という契約です。寝台車ってのはステキな乗り物です。なのに、目の前には雪国が広がっているわけで、頭の中が一生懸命に情報処理を始めていきます。確か、夜に「せきがはら」という看板を見たように思います。そして、朝も「せきがはら」という看板を見ているように思います。何かだまされているんでしょうか。寝過ぎしている間に往復してしまっただんでしょうか。そんなわけありません。ずっと「せきがはら」という看板が見える位置に停まっていたんです。恐るべし……。

仕方がありません。「果報は寝て待て」といいます。それに居場所も「寝台車」です。寝てればいいんです。寝るしかないんです。自然の力には逆らえません。待つしかないんです……。

癒し空間。

寝台特急の個室。  
やわらかい木調。  
穏やかに  
眠りたつてそうなる  
そんな気がする。

曲線



2005.12.23

列車に乗り込んだのは夜中、職場の人たちと別れたその足で駅に向かいました。冬になるとやってくる忘年会というモノに参加した後です。その会はきれいなホテルのような所で行われました。周囲は冷たい目で僕を見ます。完全装備の冬用歩き遍路スタイル、テントや寝袋を詰め込んだザックに汚れきったダウンジャケット、手にはお杖を携えています。ちよつと場違いかなあ、とは思いますが仕方ありません。

ヤンキーの兄ちゃんたちと目が合います。駅のトイレです。どこかで会ったことのあるような気がします。何年か時をさかのぼると彼らとの接点が見えてきました。何かとやってくれた人たちです。その頃は、どんな言葉も彼らの心には響きにくい状態でした。いつの間にか僕と日本語で話せるようになっていました。

少しでも揺れる心のまま、寝台列車に確保された僕のスペースへと向かいます。心がやさしく解けていくような気がしました。温かみのある間接照明、せまいながらも清潔感あふれるベッド、それを包み込むような木調の壁……、ありがたい空間でした。ゆとりが生まれた心で、いろんなことに思いを巡らせます。あわただしかつた出発を振り返ります。ゆつくりとゆつくりと……。

外は雪、自分には何もできません。温かな空間で、自分の心も温めつつ、お四国へと向かっていきます。結願への旅です。





どこが接点になる場所だったのか、明確に分らない状態でした。というのも、前回お四国を後にする時に、道に迷ってしまいタクシーを使ってからうじて松山駅までたどり着いたということがあったからです。ひたすら歩き続けた疲れと、どんどん日が暮れていく焦りで、かなりのパニック状態になっていたように思います。ガソリンスタンドへ駆け込み、どうやったら松山駅まで行けるのか教えてもらい、ついでにタクシーも呼んでもらって一心地ついたという具合です。

お世話になったという思いはとも強く残っていたから、ガソリンスタンドを目指すことには自信をもっていました。でも、よく考えたらガソリンスタンドなんてたくさんあるし、どこでも同じような店構えをしています。それを探し出すことは意外に大変なことでした。そもそも、大雪のせいで列車が遅れて、松山駅に着いたのが予定時刻を約八時間もオーバーしています。すでに周りは暗くなっているし、雨まで降り始めました。第四期はとんでもないスタートを迎えていたんです。どうやらここだと思えるガソリンスタンドを写真に収め、僕の遍路道がつながりました。

本当ならそんなにこだわる必要はないのかもしれないけど、なんか僕にとっては大切なことに思えたんです。お四国を一つの輪にすること……、つながつなぎの僕の遍路道です。

迎え

山門の下での出迎え

猫

白い毛がふわふわ温かそう

寒い朝の出迎え

猫

逃げた……



にゃーお。

2005.12.24

朝早く、できれば誰もが動き出す前に活動を始めようと思っていました。テントを張った場所は工場の軒下……、あんまりいいことじゃありません。でも、寒いし眠いし、まだぬくぬくと寝袋の中に入っていたい感じがした。

雪が降ると犬は喜んで庭を駆け回るってのは本当のことなんでしょうか。猫はこたつで丸くなるってのも本当のことなんでしょうか。イメージはぴったりで。どっちかといえば犬の方がバカっぽい印象があるけど、そんな犬たちが好きです。猫は、勝手気ままに生きていて、どうもこちらの様子をバッチリ観察しているかのように見えます。知らないヤツのことなんか相手にしてくれないような、ツンとした印象です。

猫が山門の片隅からこちらをのぞいていました。第四十八番札所でのことです。寒い冬の空気の中で、温かそうに丸くなって自分の毛皮に包まれています。またしても、無理だと思いながらスケッチブックを開きます。しばらく見ています。もしかしたら成功するかもしれない……なんて思っていたら、やっぱり……逃げられました。僕の思いなんて関係なく自分で勝手に動くからヤツらはやっかいです。ま、僕もヤツの思いなんて関係なく勝手にモデルにしてただから文句はいえないんですけど……。

寒い朝に、早起きして出迎えてくれた猫でした。



干し柿。

ソウルフードという言葉は一般的な言葉なんでしょうか。僕の中ではあんまり日常的に使われる言葉じゃありません。その言葉の意味としては、故郷の食べ物であるか思い出の食べ物などというもののようです。

甘さが口の中に広がります。時々、口がしわしわになってしまふこともあります。自家製のものならではの味です。渋柿が、いつの間にかやわらかくなり、甘く甘くなっていきます。たぶん、それぞれの家によって微妙な違いがあるんだと思います。お店で売っている干し柿を食べても、おいしさを感じられないことだってあるかもしれません。軒先には自家製の干し柿がかかっていました。

僕にとって自分の家ならではの味って何か……、鰯の唐揚げのような気がします。ばーちゃんの得意技でした。休日以外は、だいたい夕飯の準備をばーちゃんがしてくれていました。でも、はつきりいってばーちゃんには料理のセンスがなくて、しかもアイディアも乏しくて……、それで困った時に現れるのが鰯の唐揚げだったんです。小さい鰯が焦げたような衣をつけて食卓にのぼります。

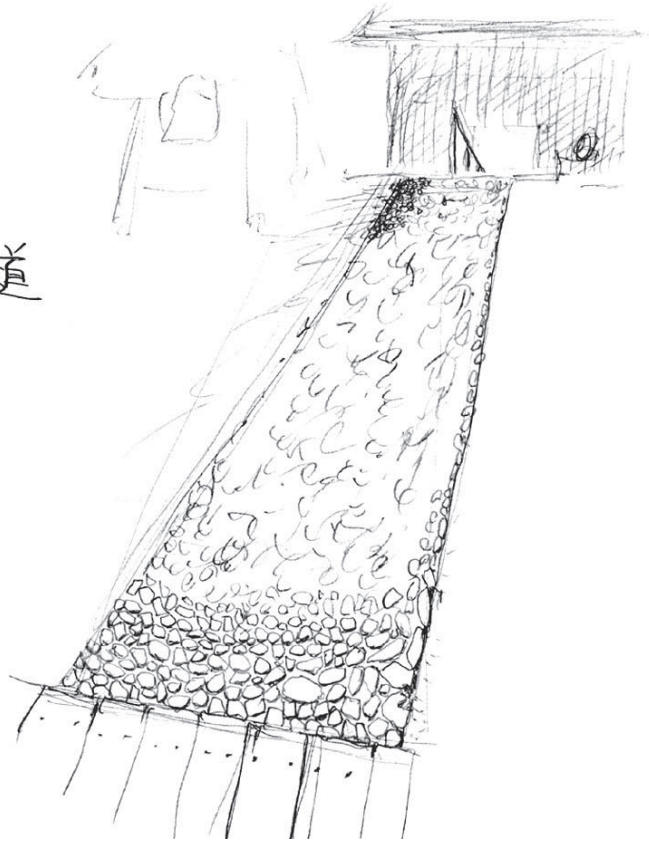
ばーちゃんが死んだ日、夕飯の食卓に鰯の唐揚げが現れたことを忘れられません。食卓を囲む僕らの、隣の部屋で寝ているばーちゃんの姿を僕はしっかりと見る事ができませんでした……。



# 道

ちいさな石が集まって  
きれいな石畳になつていろ  
ろこもたくさんの方が歩い  
道が輝いた

2005.10.24



みちです。

キラキラと輝き、まっすぐに伸びる石畳がありました。人によつては浄土への道といって重ね合わせるんじゃないかと思うような道です。第四十九番札所の本堂と山門をつなげる参道です。

道は人を導きます。どこへ導かれるのか分かつている時にはそれほどありがたいことはありません。それが歩きやすい道ならなおのことです。足取りも軽く前へ前へと進むことができます。

石畳の道はあちこちにあります。ゴツゴツと僕らを試すような道だっております。熊野古道を歩いた時は、苔むした美しさを感じる反面で、自分の強さがなければ歩けないような厳しさも感じました。たくさんの人々が歩くことで苔のベールが薄くなっている所もありました。

そもそも、どこへ導かれるのか分からないような道だっております。それはそれは不安な道です。僕らが生きていく道は、未知なる世界へ向かつています。しかも、要所所で分岐点が現れて僕らを惑わせるんです。行きたい場所がおぼろげに見えていて正しい道を選んだつもりでも、いつの間にかカーブしてあらぬ方向へ向かつてしまうことだっております。

僕らの先へと続く道、それを見極める眼を育てていかなきゃならないんですね。自分を正しく導くものを見抜ける千里眼なんて簡単に手に入りません。自分が努力するしかありませんね……。

つれづれなるままに……。



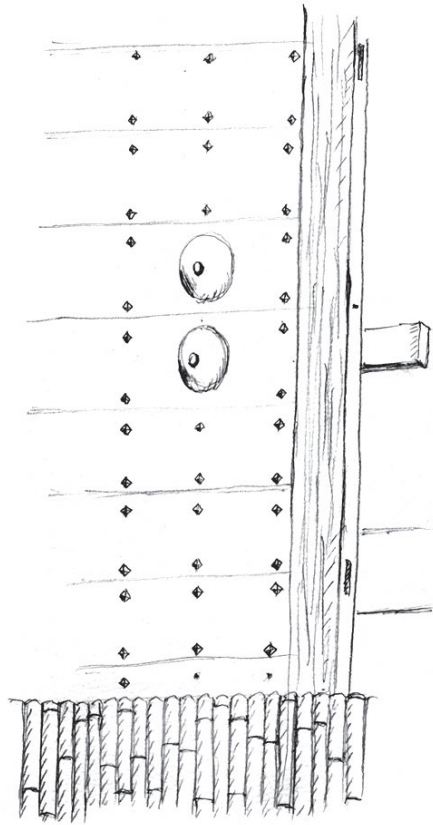
はっとしました。そこら辺の壁がポロポロとこぼれ落ちているんです。無常観が漂う土壁でした。

真新しい時代もあったはずです。きらびやかに輝き、人々がお参りをし、活気にあふれていた時代です。白い壁つてとてもきれいに太陽の光を浮き立たせてくれるように思います。温かみのある光を浴びると心が軽くなるんです。極彩色の密教的な装飾を見て、すごいなあ、とは思っただけど、僕はあんまり好きじゃありません。素朴さを見せる建築様式の方が抵抗なく目になじみます。飾り気はないんだけど、そのもの本来の美しさや力がみなぎる木の雰囲気なんかは憧れの存在ともいえます。

うわべだけの飾りはそのうちにボロがでます。僕が太陽の光を感じた白い壁も、実はうわべだけだったのかもしれない。白さの内側にはそのものの本質とでもいうような茶色の土があったわけです。

白も茶色も、両方とも壁を作っている大切な要素です。どちらも虚ではなく真なんです。ただ、太陽の光を集め、内側を守るためには白さが覆う必要がありました。存在し続けるためには常に白さが保たれなければなりません。素朴だと思えた白さは、やっぱり地道な努力があつてこそ輝きを発したんです。

常なるものはないんですね。諸行無常……。



釘 かくし

たぐさんの小太いやつ  
ちやうどだびでかやつ

たぐさんないから  
たまなやつが目立つ

いやらしい……と西うのふ  
僕だけ?

2005. 12. 24

スケベべ。

なんかね、仕方がないんです。人間ですから……。

別にいつでもどこでも頭の中がピンク色というわけじゃありません。そこまで変態的な生活じゃないです。時々、そういうモードに入っていくことがあります。ただ門の絵を描いていたらどうも形がいやらしく思えてしまいました。

そういうえば、確かあれはタイのお寺のこと……、仏様がたくさん並んでいた所でした。そこを一緒に訪れていた人が指差すんです。むう、否定のしようがありません。やさしそうな仏様たちの胸が輝いていました。体の他の部分は少しすすけたようになってるのにも関わらず、キラキラしていました。何かの御利益があるかもしれないので、僕も触ってきました……。

憧れの先輩が結婚するなんてことがありました。別に僕との間に何があつたわけでもないんだけど、いろいろ面倒を見てくれたし話も合う人だったので、少なからずショックを受けました。そのショックがだんだんに体の隅々にまで染み通っていくような感じで、しばらく抜け殻のような時間が流れていきます。自分の気持ちにも鈍感なんですね。僕はその先輩に憧れ以上のものを抱いていたみたいでした。最後のお別れの時まで、何も無いような顔をして済ませました。よかったのか悪かったのか……。

人間ですから……、いろんなことが頭を巡っていきます……。





おかげさん。

出たな……というヤツらと時々出会うことができます。それは望むが望まないか関係なくやってくる瞬間です。

旅人に「おかげさん」という言葉をなげかけるヤツ、こいつは何者なのか、慎重に論議されなければいけない感のあるヤツでした。□元を見ると、どうやら気分が悪いわけじゃなさそうです。目元を見ると、無表情に近いので心理状態を推測するのは困難です。耳……でしょうか、人間でいえば頭から突き出た部分……、ここまでくるとその部位の存在すら怪しげになってきます。そんな怪しげなヤツが「おかげさん」を強調するとは、お四国ってホント心が広い所です。どこかのアニメで見たような気もするけど、そんなはずはありません。無理です。

謙虚だ……と僕を評する人がいました。うめばれることなく生きて……と評する人もいました。前向きな解釈に最大のお礼を申し上げます。ま、真実としては、自己肯定感に欠けて自信がない弱虫……こんな風に評されるべきなんだと思います。だから、周りのみんな偉大に見えて、僕の口から出る言葉は「おかげさんで……」となるんです。多少なりとも自己弁護するなら、身の程知らずにいるよりは社会的被害が少ない人間だ……としておきたいものです。社会的な「貢献」ができたらなあ……、憧れです。

とりあえず、他力本願的に……おかげさん……。

黄色

輝く光の中に  
日本人  
ミエ  
ビルマ人の魂が眠る  
輝く塔の中に



碑。

2005.12.24

確かに僕は第五十一番札所に到着したはずです。そこは日本のお寺のほずです。境内に輝く黄金色の塔は何なんでしょう。

ビルマの塔が語るモノがありました。そんなに遠くない昔、そこは地獄が広がっていたはずです。老若男女あらゆる人たちが命と向き合って生き、死に、また、どちらにしても苦しんでいた場所だと思っています。人と人が殺し合い、自分の命を安売りし、ひとの命も簡単に消していった場所だと思っています。

特に若い命が消えていくこと、僕は苦しくなります。ある日ある時、当たり前のように命が失われるんです。全く当たり前じゃないはずなのに、それが当たり前のように世界は流れていくんです。耐えられません。今、僕は若くして消える命の灯に心が揺れます。でも、もし地獄の世界で生まれ育っていたら、さざ波ほども心が揺れなかったかもしれない、僕は思うんです。

人は体外学習型の生き物です。常識や倫理観なんてモノもどこかで学習して自分の中に入ってくるようなモノです。僕は自分の命を自分以外のナニモノかのために燃やすことを学習したくありません。誰かに学習させることもイヤです。心が震える命のつき合い方をしていきたいし、それを忘れないような努力をしていきたいと思っています。心の中に小さかったとしても揺るぐことのない塔を立てておきたいと思っています。



由緒ある建物です。重々しいオーラが漂っているような感じがします。こんなにすごい所がお風呂屋さんだなんて信じられません。くつろいでお湯に浸かるというよりは、その場から出てくるオーラを吸い取るための所にも感じられます。寒い冬、オーラを体一杯に取り入れていこうと、……最初は思っていました。でもそれよりも、前に進みたいという気持ちが強くて素通りしました。

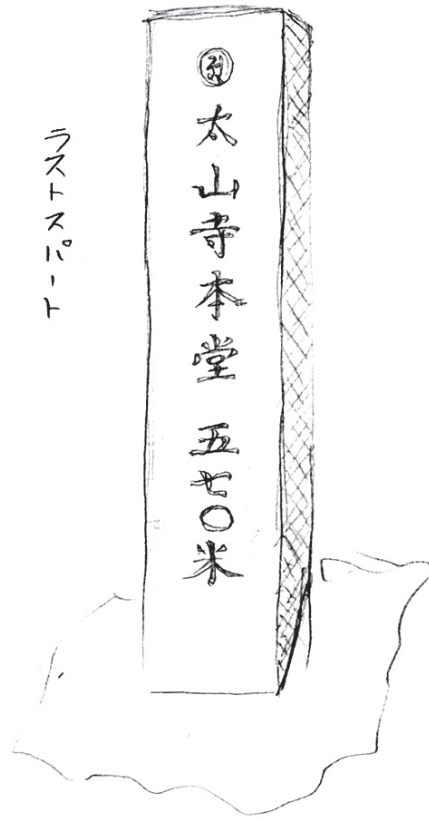
道後温泉……、前にも訪れたことがあります。その時は、少しだけ高いお金を払って、個室のような所に足を踏み入れました。せっかくだから……なんて言いながら、坊ちゃん団子を食べていたように思います。職員旅行中のことでした。半ば見捨てられ、半ば拉致されるかのような形で温泉に入り、団子を食べていました。

不思議な思い出をリアルに脳裏に映し出すことなく、僕は歩き出しました。写真さえ撮れたら納得です。

日本文学への憧れはあります。この場に夏目漱石がいたのかと思うとゾクゾクです。特別、何があるわけでもないんだけど、空気を感ずるだけでゾクゾクします。僕のアンテナは偉大な作家の存在を察知していたようです。人々に深く染み入るような文章を作った人……、そんな人のオーラは恐れ多くもあります。いつかまた、じっくりオーラを感じ取りに訪れたい場所です。



ラストスパート



これだから山寺は……  
者いた  
と思つた次の瞬間に  
これだ  
疲れる……

これだから山寺は……  
楽しさが続く  
……と嘔吐してみる

これから！

2005.12.24

予想はしています。だいたいそんなモンだとも思っています。でも、かすかに期待もしてしまうんです。軟弱者ですから……。

地図を見て第五十二番札所が山の上にありそうだと何となくの見通しはもてます。そうであつても、そうでなくつても、結局は同じ、僕の足は札所を目指します。それならあまり深く物事を考えずにどんどん進んでいった方が精神衛生上いいのかもしれない。

結構ダメージ受けることもあります。僕は山門を見つけてちよつと油断していました。「着いた！」という安心感です。確かに「四国第五十二番霊場太山寺」と書かれた石碑があります。……でも、その脇にもう一つ、小さな石碑があつたんです。遠くからじゃ見えません。やられました。

気持ちが悪られてしまった場合、それを復活させるのには大きなパワーが必要になります。身体的なことのように物理的に回復する類のダメージと違って、他の何かが心の中で上手に作用しないと癒えないんです。癒す力をもっているのは何か、それぞれ個人で違うはずです。僕の場合、心がすぎるモノを明確にもっていません。だから、ダメージを忘れさせてくれる時間だけが頼りになることがほとんどです。すぐに忘れることが多いですが……。

心のダメージをごまかしつつ、ラストスパートの上り坂です。

絵はがきのぬくもり。



52番太山寺山門

スケッチブックを持って、ころころしていたら、お接待です……と 絵はがきをいただきました。絵を描きつつ、二周ほどお四国を回っているそうなの……。

住所、聞いとまよかったです……。

僕はスケッチブックを持ってウロウロしていました。よく考えたらとても分かりやすいスタイルだったと思います。おっちゃんに声をかけられ、「お接待です」と絵はがきをいただきました。その方は絵を描く人でした。普通の官製はがきにカットを入れるかのように水彩で自作の絵はがきを生み出していました。淡い色彩がさわやかで心地よい作品です。僕の絵なんかとても見せられない……と焦り、こんなんです……とペラペラしてごまかしました。

絵は主観です。描く者の眼に写った姿を紙の上へと表現するだけのことです。上手とか下手だとか、正しいだとか間違いだとか、そんなモンとは全く別次元の話です。僕がとらえたテーマを僕の方法で表現するんだから、他の人にとやかく言われる筋合いはありません。逆にいうと自分が納得できないモノは、どれだけほめられたって何の意味ももたないモノになってしまいます。なんと自分勝手なのかと思うけど、そうなんだから仕方ありません。ついでに、たくさんウソを積み重ねて作り上げるのが芸術なんだと教えてもらったこともあり、最近はますます自分勝手になっていきます。

絵はがきに宛名を書き、投函しました。電話でもない、メールでもない、自分の字で心を込めて文を綴り、そこにはおっちゃんを描いた絵がついている……、手紙って温かいモンですよ。

夕日に染まり……。



第五十三番札所到着です。次の札所までは三十キロほど離れているので、基本的には「本日の業務終了」という感じになります。陽が傾いて、夕暮れ時のお参りでした。

納経所が開いているのが午後五時まで、ここまでその日のうちにたどり着けるかどうかタイミング的には微妙なペースでした。だから、迫りくる夜を前にして一安心です。次の札所までは遠いけど、そこまで行く途中にユースホステルがあつて、何やら個人的で楽しそうな宿だという情報をゲットしていたので、是非そこまで歩きたいと考えていたんです。

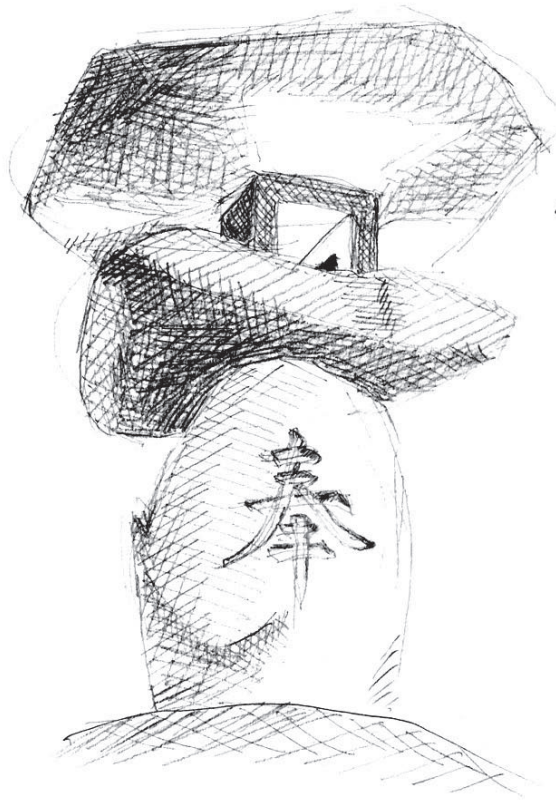
夕方ギリギリに到着すると、落ち着いた心でお参りができます。その後は時間に追われることなく夜を迎えるだけからです。暮れゆく空気を感じながらお経を唱えていると、一日歩いた充実感もジワジワと体中に染み渡っていくようです。夏の盛りに汗をダラダラかきながら一日を終えるのとは全然違うもの悲しさがあります。『枕草子』では冬の朝に「もののあはれ」を感じ取っているけど、秋の頃に負けず劣らず夕暮れだつてしみじみと趣深いモンです。それに、一応の宿泊予定地も自分の中で決めているから、不思議な安心感があります。予約も入れてないから本当に泊まれるかどうか、全く保障はないんですけどね……。いいんです。しみじみと心豊かに終わりのゆく一日に感謝します。



浮かびくる夜。

## 燈楼

暗くなじゆく空気をまとひ  
辺りに温かく優しい  
光を放つ  
石ごかい



2005.12.24

夜が浮かびくるという印象でした。本来は光の方が浮かんでくるといの方が正しいようにも思うんだけど、どうも、暗さの方がググツと浮かび上がって僕の心をとらえたんです。

着いた時には少し明るさの残る夕方の色でした。そこに大きな石が積み重ねられています。ズシンと落ち着いたたたずまいが風格を感じさせます。軽薄な僕にはないモノです。自分にはないモノには憧れるモンで、一目惚れしてしまいました。じつくりと眼に焼きつけながらペンを動かします。どんどん色彩が変わっていく夕暮れの一時です。

燈楼には明かりが灯っていました。四角い窓口からやわらかな光を放っています。その光を受けて石の素肌が浮き上がり、暗さが自己を主張していました。光があるから影があるし、影があるから光が引き立つんです。お互いに支え合っている感じがします。どちらか片方だけになってしまったら、とんでもないことです。光だけだったら、まぶしくて目を開けていることができなくなります。影だけだったら何も見えません。

光と影、どうも光の方に注目が集まりがちだけど、それだけじゃないんですね。僕の偏った見方を、大きな石の燈楼が教えてくれました。奥の深い暗さが、今までよりも少し温かく感じられるようになったと思います。日々成長です。



軽車両になるんだっただしょうか。世の中に数ある交通手段の中でも取り扱いにくい部類に入るモノだと思います。「馬」です。モンゴルの草原を思う存分走り回するには最高の乗り物でした。ある程度の指示を出してあげないと道を間違えることもあるけど、基本的にはフルオートマティックで勝手に動き回ってくれます。

信号が赤になったら自動的に止まるんでしょうか。あんまり自信がありません。うんこはやっぱ拾って歩かなきゃいけないんでしょうか。面倒です。燃料をガソリンスタンドで売ってくれるでしょうか。まず無理です。アスファルトに固められた日本という国の中で「馬」という交通手段は、すでに念頭から外されているモノのような気がします。

さすがはお四国。伝統が生き続けているようです。昔から遍路というものを通して物事の長所を見つけて生かしているんでしょう。古いものでも新しいものでも関係ありません。いいものはいし、ダメなものはダメなんです。常に本質をとらえる眼をもって、見た目じゃない部分で判断できるようになる必要があるんです。表面上の美しさや便利さに踊らされているだけじゃなくて、本当の自分の眼で見極められることが大切だというわけです。

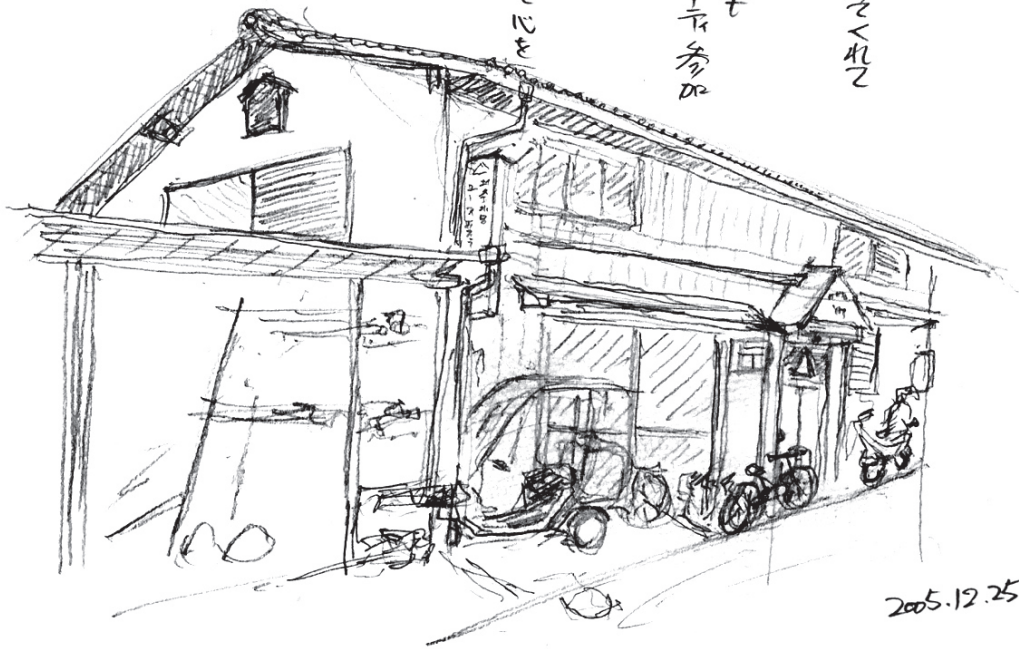
さて、交通手段としての「馬」、お四国の中でも一度も見なかったように思うのは気のせいでしょうか……。

宿

飛び込みで  
それとも泊めてくれて  
ありがとう。

たまにまで  
クリスマスパーティー参加  
ありがとう。

寒い日に  
温かい部屋と心を  
ありがとう。



2005.12.25

行ってみなけりや分からない、歩いてみなけりや分からない、だからとにかく行ってみよう、歩いてみよう……と思いつながら旅をします。行き当たりばったりという言葉がぴったりです……。

歩きの速度と到達時刻は正確に予想することができません。予想というより予感というくらいのイメージで、僕は自分勝手に進んでいきます。その先に北条水軍ユースホテルという宿があることは知っていました。以前出会ったチャリダーが泊まったことがあると話していたからです。何となくおもしろそうな宿だったので覚えていました。

突然に訪れた宿ではクリスマスパーティーをしていました。ローストチキンをいただき、寒くてうまく動かない手を駆使して肉を食べます。首の部分をゲット、チマチマ食べていました。この宿のオーナーは料理に強い思いを込めているから、全ての食べ物がおいしくておいしくて……。楽しくて、お酒を飲んでいる他の宿泊者と、かなり遅くまでワイワイ話をしてしまいました。

いきなり現れた歩き遍路の泊まり客、一般常識的に考えたら夜の九時に宿を訪れるなんて、実は迷惑な客だったんじゃないかと思っています。泊まれなかったら歩き続けるなりテントに寝るなりすればいい……とエエ加減な僕を迎え入れてくれて感謝感激でした。居心地がよくて、翌朝の出発ものんびりになってしまいました。





いくら何でもそりゃやりすぎです。何がどうなればそんなモンが道端に落っこちることになるんでしょうか。もう、僕の心はわしづかみ状態で持っていかれてしまいました。……入れ歯……。

歩きの速度だといろいろなモノたちを発見する機会に恵まれます。車でもバイクでもチャリンコでさえも見落とすような小さなモノたちが僕の目に飛び込んでくるんです。宝の山に見えることもあります。前夜、寒くて指先が動かない中で鶏の首にかじりついていた経験から、手袋を手に入れることを考えている時でした。予想通り、車にひかれてぺったんこ状態で軍手の類がたくさん落ちていました。滑り止めのゴムつきの物から大小様々、選びたい放題です。下向きな歩きが続く中、現れました。……入れ歯……。

そういえば、ばーちゃんも歯が悪くて、ガポツと取り外してはガシャガシャ磨いたり、洗浄液に浸けたり何かと手入れしていました。亡くなる三日くらい前の日、バナナを食べたいとリクエストしたので、スライスしたバナナを口元に運びました。ねっとりとした口の感触が忘れられません。その時はしてなかったと思います。……入れ歯……。

何かを食べている時って、ものすごく幸せです。この幸せが味わえなくなったら、つらいだろうと思います。幸せが続くために大切なしなけりゃいけないような気がします。……入れ歯……。



明日は我が身か……下向きに歩く僕の目に入ってきたのは乾ききったヒトデでした。そんなモン見るのは初めてのことです。思わず手に取ってしみじみと観察してしまいました。

白骨死体とでもいうかのような姿です。五方向に伸びた体には、びっしりとゲミたいな物が生えています。ボディの部分とでもいうのか、中の部分は空洞になっていました。おそらく血が流れ肉がついていたんだと思います。当然とでもいおうか、手にしても重さをほとんど感じません。

遍路というものが生まれてから、お四国という場所は特別な場所になっていったといえます。途中で息絶える人もいたようだし、口減らしのために旅に送り出すこともあったようにも考えられます。二度と戻ることない旅路になることも多かったわけです。人の死というもの、命というものが染みついた道を僕は歩きます。小さな生き物たちの命も同じように見つめる世界観です。

僕の場合は、そんなに物事を達観しているわけでもなく、申し訳ないくらいにへうへうと歩いています。落ちていた軍手をありがたく使わせていただき、現代日本という国の豊かさをまもって歩いているだけです。ただ、旅先で命を失うなら本望だと思えるくらいに一瞬一瞬を悔いの残らないように生きていきたいと思っています。貴重な命の全力投球です。





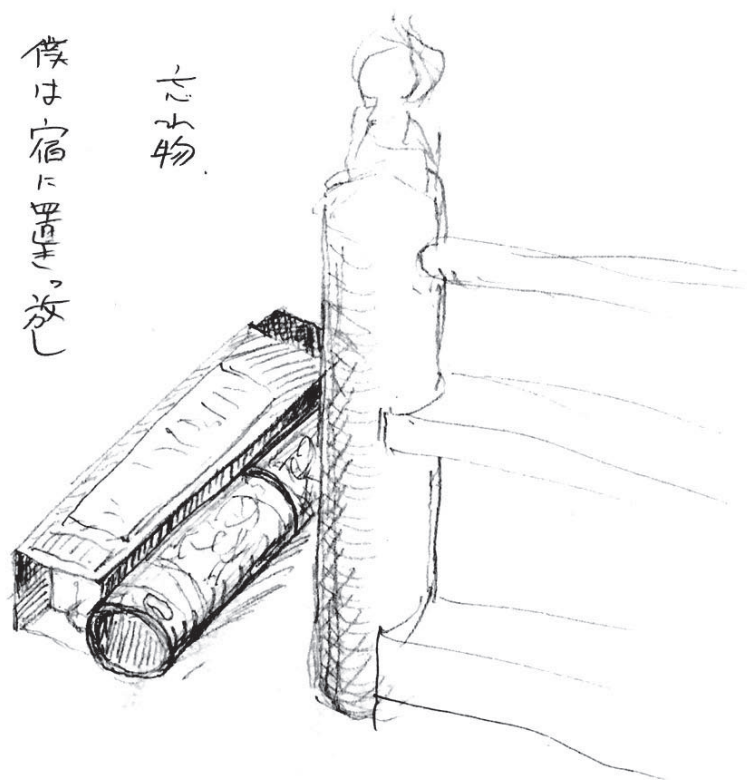
マヤとかアステカとか、あの辺りの文明が大好きです。何とも謎に満ちていて、ワクワクしてしまいます。ピラミッドを作っていたり、それに付随するでかい石の遺跡があったり、カッコいいんです。ステキです。芸術です。太陽を崇める習慣があるから、それも神秘的に表現されます。人の心臓を生きたまま取り出して太陽に捧げたりもしたみたいです。日本の文化とは全く異なるモノが流れています。

お四国は全ての文化を包括するのか……、派手な装飾をされた壁がありました。太陽に魚、人、トカゲ？ などなど、どうも中米的な雰囲気漂っています。その壁の前に軽トラックが停まっているのがまた異国情緒を醸し出すとでもいうか、ミスマッチな構成美を感じさせます。

美しいモノを見ると、僕の力がないことをしみじみ感じます。どう考えても僕があの特徴的な芸術作品を生み出すことはあり得ません。芸術作品に限ったことじゃないけど、僕は自分の中からあふれ出る表現欲に欠乏しているように思います。外からの刺激を受けて、それに反映させる形で自分の色を出していくことがほとんどです。よくも悪くも僕の心は常にニユートラル状態を保っているんです。真っ白です。もうちょっと自信をもって外界へアピールできるような「何か」を心に育てていきたいモンです。



記憶と忘却。



さぶ物

僕は宿に置き、放し

この人は大師堂に置き、放し

ロソク

線香

ライター

2005.12.25

ものを覚えているという能力が著しく低下しています。わりと昔からそうではあるけど、本当にいろんなことをすぐに忘れてしまいます。やかんを取ろうとして立ち上がって台所まで行った所で、自分が何をしようとしていたのか思い出せずに戻ってくるような類です。

いいことも悪いこともどんどん忘れてしまいます。過去のこと、過去のこと、こたわりなく生きていけると考えたら前向きな感じがします。でも、僕の場合は先への見通しをもつことも苦手であるという弱点があります。過去形もダメ、未来形もダメ、とすると残されたのが現在形であり現在進行形です。とにかく今という瞬間をがむしゃらに生きている感じがします。この状態、客観的に見たらただのエエ加減人間ということになります……。

物事という中の物を忘れるか事を忘れるか、比較します。物は忘れてもどうにかかります。僕が宿に忘れてきた線香やろうそくといったお参りグッズも他の人に役立ててもらえたら、それでめでたしめでたしです。第五十四番札所に忘れられていた線香やろうそくも誰かが有意義に使っていけばめでたしめでたしとなります。事を忘れてしまったら、フオローするのが大変です。記憶の整理棚をあちこち探し回らなければなりません。……できれば、忘れたいと願うことを自分の意志で記憶の奥へ追いやりたいです。



天の川が地上に降りてきたような光景……。もちろん、そんなモン見たことはないけど、とにかくきれいだと思いながら川沿いを歩きました。もう夕暮れ時、その日最後の札所を目指します。

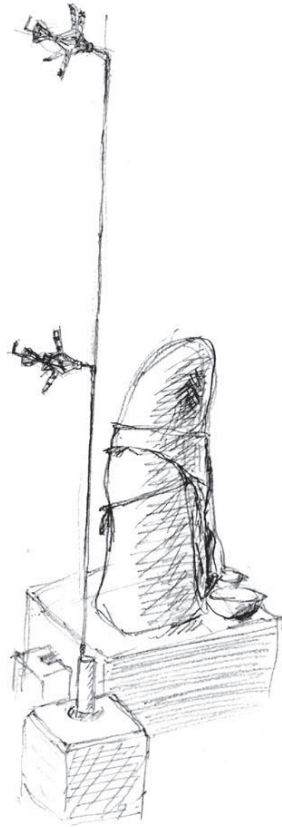
美しいもの、僕は懂れます。自分自身が美しさを持ち合わせていないので、反動なのか、ものすごく美しいものへの懂れが大きいみたいです。水面の美を写真に切り取りながら、自分の目で川をのぞき込みます。やはり……。とてもいおうか、街の中を流れる川であり、土手はコンクリートで固められており、生活排水が流れ込んでおり、水は濁りよんだ水がテロロンとけだるい様子を醸し出していました。

パツと見た時の美しさ、その影に隠れる汚さ……。どっちも事実です。逆だったらどうでしょう。パツと見た時の汚さ、その奥に輝く美しさ……。どうも後者の方が倫理的な価値観からすると尊いように感じられます。でも、美しさのない者のひがみも含めて判断するなら、そんな倫理観なんてウソっぱちだと主張したくもなります。外面の美しさをもつ者は自己肯定感を高め、内側が美しくなっていくパターンも多いんです。自他共に認める美しさ  
が外側からも内側からも磨かれるんです。うらやましい限りです。  
川は美しかった……。それでいいのかもしれない。たまには  
真実から眼を背けることがあった方が気が楽です……。

夕暮れの風を受けて。

夕暮れ

風車が  
カラカラと回る  
お地蔵さんにも  
風が吹く



2005.12.25

もの悲しい時間を迎えていました。お参りを済ませてホッと一息です。冬の夕暮れ、日が傾く頃にはどんどん寒くなっていきました。吹く風がシユルシユルと通りすぎていきます。その風を受けて風車が回っていました。スーっと伸びた竿の先端に一つ、中ほどに一つ、カラカラと回る風車です。ペットボトルから生まれたモノたちでした。第五十五番札所でのことです。

その日も午後五時を回り、納経所は閉められていきます。のんびりとスケッチブックに向かえるいい時間です。でも、夏とは違ってあんまりのんびりしすぎるとあっという間に暗くなるし、寒くなります。スケッチブックとの対話はあっさりしたものにならないを得ません。いかに自分の心に響いたモノを象徴的にとらえるか、それをいかに自分の技で紙の上に写し取るか……、努力だけはしてみます。結果的にはあきらめという言葉が頭に浮かぶことがほとんどです。仕方がありません。絵を描くことは仕事じゃなくただの趣味だから、まあ、そんなモンです。

だんだんに暗くなり寒くなる境内で、風車を描き始めました。隣には背を向けたお地蔵さんがいます。どこかテントを張るのにいい場所を教えてください、とお願いをしたい気分です。暗くなつてから寝場所を探すのは少しばかり大変なこと……、絵なんか描いているのがアホくさくも感じられ、もの悲しい時間でした。





オセッタイ。

心細い気持ちで寝場所を探していました。「オヘンロサンデスカ？」と僕を呼ぶ声があります。アクセントが微妙に四国弁じゃありません。どうやら日本の人でもないようです。おおっ、これは欧米か……と思わされる人でした。

小銭をいただきました。「オセッタイ」と言いながら手渡してくれるんです。僕は「Thank you!」とお礼を言います。「オシコクダイスキデス」なんてことを言っています。僕は「Oh, really?」と対応です。何かと話をしていると「チョットマッテクダサイ」とゴソゴソ袋を取り出しています。「リモドウゾ」などと差し出してくれたのが柿とキウイ……。「Oh, thank you very much!」と再びお礼です。

日本が好き、お四国が好き、だから、そこに住んでいるんだろうし、いろんな習慣も身につけていくんだと思います。それにしても外国籍の人からお接待を受けるとは思いませんでした。外国から日本に来る人の中には本当に本当に日本が大好きで大好きでどうしようもなく、日本の習慣になじもうと努力に努力を重ねている人もいますね。尊敬します。その土地の文化を学び敬うことは、その土地に住む人の心を敬うことに通じるはずです。

別れ際、「Merry Xmas! And good night!」とまた英語で言っていて立ち去ります。……僕は彼らのことを敬っているつもりです……。

ズシンズシン。



壁

巨大な石の重なり  
ズシンズシンと(重なり)  
石垣になる  
重厚……

1st. 12. 26

目の前に現れた大きな石、大きな石が積み重なって大きな壁になっていました。この迫力が僕を圧倒します。第五十六番札所の石垣です。

朝は寝過ぎ、目を覚ましたのが七時前くらいでした。夏だったら、完全活動時刻です。七時には納経所が開くわけで、その時にはお参りも済ませているのが僕の方程式だったんです。冬は起きることが一番つらいことになります。昔から朝が苦手で、なかなか起き上がれない日々を過ごしていました。冬の朝、テントで寝ていても同じこと……起きられません。周囲でラジオ体操をするおっちゃんやらおばちゃんやらが集まってきてしまい、コソコソと逃げ出しました。

寒い朝だから日陰には入りたくありません。太陽の光を浴びて絵を描きました。ちようどいい具合に陽を浴びた石垣が堂々と迎えてくれます。石の文明は大好きです。モアイには抱きついてきました。アンコールワットにはへばりついてきました。マチユピチュにはよじ登ってきました。メキシコではピラミッドパワーム感じてきました。未知なる過去の世界との接点を感じます。ま、そこまでの凄味は感じなかったけど、大きいというだけでも僕にとっては大きな価値があります。軽薄な僕にとっては重量感とは、永遠の憧れなのかもしれません……。



たとえば床の間にお皿でも飾ってあったとしたら、僕は無性に腹が立ちます。お皿です。使ってあげてこそ価値を見出せるというモンじゃないでしょうか。自分の役割が何なのか、その能力を充分に発揮するからこそ美しく輝けるはずです。

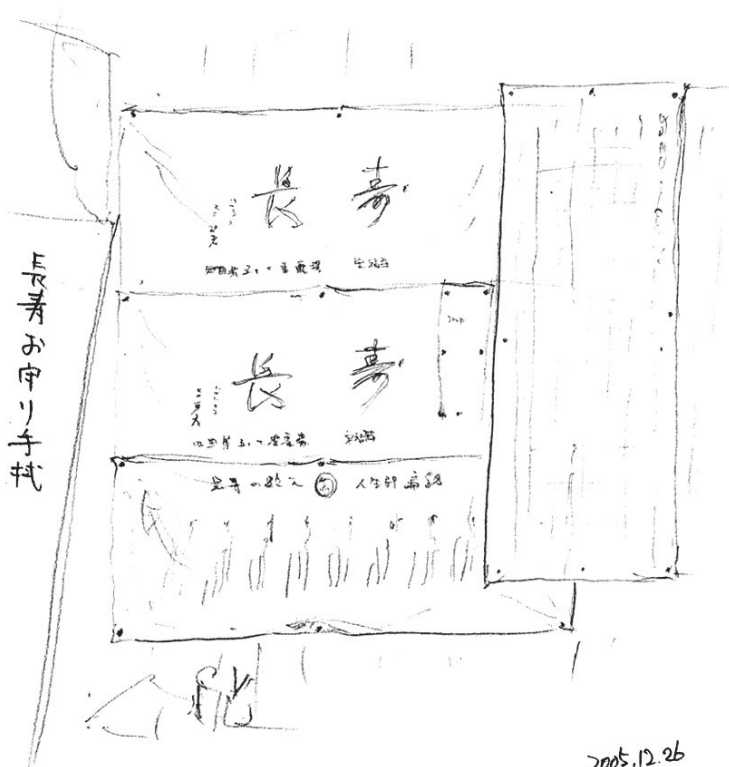
ガラス張りの向こう側に仁王さんがいました。なんか、幽閉されているかのようなです。本来なら仁王門に阿像と吽像が両側から守り神のように立っているんだと思います。小さい頃、お寺へ入ろうとした時、迫力がありすぎて恐怖を感じたモンです。それでこそ、本来の役割を果たしている状態になります。

野ざらしに近い仁王さんも見たことがあります。どこに目があり鼻があるのかも分からないくらいに風化していました。本来なら鼻息も荒く、ギロリと睨みをきかせて立っているんだと思います。小さい頃、門の仁王さんと目が合った時、生気を感じて恐れたモンです。それでこそ、本来の役割を果たしている状態になります。

仁王さんはこちらを見ていました。いくらか眼力がガラスに吸収されているようにも感じたけど、さすがは仁王さんです。存在感は大きくて、気高さもありました。その場その場に適応して、役割を果たすことが大切です。目的のためには手段を選ばないんです。ガラスの中から自分の能力を充分に発揮していました。



忘却の時間。



長寿お守り手拭

平壽

九十歳で迎えの来た時は

そう急がずとも

$$\gamma = x - 2\gamma$$

トモ

Handwritten notes:

Handwritten notes:

近々まっ人もいる……

ばーちゃんはせっかちな人でした。せっかちな上に自分勝手な頑固で、ややこしい人でした。一緒にいるとイライラさせられることがとても多かったように思います。約束の時間なんかがあると、ずっとずっと前から気になって気になって仕方ありません。まだかまだかと言って、周りの人間を混乱に陥れます。

第五十七番札所では印象的な手ぬぐいが目に入りました。歳ごとに言葉が連ねられています。この世に引き留めようとする気持ちや文字になっていました。誰でも同じなんだと思います。あの世へ旅立つ人と別れるのはつらいことなんです。それが何歳であるかは関係ありません。ばーちゃんがあのだ世へ逝ってしまったのは九十二歳の夏でした。一般的には大往生というべき形だったみたいです。ユースケは十五歳、急ぎ過ぎです。僕にも大きな衝撃を与えました。

しみじみと言葉の意味を感じていました。夏から秋を経て冬になっっている時間の流れを感じます。物事をどんどん忘れてしまう特技は健在です。少しずつ、あの時の感情が忘れられていく感じがします。夏の始めと夏の終わり、二回に分けて僕に命というモノを考えさせた季節は過ぎ去った過去のことになりつつあったんです。

時々でもいい、ふとした瞬間に思い出したいと思います。

どう見ても故障中。



朝日を浴びてキラキラ輝くトイレがありました。いや、正確にいうとキラキラ輝く水を放出するトイレがありました。公衆トイレだと思われます。水道料がかさみそうです。

トイレっておもしろいなあ……と、旅先でトイレを撮影することがよくあります。別にトイレで用を足している人間に興味があるわけでも、それを盗撮しているわけでもありません。純粋にトイレにおもしろみを感じるんです。インド、ヒンドウの教えに従って名実共に左手が不浄の手となった銀行のトイレなんかは印象深く思い出されます。中国、列車付属で足をどこに置いたらいいのか悩んだトイレも衝撃的でした。それぞれ写真を見せると、みんなが「うわ!」という反応を示します。……ということは、多少は僕の気持ちが伝わっているんですね。

外国のトイレと比較してしまうと日本のトイレなんてかわいいモンです。かわいく噴水を演じているくらいのモンですから、美しくさえあります。日本という国はとにかく異常なくらいにきれいな国だと思います。汚い所だってあるにはあるけど、それも一時的なものだったり、限度をわきまえているような汚さです。逆に考えたら、日本人は汚さへの耐性がなくなっているともいえます。無菌室で育つ弱々しい民族になりつつあるんです。

さあ、みんなでトイレを汚そう!……いや、冗談ですよ……。

## 頭の中の遊具。

ロープ

木の枝にかけられたロープ  
雄叫びが聞こえてきた  
アアアア

そして  
笑い声

最高遊び場



2005.12.26

ブラン、境内にぶら下がっているだけです。そして、そこから連想……というよりは、妄想に近いモノが始まっています。

そこは緑の深いジャングル、あちこちから鳥や獣の声が聞こえてきます。ツルを使って木から木へと移動する姿、雄叫びをあげて過ぎ去る姿はどうやら人間のようです。身につけているのはわずかに腰巻きだけ、引き締まった体が宙を舞っています。

小さい頃、ロープがあるとそこに飛びつき、ブラブラと揺れていました。でも、僕は腕力がなかったから自分の体重を支えきれずにズルズルと落ちてしまいます。なんとか結び目に足を乗っけてブラブラ揺れているだけで幸せな感じになったモンです。決してジャングルでは生きていけない姿でした。

目の前にあるロープは静かにそこに結ばれているだけです。誰もいません。第五十八番札所でのことです。誰もいないけど、誰かがきつとロープで遊ぶんだろうと思います。僕の場合は焼津神社でした。境内に木が生えていて、大きな石碑があつて、何かと遊び道具になっていました。ブランコやジャングルジムはあつたけど、特別な遊具があつたわけじゃありません。それでも充分に楽しめました。妄想の力は偉大です……。

などといいながら……、一本のロープはたくさんのかんことを考えさせてくれた上に描くのに簡単で、ラッキーな題材でした……。



粹だねぇ。



喫茶店という場所、大学生の頃まで、自分とは関係のない場所でした。喫茶店に限らず、お金を払わなければいけない所に縁がなかったというのが正しいんだけど、とにかくコーヒーなんてすすっているような所は僕の生活の中には存在し得ないモノでした。それが、しばらく前からとても馴染み深い所になりました。知り合いがお店を開いてからのことです。おいしく淹れるとコーヒーという飲み物は非常においしいことを知ったんです。んで、軽食として扱われるけど、メシを食べ、コーヒーをすすする習慣が僕の中に根付いていきました。

昼メシ時、どんなお店に入るのか、少し考えます。ドキドキしながらお店に入っていきます。おしゃれなお店だと余計にドキドキしてしまいます。ところが、この時は、お店を出る時にドキドキしてしまいました。「お接待です」ということで、五円玉をいただいたんです。カッコイイなあ、と思いました。「ご縁がありますように……」ってことですよね。

直接的に考えたら、五円という金額で何かができるか……、多くのことは望めません。でも、金額以上の気持ちが入められていることが分かるお金です。五円硬貨の偉大さです。人間でも同じ、直接的に何かあるんじゃないかって、ジワジワと伝えられる何かをもっていたらいいなあ、と思います。ダシを効かせましょう。

手のぬくもり。

握手。

手を握ること

それと伝わることもクワイのかもしれない。

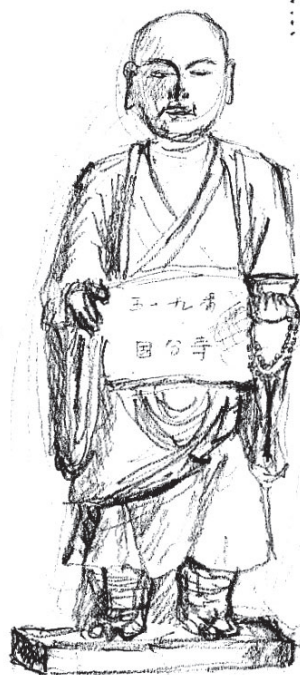
手の温かさ。

そこから伝わるその人の温かさ。

手も差して出す弘法さん。

僕々に伝えているのは

何……



2005.12.26

人のぬくもりがほしい時……あります。フラれてしまったような時、もう、とにかく心にポツカリと穴が開いた状態だったりして、相手は問わない、「誰でもやさしくしてくれえ」と泣きそうになります。何をやっていても心ここにあらず、やる気も全く出てこない時です。

握手をすると、相手のぬくもりを直接感じられます。物理的な温度はだいたい三十六度くらいで、インフルエンザで高熱の人以外はそんなに大きく差の出る人はいないはずです。「熱い」と感じることも「冷たい」とも感じない、まさに人肌の温度です。心地よい温度なんだと思います。そして、じんわりと伝わるその人肌の温度に加えて、握りしめた適度な圧迫感が心理的にも温かさを助けます。目があったりしたら完璧です。

右手を差し出していたのは弘法さんです。物理的な温度はだいたい十度くらいのモンでしょう。石ですから……。寒い冬の季節に冷え切った弘法さん、それでも僕は握手をします。握手することと何かが変わったラッキーです。過大なる期待はしていません。何かが変わるきっかけができるかもしれないと思うんです。何でもいいけど、とにかく具体的に動くことで心のよどみが晴れることがあります。弘法さんと握手するならなおのこと……。少なくとも気分転換にはなりました……。





よろしく。

何のお願いをしたか……そんなことは秘密です。恥ずかしくてとても人には言えません。とりあえず「握手をして、お願いして下さい」と書かれているからには、まず握手をし、お願いをするんです。立て看板には「願い事は一つにして下さい。あれもこれもはいけません。お大師様も忙しいですから！」なんて続いています。そりゃ、全国各地からお四国遍路の旅に出る人は多いだろうから、多すぎたら困りますよね、きつと……。一つだけです。

もちろん、チャンスは一回です。セルフタイマーを設定して、慎重にファインダーをのぞき込み、自分の体の角度まで計算に入れてから実行に移ります。弘法さんの姿が半分くらい隠れていても構いません。計算ずくです。一応、僕なりにスケッチブックには表情まで写し取ってあるから大丈夫なんです。

もちろん、チャンスは一回です。セルフタイマーの設定をして、何度も繰り返し撮影していたら、それこそ恥ずかしくて人前に出ることさえできなくなります。怪しげな人にはなりたくありません。僕は健全な歩き遍路の旅人です。この第五十九番札所に着くまでには、野グソもしたし、立ちションもしたし、少しは怪しい行動もしたけど、非常事態だったんだから仕方ありません。基本的には僕は健全な歩き遍路の旅人なんです。写真を見て、怪しげな行動の証拠だと思っではいけないのです。





応援してくれる人がいるとうれしくなります。力が湧きます。どれだけ落ち込んでいても、どれだけ心が弱っていても、どれだけゴールが遠く見えていても……。

第五十九番札所を出ると、次の札所までは三十キロ以上も離れています。しかも、山の上です。西日本最高峰だという石鎚山へ向かう途中にあるといいます。遙かに見える山の頂は白く彩られています。どれが石鎚山かは分からないけど、とにかく気が滅入る一方です。

ピロリロリンとケータイ電話にメールが届きました。夏の遍路と一緒に歩いたタカハシさんからの応援メッセージです。しみじみとうれしさがこみ上げてきます。だんだんに辺りが暗くなってくる頃、二割増くらいで心にすきま風が入りやすい頃です。そのタイミングで応援の言葉が届いたら、心の中へ直球ストレートと真ん中にズドンです。タカハシさんが女の人じゃないのが少し残念だけど、この際だから我慢します。

僕としては、翌朝一番に第五十九番札所を攻略し、その日の内に第六十四番札所までクリアして距離を伸ばそうという心づもりです。暗くなってから歩かなければなりません。遠くに見える、あの高みを目指して、ゆっくりゆっくり、それでも確実に応援の言葉を胸に歩きます。



夜中になっていました。お四国冬の陣とでもいうべき第四期歩き遍路を始めてから何日も経っていないというのに僕の足にはマメができ、マメができで痛いというのに夜中まで歩いているんです。僕は何をやっているんでしょう……。何って、ただひたすら歩いているだけで、それ以上でもそれ以下でもないはずです。歩き遍路です。

そこから先は山道でした。先の山道へ進むほど危険が好きな人間じゃありません。寝ます。東屋があつて、野宿には最適です。しかも、そこにはふとんが置いてあります。我々のような人間のためにあるんだと信じて使わせていただきます。テントの中に引っぱり込み、ぬくぬくと寝場所をセットしました。完璧です。

僕の寝袋はスリーシーズン用という設定で、春・夏・秋がその守備範囲になります。冬は想定外です。寒いんです。ということではなんと温かいのかと感動しながら寝袋とふとんを併用させていたできました。寝袋とふとんでは何がどう違うのか分からないけど、寝袋で寝ていると足先がメチャクチャ冷たくなります。ふとんでは冷たくならないのになぜなのかと不思議に思います。ふとんには僕らを温める特殊能力が備わっているみたいです。そんなふとんが東屋においてあるんだから、お四国の温かみはすごいんです。何よりも心が温まりました。



いつでもどこでも納経所の始まりは朝七時、常なることです。できれば、その時刻に近いうちにお参りをして次の札所を目指すのが歩き遍路のペースとしてはいい感じになります。なので、まだ薄暗い頃から起き出して、何となく明るくなりつつある山道を進みました。意外にも歩きやすく見えたのは、雪が積もって周りが白く、明るく見えたからかもしれません。雪の功という言葉のすごさが分かったような気がします。

歩きやすく、見えたんです。そう、見えた……、見える明るさがあったんです。決して歩きやすいのと同義ではありません。歩きにくいんです。怖いんです。滑るんです。ついでに寒いし冷たいんです。雪道なんて大キライです。

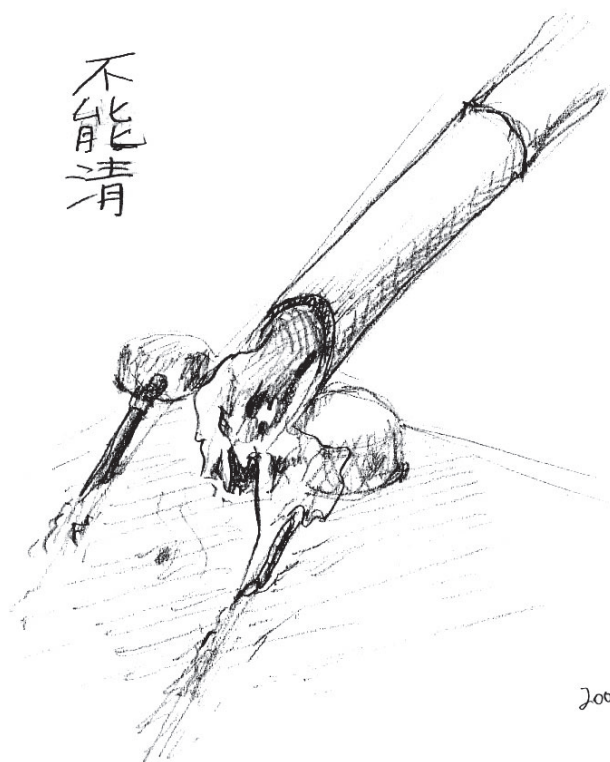
雪山を目指すほど山が好きな人がいます。僕は違います。いつの間にかそういう場面に行き会うことはあります。屋久島でもそうでした。九州の南の島に雪が積もっているなんて反則です。あの時も、苦勞して歩いていました。……そして、第六十番札所が見えるその時も、同じでした。自分が雪の中を歩いていることの現実を仕方無しに受け止めつつ、それでも自分の中には疑問が湧いてくることもあり、山門が見えた時には中途半端な平静さを心に感じます。歩くこと……全てを浄化する作用があるのか……恐るべきパワーを秘めています。雪の山門でした。



不能清

完全に凍りつき、

清めることがあたりず……



2005.12.27

凍結。

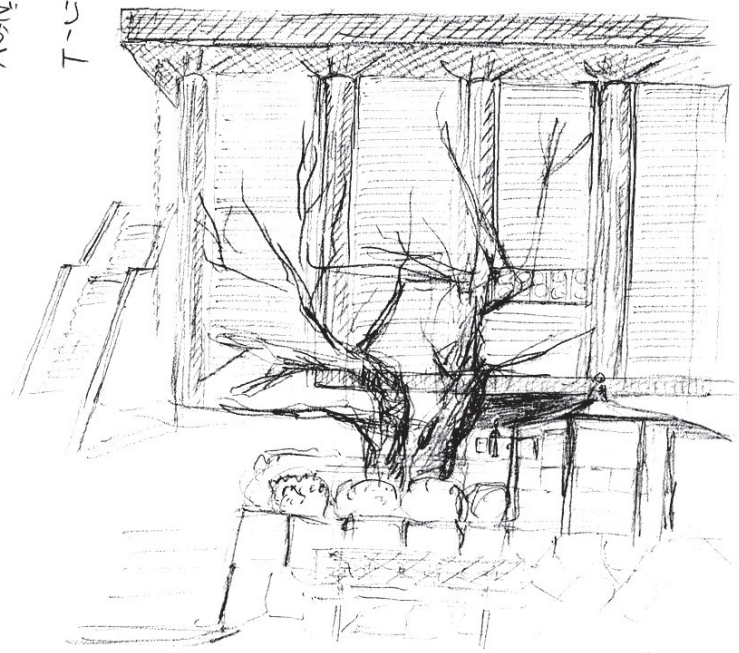
僕は汚れの多い人間です。内側も外側も汚れっぱなしです。内側の汚れは落ちにくいけど、せめて外側の汚れを落とすフリぐらいしておかなきゃ仏様に失礼というモンです。……というわけで、手を清めようとしたところ……、僕に選択肢はなくなりました。洗えません。選びようがないんです。ガチガチでした。

小さいころ、時々、水道が凍りついた朝がありました。蛇口に手を出し、グルグルひねっても水が出てこないんです。あれあれ、と思って何度も繰り返しているうちに、水を出そうとしていたのが止めようとしていたのか分からなくなってくる始末です。最近、水道が凍ってしまうことが少なくなったような気がします。地球温暖化のせいか分かりませんが、不便を感じない生活が続いていました。

それが、山の上、横峰寺で久々の……、というか、これは過激な凍りつき方でした。パツと見たところ、水が流れているようにも見えました。でも、それは、流れたフリをしているだけだったんです。流れたフリをしたまま凍っていました。柄杓たちも水に頭をつけたまま動けなくなっていました。

少しは不便な経験もしていた方がいいんだと思います。人間の幅が広がりそうに思えるからです。仏様ゴメンナサイ。僕が汚いのは、凍りついて不便な水場のせいです……。

強い守り。



コンクリート

どかんとどかく

聖堂なるものが建つ

この中に

大田如来さんと

お大師さんが

いるんだって

木が見えないよ……

2005.12.27

いきなりものすごく、怒濤のように変化が感じられました。凍りつく山の上から下界へと我が身を移し、さらに自分を磨く旅路だけど、意外なほどにすんなりと下山してしまいました。山の中にはなかったようなモノたちがたくさん出迎えます。アスファルトの道に自動販売機、二十四時間営業の便利な店など、日頃は当たり前に見えるモノたちが、固い面持ちで街にたたずんでいました。山にはない、街の表情です。

着いた第六十一番札所の本尊さまは堅固なコンクリートの屋敷に住んでいました。外側から見ると、博物館とか美術館みたいな雰囲気を醸し出しています。お寺というイメージとは少し違うように思いました。僕が思ってお寺のイメージは、まず木造建築です。古めかしい柱が立っていたりして、その上に重厚な瓦屋根が乗っかっていたりして、ふすまには隙間が開いていたりなんかして、風通しがよかったりして……。もし火事になったらあつという間に燃え落ちてしまったりして……。勝手な思い込みは禁物です。木造建築がすべてじゃありません。コンクリートも仲間入りです。身を守るのにも心を守るのにも、外側から侵入する何者かを寄せつけない強さの価値があります。じつくりと内側から充実していく、醸成されていくための守りです。内と外……。内に秘めたモノを大切にできる外壁の役割を考えました。



信号機の上に「歩車分離式」という文字が書かれています。はて、どういう意味だろうと、暫し考えました。そして、信号機を見比べると、自動車用の物が赤であるのにも関わらず歩行者用の物が青になっています。之は異な事……という状態です。それから、この状態に長所があるのか、と考えるに至ります。自動車用信号機が赤を示すとなれば、即ち、交差点に進入する原動機付きの車両は皆無となるはずですが、その瞬間を逃さず歩行者用信号機が青となるなら、老若男女問わず安全に交差点を横断できることになり、非常に安全であるという結論に達します。さらに加筆するならば、歩行者が縦横無尽に横断することが可能となるため、斜め方向へ進むことにより複数の信号機に煩わされることから解放されます。見事なり「歩車分離式」であります。

交通事故とは悲惨なものです。そこに関わった人たちが全てが不幸になります。直接の被害者、被害者の家族を始めとして、その知り合い、それを見た人、助けようとした人、助けられなかった人、加害者までみんなが不幸の底に突き落とされます。それを少しでも減らそうという工夫の姿が「歩車分離式」なのかもしれません。もちろん、待ち時間が長くなったりする弱点もあるし、完璧に事故を抑制することはできなかったりもするけど、安全のためにできることは何でもやりたいんです。大いに応援します。

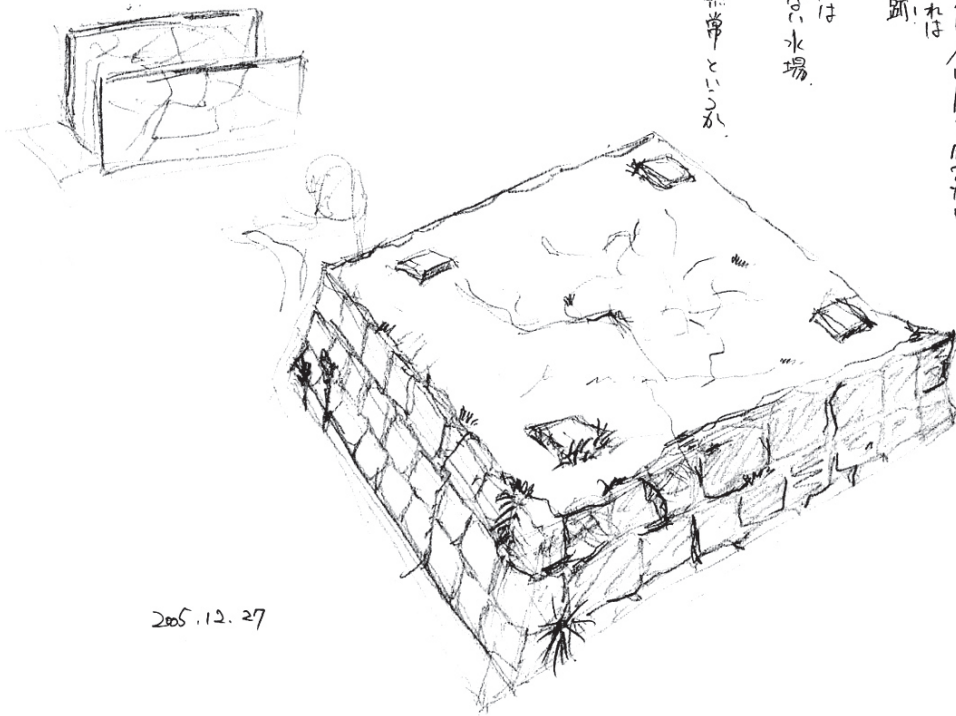


廃虚

あまごるに合用を成せるに  
まじりては  
鐘楼跡

向いには  
氷の出る水場

諸業無常というが



2005.12.27

次……。

諸行無常とはいいいながら、見事なまでに「跡」となってしまう姿を見ると、やっぱり心に寂しい隙間風が吹きます。ものがなくなることを本能的に負の出来事としてとらえることが人間なんじゃないかと思いました。

分かっているんです。物はなくなるからこそ貴重だし大切にしなければいけないんでしょう。大きな考え方をすれば、輪廻転生、全てが次への段階へと向かっていきます。

明るく考えてみました。例えば、第六十二番札所にあった三段ほどの石垣、これは土台としてはいつまでも強く存在しうる物です。次への段階が見えます。礎の上にはもう一度すばらしい鐘楼が建つことができるんです。なくなってしまうたかのように見えるけど、やっぱり次への布石を打っていたのかもしれない。

人間には、本当に、次への段階があるんでしょうか。僕にはまだ分かりません。でも、それを信じられたらどれだけ幸せになるのかと感じます。昔から人間は死というものを恐れ続けてきました。当然のことです。肉体は滅び、動かなくなってしまういます。じゃあ、それまで動いていた感情はどうなってしまうのかということ。天へ昇り、また、他の命として心が受け継がれると考えたら死の恐怖から少しだけでも遠ざかることができます。全ては無から生まれる……、やっぱり僕にはまだ分かりません。

ニまそつ。

コマイヌとらものたちが

神社で僕らを迎えてくれる。

こまは

象が僕を迎えてくれた。

やさしそうな象。

ちょっとうれしくなりました。



2005. 12. 27

象だぞう！

インドという国のそこはかない魅力というのか魔力というのか、とにかくスゲエーと思ってしまったことがあります。宗教観についてです。まず、神様がメチャクチャたくさんいます。僕には全く理解できないレベルで個性豊かな神様に満ちあふれているみたいです。来る者は拒まず……といった具合に、どんどん増えていったという噂も聞きました。全てを飲み込む包容力、怖い感じがします……。僕はびっくりしました。象の顔をしたら神様がいます。まあ、ホントにいろんな神様がいます。しかも、どこぞの神様がいくつかの神様の首をチョン切ってしまい「こりゃイカン」と、首をつけてみたところが象の首だったなんていいいます。もう、宇宙的規模の発想力です。

そして、第六十三番札所では象が僕を迎えてくれました。日本にまで勢力を拡大しているのか象の神様……。すごい力です。でも、その姿形は少々かわいすぎます。「コマイヌ」なんて言葉の響きはかわいいけど、実際の姿は高く評価できるほどのモンじゃありません。もし「コマゾウ」なんて言葉があっても言葉の響きはかわいい感じはしないけど、実際の姿はともかわいいものでした。僕の趣味にバッチリ当てはまるセンスです。

本物の象は大きくて強くて畏れの対象にもなりそうだけど、その畏れは親しみにも通じるものかな……と、チラッと考えました。

くぐることに意義がある。



象に迎えられた後は「お迎え大師」が迎えてくださいました。そして、その隣には「くぐり吉祥天女」がいらっしやいます。いろんなヒトたちがいらっしやる所でした。

くぐるように立っていらっしやるわけだから、そりゃ、くぐらなきゃ失礼ってモンです。何があるのか分からないけど、とりあえずカメラをセットしてからくぐりに行きます。自分の顔が見えるように後ろ側からくぐりました。……って、メチャクチャ失礼な振る舞いをしているような気がします。いや、気のせいです。くぐってみると、凡人の僕には何も見えず何も感じられず、ただ、石の下を通ったという事実だけが残ってしまいました。やっぱり、失礼……、無礼者です。

東大寺の大仏さん、鼻の穴と同じ大きさの穴が柱に開いているといつて、くぐったりします。それをくぐれたら幸せになれるとかいって、大人になってから挑戦しました。幸せには過酷な挑戦が必要なんです。途中で引っ掛かるかとドキドキしながらも、何とか通り抜けることができました。なぜかその時はスーッ姿で、ネクタイもしていたんだけど、そんなヤツがモソモソと穴から出てきたら、気持ち悪くて周りに迷惑をかけていたかもしれません。何か、くぐり抜けた時、その何モノかの力を浴びるんでしょう。偉大なる力を浴びて、僕はさらに歩き続けます。長い一日です。



僕の中ではストライク!

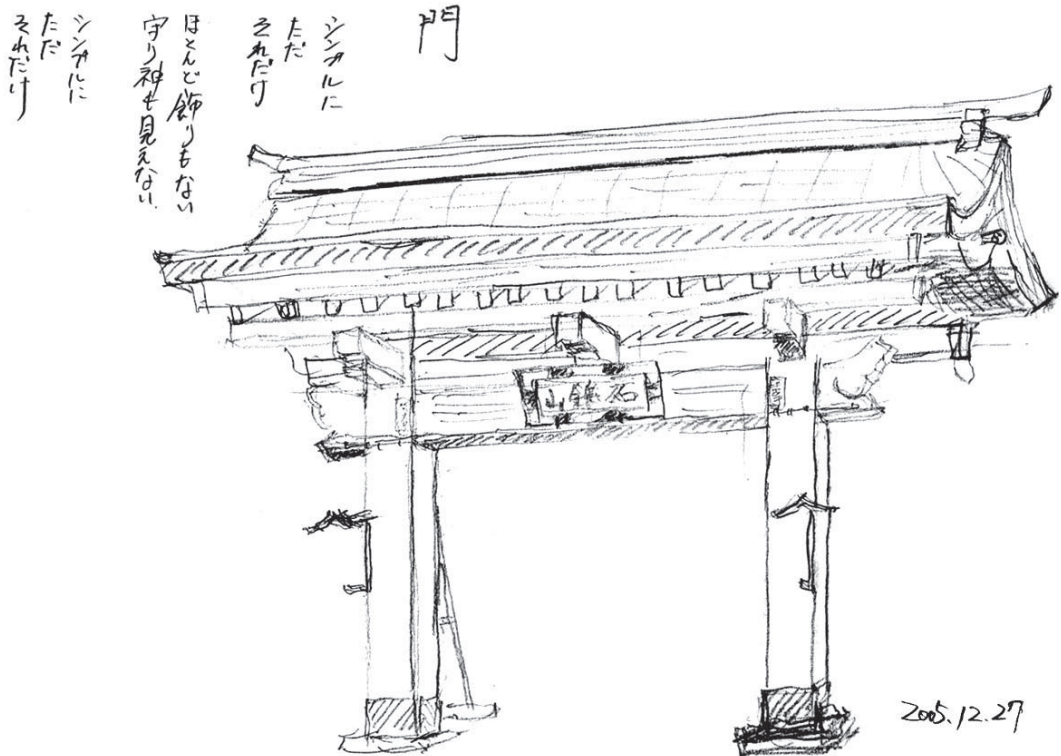


間抜けなんです。そう、間違いありません。僕はよくタイミングを外してしまいます。ここぞという時に、見事なくらいにポイントを外した行動を取ってしまうのが悲しい性です。

そんな僕に負けず劣らず外してしまったヤツがいました。「甘酒アイス」です。本来の僕の中では、完全に直球と真ん中ストライク見逃しアウト、ゲームセット……というくらいにやられていました。でも、その時としては、大暴投フォアボール押し出し逆転サヨナラゲーム……というくらいの外れ方でした。寒いなあ、どうしようかなあ、と思いながらも近づくと、商品がありません。ああ、無情……。

確かに真冬の寒い時にアイスを食べようとする方が、タイミング的には外れています。仕方ありません。でも、人によっては、ただ名前だけに惹かれて、誘惑に勝てない場合もあるんです。サヨナラ勝利を収めたはずのフォアボール……、何とも不完全燃焼の感覚です。合唱コンクールで、ちょっとだけ失敗をして「完成度としては他のグループの方がよかった」と思っていたのに一番に輝いてしまった時にも同じような感覚になりました。逆に、精一杯やりきった時には、一番にはなれなかったけど大満足だったこともあります。

結局は自分次第……、自分の心が世界を変えるんですね……。



イメージとしては鳥居です。柱があつて、その上の両側部分からお互いに屋根が伸びて合体、ちよつとだけ外側へウィーンと張り出したら山門がほぼできあがります。山号の額を取り付けたら立派な門です。文句は言わせません。四国霊場第六十四番と示す石柱もたっていました。完璧です。

それなりに太い柱でした。それがコンクリートの地面から生えているから違和感があつたのかもしれませんが。二本だけです。しかも、柱の周りには仁王さんなどもいません。それで、違和感があつたのかもしれませんが。門の向こう側には軽トラックなんぞが停まっていた。だから、違和感があつたのかもしれませんが。とりあえず、何かしらの違和感が僕に入り込んでいました。

どっしりした山門が多かつたように思います。柱の数としてはズドンズドンと八本くらい立っていることが標準装備のような気がしていました。ちよつとした家のような感覚です。別に、柱なんて二本あれば充分なんですね。山門は成立していました。それなりの建築様式があり、長年の間に培われたスタイルなんですよ。柱は八本ズドンズドンなんて、僕の勝手な思い込みです。

人間にもいろんなタイプがあります。豪華絢爛に自分を表現する人もいるし、僕のように慎ましやかに控え目な者もあるのです。暗いやツ……ではなく、慎ましくそのスタイルで自己主張です。



笑顔はいいなあ、と常に思います。常に笑顔でいられたらいいなあ、とも思います。笑顔は笑顔を招く、笑顔は幸せを運ぶ、そう信じて生きてきました。実際に笑顔を絶やさないことはとても大変なことで、僕の笑顔は引きつり、ニヤニヤとなり、最後にはドカーンといきなり怒りの面になってしまうことも多々あります。

ニヤニヤした仏様を見たことがありません。どっちなかといえば、冷静さを保った表情をしていることが多いような気がします。でも、昔から人々は笑顔を大切にしてくれているのかな、とも思い直します。パツと見た時には冷ややかに見える表情も、実は慈愛に満ちていることがほとんどです。

弘法さんはどんな顔をしていたんでしょう。僕は会ったことも話したこともないから具体的には知らないけど、厳しい修行をした人だから、強面なんじゃないかと想像していました。肖像画を見ても、真面目えくな顔をしてすわっています。それが、笑顔のやさしさを前面にアピールしている弘法さんがいて、僕はとても親しみをもっていました。むしろ、とぼけたような顔といった方が正しいくらいに肩の力を抜いた表情です。こんな顔に少しだけ憧れを抱きます。何も考えてなくて、ぼよんと平和な顔だけど、本当はメチャクチャ厳しい修行に耐えてきた芯の強さのある顔……かっこいい顔だと思っくんず……。



先客。



温泉に浸かって体を温め、メシを食い、万全の態勢で歩き出しました。なのになぜ、すぐに僕は弱音を吐くんでしょう。しんどいんです……。寒いんです……。腹まで減ってきます……。

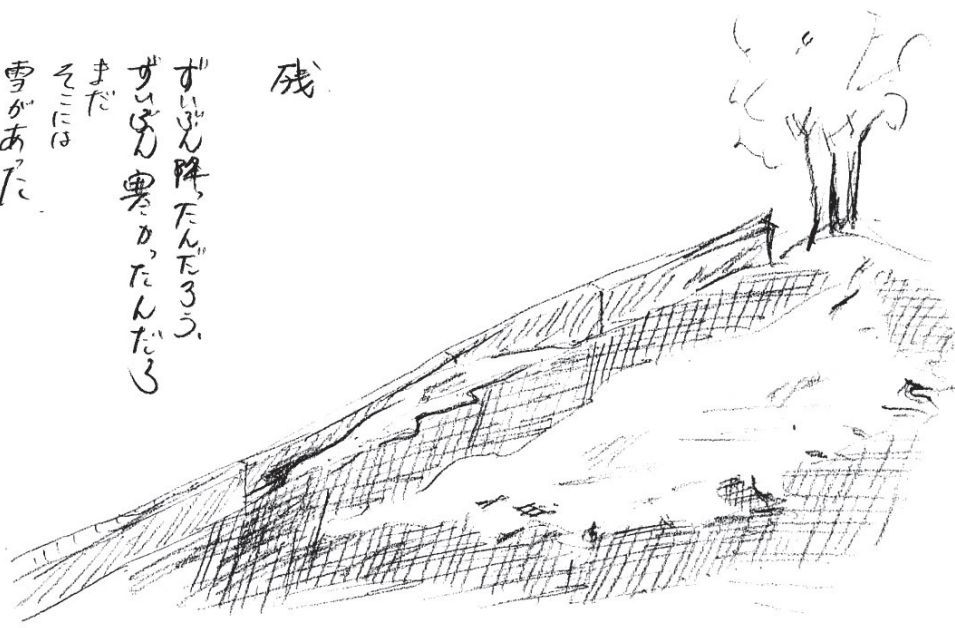
日本という国はすごい国です。大きな道沿いには夜中でも電気をバシバシに光らせて営業しているお店もあるんです。結局、僕の弱い心はファミレスへと吸い込まれていきました。そしたら、入り口に遍路グッズが置いてありました。おお、同じ屋根の下に歩き遍路の人がいるのかと思うと、それだけでうれしくなってしまう。タカハシさんからの応援メールもそうだったけど、事情が分かっている人間だけに通じる心のふれあいです。しかも、寒い夜中に、同じ道を歩いているのかと思うと、親近感たっぷりです。心と心は三センチくらいにまで近づいていますよ……。周りを見回したけど、体の方がどこにあるのか、正体を見極めることはできませんでした。

絆という言葉を大切にしている人たちがいました。人と人との結びつき、どこでどのように絡まっているのか分かりません。でも、一度つながりを感じたら、それも何かの縁、相手を敬い、お互いに慈しみ会つ心をもっていいこうよ、ってことですよ。絆という言葉の深みを感じます。

ファミレスを出るとき、もう遍路グッズの主は発っていました。

すいぶん降、たんたろう、  
ずいぶん寒、たんたろう  
まだ  
そこには  
雪が  
あ

残



2005.12.28

すぐに弱音を吐きます。しんどい、寒い、腹減った……、まあ徹夜で歩いてりや当たり前といえは当たり前なだけで、それにしても、しんどいし、寒いし、腹が減るんです。それに付け加えて眠いという現象が襲ってきます。体に蓄積している疲労も追い打ちをかけます。そのまた上に、ダラダラとした上り下りのアップダウンがあり、僕の歩く気持ちを吸い取っていききました。目の前にあるいろんな景色がモノクロに見えてきます。

絵の具は持ち歩いていません。色をつけることはできない状態です。んで、目に入ってきた景色はモノクロ……、全然問題ないはず。第六十五番札所の庭には雪が溶けずに残っていました。日陰にひっそりと白く残っていました。描き始めて、やっぱり自分の力の無さと読みの浅さに気づかれます。モノクロの世界といいながら、白という色を表現することの難しいの……、どうしたらいいのかわかりません。影をつけてあげようとしたら、雪が黒くなってしまうし、日陰の暗さの表現も同じ黒になってしまいます。何をやっても無駄でした。

あるようでない、ないようである……、色をつけたら白ではなくなってしまう……、汚れない白……、偉大な色です。真っ白な心などと人に当てはめたりもします。本当にそんな汚れない心などあるんでしょうか。僕の心の色は混沌としています……。

色。



秋の頃「あほのグランド」とも読める場所を発見しました。否、それは「あけぼのグランド」でした。じゃ……、「ケ」って何なんでしょう。周囲には他に文字らしき物は見当たりません。何の脈絡もなく「ケ」です。これはあまりに難しく、そのレベルはナスカの地上絵にも匹敵するほどです。誰が何のために……。明らかに睡眠不足の僕は、冷静に物事を考えられない状態です。理路整然と秩序立てて……なんて絶対に無理です。

普段、僕はいかに筋の通った考え方ができるかを課題にしています、それができるように努力をしています。数学で証明問題を解いていくような感覚です。分かりやすければ三段論法くらいで済むので、あんまり困りません。困るのは、極端に根拠となるものが多いか、逆に少ないか、どちらかだと思います。根拠になりそうな情報を活用できなかった時、僕の頭は見事に勘に頼ります。コンピュータとも評されますが、筋道なんて遙か彼方へ吹き飛んでしまう感性だけの世界です。課題は放棄されました……。

感性だって大切だ……と、僕の中でもう一人の自分が叫びます。どんだけ正しい理論だと思われても、本能的に「違うー」と叫ぶ場合があります。どんだけ間違った理論だと思われても、なんとなく「うん」と言ってしまう場合があります。その感性が合っていることだってあるはずです。ま、理論は後付けにします。



アホの寝顔。



今夜のお宿はどこでしょう。毎度おなじみテントではありませんが、実は少しだけ違う部分があります。屋根の下です。壁の横です。寒さをしのぐのには、この少しだけの違いが大きく寝心地を左右します。すばらしい設備です。……バス停なんだけど……。

ちよっと手前のトンネルで歩き遍路の人と出会いました。その人もなかなかワイルドな感じの人で、番外札所まで回っているとのことでした。もともとはチャリダーだったといいます。同類です。親しみが湧きます。アメリカに三年間ほど留学していたといいます。欄外です。羨望が湧きます。話をしながらバス停に到着、宿とすることに決定です。その人は、その場に寝袋を広げます。僕は、その場にテントを広げます。ニヤニヤと笑われながら、それでも、自分も笑いながら写真撮影です。

そんなことをしている間に、もう一人歩き遍路の人が登場です。中の状態を見てびっくりです。「ああ、大丈夫です。外にテント張りますから……」と、無駄話をしてから立ち去る時「うりゃあ!」と、ものすごいかけ声と共に荷物を背負っていました。聞けば約十五キロもあるといいます。僕の荷物の倍くらいです。信じられません……。

バス停に二人と一人、外と、中と、中の中と……、それぞれの夜が更けていきました。



理科の時間、百メートル高度が上がると何度気温が下がる、なんてことを聞いたような気がします。正確に数字を覚えているわけじゃないけど、実感としても分かる部分だったから納得できる話でした。

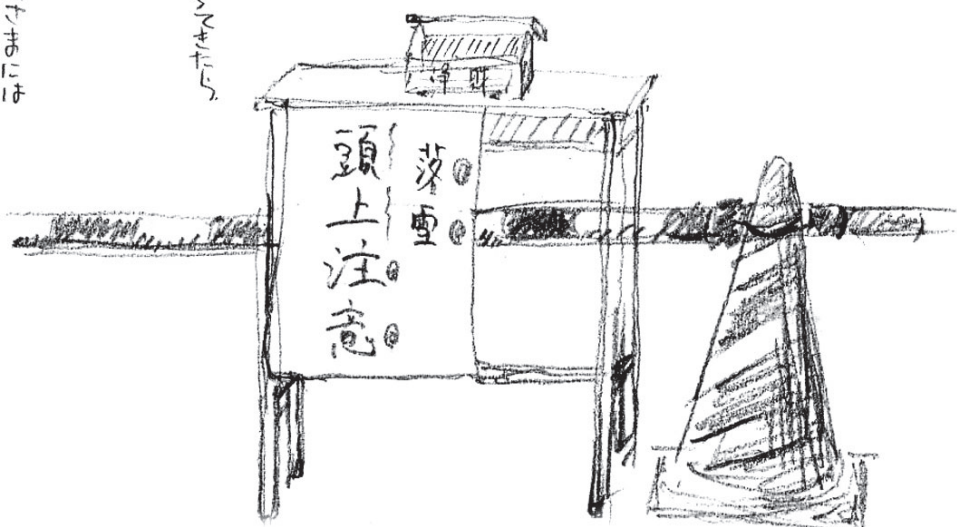
遍路道を歩いていて一番標高が高い寺、それが第六十六番札所、雲辺寺になります。九百メートルくらいの高さの所に建っているようです。だから、予想はしていたんです。辺りには雲が漂い、下界とは違った光景が広がっているだろうというイメージです。

ま、その様子を証拠に納めておかなければいけない、という義務感もあって写真撮影です。周りには誰もいなかったため、必殺セルフタイマー攻撃を繰り出しました。この手を出すとき、意外と難しい条件をクリアしなければならなかったことがあります。地面に寝っ転がってファインダーをのぞく必要があったり、斜めに傾いた地面に垂直にカメラをセットする工夫をしたりすることがあるんです。それが、この時はものすごくやりやすい条件に恵まれていました。ちょっとした石の上に雪が積もっていて、それをチヨイチヨイと加工してあげればセット完了だったからです。

周りの条件が整っているだけではないけど、自分の頭の回転で乗り越えることって、うれしいことだと思います。あとは、写真に入れるように、滑って体が回転しないようにするだけでした。

上から雨が落ちてきたら、  
そりゃあ  
いやです。  
たいさ  
これ以上大師さまには  
近づけません。

はり紙



2015.12.29

伝える言葉。

工事現場でもないのに立入禁止区画がありました。赤のコーンが工事現場の雰囲気を出しています。その向こう側に大師堂があります。でも、立入禁止です。……禁止されるとよけいにやりたくなるのが人間の性ってヤツじゃありませんか。心はウズウズです。

中学生くらいの年代が一番ひねくれていた頃だったのかもしれませんが。右と言われれば左、上と言われれば下を見なくなる感じ。仕方ない、聞くだけ聞いておこうと思えるのが友達の言葉、絶対服従で反論できないのが先輩の言葉、聞くのもイヤなのが先生の言葉、聞くことに反抗するのが親の言葉……なんて分類ができそうです。特に「君らのためを思うからこそ……」などと言われようものなら、絶対に聞くものかと決意を固めたりします。

大人になって分かることですね。いや、本当にその人のことを思っただけの言葉ってヤツです。軽い気持ちじゃないんです。相手は深く受け止めてくれないかもしれない、でも、伝えたい言葉があります。少しずつゆっくりでも伝えようと思いつけることが大切になるんでしょうか。ただの理想かもしれないけど、思いがあったら伝わりと信じていきたいんです。本当に伝えたいことが伝えられる人間性を高めていきたいんです……。



数。



数の迫力ってすごいと思います。言葉で理論的に説明できないほどに、得体の知れない何モノかが僕らに迫ってくる感じです。痛感するのは運動会、応援合戦の時、普段だったら何となく力を抜いて生きているように見える人たちが、死にものぐるいで大声を張り上げているのは圧巻で、好きです。声の圧力で吹っ飛ばされそうな感じにさえなります。重なり合う迫力です。一人じゃできません。

雪の中からニヨキニヨキと姿を出す石像に、異様なオーラを感じました。もともと一人一人が何かしらの偉大な力をもった存在なんだと思います。そんな存在がたくさん集まったら、とんでもないことになります。喜びに弾んだり、悲しみに震えたり、楽しさに踊り出したり、怒りを爆発させたり……「感情」というモノが雪の中から湧き出てきたかのようにでした。たくさんの喜怒哀楽が一斉に湧き上がったんです。

結局、人間なんて感性で生きている動物なのさ……と投げやりに考えてしまいます。どれだけ偉いことを言ったって、本能の前に屈することが多すぎます。か弱くもかわいい自分なんです。感情たっぷりの石像、圧倒的な数の人間の声、僕は勝てません。圧倒的に真剣にまともって取り組む姿、見えないモノが見えてしまいうそです。絶対に勝てないと思います……。



修行も大詰め。

ガウタマ・シッダールタという名前を知ったのは高校生の時でした。たまたま知ったあの……という程度ではあるけど、なぜかその名前の響きは僕の頭の中に強くインプットされました。その人は三十五歳で解脱し、悟りを開いた者「仏陀」になったといえます。そして、沙羅双樹の下で涅槃を迎えたそうです。仏教の創始者というだけあって、人間としてはややこしい生き方です。

お四国の遍路も涅槃の道場へと進んできました。最後、安らかに横になる日も近いはずです。……が、とりあえず、その最初の一步は雪の中だし、全く安らぎは感じられません。讃岐へ入ったという事実だけが頭へ伝わり、靴には雪が入り込んで体は寒さに震える状況が続きます。寒くて手が動かないのも当たり前です。そんな時に限ってなぜかケータイ電話が鳴ったりします。浜松に生息しているはずの者が四国の高速道路を車で走っているといえます。こっちは雪の山の中……、そのうち電波も届かなくなりました。

俗世に潜むいろんな物事から抜け出すことはとても難しいことだと思います。そこから抜け出せたら気が楽になるはずです。でも、……僕には無理だというひがみも含めて……、この世も悪くないんじゃないかと考えてみます。楽しいことも悲しいことも、いろいろ一緒に、まだまだ生き抜きたいです。



可能性の増加。



二股に分かれた所をお互いに絡め合って引つ張る松葉相撲、だいたいヒマな時にしかやらないけど、ヒマさえあれば誰でもやったことがある遊びなんじゃないかと思います。じゃ、このお寺でそれをやろうとしたらどうなるのかと、どうでもいい心配が頭をよぎりました。葉っぱが三つに分かれているから、勝ち星が同じで千秋楽を迎えて巴戦をやるような感じでしようか。二者が輪になって右と左の相手と一度に対戦したらできそうな気がします。実際にそんなことを第六十七番札所で行っている姿を見たわけでもないし、自分もやったことがないし、まあ、どうでもいいことなんですけど……。

選択肢は多い方が自分の幅が広がっていきます。僕には中学生の時、初めて自分で進路を決定していく時期が訪れました。「勉強なんてやりたくない!」って親とケンカをした日もあったような、なかったような……。「私立高校なんて行かせられない!」って親に怒られた日もあったような、なかったような……。「公立高校合格おめでとう!」って親に認められた日もあったような、なかったような……。よく考えると、選択肢が僕の中には三つあったんですね。

三本に分かれた道……。二者択一よりもお得な条件です。三本に分かれた松葉……。きっと、いいことが一つ増えますね。





浜松人から連絡が入りました。場所から考えると三キロほどしか離れていない所を移動中のようにです。遠州から遠く離れた讃岐の国でニアミス……、会えたらおもしろいけど、こんなに離れた所でまで会いたい相手でもないか……。それに僕はメチャクチャ急いでいるんです。その日のうちに第七十番札所まで到達しておけば、そのまた次の札所までの約十二キロを夜の間に稼ぐことができます。悪いけど、長電話をしている場合じゃありません。さ  
らば、浜松人……。

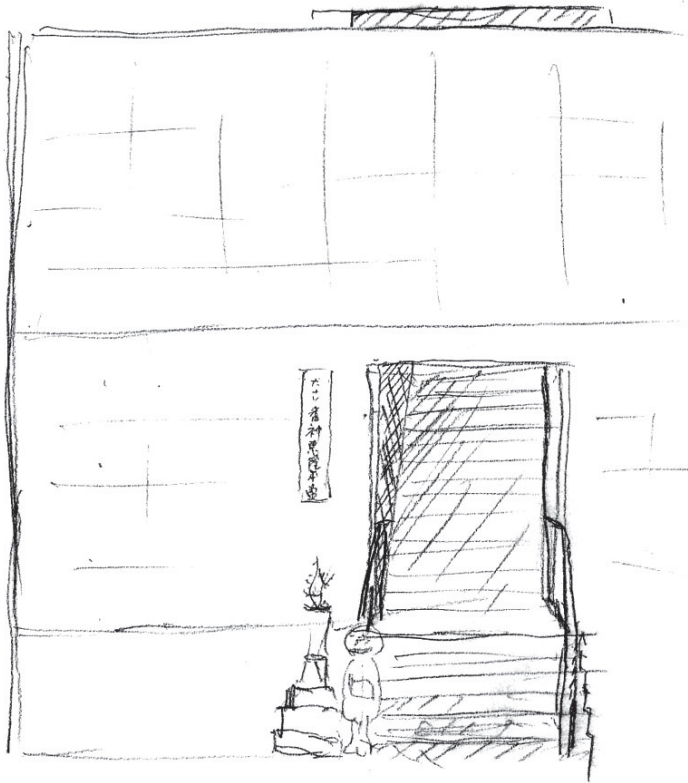
着きました。札所です。とりあえず第六十八番となります。で、僕のガイドブックの表記を見ると次の第六十九番までの距離がゼロになっていきます。何じゃこりゃ、という状態です。仰ぎ見る山門……よく見ると、「四国第六十八・六十九番霊場」と書かれているようです。不思議なこともあるモンで、同じ敷地の中に二つの札所がある所でした。なんでそうなったのか、きっと、歴史をひも解けばいろんな背景があるんでしょう。

二つのモノが出会った時、仲良くするかケンカをするか、その差は大きなものになります。できれば平和にいきたいです。憲法九条の精神です。弘法さんという敬うべき存在があるから、二つの寺が一緒にいられるのかもしれない。目指すモノ、大切です。ま、僕としては第七十番への道が近くなって、ラッキーでした。

カチカチ。

起ハード

コンクリートの下を  
通り抜けた所に  
仏さまがいます。  
固いですね……



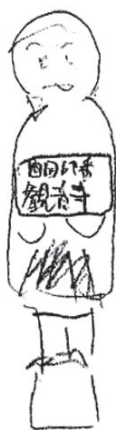
2005.12.29

仏様は敬うべき存在だと思います。大切にすべき存在です。だから、できる限りのもてなしをします。遍路として名刺代わりともいうお札を納めます。灯明をあげます。線香をあげます。お賽銭をあげます。お経を読みます。僕にできるのはこのくらいです。

昔から由緒正しい札所だから、多くの人たちがその仏様を拝みます。拝む相手はきつと心の中にいらつしやる仏様だと思います。でも、実際に姿形を世に現している仏様の像は木から生まれています。受けて、物理的に破壊されてしまうことだってあるわけです。いかにしてその衝撃を避けるか考えなければいけません。……周りが頑丈だったら破壊的なダメージから守ることができそうです。コンクリートで固めておけば、かなり頑丈なガードを固めることができます。ちよつとやさつこのことではじつともしません。

階段が終わる四段くらい手前からピヨーンと飛び降りるのが好きでした。いろんな場所で行います。自分の家は狭かったので無理だったけど、学校や駅、歩道橋や公民館など、至る所でピヨーンピヨーンと飛び降りていました。一番体全体に響くのがコンクリートの場所です。骨に直接「バキン」というほどの衝撃がくることだってあります。そう、コンクリートは固いんです。

大切に大切に、固めて固めて……。



道案内

君がいながら、たら  
六十九番か  
六十九番か  
分からなかつたよ  
オソカとう

2005. 12. 29

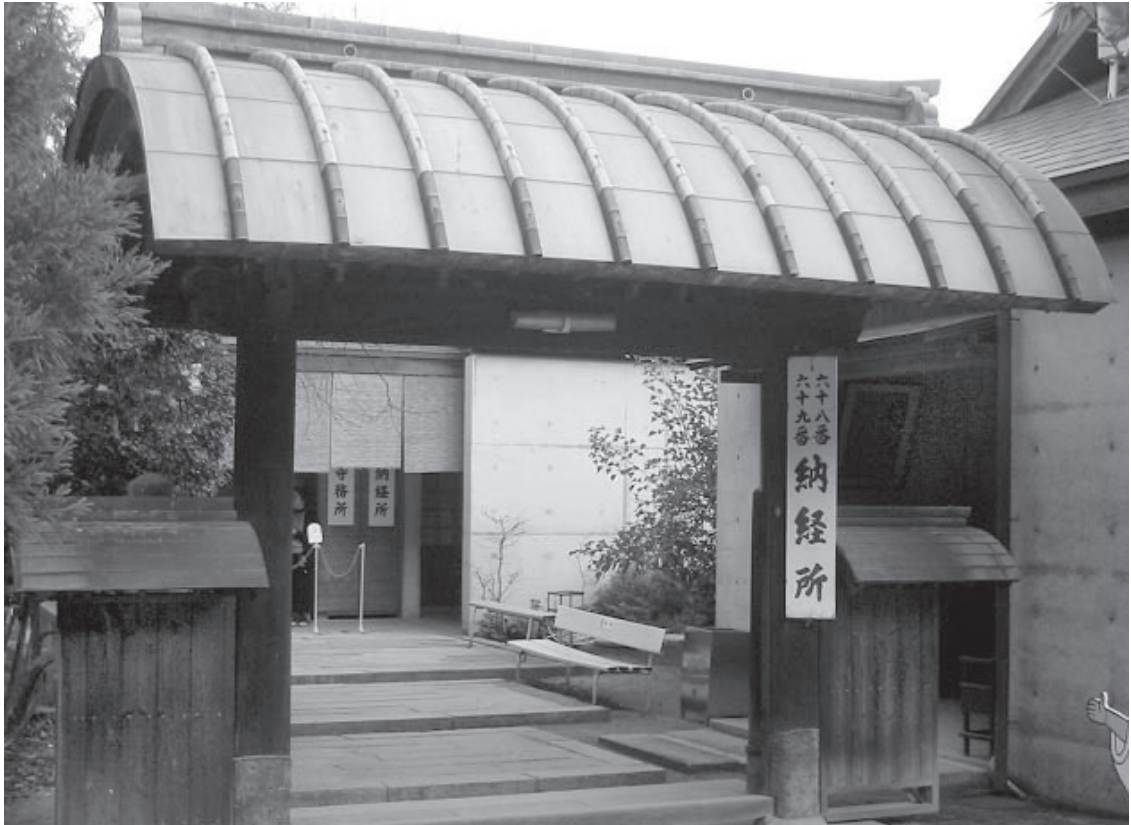
ポイントは絵よりも文字です。そう考えたら、絵なんて描く必要はなかった……のです。そのまんまだけど、その通りなんだから仕方ありません。じゃ、なんで絵なんて描こうとしたのか、その理由は簡単です。自分で自分にルールを課してしまったからです。

世の中には自閉的傾向の強い人たちがたくさんいます。自閉症だと診断された人から、何となく世の中の人々と違和感をもちながらも一応の社会生活を送っている人まで、それぞれの幅はあるけど多くの自閉人がいるようです。自閉の特徴を表すキーワードとしては主に三つが挙げられます。「社会性」「想像力」「人間関係」です。それらが具体的にどんな風に影響するか……「俺ルール」「ハイパー律儀」と表現する人もいます。自分で勝手にルールを決めて、それを無意味なほどに守るという状態です。で、僕にもそれが当てはまるんじゃないか、ってことなんです。

時間がないのにも関わらず、僕は絵を描かなければいけないという勝手な自分のルールに苦しみます。で、いかに簡単に描くか考えます。とても象徴的な対象を発見して大喜びです。そこにある文字情報が非常に大きな意味をもっています。文字の力というのはすごいんです。「四国六十九番」という文字が、同じ境内に「四国第六十八番」をもっていることをアピールしているようでした。



仲良し。



一緒にいるとリラックスできたり、楽しさが倍増したりする人間関係ってステキです。一緒にいる時間が長ければ長いほど幸せになれること……もう、うれしくなる一方です。僕の場合、自分で勝手にそう思うことはいっぱいあるけど、相手が同じように感じてくれないことが多すぎます……。フラれるばかりの我が人生です。

ここの札所はホントに仲のいい札所でした。山門にも二つの札所の番号が一緒に書かれていました。そして、ここまで……、納経所も一緒なんです。入る時にはドギマギしてしまいました。というのは、納経帳に御朱印をいただくのに僕はお金をいくら払うのか……という極めて世俗的な疑問を胸一杯に抱いていたからです。

仲がいいか悪いか、何で決まるんでしょう。「金の切れ目が縁の切れ目」なんて悲しすぎます。お金のことなんて関係なく相手のことを信頼して認め合うことができたなら、仲良し続きでいられそうです。お互いの長所も短所も分かった上で丸ごと「よし！」と思える間柄だったら最高です。ものすごくレベルの高い要求かもしれないですね。そこまで相手を思えるには時間が必要なんですよ。まず、話をするところから始めなきゃ……。

あ、納経所は独立採算制、それぞれのお金を納めてきました。



所詮、物は物、いつかは消え行く運命なのかと感じる看板でした。そりゃ、ピラミッドや前方後円墳みたいにとてつもなく大きな物だったら長い間その存在をアピールできます。それにしたって、少しずつ壊れていきます。そしたら、ちっぽけな庶民のお墓なんてあつという間になくなってしまふような代物です。物質学的には単に石の塊というだけであつて、付加価値なんぞは全くありません。もしも、その存在に託された思いが忘れ去られた時、墓石はまさに石ころへと戻っていつてしまいます。……ま、産業廃棄物です。

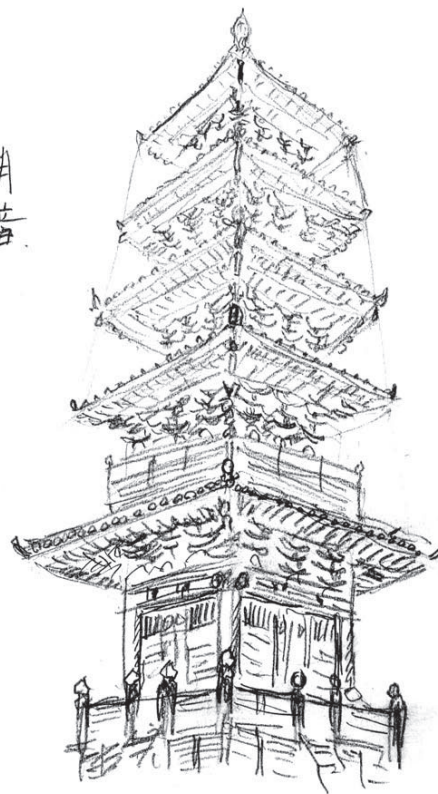
お墓がお墓だと思われるような時、まだ、その存在は石ころへ戻っているわけじゃありません。名前が刻まれ、在りし日の思い出が刻まれた墓石であり続けています。産業廃棄物として認めたくありません。忘れないでください。その人たちの在りし日をこの世から消さないでください。思い続けてください。

幸か不幸か僕らは物事を忘れます。忘れてしまいます。覚えておきたい大切な人のためにお墓はあるんじゃないでしょうか。

幸か不幸か僕らは物事を忘れます。忘れることができます。つらいことは忘れることができるんです。だから、いいことだけを覚えておくためにお墓はあるんじゃないでしょうか。

ふと、何かを想う時、お墓に立ち寄ってみようと思います。

遅々として進まず……。



明暗

あ、暗くなつてまた  
見ん、  
と思つていゝと

あ、明るくなつた  
と、ライトアップされた  
ナすが五重の塔

自分が書いたメモを見ると、「間に合った。五分前。余裕じゃん。」となっていました。納経所が閉まるのが午後五時、僕がたどり着いたのが午後四時五十五分、ということになります。五分前という時間を余裕があると感じているところに意識のズレがあるとかいいようがありません。時間の感覚がルーズなのは注意欠陥多動性障害にも思えるところです。AD/HDと呼ばれるタイプです。昔から時間はギリギリセーフかギリギリアウトが多かったことを思い出します。

お参りを済ませて、のんびりお絵描きです。立派な五重塔に挑戦します。だんだん周りが暗くなつてきて、のんびり描いているようなゆとりがなくなってきました。テキストに形を紙に落としていきます。時間との勝負がまた始まりました。マメがつぶれても、ひざの痛みの中で走つても、午後五時という時刻との勝負は僕のものになっています。今度は、さっさと逃げていく太陽との勝負です。負けが迫っていました。もう見えないほどに暗くなっています。まずい、やっぱり絵を描く能力は低いし、素早く描くなんて無理だった……と思つていゝと……あれ?……五重塔が青白く闇に浮かび始めます。ライトアップでした。さすがに遠くから目印に走ることができるような立派な五重塔です。きれいです。

手元は暗かったけど、ゆつくりと絵を描き続けました。



尊敬を込めて。



高校生の頃まで、僕のあだ名は「ウマちゃん」でした。何てことはない、ただ、顔が長いだけの話です。ビミョーに仕草や臭いなんかもオリジナルに近かったということもあるかもしれませんが。それが、だんだんに馬という動物から僕という存在が独立し始めて、「アクセントはウ」になっていきました。動物の「馬」と僕を称して言う「ウマ」とは以て異なるものとなっていったんです。

顔の長さは僕の家系の宿命です。ばーちゃんの葬式に来てくれた職場の人たちが初めて僕の家族の顔を見て「みんな同じ顔だ!」と驚き、遺影を見て「やっぱり同じ顔だ!」とまた驚き、笑いをこらえるのに大変だったといえます。

第七十番札所には動かない馬がいました。どうも親しみを感じてしまうんです。馬は高貴な生き物なんでしょうか。インドでは象顔の神様がいたけど、ここには馬顔の仏様がいました。馬頭観音と呼ばれる仏様です。とすると、顔の長い僕は、もしかしたら馬頭観音の子孫かもしれないじゃないですか。僕にも高貴な血が流れているのかもしれませんが。うふふ……。

祖先を敬う心は大切にすべきです。自分の存在にまで命をつなぎ合わせてきてくれたご先祖様には無条件に感謝と尊敬の念を向けていいと思います。命のリレーをするのが僕らの使命です。未だに僕は使命を果たせていませんが……。

冬はつとめて……。



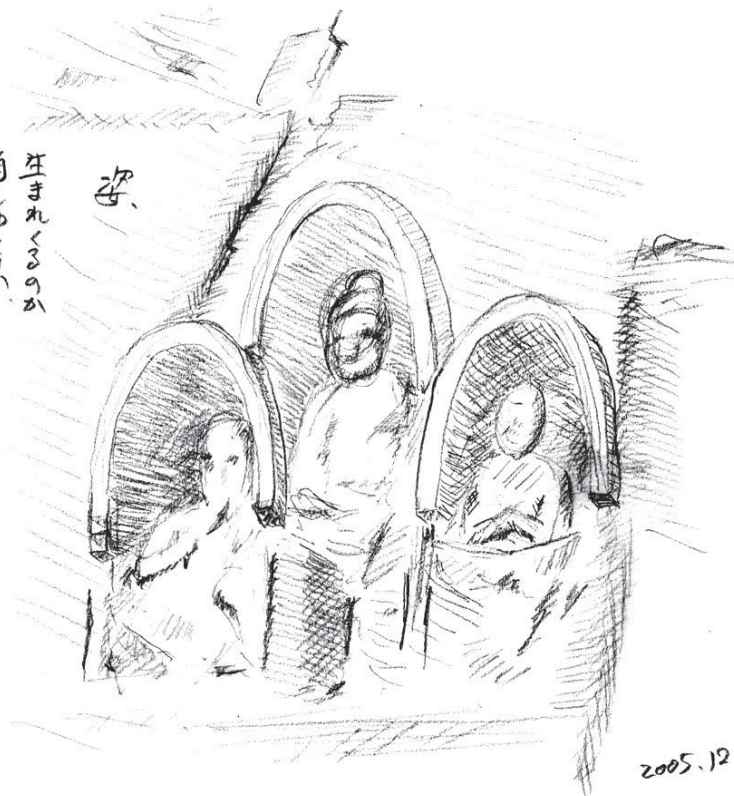
昔、清少納言は冬であれば早朝がいいと思っていたようです。僕には信じられません。冬の朝なんて寒いばかりで、おもしろくもなんともありません。最近は地球温暖化で平均気温が上昇しているのにも関わらず、僕にとっては冬の朝は大敵です。地球温暖化も進行しておらず、暖房器具も整っていない頃の冬がいいなんて、清少納言は氷河時代の生き残りに違いありません。

第七十一番札所で冬の早朝を迎えます。寒い朝です。この場所です。寒い早朝を迎えるために、僕は少しばかり無理をしました。前の第七十番札所では五重塔がライトアップされるくらいの時間までそこにいたけど、その後、夜の道を約十二キロを歩いておいたんです。おかげさんで銭湯に入ることまででき、朝一番でお参りもできるし、いい感じでした。冬の夜だって捨てたモンじゃありません。夜があるから朝があり、その良さを感じられるんです。全てが裏と表の二面性。……もしかしたら、裏と表と側面と、斜め後ろと右前の多面性かもしれないけど……。とにかく、一面だけで何かを断定することはものすごく恐ろしいことだと考えた方がよさそうです。だから、僕がその札所で早朝を迎えられることにも良さがあつた悪さがあるはずなんです。良くも悪くも一面だけをとらえて主張するのは不公平ってモンです。人間の感情と同じことだと思いました……。



生まれくるのか  
消えゆくのか  
顔もどんなか分らない  
それでも  
その偉大さと  
その優しさを  
感じさせてくれる

姿、



2005.12.30

おくゆかしい笑顔。

しばらく前に、僕には到底許し難い出来事がありました。それはアフガニスタンで起こった事件です。啞然としました。磨崖仏が一瞬のうちにバラバラになった映像を見て、魂が抜けたような感覚にもなっていました。どんな理由があつたって、人間がつくり上げてきた文化を破壊するような行為が許されてはいけません。人間の文明も発展し、文字や言葉や哲学が大いなる力をもつ時代に、全てを否定するような暴力的な行為が許されることがあつてはなりません。日本国憲法は第九条で戦争の放棄を掲げています。コスタリカの憲法も武力を認めていません。それで国が成り立つからです。人間の叡智が詰まった決まり事です。そんな人間の叡智を根底から揺るがす行為は全面的に否定すべきだと思います。

自然の行為によるものは仕方ありません。むしろ、それは当然のことであり、諸行無常の理です。第七十一番札所の磨崖仏、その顔は風雨の中で消え入りつつあります。だんだんに穏やかに丸くなる心を表しているかのようです。はつきりした顔立ちは分からなくなっているけど、やわらかに微笑む顔が見えるようにも感じられます。平和の象徴、笑顔です。

強く主張しなくてもいい、穏やかに、でも確かで揺るぎないやさしさを秘めた表情が湧き出る人生を送りたいと願います。





ひっそりとした岩屋の中、仏様が座っています。ろうそくの光に揺れて何かを語らっているかのようです。

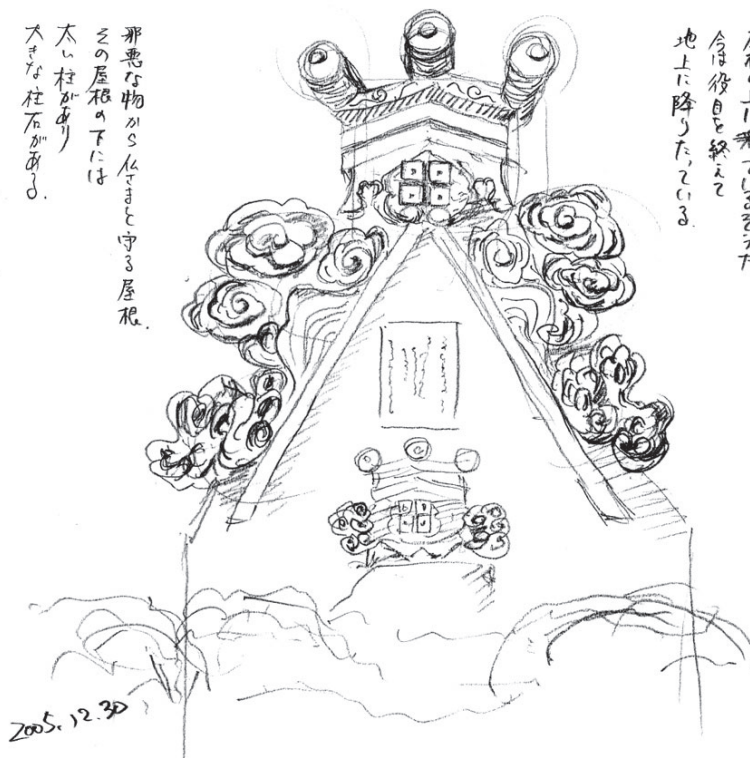
岩の寺……第七十一番札所はそんな感じがします。外で見た磨崖仏も岩から生まれていたけど、建物の中にも岩の風味が漂っていました。野性的で少し荒々しい趣です。質実剛健、決して派手には主張しない岩たちが、重厚な存在感をじんわりと僕に与えてくれるんです。かつこいいです。

男らしいとか女らしいとか、ジェンダーフリーの考え方からしたら、あり得ない考え方かなあ、とも思います。この「らしい」という言葉が曲者なんですね。男と女の性差は確実にあるわけで、その差のとらえ方次第でプラスにもマイナスにも感じられるってことです。ま、いいや……と深く考えずに……僕はお寺の雰囲気をも男らしいと感じ取りました。筋肉質な体格をもったお寺だと肉体的な性差を見たような気がしたんです。

僕は軟弱者ながら、一応生物学上はオスの部類に入ります。んで、皮下脂肪があまりないことをチラリと見て、「割と筋肉質だね」と女の人から言われたことがあります。必要最低限のパーツを肉体に取り入れているだけなんですけどね……。わびさびの世界にも共通するんでしょうか。仏の道も然り……。不要なモノを極力そぎ落としたら、本物の存在感が現れるのかもしれない……。

## 瓦

こんな重たそうなものが、  
屋根の上に乗っている。さうだ、  
今は役目を終えて  
地上に降りた、こいる。



邪悪な物から守るまじく守る屋根。  
その屋根の下には  
太い柱があり  
大きな柱石がある。  
いろいろなものに守られている。  
いろいろな目に見守られている。

重厚な安心感。

植え込みの向こう側に、重たそうなモノが大きな体を二ヨキツとせり出していました。そんな重たそうなモノが屋根の上にあつたというんだからびっくりです。そんなに無理することはないのに……と思つてしまいます。

屋根の上から見た景色つてのは格別なモンです。そんなに高さがあるわけじゃないけど、小さい頃は時々実家の屋根に上りました。自分が一番上にいて、世の中の全てを見下ろしている気分です。隣にはもっと立派な家が建っているし、実際問題としては見下ろされる受身的な立場のはずなのに、偉そうな気分になつてしまふんです。瓦屋根の上でガサゴソしていたら、家の下ではパラパラと何かが落ちていたかもしれません……。

屋根全体に瓦が乗っていたら、それはそれは重たいはずですが、支える骨組みや土台の負担が大きくなるのも当たり前です。ヤワな建築構造じゃ倒れてしまいます。だから、太い柱が支えます。大きな礎が支えます。しなやかに、堅固に守る日本家屋です。

土台が瓦を支え、瓦は雨や日差しを防いで人を守ります。瓦がなかったらえらいことです。でも、それだけじゃなさそうです。角の飾り瓦は僕らの心を見守ってくれているように感じます。重たそうなモノが、大きな体を見せて、安心感をくれるんです。役目を終えた大きなモノが、地上で僕を迎えてくれました。

支持率。



臭くなります。汚くなります。旅の者の宿命です。冬の時期であろつと、一日中歩いていれば汗もかきます。アスファルトの道路には車が走り、排気ガスをたらふく味わいます。臭くなり、汚くなります。

一服の清涼剤として、さわやかさが必要です。だからか……、僕の目にブドゥンと飛び込んできたのは案内看板の文章ではなく、その前に立ててある説明書きの表示でした。ボタンがついています。児童科学館みたいな所にもあつて、そのボタンを押すと模型が光ったり動いたり……というような、昔ながらのボタンです。それを押せばさわやかさが提供されるんです。

声のさわやかさって誰が決めるんでしょう。もしも、僕が決めるんだったら、声の主は間違いなく女の人になります。それも、二十代の人に限ります。さらに条件は厳しく、音域がだいたいメゾソプラノくらいの人であり、胸声であるにも関わらずよく響き、テンポはアンダンテ……それらをクリアしたら、さわやかな声として認定してあげます。もちろんこれは僕の設定であり、独断と偏見以外のナニモノでもありません。他の人が決めたら全然違った条件になるはず。人の基準は様々……、多種多様です。

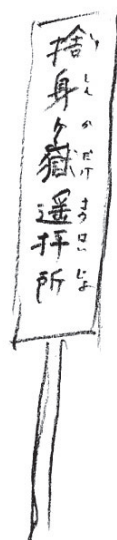
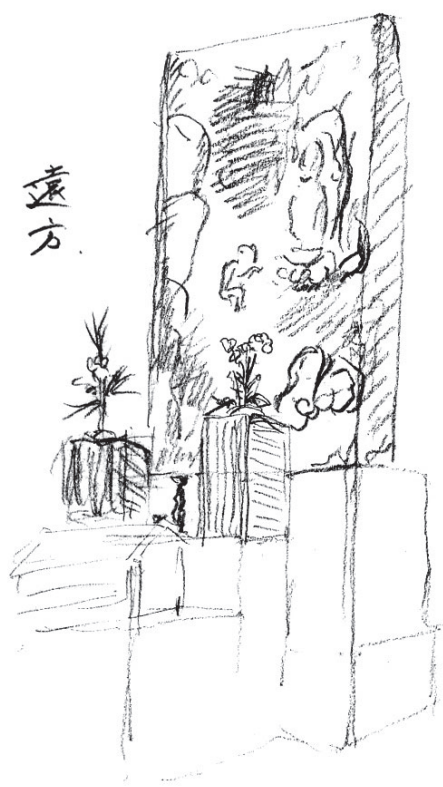
さて、表示された「さわやかな声」の支持率は何パーセントくらいになるのでしょうか。僕には分かりません。



体は遠く、心は近く。

山の中ほどから  
白い燈籠が、  
ひとき  
山の上のちやんと  
続いている  
あそこまでは  
行けない。  
……拝もう

遠方



2005.12.30

痛い……、ものすごく痛い……、朝から右ひざに激痛が走りま  
した。何となくごまかしながら歩いていただけ、あそこまでは行  
けないと思える所でした。

真魚といったそうです。弘法さんの幼いころの名前です。七歳  
の時、世の中のために身を捧げる行動を取り、それが第七十三番  
札所が興る縁起になったといひます。真魚少年、がんばりました。  
山の上から飛び降りたというんだから、まさに命懸けです。どう  
やら仏様は彼を認めてくれたようで、めでたしめでたしとなつて  
います。

世の中のためだなんてとんでもない、自分自身だけのために歩  
いているような僕です。もちろん心の中には何モノかの命が渦巻  
いてはいるけど、それだって結局は自分勝手な思い込みなのかも  
しれません。んで、右ひざはメチャクチャ痛いし、基本的に軟弱  
者だし……、とても山に登っていきこうなんて気持ちが生まれる余  
地がありません。遠くまで燈楼のようなモノが続いています。小  
さく見えるモノがいくつも続いています。見れば見るほど体が拒  
否反応を示します。

看板には「捨身ヶ嶽遥拝所」と書かれています。……そうか、  
ここから拝めばいいんです。看板があるんだから間違いありません。  
体は引いていただけ、心はめいっぱい参拝してきました。



甲山が甲山じゃなくなってしまふ……、いや、山そのものがなくなってしまう……。と変な不安が頭をかすめました。大切な場所がなくなっていく悲しさを思っただんです。直接的に人間が何かを大きく変えてしまふ力を手に入れたことによるものです。

環境にやさしくなろうとしてレジのポリ袋を減らしながら、二十四時間ずっと昼間のような明るさを保ち続けるお店があります。二酸化炭素の排出を減らそうとしながら、放射線物質を地下に捨てていく動きがあります。……僕は……、偉そうなことを考えながら、旅をして写真を撮って電気をたらふく使って文章を作っています。

ホント、身勝手な生き物だと思います。恐るべし……「人間」です。山をガンガン切り崩して土砂を採取し、自分らの生活の中に消費していきます。僕が日常的に土いじりをしているわけじゃないけど、絶対にどこかで採取された土砂と結びついているんだろうという確信があります。自分自身の手を汚さずに何か悪いことを押し進めていくような感覚です。しかも、すぐに自分を変えることもできません。

結局、自分のことは棚に上げて偉そうなことを発信していくことが精一杯の現状です。それでも何でも、できることはやらないと気が済みません。ホント、身勝手な生き物です……。



強くて怖くて気性が激しくて……、僕にとってそんなイメージがあるのが毘沙門天です。戦国時代、どこかの武将が崇拜していたようにも聞きます。

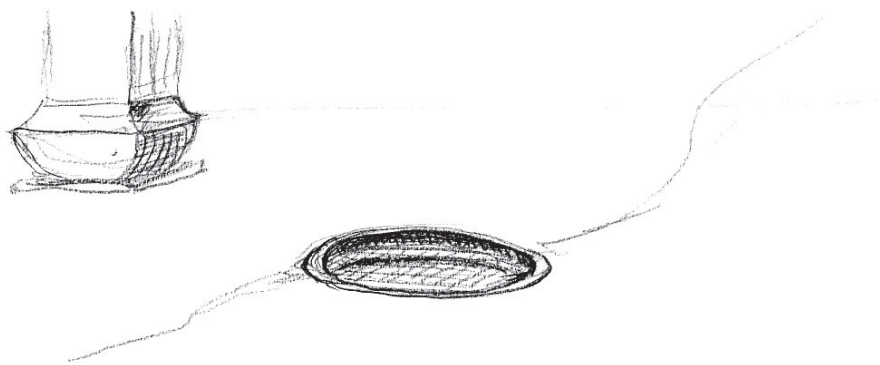
山の中からビョーン……いくら何でも画期的すぎるように見えました。トンネルの中の入り口からお堂が顔をのぞかせています。強引な印象さえあります。そこに祀られているのは毘沙門天です。あ、強くて怖くて気性が激しくて……、文句を言ったら祟られそうです。

自分のことを考えます。強くはありません。間違いなく弱い人間です。怖くもないと思います。何かと迫力がなくてナヨナヨしたヤツです。気性の激しさは少しだけあります。ただし、自分の中だけです。自分自身に対する喜怒哀楽は激しいような気がします。自分勝手に一人で怒って、自分勝手に一人で悲しんで……、それで解決させてしまふんです。本来ならもっと周囲にアピールをしてもいいのかもしれませんが。もっと人間的な感情を爆発させる必要もあるのかもしれません。でも、自分に自信がないから外へ感情を出すことができません。謙虚だなんて言われたこともあるけどそんなじゃありません。ただの軟弱者です。

強くて怖くて気性が激しくて……、僕も押んでみます。必要な時には僕にもそんな猛々しさが現れますように……。



2005.12.30



穴

釣鐘の下にある

穴

音響効果のためか……

僕の想像を絶する

何か

すごい

そんな

付から

音の意味があるにちがいない

能舞台の下には瓶が埋めてあると聞いたことがあります。ラジ  
オで聞いたんだと思うけど、その時は何とも言えない奥深さを感じ  
ました。足踏みをするドンツという音の周波数を最大限に生か  
す物だと言っていたはず……、昔の人ってすごいです。

穴がありました。第七十四番札所の釣り鐘の真下です。僕の発  
想は瞬時のうちに能舞台へと飛んでいきました。すごく重要な意  
味をもったモノなんだろうと勝手に想像して、勝手に解決してし  
まうのが僕の愚か者であることの所以です。恥ずかしい限りです。

恥ずかしい時に、穴がある……、ぴったりのことわざが頭に浮  
かびます。「穴があつたら入れたい」……ん、違う違う……、巡礼  
の最中に何と不謹慎な……、これこそ「穴があつたら入りたい」  
です。恥ずかしい思い、情けない思いは得意技です。人に負けな  
い自信があります。

恥ずかしさを失うことは自分の向上の停止だと考えます。何か  
をして恥ずかしいと思うなら、その恥ずかしさを乗り越えようと  
いう自分もいるはずで。その時は恥ずかしくて逃げ出したいくて  
も、実際には何とかして解決していくのが人間です。方法はいろ  
いろあります。弘法さんに祈るのも一つの手かもしれません。で  
きる限り、僕は自分の力で恥ずかしさも乗り越えていきたいと思  
います。傲慢かもしれないけど、僕は自分に負けたくないんです。

納得。

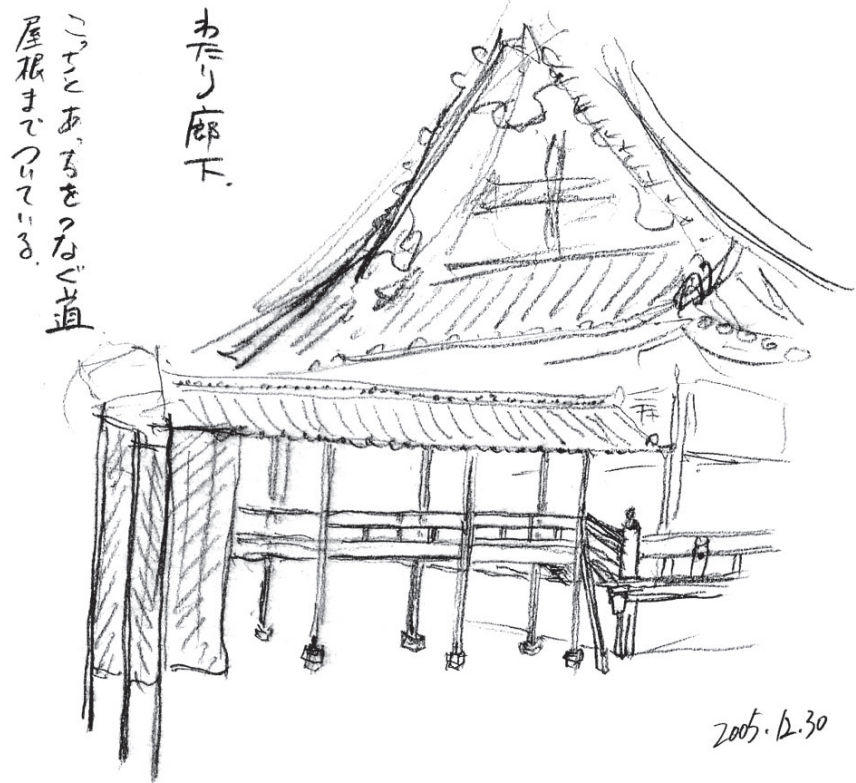


どこかの札所で「霊場協会の方針としては……」なんて言葉を聞いたことがあります。お礼参りをするのだの、しないだの……といった内容について教えてもらった時のことです。その時、遍路を取り仕切る団体があることに気づきました。なるほど、八十八もの札所があるんだから、まとめる役割がなかったら大変なのは大変です。そして、その本部が第七十五番札所にあるのは、そこが弘法さんの生まれ故郷だからってのも納得です。物事にはそれぞれ理由があるんですね。

理由がはっきりしていて分かりやすかったら納得できます。誰かに叱られた時でも、素直に「ごめんなさい」と言えます。いいことはいい、悪いことは悪い……シンプルに、ただそれだけのことなんです。だけど……だけど、ですよ……、僕は人間です。頭の表面では納得しても、心の奥底では納得できないことも多いんです。くやしいけど、相手の言い分に対して屈して従わなければならぬことも多いんです。ホント、くやしい話だと思います。きつと、何か正当な理由が隠れているんでしょう。見えないけど、そんな何かがあるんでしょう……。

理由が見えなくても「ああ、そうかな……」と相手に思わせてしまうような、そんな人徳が欲しいです。自分なりに伝えたい思いが、自然に醸し出せるような、そんな人徳が欲しいです。

名は体を表す……。



僕は自分の名前を大切にしたいと思っています。生まれた時に付けてもらった名前も、友達からつけられた名前も、どっちも大切な、僕を表す名前です。友達が初めて「うくん……、じろちゅうやなあ！」と口走り、「じろちよう」と呼ばれ出した頃は違和感たっぷりで妙な気分でした。でも、「じろちゃん」なんてかわいく呼ばれたりしていたら、どんどん自分の名前としてなじんできてしまいました。

名は体を表すともいいます。名前負けしている僕のこととは忘れることにして……、登場するのは善通さんという人です。「よしみちさん」とお呼びするんでしょう。そして、次に登場するのは第七十五番札所です。その名も善通寺……普通「よしみちでら」とは読みません。「ぜんつうじ」でしょう。息子である弘法大師空海が、感謝やら尊敬やらを含めてお父さんの名前をお寺に名付けたんだと思われます。善が通う……そんなすごい名前をもつ人、そして、お寺なんです。お寺の伽藍は立派な物で、名前負けすることなんか考えられないほどの立派さでした。

建物をつなぐ廊下がありました。きつと、その通路にも何か善いことが通っているんだと思います。どこでも同じ……善いことがあるんだったら一ヶ所に滞っているだけじゃなくて、循環することでも広く善さが行き届きます。善が通っていきます。





敬意。

分かつちやるけど……どうしようもなかったんです。許してください。これも写真を撮るためです。何よりもそこが優先されるのはズれているようにも思うけど、ま、そんなモンです。本来は大切に扱う意識を手で表すべきで、片手で大数珠を扱うのはおかしい話なんだと思います。

大学生のコンパで、とにかく厳しく注意された事柄があります。それは、ビールの注ぎ方です。注意する大きなポイントは二つでした。ラベルの部分を上に向けて注ぐこと、そして、片手は底の部分に添えながら両手で注ぐこと、という二つです。ラベルに関するポイントの起源は、薬品をビンから注ぐ時に垂れたりしてはいけないということだったようです。両手で注ぐことは、丁寧に注ぐことの表現じゃないかと思います。ビールは苦しい、酔っぱらって頭が痛くなるし、好きなモンじゃありません。でも、せっかくだから、せめて気持ちだけはさすがしく注ぎ注がれ、いい時間を過ごしたいワケです。

日常生活にはビールがあふれている状況はありません。でも、物をやりとりする場面はたくさんあります。慇懃無礼というほどにするのは困るけど、僕はできるだけ物と相手に敬意を表して両手を使おうと思っています。

なのに大数珠を片手で……、分かつちやるんですけどね……。

土俵際いっぱい。



2005.12.30

荒土俵  
き俵ぎや  
いつでも俺は  
かけ、ぶち  
荒れてるなあ……

フジケンからの指令が思い出されます。一つ目は夏の間に果たしました。二つ目は「第七十五番札所の辺り、角の旅館に泊まる」というものです。フジケンがそういうんだから、ナーカステキなことがあるんだろうと思って、その日は旅館に泊まることにしました。とりあえず宿泊手続きを済ませて時計を見ると……、まだまだお休みには早すぎる時間です。地図を見ると……、まだまだ歩ける距離に札所が待っています。行くべし！進むべし！……と、重い荷物は部屋に置いて歩き始めました。

体が軽い！ そんなに重たい荷物を担いでいるわけじゃないんだけど、それでも自分の体に負担をかけていたんだということがよく分かりました。ひよいひよいジャンプしても進めそうです。痛いひざもごまかしています。ついでに薬局発見。ひざ用のサポーターを購入して、ごまかし具合をアップさせました。より身軽な感じになって進みます。

そして、第七十六番札所へ到着したのはだいたい四時くらい。次の札所までギリギリ間に合うくらいの距離と時間です。なぜかそこにあつた土俵を絵に描きながら、徳俵に救われている自分を感じてしまいました。荒れていようと、崖っぷちであろうと、僕は土俵の上に残っています。何とか歩けます。

行くべし！進むべし！

親指さん、こんにちは。



ついに現れました。いつかは必ずやってくるモノです。

ここ近年、あまり見られなかった現象です。そんなことが起こるより前に、ビロンビロンになってしまっただけの元を去っていくことの方が多かったんです。ハードな刺激を与えることなく、ソフタッチだけで過ごしているとそんな風になるみたいです。日常生活は軟弱の極み……、充分に使われずにこの世を去った靴下たちに謝罪です。

だいたい場所は決まっています。親指の先か付け根か、もしくは、かかとか……。穴の場所です。かかとや親指の付け根の部分だと、だんだんに生地が薄くなっていくから危機感が少しずつ近づいてきて覚悟の上での決壊となります。でも、親指の先の部分だと、かなり不意をつかれてしまいます。気がつくともう穴が開いているんです。びっくりします。

何枚も持ち歩いていたフケじゃありません。洗濯をしながら大切に使っていた靴下です。お四国遍路も終盤に近づいており、いろんな所にガタがきているような気がしました。靴の底だってすり減っているし、お杖だって削れているし、白衣の背中文字だって消えかけているし……。何よりも僕の体が悲鳴を上げつつありました。長い距離を歩いてきたモンです。しみじみと、穴の開いた靴下が僕の心に訴えていました。



ものをいう顔。

笑顔

ほほえみが

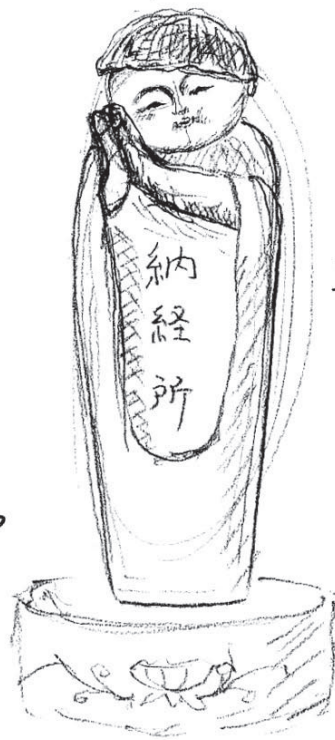
とてもかわいいのです。

とくに

目が

とてもとてもかわいいかたのです。

笑っている目は  
すてきです



2005. 12. 30

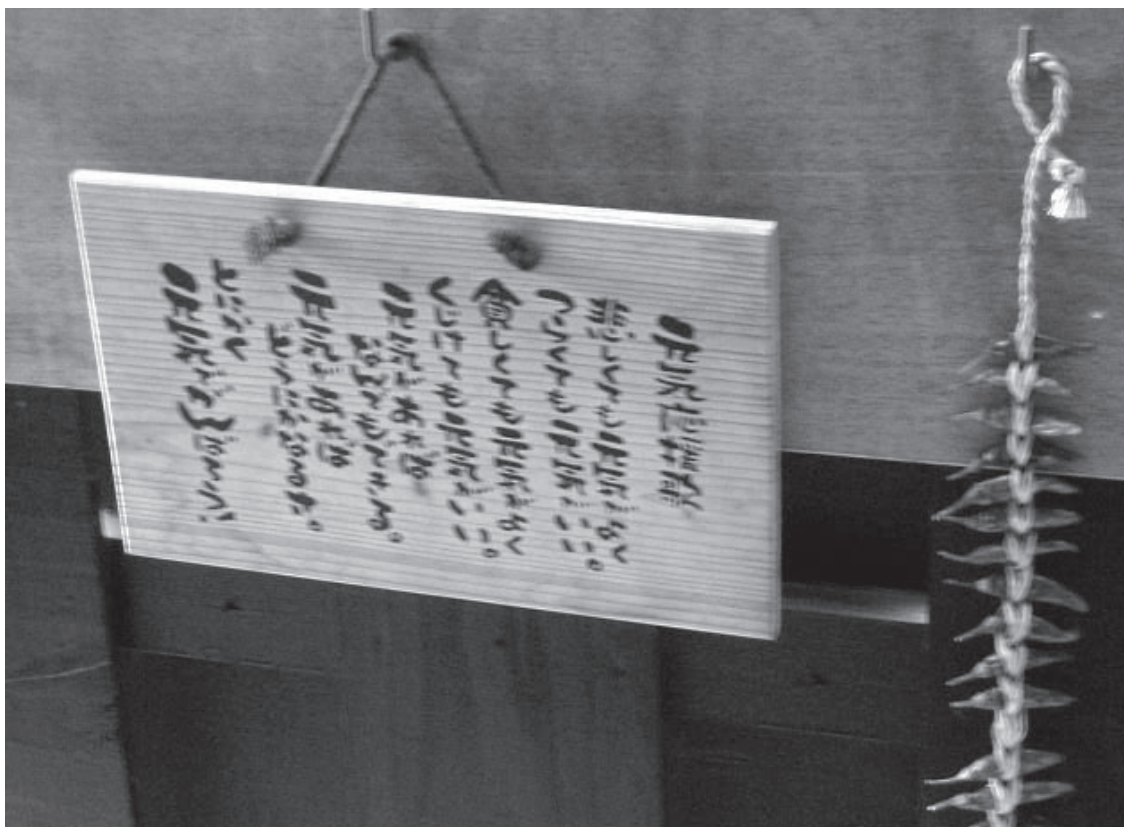
自然な笑顔が、自然と心の内にあふれ、自然に表面に出てくることつて、すばらしいことだと思います。バカ笑いじゃありません。それなら僕にもできます。なんか、バカな話をしていればバカ笑いが爆発です。そうじゃなくて、自然な笑顔です。

笑い顔は、その質によって人を心地よくしたり、不愉快にしたりします。少なくとも、僕はそうなります。あるお店で、決まって僕を不愉快にする、作り笑顔を向ける人がいました。たぶん、その人は僕に心地よくなってほしかったんだと思います。でも、残念ながらその人の思いとは裏腹に、笑顔は引きつり、いやらしい笑いにしか見えませんでした。

あるお店でさわやかな笑顔を見ることができました。コンビニでした。たぶん、アルバイト料はそんなに高くないと思います。でも、その人の笑顔は僕を幸せにしました。お店用の営業スマイルだとは思いますが。それなのに笑顔がステキに見えかったです。すごいことです。

人間性が顔に出るのかもしれませんが。怒っていても安心感のある顔だってあります。怒鳴られたとしても納得できる深みのある顔をもつ人もいます。うらやましい……心の底から思います。僕の作り笑顔は、どこまでバシっているのか……、恐ろしい限りです。シンプルに心を磨き、素直な心を顔に表したいと思います。

がんばれたら苦勞はしない……。



苦しいモンです。疲れている時、弱っている時、気持ちが後ろ向きの時、そんな時に「がんばろう!」と言われることは、ほんとに恐怖でもあります。がんばれなくなっているから、悲しくなるんだし、くじけてしまうんです。元氣にがんばれるんだったら周りの人に「元氣でがんばろう!」なんて言われなくなったら自分の力で何とかできます。そういう力強い言葉で元氣になれる人は、たぶん、まだまだ窮地に立たされているわけじゃないはずです。そういう力強い言葉で元氣にさせようと応援する人は、本当の窮地に立たされたことがない人だと思います。

なよなよしています。本当は強くなりたいし、元氣に生きていきたいと思っています。でも、なかなかそうはいきません。あの、宮沢賢治だって、「雨ニ干負ケズ」生きることには憧れていたんだから、僕が何かと負けてしまうことは当たり前です。「雨にも負けて」「風にも負けて」負けっぱなしになってしまいます。ただ、僕の場合、負けた後の立ち直りを早くすることが出来ます。それこそ、本当の窮地に立たされていないのかもしれないけど、楽観的でもあるし、忘れっぽいので助かっています。

力強い言葉にあれこれ思いを馳せながら、また、余分なことを考えます。こんな力強く生きていける人はどれだけ力強いうんこをするんだろう……と。だって、場所がトイレですから……。

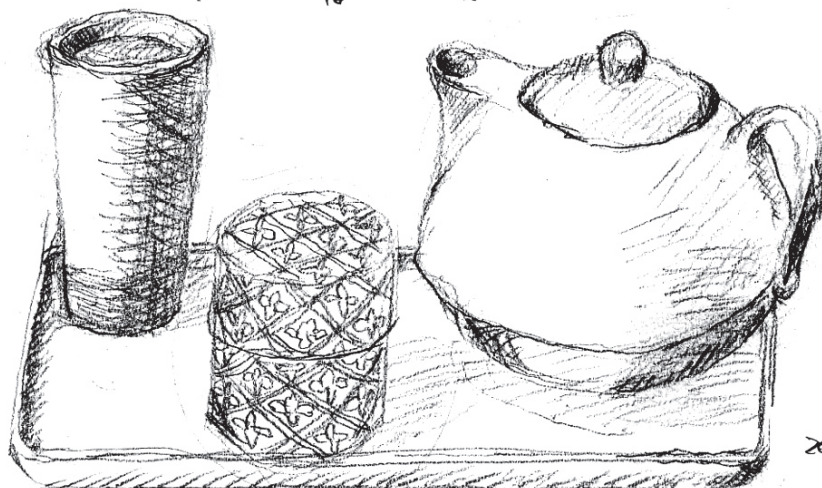
もてなし

旅館

夏の最高のもてなしは  
冷たい麦茶だった。

冬、お茶向のもてなしは  
温かい緑茶だった。

人のふなりの中で……



2005.12.30

第七十七番札所までお参りをして電車で引き返してくると、部屋には温かいお茶が待っていました。最高のもてなしです。

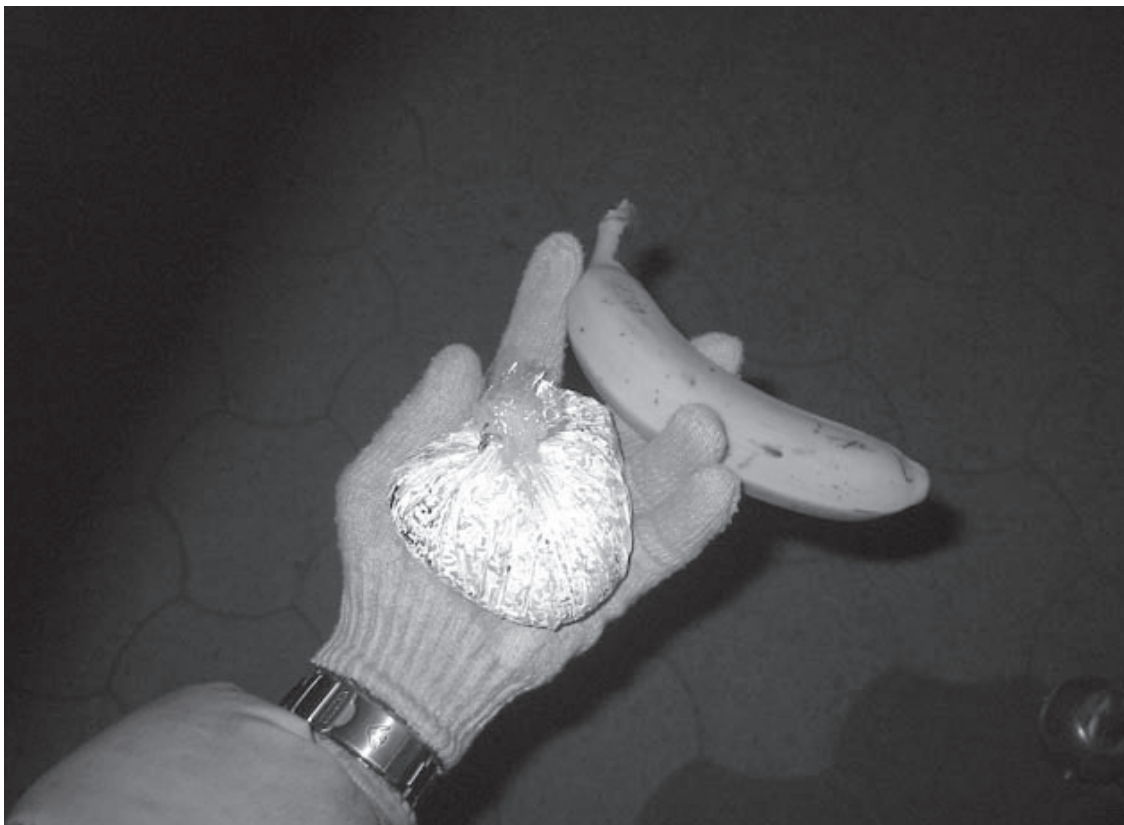
冬の寒い時、おととと……なんて言いながら熱燗の酒を飲んでいる人がいます。それを見て僕は、何て幸せなんだろう、とうらやましく思います。僕は、お酒が飲めません。飲んでも頭が痛くなるし気持ち悪くなるし、うれしいことはひとつもありません。じゃ、冬の寒い時、僕がおととと……なんて言えるのが……、温かいお茶なんです。暑い夏とは少し違いますね。

温かいもてなしで迎えてくれた旅館の女将さんは、フジケンのことをバッチリ覚えていました。「あ、少し頭の薄い感じの……」などと言いつつ大笑いでした。泊まっていた人たちの思いを大切にしている人のようでした。フジケンが勧めるわけです。

部屋にはテレビがあり、三年〇組とかいう有名な中学教師のドラマが流れていました。中学生のあふれるエネルギーを思い出しました。そして、また、ユースケのことも思い出してしまいました。中学校という場所は僕にとって特別な場所なんです。みんなで走ったムカデ競走が忘れられません。みんなで歌った合唱が忘れられません。みんなで泣いた卒業式も忘れられません。

疲れた体に温かいお茶を注ぎ込みながら、しみじみと湧き出る思いをかみしめました。





朝早く行動を開始しました。外は真つ暗です。宿の周りの人に迷惑をかけないようにコソコソと動きます。階段を下りて、靴箱へと向かおうという時、呼び止められました。女将さんです。お接待ということで、おにぎりとバナナをいただきました。おにぎりはまだ温かく、僕の出発時刻に合わせて準備してくれたことが分かります。朝ごはんとしてありがたいいただきました。寒い朝の、温かい朝ごはんでした。

おにぎりとは偉大な日本食だと思います。こんなにすごい食べ物はありません。米を主食とする日本人に生まれてよかったと思えることの一つです。お茶碗一杯分のごはんがギュツとおいしさを詰め込んで僕たちの前に現れるんです。最高のことです。最近コンビニのおにぎりなんてのも多いけど、あれはまあ、あれとしていいか……と許可します。初めて「ツナマヨおにぎり」なんて見た時にはびっくり返りそうでした。ごはんはマヨネーズなんて信じられない世界です。それが、食べたら悪くない味なんだからたいしたモンです。

人として信念をもって生きることが大切です。多少、何かで心が揺らぐような出来事があっても、信念があつたら道を大きく外れて戻れなくなることはありません。日本人が米を主食とするように、揺らがない一つの主たる柱を……太い柱をもちたいです。

深く思うこと。



幸せ

ぽっくり逝くのは

たぶん

不幸なことなんだろう

でも

残された者には

つらいものもあるはず

でも……

本人の幸せを願って……

確かに、ばーちゃんもよく言っていました。「ぽっくり逝きたい」ということです。自分自身が苦しむこともなく、周りが介護する大変さもなく、潔い最期だと思います。それが老齢であればあるほど説得力のある言葉になります。九十歳を越えていれば、仕方ないことでもあり、大往生ともいえます。でも、残される側としては、昨日まで会話を楽しんでいた人が逝ってしまうことの虚しさは大きなものです。

事故で逝ってしまったユースケは何を思ったでしょう。それまでの人生で、真剣に自分の死について考えたことがあったろうか、と疑問が浮かびます。明るく高校に通っている者がそれを身近なこととして考えることは不可能に思えます。本人にとっても周りにとっても、急すぎて受け入れることの困難さは計りしれません。

僕自身のことを振り返ると……、職に就いて一年目……「特別休暇」を取りました。半世紀昔だったら死んでいたかもしれない病気になるっていたんです。自覚症状はなし、現在の医療なら完治できる病気……、「長い夏休みをもらった」とウソぶいていました。心の隅では真剣に考えることを避けていたのかもしれない。

人は必ず死ぬ……、当たり前のことなんだけど普段は全く考えずに生を楽しんでいます。暗い話題じゃなく、真剣な思いとして、死についてもう少し思いを巡らす必要があるのかもしれない。



神社巡りをしているわけじゃありません。地図に従って歩いて、間違っているわけでもありません。なのに、なぜ、鳥居が現れてしまったのか、少しだけ不安になります。神仏混淆なんていう思想もあるような日本という国だから、お寺と神社が仲良くなっていることもあるんでしょう。お隣さん同士、いい関係だったらそれでよしつ、て感じですよ。

参道が延びていて、目的地へと僕を導きます。そこには神社とお寺が仲良く隣り合っていました。崇めるものは違うのによくケンカもせずにはいられるモンだと感心してしまいます。よく、仲のいい友達のパターンには二種類あるといいます。一つは、興味関心が本当に共通していて、まさに意気投合というパターンです。そりゃ、話をしていても楽しいことでしょう。もう一つは、重なる部分が少なく、相互補助というパターンです。お互いに頼り合っていて、そりゃ、相手を尊重できることでしょう。かくあります。

どうしたって、自分と全然違うヤツと関わらなければいけないこともあります。そんな時、自分の価値観だけで相手を見たら、ストレスがたまる一方で何もいいことはありません。学校だったりクラスの中に何人か、そういうヤツがいるはずですよ。お寺と神社のいい関係……人間関係の教訓になりました。



大小。

# 大鳥居



でかいんです。表に出ている名前だって立派にがんばっています。でも、でかいんです。そして、きれいな朱色が目に飛び込んでくるんです。

お四国という僕の勝手なイメージからすると、八十八ヶ所の札所が放つ威厳は他の何者よりも大きく強いものに思われます。遠路はるばる時間をかけて来るんだから当然といえば当然です。それは僕のイメージだけの話であって、客観的に当然と判断される事実とは異なる場合があります。だから、客観的な大きさというデータで比べたら、やっぱり、でかいんです。そして、大きいという事実は圧倒的な迫力で僕を襲います。恐るべし大鳥居です。

見た目で勝負はできない、だから中身で勝負しよう……と、常に考えてきました。見た目で僕のことをカッコイイと思う人は、まずいません。悲しい現実です。中身だったら少しだけがんばってる部分もあります。物事を深く考えようと努力しています。人とは違った見方をするセンスも磨いています。でも、それは自分の中だけのことで、なかなか伝わりません。ぜひ、僕の中身を見られるメガネを開発したいモンです……。

中を見たら、厳粛な存在感です。第七十九番札所です。他との比較ではない、自分の道を確実に歩む厳粛さを秘めています。あらためて厳かな気持ちを心の中に大きくし、お参りをしました。



いよいよ大台、第八十番札所を迎えました。讃岐國分寺です。讃岐の国の名前を負った札所です。

ん？……讃岐の国に入ったからには絶対にしなければならぬことがあるんじゃないでしょうか。讃岐ですよ、讃岐。いくら急いでいたって、うどんを食べずに通り過ぎることはあり得ません。もしも、そんなことをしたら犯罪に近い愚行ともいえます。

一応、おいしいと評判のお店はチェックしていました。北条水軍ユースホステルでも予習したし、途中で出会ったお遍路さんからも情報はゲットしています。きっちり地図へもメモしました。完璧です。

が……、計算できなかったことがあります。その日が大みそかだったということです。讃岐のうどん屋さんは、いわゆる製麺所であり、食べさせるお店というよりも、生のうどんを売ることが本業のようです。そして、讃岐の人たちは年越しうどんを食べる習慣があるというんです。何軒かのお店を訪ね、「今日は玉だけ」と、ゆでたうどんに出会うことができませんでした。大みそかを恨みました。

世の中は年の瀬を迎えていたんですね。全然気がついていませんでした。旅に出る者は、無常を感じます。旅に出る者は、様々なモノからの解脱を志し、遍路道を歩いていきます。

弁財天

僕は  
ギターを  
がんばります。



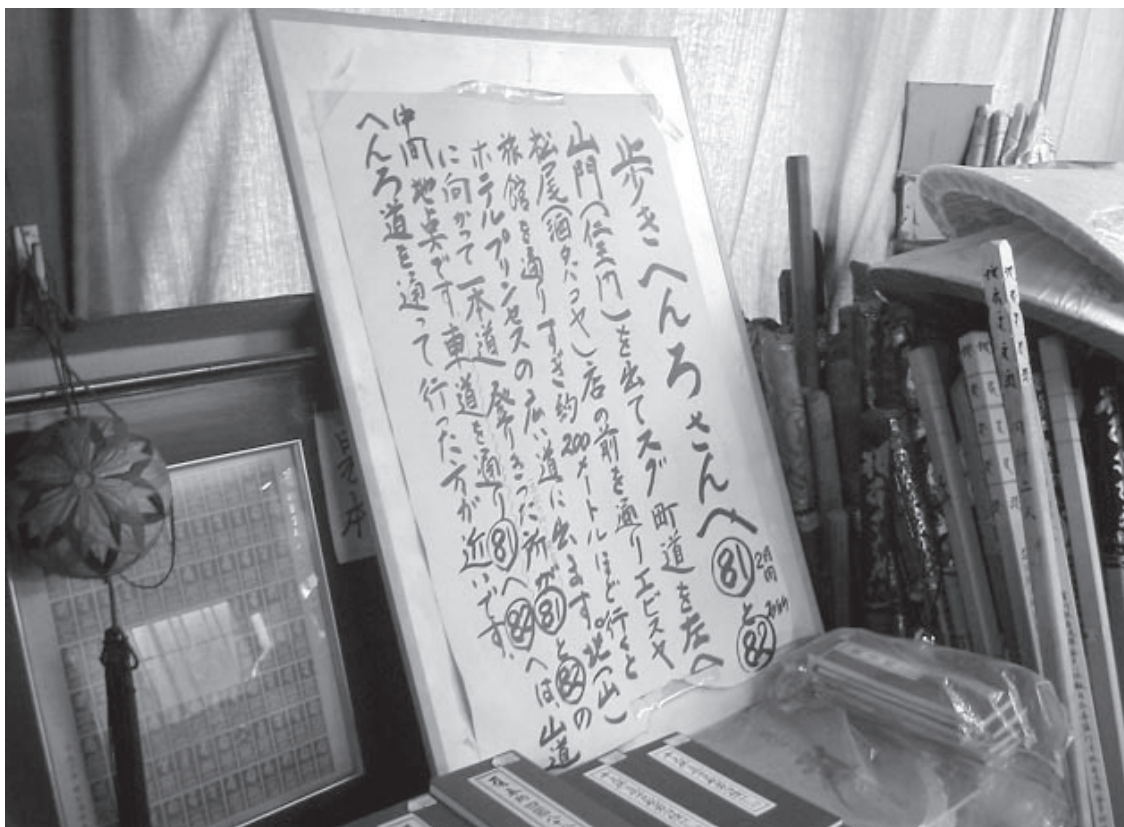
2005.12.31

楽器は練習しないとうまくならないし、練習しないとどんどん下手になってしまいます。かといって、練習しても目に見えて上達することは少なく、基礎練習なんかはつまらないばかりです。僕が特に上手になりたいと思う楽器はギターです。小さい頃からやっているわけでもないからプロ級の技を身につけようと思っただけです。友達の前でポロポロ弾いて自慢できたらいいなあ、と企む程度です。

ここで白柳淳の登場です。ギタリストです。自作の曲を、自分が製作したギターで、自分が弾くという奇妙この上ないヤツといえます。ギターと関わる仕事がしたいと言いつつ大学の文学部に入った彼と出会い、僕は大きな影響を受けたような気がします。とにかく真面目に物事を考えます。音楽のことにになると、特に自分の思いを前面に出して語り続けました。すごいヤツです。ヤツを裏付けているものは何か……、それは練習でした。地道にひたすら努力を積み重ねていたんです。僕には絶対にできないだろう努力を今でも続けています。

努力するという才能に欠けた僕は、第八十番札所で弦楽器を弾く弁財天と出会い、「ヨロシク」とあいさつをします。他力本願です。自分の力でできないことは、他にすがりしかありません。無理は禁物、できることからやっていきます……。



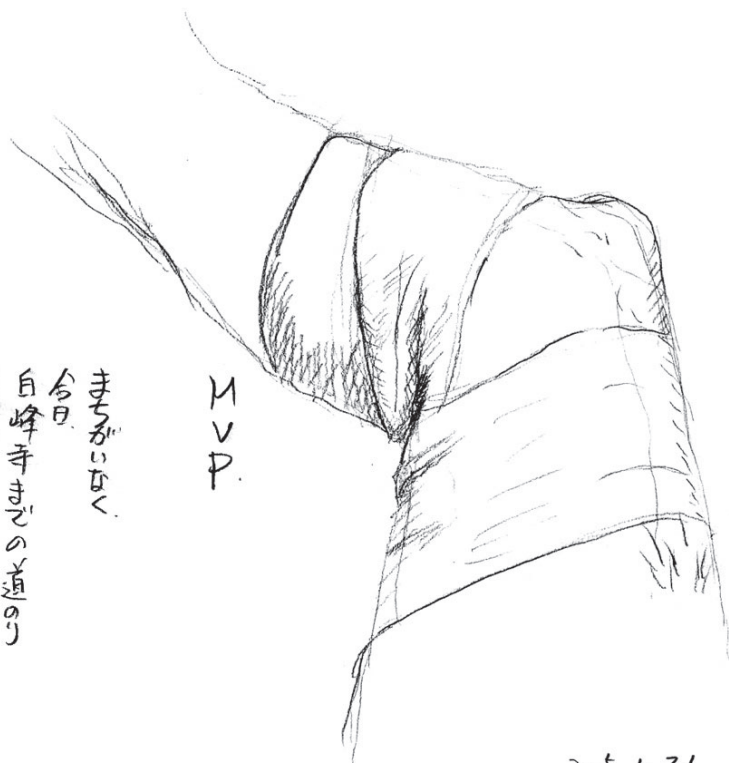


携帯電話でバス停の写真を撮っている人の姿を見たことがあります。なるほど、その時刻表を書き写すよりも速くて正確で便利です。必要になったら保存してある画像を見れば、いつバスが来るのかすぐに知ることができます。電子機器の有効な使い方です。

僕はデジカメを使います。今となっては他の人に自慢できるような高機能の物じゃないけど、買った時には自分なりにお金を奮発して、満足できる物を手に入れました。それ以来、僕の旅には欠かせない武器になっています。使う時に気をつけているのが、バッテリーの消費です。電気がなくなったら全く使い物にならなくなってしまうのが電子機器の最大の弱点。普段は液晶の画面を使わずにファインダーを覗いて写真を撮るようにしているほどです。でも、この時は、撮ったデータがその場で必要だったので、曲がり角に出るたびに画像を見直していました。時間的にそれだけ焦っていたということなんです。ひざも痛かったけど、とにかく前へ前へ速く進んでいきたい気持ちがいっぱいでした。札幌も第八十番を過ぎ、結願の時も近づいていたからです。

画像には、毛筆の美しい字が並んでいます。デジタルの中に息づくアナログの強さです。アナログの強さは絶対に忘れてはいけないと思います。人間の感覚に訴える、強い力をもっています。温故知新……、いいトコ取りが必要な世の中です。

火事場のくそ力。



2005.12.31

MVP.

まじがいた。

今日。

白峰寺までの道のり

一番がんばったのは

あなたです

痛みを耐え

じくがんばった

トライ!

ふざ!!

証



後から描き足した  
確保できた  
白峰寺へ  
石

耐えに耐えたという道のりでした。時間との勝負を考えると、どうしたってギリギリです。毎度毎度のことではあるけど、瀬戸際が身に染みついた人間だから懲りることなくくり返してしまいます。果たして午後五時までに、あと二つの札所を巡ることができらるだろうか……という瀬戸際です。

坂道を走りました。でこぼこの少ない下り坂で、ひよいとジャンプすれば普段の倍くらい距離は進める勢いです。ちょっとした段差だってビヨンと跳び越えてしまいます。迷うこともなさそうな道だったから、とにかく突進しました。境内を回り込むのです。もしもサポーターをしていなかったら途中であきらめただろう痛みがひざを襲っていたけど、まあ、何とかたどり着きました。いや、目標はまだ先にあり、ひとまずチェックポイント通過といった感じです。

夏休みの宿題にしてもそうで、計画的にやるのが一番いいに決まっています。誰に言われなくても分かります。それが、いつの間にかやら最終日を迎え、必死になって鉛筆を走らせるのが現実なんです。そのパワーはものすごい大きなもののように感じます。最終日さえ迎えればそのパワーが得られる……じゃ、それまでパワーは温存……と言い訳をしながらダメ人間の完成です……。





落ち葉に埋められると気持ちがいい……そんな経験をしたことがあります。ふかふかとした感触が全身を包んでくれます。厚い落ち葉の層が懐の広さで僕を認めてくれるような感じですよ。

目の前には飛び込みたくなるような落ち葉が続いていました。本当に泳いでいけそうな落ち葉です。ドップン、バシャバシャ、ス～イスイ……潜っていけば、きっと木の根が珊瑚のようにうつそうと茂っています。葉っぱの色も様々で、太陽の光を浴びて輝く虹の美しさにも負けないはずです。溺れることなんてあり得ません。体が自由自在に操れるんです。息がつかなくなることもありません。疲れもせず、いつまでも泳いでいられるんです。

空想の世界で遊ぶことは楽しいことだし、意味のあることだと思います。自虐的に「妄想力」なんて表現する人もいるけど、そんなマイナスイメージの言葉は当てはまりません。頭の中でキラキラ輝くイメージをつくり上げられたら、そこをスタート地点にして現実の世界だって大きく大きく広がっていくはずですよ。何事であろうと、実現させることの発端は頭の中にあります。シンブルに形作りができれば、それはもう想像ではなくて創造になっていきます。自由な発想は世界を広げます。

ふと、現実の落ち葉は、埋もれた時にチクチクと痛かったことを思い出しました……。



笑顔の底力。



## 役の行者

ただのじいさまごはないらしい、  
何だかすこい人らしい。  
でも  
笑顔は  
ただのじいさまだ

2005.12.31

必殺、能ある鷹は爪を隠す……です。そして、僕の爪は退化してしまっているかのように隠れつばなしです。自分には才能がある、とまだ今でも勘違いすることはいっぱいあるけど、どうにも僕の爪が姿を現すことはありません。

必殺、営業スマイル……です。ありがちな話です。どうしたって、笑顔を提供しなければならぬ時があります。どこかのハンバーガー屋さんのようにわざわざ「〇円」なんて値段はつけないけど、商品の一つのようなモンです。すぐに見破られてしまい、破滅へ向かうことも多いので、営業スマイルは、使用量・用法をよく読み、正しく使っていきましょう。

隠された実力、それに気づくのも実力なんだと思います。要するに僕には実力がありません。かろうじてたどり着いた第八十二番札所には、役の行者という人が石になって座っていました。その人は穏やかな笑みを浮かべて座っています。やさしいやさしい笑顔でした。ひざの痛みまで癒されてしまいそうなやさしさを感じます。でも、僕にはその人がどれだけすごいのか分かりません。能ある鷹のすごさを感じ取る能力が隠れているんだからどうしようもないわけです。

いいです。役の行者は僕に笑顔パワーのすばらしさを教えてくれました。それで、いいんです。

正月。



世の中は新年を迎えていました。きっとカウントダウンをして喜んでいた人もいることでしょう。その頃、僕はインターネットカフェで悲しい時間を過ごしていました。ネット忘年会なんてことをしていたのも、この時だったかもしれません。時々出てくるギタリスト、白柳淳を応援するファンのホームページがあるんだけど、その掲示板で怪しげな呼びかけがあり、ちよこちよこ書き込みがされていったんです。僕は讃岐の国にいるという身の上なので、うどんをネット上に持参したつもりになって遊んでいました。つながっているようだけど、僕は一人で画面を見つめています。ますます、悲しさがつのりました……。

夜も明ける頃、寒さの中を第八十三番札所へ向けて動き出します。空気は暖かいけど、心の寒いインターネットカフェからの出発です。山門には門松が立っていました。まさに正月の光景です。昔ながらの日本の風情を味わう気分でした。厚着をして初詣に訪れる人々の姿も見られます。初詣のためにお寺に向かうのか、神社に向かうのか……、ま、どっちでもいいです。神様や仏様に新年のあいさつをして、一年をがんばろうと思えることが大切なんです。

僕の人生に様々な大きな影響を与えた年が去り、新しい年が始まりました。様々な楽しい出来事が待っていることを願いました。

物

誰かが般若心經を書き  
誰かが石を握り  
誰かがここに寄り進んだ。

誰もいいます  
ただ、そこにあり  
心の叫びが刻み込まれている  
ただそれだけです



2006.1.1

初詣の人が行き来する境内の片隅に、それはありました。蓮かなあ、と思わせるような形をしています。そして、中には漢字がずらずらと並んでいます。僕は読み仮名をふったその漢字を唱えつつ、お四国を歩き続けてきたんです。「般若心經」です。旅する者にとっては感慨深い内容の経文であり、人間の存在の小ささを感じてしまうような漢字たちです。

お四国を歩く時、僕はもう一つの言葉を覚えました。「おんあばきやべいろしゃのうまかばだらまにはんどまじんばらはらばりたやうん」という平仮名書きのものです。意味も分からずに並ぶ平仮名だけの言葉は、読み上げるだけでも苦痛でした。それでも、さすがに八十ヶ所以上の札所を回った頃には、すらすらと口から勝手に言葉が流れてきます。ありがたいモンです。

言葉には魂が宿るといいます。僕らには直接に意味の分からない言葉でも、インド辺りで発せられた時には、ストレートに思いが言葉にあふれていたはず。その言葉を唱えるということは、僕らもその魂を直接に甦らせることにつながると思います。音の響きの力です。

初詣の人が行き来する境内の片隅で、邪魔にならないようにコソコソしながら言葉の重さを想像して絵を描きました。薄っぺらな絵や言葉でしか表現できないことが僕の限界です……。





焼津の人間のほとんどが「日本武尊」という名前を知っています。そして、浜松の人間のほとんどが「金原明善」という名前を知っています。それぞれの地域では学校で教えられる名前です。

焼津では、日本武尊が敵に追いつめられて火を放たれた場所が焼津だと習います。火山でも何でもないのに「焼」という文字が使われる所以です。

浜松では、金原明善が「暴れ天竜」と呼ばれる天竜川の治水工事をしたんだと習います。というわけで、天竜川の下流域には、今では島がなくなったのに「O島」と呼ばれる町がいくつか残っているんです。

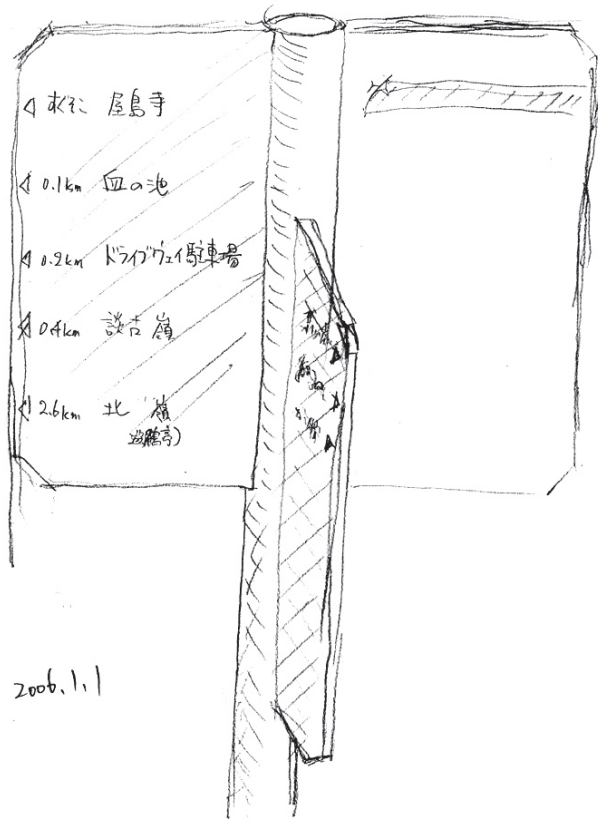
じゃ、屋島は島なんでしょうが。昔は完全に島だったみたいですよ。じゃ、山じゃないんでしょうか。うーん、今では確かに山です。……車の標識に困惑が感じられました。「shima」なのに「Mt.」なんです。昔の様子を地名が語っているわけです。こんな矛盾が大好きです。言葉のおもしろさを感じます。

言葉の背景まで考える機会は、そんなにたくさんありません。でも、考え始めるとどれもこれも気になってきます。人間だってきつと同じです。いいなあと思える人には、いいなあと思える背景があるはず。いいなあと思える体験をたくさん積んで、いいなあと思われる人になれたらなあ、と思います。

弱肉強食。

強者

〇、ニキ口枕にあうやつ  
おまえの所へみんは来るから  
歩く人間は大変なんじゃ  
だからキライなんじゃ



2006.1.1

強者と弱者です。歩行者は交通弱者として大切にされなければいけないと思います。なのに、なぜ……、わりといじめられている感じを受けます。ま、チャリダーのいじめられ方に比べたらマシだけど、それでもやっぱり日本の交通事情は弱い者いじめの構図になっているとしかいいようがありません。

山の上に水族館があるってのも何か不思議な印象だけど、山の上まで車で行くことが当たり前だと思ってしまうのは困りものです。看板の中に「〇.2km ドライブウェイ駐車場」などという表示があっただんです。駐車場が完備しているなら車で行くのも簡単だと思います。山の道を、歩行者を押しつけて車がグイグイ登っていくなんて最悪です。車にはエンジンがついていて、強いんです。そんな強者たちが我がもの顔で進んでいくなんて悲しくなります。

世の中ではいじめが問題になっています。学校じゃ何をやるのかと、みんなが心配になります。でも、いじめは学校の中だけのことじゃありません。世の中どこでも横行していると感じます。象徴的なのが交通事情だと思っんです。なんで、強い立場の車が一番に優遇されるんでしょう。弱い立場の歩行者が優遇されなきゃおかしいじゃないですか。もっとやさしい社会になってほしいと感じます。いや、本当は、僕らが自分でそんな社会をつくり上げていかなきゃいけないんですよね。ガンバロ〜。

明鏡止水の如し。



日本には昔から自分の気持ちを表に出さないことを美德とする文化がありました。僕は剣道をやっていた頃、相手に勝って大喜びしていたら叱られたこともあります。常に冷静な振る舞いをせよ、という教えです。弓道をやっていた頃も同じで、矢が的に当たっても外れても、とにかく騒ぐと叱られました。日本的なかつこよさとして静かな様子がいいことです。うれしい時には飛び上がって喜び、悲しい時には泣き崩れる、怒る時には拳を振り上げて叫ぶ……そんな姿も人間として正しい姿に思えるんだけど、どうなんでしょう。

怒るという感情は激しいものだし、エネルギー消費も激しいものです。「怒」という文字を見ただけでも身構えてしまう部分があります。それが「文庫」という冷静さをイメージさせる言葉と一緒になっているから、何じゃ？と思ってしまうしました。「庵」という文字も激しさを伝えるものじゃありません。四文字あるうちの三つは静、一つだけが動……多数決をしたら静の勝ちです。なのに四文字トータルで激しさを感じました。

数の暴力が横行しています。少数だけど貴重な意見があり、それが見捨てられていきます。こんな時、もっと冷静に考えましょうよ……。強い者が勝つのは当たり前かもしれないけど、強い者ほど穏やかにやさしい心をもつのがかっこいいと思います。





僕の心は対決です。やるべきかやらざるべきか……いたずら心がむくむくと湧き上がり、うれしくてうれしくて仕方がありません。僕の行動を分ける大きなポイントの一つが、おもしろいかおもしろくないかという判断です。おもしろいことは、ぜひ行動に移していきたいと思います。

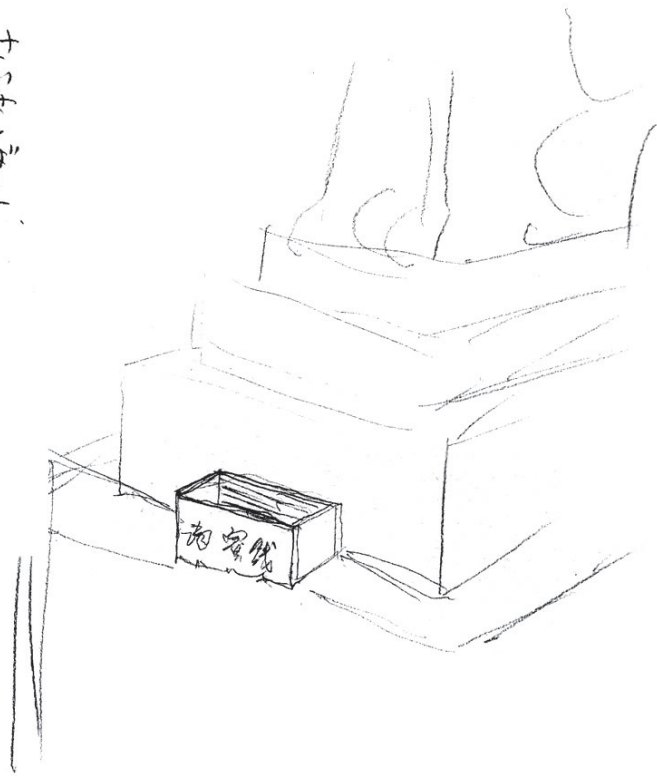
一方通行の標識が立っていました。……が、期間限定です。正月のある時期だけしかそこに存在しないようです。地面に埋め込まれているわけではなく、ポンと置かれています。学生時代の僕だったら、間違いなくやっていっていると思います。場所の移動です。ひょいと持ち上げれば一方通行の向きは変わります。逆向きにするのはおもしろさに欠けます。向こう側の崖下に向かうように一方通行にしたらどうでしょう。続々と車が落ちていくんです。法を守れば守るほど事故が多発する仕組みです。かなりのおもしろさを提供できます。

残念ながら、僕は実行に移すことができませんでした。世の常識というものが身についてしまったのか……いや、違います。ただ単純におまわりさんに叱られるのがイヤだっただけの話です。崖下に向かつていく車が現実にあるか……否、停車するでしょう。迷惑をかける相手はおまわりさんだけであり、やっぱり僕は叱られたくないというだけの理由でそのまま立ち去りました。

ナ  
ン  
カ  
ン  
カ  
ン  
カ  
ン

いまいぬにまで準備してあります。  
いふもメチヤ新しです。  
すま正月です

2006.1.1.



機会均等。

どこの地方にも、どこの寺にも、機会均等に、全国的に正月がきていました。それは見事なまでに機会均等でした。相変わらずバタバタと急ぎ足な僕は、人の多さにイライラしながら第八十五番札所へ到着しました。

行く人来る人騒ぐ人、老若男女がひしめき合っています。参道のすぐ隣にはケーブルカーが走っていて、それにもたくさんの人が乗り込んでいるようでした。まったく、毎日お寺参りをしている者にしてみれば、そんな時だけ現れる初詣の人が当たり前のような顔をしてお参りをしている姿が滑稽でもあります。

たくさんの方がお参りをするとすると、賽銭もそれなりの金額になるはずですが。ふと見ると、ここにも機会均等の波が押し寄せていました。狛犬の前に賽銭箱が置いてあるんです。さすがに心の広いことです。気配りにも感心します。普段だったら気にもとめないような所にも、正月という神聖な日にはきつと参拝客は敬意を表すでしょう。準備は整えておかねばならないんです。

僕は間の悪い人間です。「ここぞー」という時にこそ失敗をするタイプの人間なんです。器用に力の入れ具合をコントロールして、上手に生きていきたいとは思っています。そんな風にやっているつもりのこと多いんだけど、なぜかコケるんです。上手に世を渡れる方法を教えてください……。狛犬にすぎります……。



どこかに『とも』という二ユースを発行している人がいました。月刊の二ユースだと思っていたんだけど、実はエエ加減なモンで、適当な時……いや、適切な時に発行するようなスタイルでした。発行者は「最近、『とも』というより『セコ』になってる……」と自虐的にボヤいていました。発行時期も内容も、ほとんどその場しのぎになっていく雰囲気で、確かにセコい感じがあったと思います。

森と呼ぶにはあまりに小さなモノで、セコいと表現するのが正しくも感じられる植物群がありました。そこにどんな背景があり、どんな歴史的価値があるのかも知りません。ただ、そこを通りかかった歩き遍路の者が見るだけでは「セコ！」とつぶやいてしまいうくらいのモノです。「小さな愛のもり」と名づけられているけど、この愛は小さすぎるんじゃないか……と愛する人にツツコミを入れられそうです。僕はもっと大きくてたくさん詰まった愛を届けたいなあ、と思います。今のところ届ける相手がいないのが問題ですが……。

愛は小さな所から生まれるんでしょう。それがだんだんに大きく育って、深まって、大きな森のように実り豊かなものになるんでしょう。小さな愛、ささやかな愛をセコセコと積み上げていきたいと思います。誰かに届けるために……。



天才。



早すぎた天才というべきだと思います。江戸時代に電気の価値を見出すなんて信じられません。僕なんか、今だって、目に見えない電気という物を実感としてすごいと思えないくらいです。周りにこれだけ電気製品があふれていても……です。そりゃ、頭の上にちゃんまげを乗せた人たちが「エレキテル」という言葉を聞いたって、怪しがる他にはないはずですよ。平賀源内は捕まって、悲劇の最期を遂げたといいます。さぞ、無念だったことでしょう。

世が世であれば、彼は天才として社会に貢献する仕事を成していたに違いありません。他の国に生まれていたらしても何かが変わったかもしれません。歴史に「もし」は禁句です。でも、やっぱり彼の気持ちを思うと「もし」と言いたくなります。

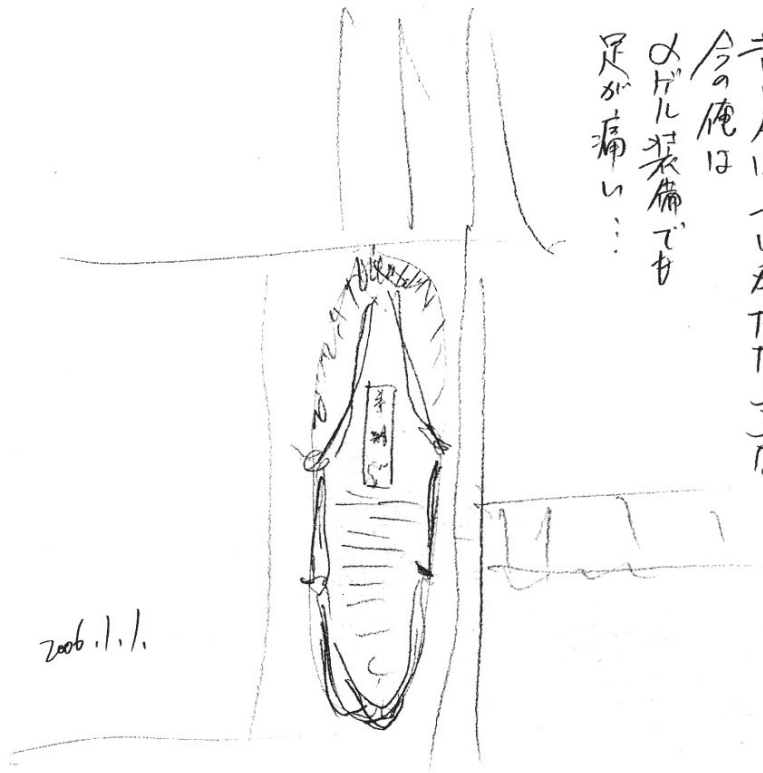
バカと天才は紙一重といいます。バカの発想も天才の発想も、凡人には理解できません。バカの発想を理解したいとは思わないけど、天才の発想は理解したいものです。理解できないとしても、せめてそのすごさを自分の中に生かしたいと思います。たぶん、考える道筋は同じです。ただ、そこに行き着くまでにかかる時間や労力が断然少ないということなんです。

僕の発想も、時として人から理解してもらえません。早すぎた天才と後世に伝えられるかもしれません。それを誰が伝えるかが問題ですが……。

歩き風景。

わらじ。

昔の人はつらかったらうな。  
今の俺は  
メダル装備でも  
足が痛い……



2006.1.1.

第一印象……でかい、第二印象……でかい、第三印象……でかい、それ以外の印象は基本的にありませんでした。第八十六番札所の山門にぶら下がっている巨大なわらじです。印象としてはそれだけでも、頭で考えることはありません。

わらじは藁です。底から鼻緒まで全て藁です。慣れない僕が履いたら、すぐに足が悲鳴をあげます。第一印象……痛い、第二印象……固い、第三印象……歩きにくい、つてな感じだと思います。昔の遍路はわらじしかなくて、どれだけ大変な道のりだったのかと恐ろしくなります。僕の靴は、科学技術の進歩のおかげで足に負担が少ないという噂の材質が使われています。それでも、僕の足にはマメができるし、ひざも痛くなります。現代に生まれていて、まだマシだったと思います。

僕の足は不器用だけど、とりあえず自由に動かすことができます。周りには足を上手に動かせない人もいます。ごはんを食べる手の動きをトレーニングしている人もいます。それを懸命に応援する家族もいます。頭が上がりません。ものすごい壁を乗り越えつつ生きているんだと感じます。本人を含んで家族みんなの力のすごさを感じます。わらじだの靴だの細かいことをグチャグチャ考えている場合じゃありません。歩いて遍路道をたどれることの幸せを精一杯感じたいと……今、文章を書きながら思いました。

山壁の看板。



高級住宅地というイメージがあります。山の中腹に横文字が並び、映画俳優がザクザク住んでいる所という感じです。なんて勝手な思い込みだ、と思われるんでしょう。仕方ありません。貧弱な発想しかありませんから……。ハリウッドという所は遙か彼方の遠い世界なんです。

お四国にハリウッドかと思間違っような光景がありました。書いてある文字は「ORANGE TOWN」であって、似ても似つかぬ別物ではあるけど、どうも雰囲気はねらっている感じがします。ねらってはいるけど、日本の山に白い文字の看板があってもシャレにしかならないし、逆に貧相な雰囲気を感ぜしてしまうから、どうでもいいや……ということになります。ただ、どうやら本当に高級住宅が建ち、おしゃれな街のような予感もありました。

僕の思いとして、「部屋は借りて住め、本は買って読め」というものがあります。住む所なんてどうにでもなるけど、身につけていく知恵はお金を払ってでも手に入れたいという思いです。どうも図書館の本などは苦手で、自分の物になっていないと落ち着きません。自分の物ならどれだけ線を引いてもメモをしても人に迷惑をかけることもなく、自分のためだけに使うことができます。自分勝手にできることの開放感が僕には必要なんです。

さて、僕はいつまでアパート暮らしになることやら……。





あかれ

絶対無理だし  
百も承知で、  
それでも

自分の手の中に  
入れたくなくてしょう。

大きな木は……  
いい。

何回も何回も打ちのめされているけど、それでもやっぱり、僕は大きな木を自分の中に生かしていきたいと思っています。んで、スケッチブックを開いてペンを走らせます。いや、ペンは走りません……モソモソと動き回り、怪しげな物体が紙の上に現れることになります。しかも、これは夕暮れ時、辺りはどんどん暗くなっていく第八十七番札所です。僕の技術でどうにかなるわけがありません。スケッチブックに怪しげな物体登場です。

小さい頃……というか、今でも……木の上に小屋を作って自分のスペースにしたいと憧れます。その木が大きければ大きいほど、そんな憧れも大きくなります。自分が頼っても絶対的な安心感を求めているのかもしれませんが。無い物ねだりってヤツです。絵を描く技術だって同じです。他者に「おおっ！」と言わせるような絵を描きたいなんて、心の底では思っています。無い物ねだりなんです。許してください。暗くなっていく境内に、力の無さを突きつけられて打ちのめされていく自分がいました。

お四国遍路も第八十七番札所まで来てしまいました。気持ちの面で、「終わってしまう」という寂しさや虚無感に近いものが押し寄せていました。結願の喜びを近くに感じることはなかったような気がします。大きな木と小さな自分を比べてしまい、ますます心の中はトロトロと渦巻いていきました。



できれば直球、ストレート勝負で三振を取りたいモンです。しかも三球三振で実力の差を見せつけられたら最高です。

説明によると、最短で七・七キロ、最長で十一・五キロという距離になるようです。基本的には回り道をせず、ドカドカとストレートに攻めるコースを進みたいと思いました。でも、攻めすぎて道に迷うのはかなりイヤなことです。それに、夜寝る場所も決めていないんだから、大冒険はできません。とすると、ちょっとした軒下がありそうな場所を目標にしつつ、七・八キロのコースを選ぶのが最善の策になりそうでした。ストレートだけで勝負するのは危険な賭けだという判断です。ちよっとだけボール気味の球を投げてみることにしました。

うだうだと悩んだのは、そこにデータがあったからです。もしも、データがなかったら、悩むことさえできません。ありがたいことでした。客観的に物事を判断しようとするのは僕の努力目標です。この時のルート選択は正しかったと思っています。寒い寒い夜だったけど、予想していた通りのちよっとした軒下を発見することができたし、便座の温かい公衆トイレまで発見できたからです。自動販売機で買った温かい飲み物を個室に持ち込み、地図を眺めながらお尻のぬくもりに感謝しました。

次の日の朝は、早くに起きて歩き始めるつもりです。

女体よ……。



怖いゝ滑るゝ、とおびえながら山道を進みました。風はビュッビュッ吹いているし、寒くて体も動かないし、シヤレにらん状態です。しかも、女体山のとっぺんを目指すつもりはサラサラなく、最短距離で歩くつもりでした。途中、ちゃんと道標を見て別の道であることを確認し、「ああ、やっぱり女には縁がないのか」と悲しく思っていたんです。

あれ？……と思いました。歩けば歩くほど風が強くなってきて、雪は増えてきて、何となく空が明るく見えてきて……。どうも山頂が近いような気配を醸し出しています。そして、ついに登頂。なぜか、女体山は僕に微笑んだのです。ちょっとうれしくなっていました。とりあえず写真撮影です。周りに誰もいないのは当たり前、セルフタイマーをセットします。シャッターボタンを押して山頂碑へダッシュ……。死ぬかと思いました。靴底ツルのランニングシューズがこんなに恐怖を感じさせるとは……。山の装備はやっぱり大切なモンです。「女体山」に抱きつく変な人になってしまいました。ま、いいか……。

ここからは下り坂……。靴底が滑る僕の憂鬱は続きます……。それでも、一步一步が結願の地へと向かっていく足取りです。気を引き締め直し、緊張感と共に、いよいよ第八十八番札所を目指しました。





ついにその時がきました……というほどの感動もなく、僕は第八十八番札所へ到着しました。どこをどう通ったのか、よく分からないんだけど、いつの間にか境内に入り込んでいました。まあ、他のどこであっても同じように、お参りをして納経所へ向かうというだけです。ああ、記念撮影を忘れてはいけません。山門へ向かいます。そこら辺にいたおっちゃんにシャッターを押すようにお願いをしました。階段よりもっと山門を大きく撮ってくれりゃあいいのに……と感謝の気持ちも薄いモンです。何なんでしょう。

ものすごいことをやっても当たり前のような顔をしている人がいます。○試合連続安打記録更新なんていいながら、自分のことじゃなくてチームについてのコメントをする野球選手なんてのもいます。記録を意識しないなんてことはあり得ません。なのになぜ記録更新をして大喜びしないんでしょう。僕が思うに、その数字に意味を感じないからじゃないでしょうか。いくつの試合連続でヒットを打ったとしても、チームが負けたら意味ないし、ヒットの質が相手のミスによるものだったりしたら、特にうれしくありません。むしろ記録よりも記憶に残るプレーの方がすごいと思われることだってあります。

僕の遍路にも共通点があります。八十八という数字には意味を感じません。……とにかく「着いた」という記録が残りました。

体の記憶。

火

お杖堂の前に  
火が揺れていた  
まさか

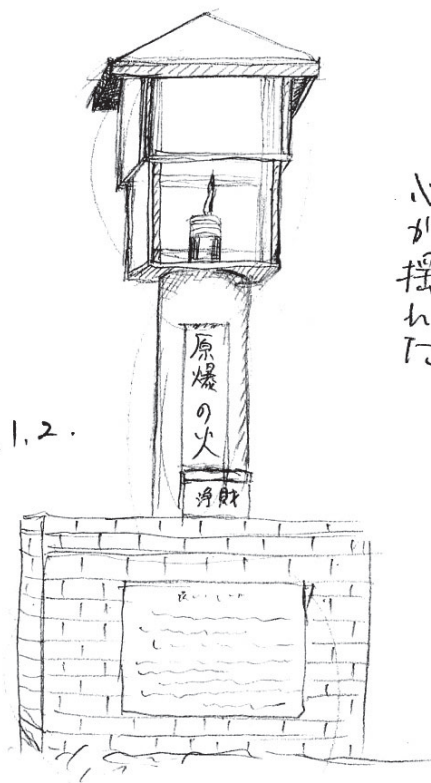
結願のすで

出会うとは思わなかった

火とともに

心が揺れた

2006.1.2.



忘れてはいけな記憶があり、その記憶を存在として証明しているものだと思います。一瞬にしてもすごい数の命を奪った火の一部です。人類史上初めて戦いの手段として現れ、日本人を殺していった原子爆弾の火です。

記憶に残るのは何だろうと考えます。第八十八番札所で結願の日を迎えたことは記録として残っています。他者からの評価を常に気にしている僕にとっては大切な記録です。反面で、結願の日というものに何の価値があるのか、と疑問を投げかける自分もいます。そりゃそうです。結願したことで賞金が出るわけでもないし、僕は熱心な仏教徒というわけでもありません。そこを訪れた記録は「へえ、すごいねえ」と、周囲から少なくとも口先だけでも感嘆の声を聞ける……そんなアイテムでしかないんです。

ゆらゆら燃える火、結願の地にそんなものがあつたことさえ、僕の記憶の中では薄れていくかもしれません。そんな僕でも、日本に落とされた凶悪な火についての記憶を簡単に失うことはありません。それに、そこでグチャグチャと物事を考えて何かの思いをもったという、実体のないかすかな記憶は残っていくはずですよ。

きっと体に染みついた記憶が僕を支えてくれる日がきます。お四国をグルグル歩き続けた僕の体に蓄積された、大いなる記憶が僕を高めてくれる日がきます。そう信じます。

場所

夏

僕はここにいた

明け方の薄暗がりの中  
僕はここにいた

冬

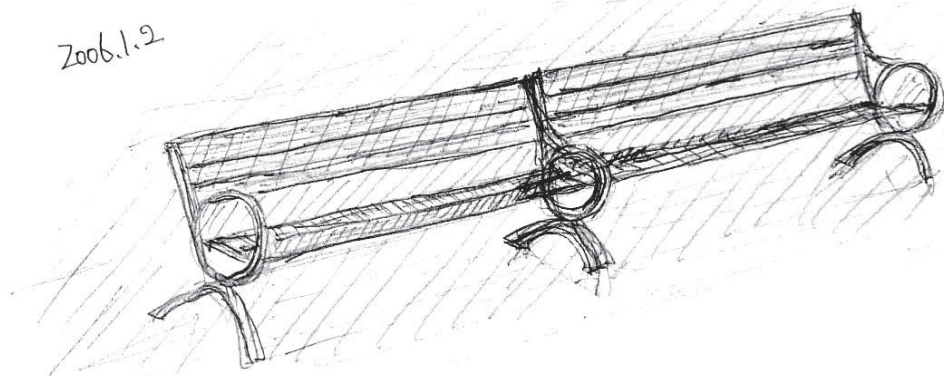
僕はここにいた

夕方の薄暗がりの中  
同じように

僕は

ここにいた

2006.1.2



雨上がりの大師堂、僕はまた同じベンチに腰かけていた。あの朝、ケータイ電話が鳴ったのと同じベンチである。そして、泣いた。この世に生かされている自分を振り返って泣いた。この世にいる限り、逝ってしまった命と再会することはない。ばーちゃんの死を知ったベンチに座って、時を忘れていた。

あの世には何があるんだろう。若くして逝ったユースケは何を急い込んだろう。僕らには急ぐ必要性が見えない。見えない僕らには、大きな悲しみが押し寄せてくる。そして、僕は泣いた。この世に生かされている自分を振り返って泣いた。この世にいる限り、逝ってしまった命と再会することはない。残された者の思いを胸に、時を忘れていた。

ふと、我に返る。この場所が、僕に何かを訴えていた。かすかな光を残した大気が僕を呼ぶ。薄暗がりにベンチがぼんやり浮かんで見えた。

人の気配はない。静けさの中でスケッチブックと対峙し、また、自分の心と対峙した。線になって現れるベンチは、決して全てを伝えない。僕が見た心の中のベンチは僕だけのもの……。いや、もしかしたら、あの世に逝った命たちには見えるのかもしれない。いつか必ず逝くことになるだろう、あの世。その時がくるまで、僕は僕の眼で、この世を見続ける。





あやう  
闇の中に  
第一番のちやもんが  
浮いてた。  
でも、  
もう、  
どこか何番でも  
関係なくなっていた  
お四国は、  
僕の中で  
一つの環になつてた

お四国が一つの大きな輪になりました。第一番札所へのお礼参りです。自分勝手な思い込みのお礼参りだから、気持ちだけを伝えて拜んで満足です。僕の歩き遍路は、第八番札所を再訪した時に終わっていました。

結願した時の感動、お四国の輪廻完成……、そんなものよりも第八番札所は遙かに大きく僕に迫ってきました。お四国を歩いて、様々な思いが湧き起こってきたのは事実です。喜怒哀楽が渦巻く遍路でした。でも、一番に深く思うのは第八番札所である熊谷寺なんです。

人によって感じ方は大きく変わります。同じ本を読んでも、同じ体験をしても、それまでの人生や感性によってモノの見え方は明らかに違うようです。所詮、僕らは感情に支配されている動物ということなのでしょう。その感情というものを大切にしつつ、上手にコントロールしていくことこそ、人間の叡智といえるのかもしれません。遍路道を歩き、苦しい思いと闘いながら、感情を意のままに操ることを目指していたんです。自分の感情と上手に付き合えたら、見える世界はシンプルに透き通って見えるような気がします。お四国を一周してもそんな眼は手に入らず、僕にはまだまだ修行の道が続いていきます。

背後の暗闇に、お四国の入り口を示すあかりが灯っていました。

## あとがき

二〇〇五年という年は僕にとって激動の年になった。

正月を迎えた日、僕は屋久島の神社で学業成就のお守りを買っていた。担任する中学三年生の合格祈願である。受験生を担任することは初めての経験で、彼らのためにできることが何なのか分からず、できることを手当たり次第にやっておきたかった。困った時の神頼みとはまさにこのこと……、神様に頭を下げていた。

三月、彼らは無事に卒業していく。卒業式では感動の涙、涙……。我慢することなど到底できず、顔はグシャグシャである。卒業記念の合唱でも彼らの雄姿を一瞬でも見逃したくなくて、ハンカチで涙を拭うこともせずに、ひたすら顔を前に向けていた。合唱では、秋のコンクールの時から泣かされっぱなし……、運動会でも泣かされたし、悪さを叱りながらも泣かされた。本当によく泣かせてくれた学年だったように思う。それだけの思いをもたせてくれた彼らへの感謝は尽きない。

彼らを卒業させてすぐ、人事異動で僕は養護学校へと赴任することになる。小学二年生という年齢の学級担任になり、それまでとは明らかに違う環境に身を置くことになった。体はメチャクチャ元気な、それでも知的にハンディキャップをもつ小学二年生の子どもたちを前に右往左往、何をどうしたらいいのか全く分からないままに夏休みになってしまった。

夏休みに入り、家族の一人に大きな転機が訪れた。弟の結婚である。小さい頃から馬鹿にし続けてきた弟だったのに、いつの間にか家族の中で一番の常識人になったような気がする。一般企業に就職して世間の荒波にもまれ、そこで出会った女性と結婚。順風満帆な人生の歩みである。しみじみと温かい、すてきな結婚式だった。

お四国へは弟の結婚式の次の日に到着した。しかし、さらに次の日には焼津の実家に戻っている。ばーちゃ

んの死が僕の心に激震を引き起こした。本当に何も考えられない、無の心でお四国を歩き続けるしか、僕にできることはなかった。

追い打ちをかけるかのように、教え子が亡くなる。僕の中から感情が消えていった。分からないことだらけの仕事をこなし、日々、体に忙しさの負荷をかけ、自分の有り方を模索した。少しずつの連休を使い、お四国へと通った。

夏から秋にかけて逝ってしまった二つの命は僕に大きな決意をさせることとなる。「絶対に両親より先には死なない」……もちろん、どこで何があるかは分からないが……何が何でも生き延びてやろうと思う。どんな手を使ってでも僕はこの使命を果たす。

冬、結願へ向けて歩き出した。とにかく寒い。雪が多い。泣きそうになりながら僕は歩いた。鼻水もズルズルである。ひざが悲鳴をあげた。右ひざ、左ひざともに激痛が走る。痛みとの闘い、時間との闘い、そして自分との闘い。勝つ必要はない。負けなければそれでよし。後ろに進むことはないから……。少しずつ、お四国の人、お四国の心に温められながら、結願へと向かっていった。

結願の地で、怒濤のように押し寄せてくるような大きな感動はなかった。ただ、最終の地を踏んだという安心感からか、もう歩けないのではないかと思うほどのひざの痛みが押し寄せてきた。足を引きずりながら、それでも僕は歩いた。とにかく、あの第八番札所をもう一度訪ねたいという気持ちで僕を支えた。ばーちゃんへの思いをきっちり整理させなければ僕の遍路は終われない。とにかく、モノクロの記憶しかない大師堂をもう一度見ておきたい。

第八番札所へ向かう道のりに土砂降りがきた。氷の粒まで混ざっている。天は僕の気持ちをくみとったか……。共に泣こう。大師堂の前で時を過ごす。静けさの中で時を過ごす。ばーちゃんと、ユースケも含め、あの世に逝った命と共に時を過ごす。雨があがった。僕は歩き出す。不思議なことに膝の痛みがひいていた。



第一番札所で気持ちばかりのお礼参りをした後、そのまま僕は和歌山へ渡り、高野山へもお礼参りをした。僕にとってそれが何の意味をもつのか……。僕の中では、第八番札所を再訪したことで完全に遍路は一区切りしていた。

お四国を振り返りながら、もう一度お四国を巡った。文章による遍路道である。その時々 생각이甦る。涙も流した。文章で遍路道をたどるその間に、また僕に関わりのある命が逝ってしまった。そこには怒りにも近い悲しみがあつた。彼は自ら命を絶つたのである。僕に何かできることはなかったのか、僕の決意を伝えることだけでもできたのではないか、やるせない思いが湧き上がる。そして、僕はあらためて決意する。「絶対に両親より先には死なない」と。

お四国遍路は輪廻の道、何度でも回ろう。時がくれば、僕の足は何度でもお四国を目指す。

## 《著者紹介》

じろちょう

現住所：静岡県浜松市

学生時代に放浪癖が現れ、今に至る。

### 放浪歴

チャリダーとしてつなぎつなぎで日本一周もしているが、軟弱者であるが故に一度にたくさんの距離を走ることはできない。ライダーとしては、毎日、超短距離を乗り回していることの成果か、運転技術は非常に拙い。愛車「赤龍丸」と共に、北海道から屋久島までを何となく走ってきている。国外へも身一つに近い形で度々逃亡を企てている。これまでに19ヶ国へ足を踏み入れているが、言語の壁に阻まれて日本での生活を余儀なくされている。

今回、本格的にトホダーとしてデビューした。ただ歩くだけということに関して甘くみている部分もあったが、お四国遍路を通して「トホダー至上主義」に傾倒しつつある。今のところ学校という場所で「先生」と呼ばれる生活が続いている。

## タビのキ 其の参

---

2007年8月8日発行

著者 —— じろちょう

発行 —— 株式会社 **かんぽうサービス**

発売 —— 株式会社 **かんぽう**

大阪市西区江戸堀1丁目2番14号(〒550-0002)

電話……(06)6443-2171 / FAX……(06)6445-2470

印刷／製本……モリモト印刷株式会社